

自己点検評価書（2020年度）
教育研究年報（2019年度）

2020年6月

群馬パース大学

目 次

第 1 部 自己点検評価書 (2020 年度)

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等	1
II. 沿革と現況	4
III. 評価機構が定める基準に基づく自己評価	8
基準 1. 使命・目的等	8
基準 2. 学生	21
基準 3. 教育課程	49
基準 4. 教員・職員	65
基準 5. 経営・管理と財務	74
基準 6. 内部質保証	85
IV. 大学が独自に設定した基準による自己評価	90
基準 A. 地域への貢献	90
基準 B. 国際交流の推進	94
V. エビデンス集一覧	98

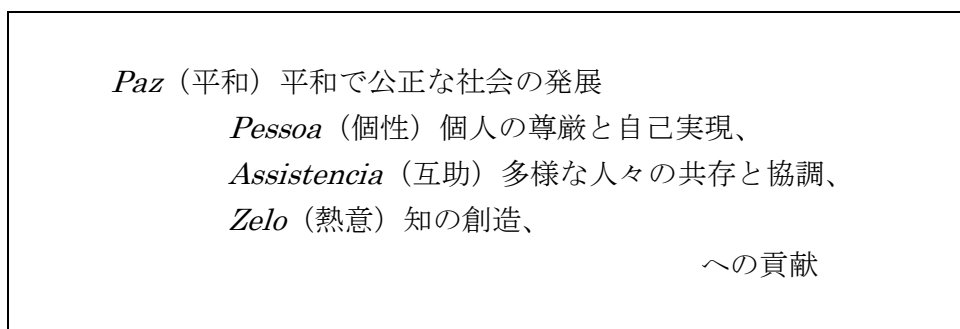
第 2 部 教育研究年報 (2019 年度)

I. 教育活動の記録	99
1) 看護学科	100
2) 理学療法学科	102
3) 検査技術学科	104
4) 放射線学科	106
5) 臨床工学科	108
6) 保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程	110
7) 保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程	112
8) 全学科	113
II. 研究活動の記録	114
1) 看護学科	115
2) 理学療法学科	149
3) 検査技術学科	164
4) 放射線学科	187
5) 臨床工学科	209
6) 教養共通教育部	224
7) 保健科学研究科保健科学専攻	230

第 1 部
自己点検評価書
(2020 年度)

I. 建学の精神・大学の基本理念、使命・目的、大学の個性・特色等

1. 建学の精神



すべての人々が「Dum Spiro Spero ～人には生命ある限り希望がある～（以下、「基本理念」という。）」を「PAZ グループ（図 1-1）」の基本理念とした中から創設された、学校法人群馬パース学園（以下、「本法人」という）は、平成 10（1998）年、人口 3,000 人ほどの高山村に看護短期大学を開設した。法人名と同じ、平和「Paz」を大学名にし、「群馬パース看護短期大学」とした。



図 1-1 PAZ グループ構成図

「Paz—平和」は、16 世紀、日本に初めて西洋医学を紹介したポルトガル人「ルイス・デ・アルメイダ」にちなんで、ポルトガル語から選んだ。

Paz は、すべての人が、「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現を求めて、大学

名の Paz には、「平和で公正で安定し成長する」社会を希求する大学であることを示し、同時に大学も学生も「平和・公正・安定・成長」を旨とすることとしている。

看護短期大学の設立当初には、P、A、Z の各文字に Pessoa（人々・人類）、Assistencia（保健・医療・福祉）、Zelo（貢献・献身）という個別の概念を付与した。そこには「人類愛を抱き、看護を通して保健医療福祉に貢献する」という理念が込められている。その後、看護短期大学から「群馬パース大学（以下、「本学」という。）」に成長する過程で、看護短期大学の理念を発展させ、P、A、Z を現在の Pessoa（個性）、Assistencia（互助）、Zelo（熱意）として再構成した。これにより、群馬パース大学では、学生の「一個人、社会人、職業人」としての能力を磨くことを教育の三本柱とすることとした。

P、A、Z の表す能力をそれぞれ「柔軟な知的適応能力」、「円満な対人協調能力」、「有用な業務遂行能力」と呼び、簡略にして「P 力、A 力、Z 力」と書く。三つの力を併せて総合的な人間力を持った人材を世に送り出すことが、本学の使命であり、どんな地域であっても「PAZ グループ」の基本理念の体現者となり、「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現に必要な人材となってもらいたいと願う。

2. 群馬パース大学の使命・目的

上記で説明したように、本学が大学名とする「Paz—平和」を希求する力（PAZ 力）を持った専門職を育成し、一人でも多くの PAZ 力を持った専門職を社会に送り出すことを本学の使命とするが、臨床の現場と教育とを循環させ、大学院や研究所活動を通じて再教育の仕組みを確立させることも大切な使命としている。

本法人は、医療法人を含む他の 5 つの法人とともに「PAZ グループ」を構成している。6 法人が基本理念を基に「美しく、健やかに、元気で」老いる社会の実現を目指し、事業展開をしている。

学校法人がグループ法人と密接な相互関係を持ち、医療・福祉の現場と一体的つながりをもった教育・研究機関であること、また、それらの周辺をサポートする関連会社があり、本学と積極的な協力関係を築いていること、そしてそれらを背景に本学が地域に存在する意義を持たせるように努めている。

3. 本学の個性・特色等

本学の建学の精神及び教育目標を、本学に学ぶ学生が理解できるよう、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確にし、「学生自身が、三つのポリシーの関係の背後にある大学の特色を理解する。」ことが重要であるという視点に立ち、毎年 1 年生全員に学長特別講義を実施する中で「P+A+Z=PAZ」という概念を以下のとおり説明している（図 1-2 学長特別講義資料（抜粋））。

群馬パース大学の教育体系の理解と記憶のために

■本学の名称 PAZ（パース）は、16世紀に日本に初めて西洋医学を紹介し、日本初の病院を作ったルイス・デ・アルメイダにちなんでポルトガル語から選ばれた。

■「PAZ」は平和を意味し、「平和で公正で安定し成長する」社会を希求する大学であることを示し、同時に、大学も学生も「平和・公正・安定・成長」を旨とすることを示す。
注：公正とは、規則を守ること、道を外れないこと。

■「P、A、Z」の各文字には、Pessoa（個性）、Assistencia（互助）、Zelo（熱意）という個別の概念が付与されている。読み方は、ペーソ、アシステンシア、ゼロ。

■この対応に基づいて、学生の「一個人、社会人、職業人」としての側面を高めた能力を磨くことを本学の「教育の三本柱」とする。

■P、A、Zの示す三つの能力を「P力、A力、Z力」とも書き総合能力を「PAZ力」と呼ぶ。それぞれの基本の表現は以下の通り。

「柔軟な知的適応能力」、「円満な対人協調能力」、「有用な業務遂行能力」

■本学は三力を併せて総合的な人間力をもった人材を世に送り出すことを目指す。ここで
P力は「学識を増し、見識を磨き、人として成熟し、適応力を高める」ことで、
A力は「共感力、協調力、交流力を高めて、円満な対人能力を伸ばす」ことで、
Z力は「専門的な知識と技能を真摯に学び、有用な仕事力を修得する」ことで
それぞれ得られる。下表では、以上の内容を整理したもの。

用語	意味する内容
PAZ（平和）	平和・公正・安定・成長を希求する
Pessoa（個性）	柔軟な知的適応能力（一個人としての側面）
Assistencia（互助）	円満な対人協調能力（社会人としての側面）
Zelo（熱意）	有用な業務遂行能力（職業人としての側面）

■医療の場で言えば、P力、A力、Z力は以下の内容を含む。

P力：「問題意識を高め、人格を磨き、倫理観を養い、研究する能力の基礎を育むこと」。

A力：「医療の現場で出会う人々に真摯に向き合い、思いやり、優しさ、共感を持って接し、的確なコミュニケーション能力を発揮し、チーム医療のセンスを育て、地域や社会に貢献する意志を養うこと」。

Z力：「日々進歩する医学医療の知識と技術を的確に学び、向上心を失わずに努力し、役割を理解し、医療の現場のさまざまな問題を発見し、評価し、解決し、主体的、意欲的、効率的にかつ責任感をもって職能を発揮する基礎を習得すること」。

図 1-2 学長特別講義資料（抜粋）

P＝個人的側面—知的適応能力、A＝社会的側面—対人調整能力、Z＝職業的側面—業務遂行能力として、これを組み合わせ、「平和・公正・安定・成長」を目指している。

本学は、グループ法人である「医療法人社団ほたか会」の実践を通じた人材育成の必要性から創設されたものである。医療法人社団ほたか会では、病院・診療所・介護老人保健施設・ケアハウス・通所リハビリテーション等を運営している。これにより成立した臨床と教育のつながりの中から、指導者の育成と研究機能が求められるようになり、大学院の開設が導かれた。また、各株式会社では、福祉施設関連事業、医療職のための職業紹介事業及び学生支援関係事業等を営んでいる。

創設 22 年目を迎えた本学では、教職員全体で、大学を積極的に活動させることに取り組める状況である。学生数も、比較的小規模であることの利点が、教学や学生支援にも反映されている。

学校法人と大学の関係も毎月 1 回開催される学園運営会議の実施により、経営側と教学側の意思疎通、連携、協働が円滑であり、機動的な意思決定がなされ、責任が明確にされ、大学の管理運営が統括されている。

II. 沿革と現況

1. 本学の沿革

平成 09 年 12 月	群馬パース看護短期大学の設置認可
平成 10 年 4 月	群馬パース看護短期大学の開学
平成 10 年 4 月	看護学科第 1 回入学式の挙行
平成 12 年 12 月	地域看護学専攻科の設置認可
平成 13 年 3 月	看護学科第 1 回卒業証書授与式の挙行
平成 13 年 4 月	地域看護学専攻科第 1 回入学式の挙行
平成 13 年 12 月	理学療法学科の設置認可
平成 14 年 3 月	地域看護学専攻科第 1 回修了証書授与式の挙行
平成 14 年 4 月	大学名を「群馬パース学園短期大学」へ変更
平成 14 年 4 月	理学療法学科第 1 回入学式の挙行
平成 15 年 09 月	高崎キャンパスの開設
平成 16 年 11 月	群馬パース大学の設置認可
平成 17 年 4 月	群馬パース大学の開学
平成 17 年 4 月	保健科学部看護学科、理学療法学科第 1 回入学式の挙行

群馬パース大学

平成 20 年 10 月	群馬パース大学大学院の設置認可
平成 21 年 3 月	保健科学部看護学科、理学療法学科第 1 回学位記授与式の举行
平成 21 年 4 月	群馬パース大学大学院の開学
平成 21 年 4 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻修士課程第 1 回入学式の举行
平成 22 年 2 月	新キャンパス（1 号館）の竣工
平成 23 年 3 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻修士課程第 1 回学位記授与式の举行
平成 24 年 8 月	保健科学部看護学科が助産師学校の指定を受ける
平成 25 年 2 月	検査技術学科棟（2 号館）の竣工
平成 25 年 4 月	保健科学部検査技術学科第 1 回入学式の举行
平成 25 年 10 月	体育棟（3 号館）の竣工
平成 29 年 3 月	放射線学科・臨床工学科棟（4 号館）の竣工
平成 29 年 4 月	保健科学部放射線学科・臨床工学科第 1 回入学式の举行
平成 30 年 4 月	大学院保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程第 1 回入学式の举行
平成 30 年 10 月	日本看護協会から認定看護師教育機関（摂食・嚥下障害看護）の認定を受ける。
令和元年 7 月	認定看護師教育課程（摂食・嚥下障害看護）第 1 回開講式
令和 2 年 1 月	認定看護師教育課程（摂食・嚥下障害看護）第 1 回修了式

2. 本学の現況

・大学名

群馬パース大学 群馬パース大学大学院

・所在地

群馬県高崎市問屋町一丁目 7 番地 1 【1 号館】

（看護学科・理学療法学科・図書館棟）

群馬県高崎市問屋町一丁目 8 番地 1 【2 号館】（検査技術学科棟）

群馬県高崎市問屋町一丁目 3 番地 8 【3 号館】（体育棟）

群馬県高崎市問屋町三丁目 3 番 4 【4 号館】（放射線学科・臨床工学科棟）

群馬県吾妻郡高山村中山 6859-252 【グラウンド】

・ 学部構成

学部等	学科、専攻・課程
保健科学部	看護学科、理学療法学科、検査技術学科 放射線学科、臨床工学科
大学院保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程 保健科学専攻 博士後期課程

・ 学生数、教員数、職員数

保健科学部の定員及び在籍学生数

学部	学 科	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	在籍学 生総数	編入 学生数 (内数)	b/a
				(a)	(b)		
保健科 学部	看護学科	80	-	320	349	0	1.09
	理学療法学科	60	-	240	270	0	1.13
	検査技術学科	60	-	240	266	0	1.11
	放射線学科	70	-	280	320	0	1.14
	臨床工学科	50	-	200	228	0	1.14
合 計		320	-	1,280	1,433	0	1.12

保健科学研究科の定員及び在籍学生数

研究科	専 攻	入学 定員	収容 定員	在籍学生 総数	b/a
			(a)	(b)	
保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程	8	16	13	0.81
	保健科学専攻 博士後期課程	2	6	6	1.00
合 計		10	22	19	0.86

保健科学部の教員数

学部・学科		専任教員数					助手
		教授	准教授	講師	助教	計	
保健科学部	看護学科	7	5	10	5	27	7
	理学療法学科	6	4	7	2	19	0
	検査技術学科	6	1	4	3	14	2
	放射線学科	7	4	1	3	15	2
	臨床工学科	4	2	4	3	13	2
保健科学部計		30	16	26	16	88	14

保健科学研究科の教員数

研究科・専攻、研究所等		研究指導教員及び研究指導補助教員		
		研究指導教員	研究指導補助教員	計
保健科学研究科	保健科学専攻 博士前期課程	26	6	32
	保健科学専攻 博士後期課程	13	1	14
保健科学研究科計		39	7	46

*一部保健科学部との兼担

職員数	
正職員	37
その他	22
計	59

Ⅲ. 評価機構が定める基準に基づく自己評価

基準 1. 使命・目的等

1-1 使命・目的及び教育目的の設定

1-1-① 意味・内容の具体性と明確性

1-1-② 簡潔な文章化

1-1-③ 個性・特色の明示

1-1-④ 変化への対応

(1) 1-1 の自己判定

「基準項目 1-1 を満たしている。」

(2) 1-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

1-1-① 意味・内容の具体性と明確性

1-1-② 簡潔な文章化

1-1-③ 個性・特色の明示

1-1-④ 変化への対応

大学の使命・目的及び教育目的の具体的な明文化と簡潔な文章化については以下のようになっている。

本学及び群馬パース大学大学院（以下、「本学大学院」という。）の使命・目的については、「群馬パース大学学則」（以下、「学則」という。）第 1 条及び「群馬パース大学大学院学則」（以下、「大学院学則」という。）第 2 条に定めている。

大学の使命は、「建学の精神」に学生の理解が深まる表現を用いた補足説明を加え表記している。

本学ホームページ、学生便覧等における「建学の精神」の補足説明

Paz は、平和を意味するポルトガル語、パース (Paz) に由来します。同時に Paz にはこの 3 文字を頭文字とする Pessoa (個性)、Assistencia (互助)、Zelo (熱意) の意味が与えられています。

Paz (平和) 平和で公正な社会の発展

Pessoa (個性)

個人の尊厳と自己実現、

Assistencia (互助)

多様な人々の共存と協調、

Zelo (熱意)

知の創造、

への貢献

次に大学及び大学院の目的は、簡潔な表現で以下のように具体的に文章化されている。

【大学の目的】

豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献することを目的とします。

【大学院の目的】

現代医療の高度化、複雑化、多様化に幅広く対応するために、保健科学を看護学、理学療法学、病因・病態検査学、放射線学、臨床工学の立場から探求するとともに、保健科学に共通する高度な学術的基盤を修得し、各分野における次世代を担える研究能力と豊かな人間性を備え、その分野で活躍できる教育者、研究者、指導者を育成することを目的とする。

本学の教育目的とは以下の教育目標を指すものである。これを基本理念において、より明確な表現に展開すると共に、育成する人材のより具体的な人物像を、学部、学科及び大学院の教育目的（教育目標）として学則（第3条の3）及び大学院学則（第2条）で規定し、学内外に示している。

これらの教育目的（教育目標）等は、本学ホームページ（以下、「本学HP」という。）において広く開示されている。保健科学部及び保健科学研究科について以下に示す。

（ア）保健科学部

1) 看護学科教育目標

1. 生命の尊厳を認識し、個人の人格を尊重する豊かな人間性と高い見識の育成
2. 看護の基本的知識・技術に基づき、ヒューマン・ケアを実践できる能力の育成
3. 保健・医療・福祉その他の領域との協調性と調整能力の育成
4. 看護の向上を目指し、自己研鑽する能力の育成
5. 看護を通して地域社会に主体的かつ創造的に貢献できる能力の育成
6. 国際社会に関心をもち、貢献できるための基礎的な能力の育成

2) 理学療法学科教育目標

1. 人を広く深く理解し、人と関わりあえる理学療法士の育成
2. チーム医療の実践、他職種と連携できる理学療法士の育成
3. 広範な理学療法ニーズに対応できる理学療法士の育成
4. 地域リハビリテーション領域で活躍できる理学療法士の育成
5. 多様化するニーズに応えられる理学療法士の育成

3) 検査技術学科教育目標

1. 建学の精神に基づいた幅広い教養と高い倫理観及び使命感を備えた人材の育成
2. 生命科学や検査技術学を生かした分野で貢献できる人材の育成
3. 科学的根拠に基づく適切な判断能力と問題解決能力を持つ人材の育成
4. 検査値から病態を推測し診療支援ができる人材の育成

4) 放射線学科教育目標

1. 放射線医学領域に重点を置いた教育・臨床・研究による専門性と豊かな人間性を兼ね備えた診療放射線技師の育成
2. 脳機能イメージングなどの生理学的な活性機能画像、MDCT や MRI などの画像データの収集に関する原理、機器の基本構成、その利用に関する基礎知識や技術、「読影の補助」などの画像診断学的知識・技術を有する診療放射線技師の育成
3. デジタル医療画像や電子カルテなどの情報を処理し、患者を中心とした他職種間との協働と多職種による連携からなる「チーム医療」を推進できる診療放射線技師の育成
4. 強度変調放射線治療 IMRT など、コンピュータ処理による治療計画と連動したコンピュータ制御の特殊照射法、3次元治療計画装置やコンピュータ処理の基礎的知識や臨床応用技術を習得し、正確で効果的な放射線治療を支える診療放射線技師の育成
5. 社会のニーズに応えられる質の高い医療を実践できる問題発見と問題解決能力を持った診療放射線技師の育成
6. 医療に関わるさまざまな課題に取り組み、研究の立案、解決法の提示、研究の流れ、結果の解釈などを自ら臨床実践し、かつ、結果を集約できる研究者である診療放射線技師の育成

5) 臨床工学科教育目標

1. 人間を総合的に捉え、人間に深い愛情を持つ、豊かな人間性を有する臨床工学技士の育成
2. 複雑化・高度化する医療技術に対応し、医療現場における安全性の向上に貢献できる確かな技術と知識を有する臨床工学技士の育成
3. 思考力、洞察力、判断力を持ち、医療の現場における諸問題に的確に対応できる問題解決能力を持った臨床工学技士の育成
4. 医療者としてのマナーとモラルを重んじ、高い倫理観を備えた臨床工学技士の育成
5. 医療を総合的に捉え、医療現場におけるチーム医療の一員として他職種との連携・協働を推進できる臨床工学技士の育成
6. 臨床工学技士という職業について高い誇りを持ち、生涯に渡り自己研鑽を続ける、向上心と使命感を持つ臨床工学技士の育成
7. 医療分野におけるさまざまな国内外の課題に対し、自ら進んで問題意識と研究意識を持ち、医工学の発展に寄与することのできる臨床工学技士の育成

(イ) 保健科学研究科

1) 保健科学研究科（博士前期課程）教育目標

1. 高度な専門知識・能力を有する実践者の育成

高度な倫理観と社会に対する深い洞察力、保健医療をとりまく社会システム、医学・医療の最新の知識を有し、根拠に基づいた高度な保健医療の実践を提供し、その結果を分析、蓄積するとともに、実践を研究、教育へと還元できる人材を育成する。

2. 保健医療分野においてリーダーシップを発揮する指導者の育成

保健医療システムを包括し、対象者の QOL 向上のために資源を活用し、他職種との協働の中でリーダーシップを発揮し、ケアを推進できる人材を育成する。

3. 実践分野において研究能力・教育能力を発揮する実践者・指導者の育成

臨床現場において生じる実践上の問題を抽出・分析し、その解決を図るために研究を推進・指導できる人材を育成する。また、臨床現場での新卒者、現任者を対象とする卒後教育、医療専門職養成機関での教育実践において、教育理論に基づいた教育方法を開発・構築し、実践できる人材を育成する。

2) 保健科学研究科（博士後期課程）教育研究上の目的

大学院修士課程における教育・研究を通して養われた知識や技術による高度な専門能力をさらに高め、医療科学領域において国際的な視野に立ち、自ら独創性の高い研究を遂行、指導できる教育・研究者、及び医療現場の高度な専門技術者を育成することを目的とする。

このように本学は使命・目的及び教育目的に大学の個性・特色を反映させ、各媒体でその趣旨を一貫した形で明示している。

(3) 1-1 の改善・向上方策（将来計画）

本学は大学の目的を踏まえ、開学以来一貫して建学の精神に基づいて保健医療専門職を育成しているため、大学の使命・目的及び教育目的は策定されてから現在まで大きな変更はない。しかしながら、各職種養成所の指定規則改正等の法令改正や、社会情勢の変化に注視し、本学の「中長期目標・中長期計画（以下、「中長期計画」という。）」の見直しが実施されるときなど、必要に応じて本学の使命・目的及び教育目的の見直しを実施していく予定である。

また、教育目的については学部学科ごとに学則に定めるよう準備している。

1-2 使命・目的及び教育目的の反映

1-2-① 役員、教職員の理解と支持

1-2-② 学内外への周知

1-2-③ 中長期的な計画への反映

1-2-④ 三つのポリシーへの反映

1-2-⑤ 教育研究組織の構成との整合性

(1) 1-2 の自己判定

「基準項目 1-2 を満たしている。」

(2) 1-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

1-2-① 役員、教職員の理解と支持

本学の教職員協働による大学運営体制を図 1-2-1 に示す。大学内の審議事項は各種会議などで発議され、教授会、研究科委員会又は大学協議会にて承認され周知される。審議内容が法人を含む場合は大学協議会から発議され、学園運営会議又は理事会にて承認され周知される。教職員への周知は、学科会議、事務局会議などを通して全員に行われる。

その意思決定機構の中で、教職員は学科会議、各種委員会等に参加し、意思決定プロセスに関わる。また意見なども前述の各種会議を通して十分に尊重され、組み込まれる仕組みとなっている。

群馬パース大学

【学長(副学長)】

会議名	構成員
教員評価委員会	学長 研究科長 学部長(議長) 事務局3名

【大学協議会】 学長 研究科長 学部長(議長) 各学科長 教養教育責任者 準備室長 IR推進室長 事務局3名

会議名	構成員
教学マネジメント会議	学長 研究科長 学部長(議長) 各学科長 教養教育責任者 事務局3名
財務マネジメント会議	学長 研究科長 学部長(議長) 各学科長 教養教育責任者 事務局4名

組織名	構成員						
	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
IR推進室	1名	2名	1名	1名	1名	1名	4名

会議名	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
SD委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	6名
自己点検評価委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名
情報システム委員会	1名	1名	1名	2名	1名	2名	2名

(臨時委員会)

会議名	構成員
新学部設置準備委員会	学長 学部長 各学科長 教養教育責任者 準備室長 事務局6名

【大学院】

【研究科委員会】 学長 研究科長(議長) 看護学科1名 理学療法学科1名 検査技術学科2名 放射線学科1名 臨床工学科1名 大学院1名 事務局4名

会議名	委員	事務局
博士前期課程運営委員会	看護学科2名 理学療法学科1名 検査技術学科3名 放射線学科1名 臨床工学科1名	5名
博士後期課程運営委員会	理学療法学科1名 検査技術学科5名 大学院2名	5名
FD委員会	看護学科1名 理学療法学科1名 検査技術学科1名 放射線学科1名 臨床工学科1名	3名

【大学】

【教授会】 学長 学部長(議長) 学部全教授 事務局4名

会議名	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
教務委員会	2名	4名	2名	2名	2名	2名	4名
(実習部会)	2名	2名	2名	2名	2名	-	4名
学生委員会	2名	3名	2名	3名	2名	2名	3名
(学生相談部会)	1名	2名	1名	1名	1名	1名	3名
(キャリアサポート部会)	2名	3名	2名	2名	2名	1名	3名
(健康管理部会)	2名	3名	2名	2名	2名	1名	3名
入試委員会	2名	3名	2名	2名	2名	2名	4名
広報委員会	2名	4名	2名	2名	3名	2名	3名
FD委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	4名
国家試験対策委員会	2名	2名	2名	2名	2名	-	3名

【大学・大学院共通】

会議名	構成員
教員審査委員会	学長 研究科長 学部長(議長) 各学科長 教養教育責任者 事務局3名

会議名	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
紀要編集委員会	2名	2名	2名	2名	2名	1名	3名
研究倫理審査委員会	内部委員：看護学科2名 理学療法学科2名 検査技術学科2名 放射線学科1名 教養共通教育部2名 外部委員：3名						5名
バイオセーフティ委員会	1名	1名	2名	1名	1名	1名	4名
利益相反マネジメント委員会	内部委員：看護学科1名 理学療法学科1名 検査技術学科1名 教養共通教育部1名 外部委員：1名						3名

会議名	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
国際交流センター	2名	3名	2名	2名	1名	2名	4名
地域連携センター	2名	4名	2名	2名	1名	1名	5名

【大学附属施設等】

会議名	看護学科	理学療法学科	検査技術学科	放射線学科	臨床工学科	教養共通教育部	事務局
附属図書館運営委員会	2名	2名	2名	2名	2名	2名	3名
附属研究所運営委員会	2名	2名	2名	2名	2名	1名	6名

会議名	構成員
看護実践教育センター運営委員会	主任教員 専任教員 看護学科長 事務局5名

図 1-2-1 教職員協働による大学運営体制

1-2-② 学内外への周知

本学の使命である建学の精神、大学の目的及び教育目標は以下の形で周知される。

学外に対する周知は、本学 HP 及び「大学案内 2021」に掲載している。同じく、大学院の目的を学外に周知するため、本学 HP に掲載している。

一方、学内に対する建学の精神、大学の目的及び教育目標の周知は、学生の一番目につきやすい 1 号館学生ホールの壁面や附属図書館の出入口、また 4 号館の 2 階出入口に掲げる他、学生便覧を通して行っている。

1-2-③ 中長期的な計画への反映

本学の中長期計画は、平成 28 (2016) 年 3 月に策定されたものを、平成 30 (2018) 年 3 月に見直した。さらに、令和 2 (2020) 年 4 月に中長期目標・中長期計画を新たに策定した。今後も中長期計画は本学の重要な位置づけとし、企画課が策定した中長期計画を大学協議会や学園運営会議において定期的に見直しを行う。

1-2-④ 三つのポリシーへの反映

保健科学部、保健科学研究科（博士前期課程）及び保健科学研究科（博士後期課程）の三つのポリシーを以下に示す。ただし、中長期計画による令和 3 (2021) 年度の新学部設置により、三つのポリシーを新たに学部・学科ごとに策定するなどの検討を行い、令和 2 (2020) 年 4 月の教授会、及び大学協議会にて承認された。

(ア) 保健科学部

1) ディプロマ・ポリシー（全学科共通）

本学は、建学の精神に基づき保健医療専門職の質を高め、地域保健医療の発展に寄与することを教育の目標に掲げ、本学の学士課程に共通する学位授与の方針を定めている。

【知識・理解】

- ・保健医療専門職としての基礎的知識と、社会人としての教養を身につけている。
- ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。

【思考・判断】

- ・保健医療分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。

【技能・表現】

- ・先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供することができる。
- ・チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力を身につけている。

【関心・意欲】

- ・生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲を持っている。
- ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。

【態度】

- ・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。

2) カリキュラム・ポリシー（全学科共通）

本学保健科学部は、その建学の精神に基づき、地域保健医療の発展に寄与する人材を養成するため、看護学科、理学療法学科、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科を置き、次のとおり学部の教育課程の編成方針を定めている。

1. 保健科学部の教育課程は、教養科目群・共通基盤科目群、専門基礎科目群、専門科目群から構成される。
2. 教養科目群は社会人としての教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるため、「人と社会及び自然の理解」の科目群と「情報と言語の理解」の科目群に大別された広範な科目を5学科共通科目として開設する。
3. 共通基盤科目群は、初年次において大学での学習に対する準備状態を整え、専門領域の学習への関心と意欲を高めるための科目を開設する。また、今日の医療において必須事項であるチーム医療に関する意識を高めるための科目を配置する。
4. 専門基礎科目群は、医療専門職を養成する5学科それぞれに展開される専門領域の理論、技能の習得のための学術的基盤となる科目を開設する。
5. 専門科目群は各学科の専門領域とそれに関連する理論、技能を学ぶ科目を開設する。
6. 各科目は「知識・理解」、「思考・判断」、「技能・表現」、「関心・意欲」、「態度」の要素からなる本学のディプロマ・ポリシーを達成するよう、4年間を通して体系的に配置する。さらに、これら5つの要素を総合的に発揮することによる高い実践力を獲得するため、専門科目群に実習科目を置く。

3) アドミッション・ポリシー

本学保健科学部のアドミッション・ポリシーでは、「高等学校における教科・科目の学習」や「日常生活、学校生活、社会活動等」について、どのような視点で人としての資質形成に努めるかを記載した上で、各学科別にアドミッション・ポリシーを以下の通り示している。

①看護学科

- ・人が好きで、人を思いやり、人を援助することに労力を惜しまない人
- ・相手の立場に立ってものごとを考えることのできる人
- ・看護学に興味をもち、学ぶ意欲にあふれ、主体的に学習する姿勢のある人

②理学療法学科

- ・人が好きで、人を思いやり、人を援助することに労力を惜しまない人
- ・明るく元気で、向上心のある人
- ・学ぶ意欲、挑戦する意欲があり、主体的に学習する意志のある人
- ・理学療法を通じて社会に貢献しようとする強い意志を持っている人

③検査技術学科

- ・“人”を思いやる心を持ち相手の立場に立って物事を考えることができる人
- ・“臨床検査”という学問と技術を学び医療に貢献しようとする意欲のある人

- ・ 社会に対し積極的に関わり、生命科学や検査技術学を生かし多様な分野で貢献しようとする意欲のある人
- ・ 協調性があり、独創性と粘り強さで問題を解決しようとする人

④放射線学科

- ・ “人”を思いやる心、労る心を持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人
- ・ 生命科学や放射線科学を生かし多様な分野で貢献しようとする意欲のある人
- ・ 学ぶ意欲、挑戦する意欲があり、粘り強く主体的に学習する意志のある人
- ・ 社会に対し積極的に関わり、コミュニケーションを大事にできる人

⑤臨床工学科

- ・ “人”を思いやる心、労る心を持ち、相手の立場に立って物事を考えることができる人
- ・ 臨床工学を深く学び、チーム医療及び医療の質に貢献しようとする意欲のある人
- ・ 学ぶ意欲、挑戦する意欲があり、粘り強く主体的に学習する意志のある人
- ・ 社会に対し積極的に関わり、コミュニケーションを大事にできる人

(イ) 保健科学研究科

1) 博士前期課程

①ディプロマ・ポリシー

保健科学研究科博士前期課程を修了し、次に該当するものに修士（保健学）の学位を授与する。

1. 保健医療専門職としての基礎的知識、科学的根拠及び高い倫理観に基づいて問題の探求・解決を図る高度な研究能力を有する。
2. 保健医療分野の諸課題に関して、科学的な手続きと洞察に基づく的確な判断能力を有する。
3. 先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供する実践能力を有する。
4. 地域保健医療の実践現場で他の分野と連携して社会に貢献できる教育能力を有する。

②カリキュラム・ポリシー

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施する。

1. 研究者としての基盤の涵養

研究能力の基盤を形成するために、共通科目に「研究方法特論」、「研究方法論Ⅰ～Ⅴ」、「応用英語」、「保健医療統計学」などの科目を設置する。又、専門の領域における研究実践の方法、すなわち研究テーマの設定から学位論文の完成までを段階を追って教育するために、専門科目に各領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を設置する。

2. 高度な実践力とリーダーシップの涵養

保健医療分野におけるリーダーに必要な、専門領域の枠を超えた総合的・学際的な教育を行うために、共通科目に「医療倫理学特論」、「医療経営・管理学特論」、「人体の構造と機能学特論」、「加齢医学特論」、「家族社会学特論」、「保健学特別セミナー」などの科目を設置する。特に、「保健学特別セミナー」は幅広い視野の育成という目的に加え、協働(チームアプローチ)の重要性に鑑み必修科目として設置する。

3. 専門領域における教育能力の涵養

教育機関での教育志向だけでなく、保健医療の様々な場面における教育活動を想定した医療専門領域における教育学の教育を行うために、共通科目に「教育学」を設け、さらに専門科目の「特論」、「演習」のなかで領域ごとに、より実践的な内容を盛り込む。

履修計画では、体系化された所属専門領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を基本に置く。並行して学ぶ共通科目は一部を除き、学習ニーズ、学習進度に合わせて年次にかかわらず柔軟に履修できるように配置する。また、家庭や職場など社会的事情により標準修業年限(2年)での修業が困難な場合に、標準修業年限を超えて履修可能な長期履修制度を設ける。以上のように、少人数教育の利点を活かし、学習者の志向・ニーズに対応できる柔軟で特色のある大学院プログラムを提供する。

③アドミッション・ポリシー

保健科学研究科博士前期課程ではアドミッション・ポリシーを以下のとおり定める。

1. 高度な専門知識・能力を有し、実践の場を通して研究・教育に携わっていきたいと考えている人
2. 保健医療分野において対象者のQOLの向上に寄与したいと考えている人
3. 実践上の問題を抽出・分析し、その解決に努力を惜しまない人
4. 教育理論に基づいた教育方法を開発構築し、卒後教育に活かそうと考えている人

2) 博士後期課程

①ディプロマ・ポリシー

保健科学研究科保健科学専攻(博士後期課程)を修了し、次に該当するものに博士(医療科学)の学位を授与する。

1. 独創性・創造性に優れ国際的に通用する研究能力を備えた人材
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学あるいは大学院における教育・研究指導ができる人材
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究ができる人材
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発ができる人材

②カリキュラム・ポリシー

学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施する。

1. 高い倫理性と強い責任感、課題遂行力の涵養

共通科目において、社会的理解を得るための生命倫理に則った研究デザインと倫理的行動能力を修得することを目的とした「生命研究倫理論」と、自らの研究分野以外の幅広い知識と課題に適した研究法を選択できる能力を修得することを目的とした「医療科学研究法」の科目を設置する。

2. 創造性豊かな優れた研究・開発能力の涵養

専門科目において、科学的エビデンスを構築するための高度解析技術や最新評価法などを修得することを目的とした「特講科目」と、各領域の解決すべき課題を広く探求し、課題解決思考を発展させるため、英文文献講読と教員との討論により、研究の評価・応用能力を養い、国際的な情報発信ができることを目的とした「演習科目」、さらに、医療科学における新たな知見を得るための研究を行い英文論文として公表できることを目的とした「特別研究」を設置する。

③アドミッション・ポリシー

保健科学研究科博士後期課程ではアドミッション・ポリシーを以下のとおり定める。

1. 科学的・論理的な思考に基づいて独創的かつ実践的な研究を遂行することに意欲のある人
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学、あるいは大学院における教育・研究指導に意欲のある人
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究を行うことに意欲のある人
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発を行うことに意欲のある人

保健科学部及び保健科学研究科の三つのポリシーは、中長期計画により、具体的目標に変更の必要があった場合、各委員会を通して審議され、教授会及び研究科委員会を経て大学協議会にて決定され、学園運営会議の承認を経て速やかに反映される仕組みとなっている。

1-2-⑤ 教育研究組織の構成との整合性

本学は、学則第3条及び「学校法人群馬パース学園組織規程」（以下、「組織規程」という。）第8条により保健科学部を、そのもとに看護学科（入学定員80人）、理学療法学科（入学定員60人）、検査技術学科（入学定員60人）、放射線学科（入学定員70人）、臨床工学科（入学定員50人）を置いている。また、教育・研究・実践3面の還流を意図して、大学院学則第4条・第5条及び組織規程第8条により、本学に大学院保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程（入学定員8人）、博士後期課程（入学定員2人）を置いている。

教育、研究を支える附属機関として、学則第4条・第5条及び組織規程第8条により群馬パース大学附属図書館（以下、「附属図書館」という。）、群馬パース大学附属研究所（以下、「附属研究所」という。）を有する（図1-2-2）。

組織構成は、学長による学務掌握・職員の監督・教育運営の管理（組織規程第8条・第12条）のもとに、研究科長が統理する大学院研究科（同第8条・第14条）、学科長が学務

を行う看護学科、理学療法学科、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科から成り学部長が統理する保健科学部（同第8条・第15条・第16条2項）、附属図書館（同第8条・第18条）及び附属研究所（同第8条・第19条）が設置され、重要事項の協議のために研究科委員会と教授会が、教授会のもとに教務委員会、学生委員会、入試委員会、広報委員会、FD委員会、国家試験対策委員会が置かれる（「群馬パース大学教授会規程（以下、「教授会規程」という。）」第4条）、という体制で運営されている。

以上から本学では、有機的に大学教員の教育研究をサポートし、また研究内容に関しても群馬パース大学附属研究所などを通して、速やかかつ丁寧にサポートする体制を敷いている。

群馬パース大学／群馬パース大学大学院 教育研究組織図

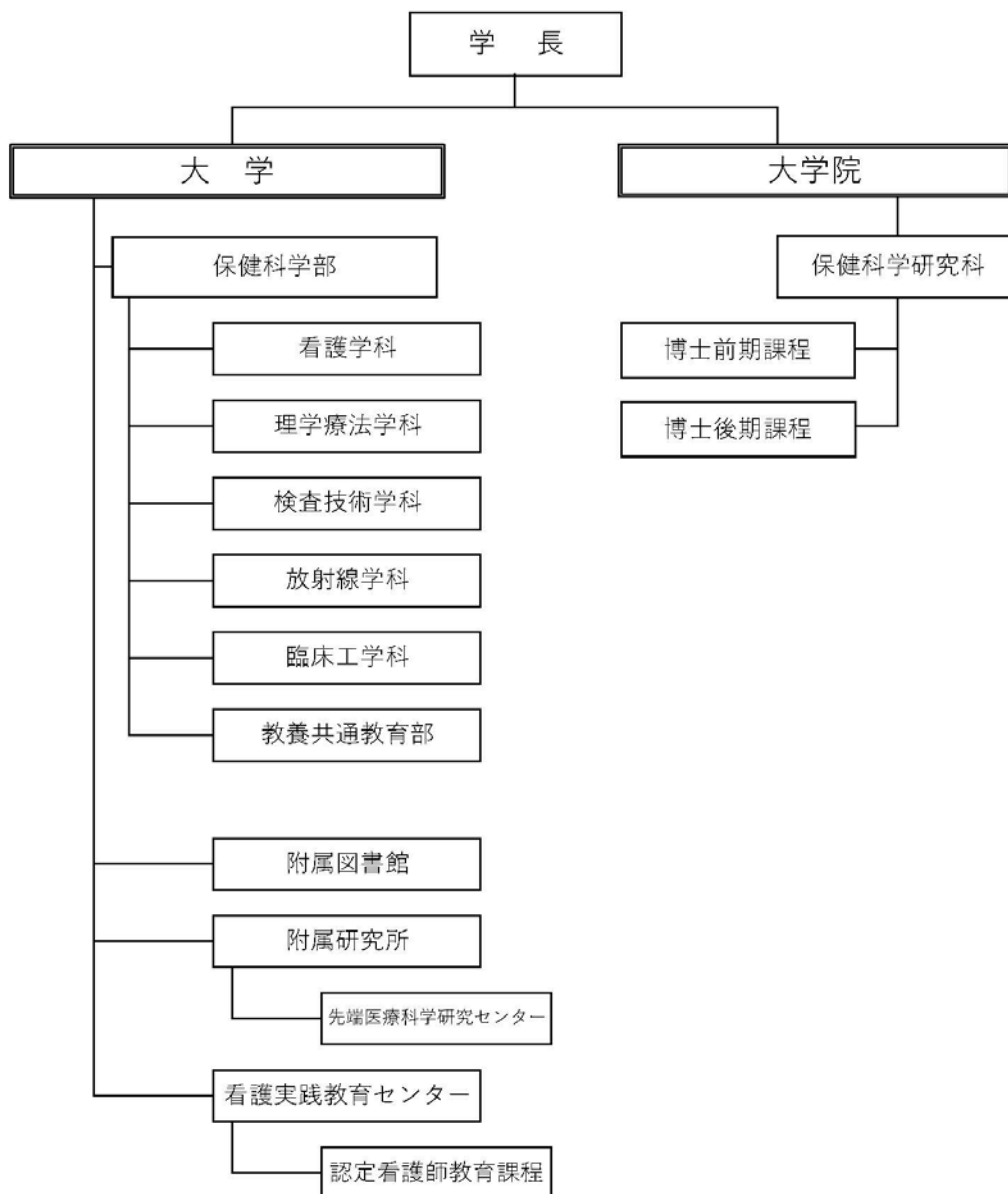


図 1-2-2 群馬パース大学・群馬パース大学大学院 教育研究組織図

(3) 1-2 の改善・向上方策（将来計画）

社会情勢の変化や大学を巡る状況に迅速かつ適切に対応し、社会のニーズに応えるためにも、今後、大学の使命・目的を的確に遂行していく。大学を巡る状況の変化に対応するため、学長主導による大学協議会と理事会との調整機関である学園運営会議において毎月学内すべての審議事項に対し検証を行っている。また、三つのポリシーや教育研究組織の構成に関しては、中長期計画に基づく学部再編に合わせて、学部・学科ごとに三つのポリシーを作成するなどの再整備を実施した。今後も必要に応じ、継続して見直しを行う。

【基準1の自己評価】

大学の使命と目的は、学則の第1条に示され、教育目的（教育目標）は簡潔な文章で示されている。

また、大学の使命と目的を時代の変化に適応させるため、平成29（2017）年に放射線学科と臨床工学科を増設した。使命・目的及び教育目的（教育目標）を達成するための三つのポリシーは、本学HPで周知されているだけでなく、学内の目につきやすい場所に掲示したり、学生便覧に掲載したりしている。教育研究組織は、図1-2-2の通り、教育目的（教育目標）に照らして整備されている。令和2（2020）年4月に策定された中長期計画では、新学科の設置も想定されており、教育目的（教育目標）に基づく三つのポリシーも時代に即して発展させる予定である。

以上のことから、基準1を満たしていると判断できる。

基準 2. 学生

2-1 学生の受入れ

2-1-① 教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知

2-1-② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施とその検証

2-1-③ 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持

(1) 2-1 の自己判定

「基準項目 2-1 を満たしている。」

(2) 2-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-1-① 教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知

(ア) 保健科学部

本学のアドミッション・ポリシーは教育目的（教育目標）を踏まえ基準 1-2-④にあるように定められている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、大学案内、本学 HP に掲載し、本学の情報を収集しようとする受験生、保護者及び高等学校関係者等に向けて周知している。

本学 HP では、トップページから直接アドミッション・ポリシーを含む三つのポリシーの掲載箇所にアクセスできるようにしている。

また、進学ガイダンスやオープンキャンパス等の参加者に対しては、担当者よりアドミッション・ポリシーを直接説明して、その浸透を図っている。

(イ) 保健科学研究科

本大学院のアドミッション・ポリシーは教育目的（教育目標及び教育研究上の目的）を踏まえ基準 1-2-④にあるように定められている。アドミッション・ポリシーは、学生募集要項、大学案内、本学 HP に掲載し、保健科学研究科受験生等に周知している。

2-1-② アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施とその検証

(ア) 保健科学部

本学ではアドミッション・ポリシーに基づいて各学科の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、学生募集要項（入学試験要項）を定め入学試験を実施している。

令和 2（2020）年度保健科学部入学試験においては、AO 入試、推薦入試、特別入試、一般入試、センター試験利用入試の区分を設定し、入学試験を実施している。

保健科学部入学試験では、学長の責任のもと「群馬パース大学入学者選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」、に基づき、入試委員会及び入試広報課が中心となり適切な実施体制を整備し、入試問題作成委員会及び入試広報課が中心となり入試問題を作成し、全学的に実施している。

入学者の選考に関しては「群馬パース大学入学者選考規程」に基づき、入試委員長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、学長が決定している。

このように実施されている入学者選抜の方法や運用が妥当、適切であるかについては、入学者の追跡調査を毎年度入試委員会から IR 推進室にデータ解析を依頼し、その解析結

果を入試委員会において検証している。

入試問題の作成は本学が自ら行い基礎学力試験、一般入試学力検査ともに、ヒューマンエラーの発生を抑えるべくチェックを重ね適切に実施している。

以上のように保健科学部ではアドミッション・ポリシーに基づき、「群馬パース大学入学選考規程」、「群馬パース大学入試問題作成委員会規程」、「群馬パース大学入試委員会規程」、に則って公正かつ妥当な方法により適切な運用ができていないか検証を重ねながら、入学選考が実施されている。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科ではアドミッション・ポリシーに基づいて、博士前期課程及び博士後期課程各領域の特色、専門分野の特性に応じた能力を持つ学生の確保を目的として、入学試験要項を定め入学試験を実施している。

令和2(2020)年度保健科学研究科においては、博士前期課程及び博士後期課程でⅠ期とⅡ期の入試区分を設け、入学試験を実施している。

1) 博士前期課程入学試験

看護学領域、理学療法学領域、病因・病態検査学領域、放射線学領域、臨床工学領域において、共通の英語の筆記試験、志望する領域の専門科目に関する筆記試験、面接試験を行い、試験結果及び提出書類を総合して選考する。

2) 博士後期課程入学試験

医療科学領域においては、志望する研究分野に関する英語の筆記試験と口述試験、研究計画等に関する口頭試問を含む面接試験を行い、試験結果及び提出書類を総合して選考する。

保健科学研究科入学試験は、学長の責任のもと研究科委員会が中心となり実施体制を整備し、実施している。入学者の選考に関しては「群馬パース大学大学院入学選考規程」に基づき、研究科長を議長とする合否判定会議を開催し合否判定を行い、研究科委員会において選考し、学長が決定している。

以上のように保健科学研究科ではアドミッション・ポリシーに基づき、適切な体制のもとに入学選考が実施されている。

2-1-③ 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持

(ア) 保健科学部

開設初年度である臨床工学科における入学定員充足率については、平成29(2017)年度で132%となっているが、その後初年度の受験生の動向を考慮した結果、平成30(2018)年度においては118%、平成31(2019)年度においては114%、令和2(2020)年度においては114%と適切な割合に留めることができている。それ以外の学科においても過去5年間の学科別の入学定員充足率(平均比率)については、120%以内を維持している。

また、保健科学部全体の収容定員充足率については、過去5年間115%以内を維持している。

以上のように教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保している。

(イ) 保健科学研究科

過去5年間の博士前期課程の入学定員充足率（平均比率）は106%、博士後期課程の入学定員充足率（平均比率）は100%となっており、適切に入学者の確保が行われている。

博士前期課程では、看護学領域、理学療法学領域、病因・病態検査学領域に加え、平成29（2017）年度から放射線学領域、臨床工学領域を合わせた5領域の構成に変更している。このことから平成30（2018）年度に入学定員を2人増加した。

以上のように、教育を行う環境確保のため、入学定員及び収容定員に沿って在籍学生を適切に確保している。

(3) 2-1の改善・向上方策（将来計画）

令和3（2021）年度入学選抜より、令和3（2021）年4月に新設されるリハビリテーション学部の学生募集を開始する予定である。

今後も保健科学部及び保健科学研究科の入学選抜が、教育目的（教育目標及び教育研究上の目的）を踏まえたアドミッション・ポリシーに沿った方法により適切に運用できているか検証を重ねながら、アドミッション・ポリシーの周知手段を常に見直し、周知するよう努める。また、保健科学研究科博士前期課程においては、令和2（2020）年度の定員充足率が81%となっていることから、入試及び広報活動の在り方について検討していく。

これまで同様に公正かつ適切な入学試験の実施、入学定員及び収容定員に沿った適切な在籍学生の確保を目標に入学選抜に係る体制の整備・確立を推進していく。

2-2 学修支援

2-2-① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備

2-2-② TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実

(1) 2-2の自己判定

「基準項目2-2を満たしている。」

(2) 2-2の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-2-① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備

教職協働による学生への学修に関する支援及び授業支援に関する方針及び計画は、保健科学部においては教務委員会によって検討され、その実施状況が管理されている。教務委員会は委員長、副委員長、看護学科教員、理学療法学科教員、検査技術学科教員、放射線学科教員、臨床工学学科教員、及び事務職員によって構成され、毎月1回開催される。

教務委員会は、①学事予定（年間授業計画）、時間割の策定、教育課程の編成、シラバス

の作成、②履修登録管理及びキャップ制の遵守、③出欠・成績管理、修学ポートフォリオの推進、④教室や教育機器などハードウェアの保守点検、⑤単位認定及び進級・卒業判定基準の遵守、⑥学籍異動に関する事項の管理等を行っており、教職協働による学生への学修支援の要としての役割を果たしている。検討された内容は教授会に報告され、学長の承認を経て全学に周知されている。また、学生へは学内掲示やアクティブ・アカデミー、授業やガイダンスを通じて周知している。

保健科学研究科については、博士前期課程運営委員会及び博士後期課程運営委員会において、同様の活動がなされている。

2-2-② TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実

(ア) 障害を有する学生への配慮

障害を有する学生の入学事例はないが、当該学生が入学する場合には現在のバリアフリー環境に加え、更なる物理的環境や、人的支援を行うべく学生委員会において検討されている。

(イ) オフィスアワー制度の全学的な実施

オフィスアワー制度は、開講されている全科目で実施されており、受付時間と場所等がシラバスを通じて周知されるよう、全教員にシラバス作成要領で指示している。教務委員会においてシラバスをチェックし、不備がある場合は記載内容の修正を求めている。このようにオフィスアワー制度を全学的に実施している。

(ウ) TA等の活用

TA制度は「群馬パース大学大学院ティーチング・アシスタント (TA) に関する規程」に定められ、主として指導教員の授業において補助的役割を持って運用されている。

実績としては、平成27 (2015) 年度4名、平成28 (2016) 年度0名、平成29 (2017) 年度5名、平成30 (2018) 年度3名、令和元 (2019) 年度2名のTAが授業における実技や演習の補助として活動を行っている。

(エ) 中途退学、休学及び留年への対応策

本学では、学生1人ひとりに目の行き届いたきめ細やかな支援を行うために担任制度やチューター制度を導入し、随時面談を行うことで学生の状況把握に努めている。

また、Active Academy (アクティブ・アカデミーWebポータルシステム) (以下、「アクティブ・アカデミー」という。) を活用して、全教職員が学生の出欠状況や成績状況等を確認し、学生の状況変化に早期に対応できるよう情報共有している。

加えて、中途退学、休学を希望する学生については、担任やチューターが学生本人や保護者と面談を実施し、必要に応じて学科長や他の教員、学生相談室などとも連携をとりながら対応している。

学部では、学科による差はあるが退学者および留年者とも若干の増加傾向にある。大学院にあっては、目的意識を強く持った社会人が多いため、これまで休退学者は多くない。

(3) 2-2 の改善・向上方策（将来計画）

オフィスアワー制度は全学的に実施しているが、シラバスへの記載内容が適切に実施されているか、今後、教務委員会においてチェック体制を強化する。

教職員協働による学生への学習支援体制については、アクティブ・アカデミーにおける修学ポートフォリオの活用を進めることが大きな課題である。

現在、修学ポートフォリオの利用状況は、各学生データの参照と学生指導の一部を記録する程度である。今後は、学生指導記録の活用を全教員に徹底するなど、修学ポートフォリオを積極的に活用し、在学中のエンロールメント・マネジメントの一助としたい。

2-3 キャリア支援

2-3-① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備

(1) 2-3 の自己判定

「基準項目 2-3 を満たしている。」

(2) 2-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学では学生委員会の下部会にキャリアサポート部会を設け、キャリア教育及び就職支援全般に関する支援を組織的に行っている。詳細については、以下（ア）キャリア教育に関する支援体制、（イ）就職に関する支援体制で示す。

（ア）キャリア教育に関する支援体制

1) キャリアサポートセンターにおけるキャリア教育の実施

キャリアサポートセンターは、キャリアサポート部会の管理のもと、本学のグループ会社の職業紹介部門（メディカル・サフラン）のスタッフが本学の委託を受け、本学の職員と共にキャリア支援を行っている。また、必要に応じてキャリアサポート部会の教員がキャリア教育を行える体制も整えている。

そのキャリアサポートセンターでは、放射線学科と臨床工学科の学生が就職活動を本格的に行う令和2（2020）年を見越し、令和元（2019）年より相談員を増員しキャリア相談を行っている。そのため、令和元（2019）年度は前年度と比較して1.5倍の相談件数となった。具体的なキャリア相談件数（延べ）は、看護学科学生651人（4年生の求職者数82人）、理学療法学科302人（4年生の求職者数81人）、検査技術学科133人（4年生の求職者数60人）、放射線学科1人（最上級学年は3年生）、臨床工学科1人（最上級学年は3年生）であり、具体的な相談内容は、進路相談37件、履歴書添削が450件、小論文・作文の書き方246件、添え状・送り状の書き方20件、面接対策510件であった。

2) 各学科におけるキャリア教育

①看護学科

就職・進学に関するキャリア支援も含めた相談・助言体制は、担任及びチューターにより個別に対応している。

②理学療法学科

キャリアサポートセンターのキャリア支援と並行して、学科の教員も担任と学科の就職担当が協働して進路指導にあたり、就職活動が遅延なく行える指導を行っている。

③検査技術学科

企業、衛生検査所、病院、健診センター等の協力を得て、2学年（希望者のみ）と3学年を対象とした学内進路相談会を実施し、キャリア教育の充実を図っている。また、就職活動の際には、教員が出願書類のチェックや面接練習等も行っている。

④放射線学科

キャリア教育の一環として、学外実習を重要視している。特に4年前期に行われる臨床実習は、キャリア教育の場としても捉えている。

⑤臨床工学科

キャリア教育の一環として、1・2学年では病院施設・医療関連企業などへの一日見学を実施している。3学年での臨床実習（7週間）もキャリア教育として重要と位置付けている。また、病院施設以外の分野として、医療機器企業の企画開発責任者を招き、医療機器企業と臨床工学技士の関りについて学び、社会人としての自立を目指した職業教育を実施している。

3) インターンシップへの参加支援

本学のインターンシップについては、①教育課程や臨地・臨床実習などに位置付ける場合、②大学行事や課外活動の一環として位置付ける場合、③病院・施設・企業等が独自に実施し学生が個人的に参加する場合に分けられる。

①については全学生が臨地・臨床実習を履修している。②については、課外授業において病院・施設見学を実施したり、教員が個別に得た情報を学科掲示板で案内したりしている。③については大学にきた情報を就職関係の共通掲示板で案内し、学生課を窓口に参加をサポートしている。

(イ) 就職に関する支援体制

1) キャリアサポート部会における就職支援の実施

キャリアサポート部会はキャリア教育の他に、求人票の管理、学外で行われる就職説明会の周知など、就職希望者を対象とした支援を行っている。病院や施設のパンフレット・ポスターなど求人票を含めた就職情報については、1号館は図書館、4号館は図書室にそれぞれ就職コーナーを設け随時閲覧することができる。

なお、令和元（2019）年度の求人件数は、看護師329件、保健師72件、助産師112件、理学療法士550件、臨床検査技師261件（件数は同病院・施設の重複有り）であった。

また、令和元（2019）年度の卒業者のうち、就職を希望する学生は国家資格を活かした病院や施設、企業等に就職している。就職者数についての詳細は以下に示す（表2-3-1）。なお、放射線学科と臨床工学科の1期生は、卒業が令和2（2020）年度となる。

表2-3-1 令和元（2019）年度学科別就職率一覧

卒業生数	求職者数			就職者数			就職率
		男子	女子		男子	女子	
看護学科 82名	82名	14名	68名	80名	13名	67名	97.6%
理学療法学科 82名 (うち1名就職の意思なし)	81名	52名	29名	81名	52名	29名	100%
検査技術学科 63名 (うち3名進学)	60名	21名	39名	59名	21名	38名	98.3%

2) 就職に関する情報提供

本学に届いた求人情報は、学内の就職コーナーの掲示と同時に、アクティブ・アカデミーからも配信しており、全学生が学内外を問わず最新の情報を閲覧することができる。

また、同就職コーナーには、過去の就職試験や面接等のデータを収集、蓄積整理しており、学生は必要な情報を閲覧することができる。

3) 就職説明会

就職支援の一つとして、病院、施設、企業の就職担当者を本学に招き、直接学生が面談できる就職説明会を例年実施している。参加者の専門職員の中には本学OB・OGも多数参加しており、先輩から直接就職の現場の説明を受けることにより、就職に対する強い動機付けとなっている。

令和元（2019）年8月には、例年学科単位で行っていた就職説明会を、看護学科、理学療法学科、放射線学科、臨床工学科の4学科の合同進路相談会として実施した。この合同進路相談会は、大学近隣の施設（展示ホール）を会場として、県内外の150施設が一堂に会した大規模な相談会となった。令和2（2020）年には、看護学科、理学療法学科、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科の5学科合同で、8月と3月に同様な相談会を計画している。

4) 就職対策講座の開催

令和元（2019）年度に行われた就職対策講座は、本学のキャリア相談員が受け持ち実施した。また、国公立の施設に就職を希望する学生のため、地元の資格スクール校に協力を得て公務員対策講座を実施した。「みだしなみ講座」では、紳士服販売専門店のスタッフを講師に招き、採用担当者の視点からの就活マナーやスーツの着こなし等の講座を実施した。令和元（2019）年度に開催した「専門職就活講座」では、医療現場で活躍している専門職の方を招いて講座を実施した。

5) 国家試験に関する支援

本学の学生は、国家資格を必要とした病院、施設、企業などに就職するため、国家試験が不合格の場合、内定が取り消される場合がある。そのため、国家試験合格のための支援が就職に関する支援と同様に重要となる。

本学では、各学科教員及び事務職員から構成される国家試験対策委員会を設け、国家試験対策を全学的な取り組みとしている。

6) 再就職支援等

新規学卒者の事業所産業別離職状況（令和元（2019）年10月厚生労働省調べ）によると、医療職の早期離職率が必ずしも他の業種と比較して低いとは言えず、希望どおりに就職したものの、何らかの事由により3年以内に離職しているケースが多いとの報告がなされている。本学では、雇用のミスマッチや結婚・出産などの事情により退職した卒業生に対して、本学のグループ会社の職業紹介部門（メディカル・サフラン）が再就職支援を行っている。具体的に、令和元（2019）年度にメディカル・サフランで再就職支援を受けた本学卒業生は34人（中途退学・除籍者4名の就職斡旋を含めると38人）であった。

7) キャリア教育と就職支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

学生の意見をくみ上げる仕組みの一つとして、学生委員会が実施している「卒業時アンケート」と「卒業後アンケート」がある。

2018年度卒業予定者を対象に、令和元（2019）年3月に「卒業時アンケート」を、8月に「卒業後アンケート」を実施し、学生の意見、要望を集約した。卒業時アンケートは197人のうち68人が回答（回答率34.5%）、卒業後アンケートは42人が回答（回答率21.3%）した。この調査では、在学中のキャリア教育や就職支援に関する調査が含まれており、本学のキャリア教育と就職支援の重要な基礎資料となると同時に、改善と向上に役立つものとする。この調査結果は学生委員会から各学科にフィードバックしており、キャリア教育、就職支援の改善を全学的に行う体制を整えている。

(3) 2-3の改善・向上方策（将来計画）

放射線学科と臨床工学科の1期生が令和2（2020）年度に卒業する。低学年のうちからキャリア教育を段階的に導入しており、専門職としての意識付けを卒業年度までに確立できるよう引き続き努める。

キャリアサポート部会が主体となって行う合同進路相談会や就職対策講座などを低学年から実施することにより、広がりや深みのあるキャリア支援を全学的に展開する。

また、令和2（2020）年度には、卒業した学生の就職先へアンケート調査を行い、早期離職防止や再就職支援のために活用する予定である。

2-4 学生サービス

2-4-① 学生生活の安定のための支援

(1) 2-4の自己判定

「基準項目 2-4 を満たしている。」

(2) 2-4 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学における学生サービス、厚生補導のための取り組みは学生委員会を主体に行われている。学生委員会は、学生生活が円滑に行われるよう支援することを目的として設置され、学生委員長、副委員長、看護学科教員、理学療法学科教員、検査技術学科教員、放射線学科教員、臨床工学科教員、及び事務職員により構成されている。学生委員会は月1回の頻度で開催している。

学生生活の安定のための支援として、学生委員会の下部会に学生の健康管理全般を管理する健康管理部会、心理的支援を行う学生相談部会を置き、日常の学生生活相談窓口として学生課を設け、組織的な支援を行っている（図 2-4-1）。

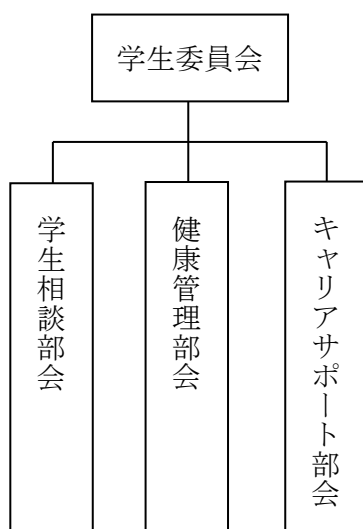


図 2-4-1 学生部組織図

また、学生委員会を中心とした組織的な支援とは別に、個別対応として各学科の担任やチューターが、学生の様々な問題についてきめ細やかな支援を行っている。

(ア) 奨学金などによる学生への経済的支援

本学における独自の奨学金制度の概要、及び平成30（2018）年度の奨学生数について以下に示す。日本学生支援機構の奨学金、修学支援新制度の授業料等の減免、地方公共団体や病院施設等の奨学金も含め、奨学金に関する情報については、学内掲示やアクティブ・アカデミーを通じて広く周知している。

1) 本学独自の奨学金制度

本学独自の奨学金は平成27（2015）年度より新設され、令和元（2019）年度では、21人の特待生（特待生S：4人、特待生A：10人、特待生B：7人）、19人の神戸（かんべ）奨学生、5人の兄弟姉妹奨学生、本学の卒業生及び修了生が対象となる同窓生奨学生は1人となっている。本学独自の奨学金のうち、特徴的な奨学金として「群馬パース大学神戸

奨学金」がある。この奨学金は本学創設者である樋口建介の教育の原点に多大な影響を及ぼし、学園創設に当たり多額の私財を投じた神戸照子先生の思いを尊重して設立された制度である。高い志があり、学業が優秀であるにも関わらず経済的な理由により修学困難な学生に対し給付すると定めている。

①特待生奨学金

申請資格：一般入試（前期）の出願者のうち、特待生選抜を希望する者

採用条件：経済的理由により修学困難な者（入試成績優秀者）

給付方法：学納金と相殺し現金給付無し

特待生の種類：特待生 S 給付額－授業料全額相当
給付期間－4年間 ※進級時に継続可否の審査あり
特待生 A 給付額－後期授業料全額相当
給付期間－4年間 ※進級時に継続可否の審査あり
特待生 B 給付額－後期授業料全額相当
給付期間－1年間（入学年度のみ）

②神戸奨学金

2～4年生で、人物、学業ともに特に優れ、経済的理由により修学困難な者に対し、300,000円（当該年度の後期授業料と相殺し、現金給付無し）を給付する。

③兄弟姉妹奨学金

1人以上の兄弟姉妹が本学に在籍（同時入学含む）しているか、本学を卒業した兄弟姉妹がいる新入生で経済的理由により修学困難な者に対し、100,000円（1年次後期授業料と相殺し、現金給付無し）を給付する。

④同窓生奨学金（群馬パース大学大学院生対象）

本学を卒業して本大学院に入学した者、又は本大学院の博士前期課程（修士課程含む）を修了して本大学院の博士後期課程に入学した者で、経済的理由により修学困難な者に対し、入学金相当額（100,000円）を給付する。

2) 学外の奨学金制度

学外の奨学金制度は、日本学生支援機構奨学金や地方公共団体奨学金、医療機関等による奨学金等がある。地方公共団体や医療機関等による奨学金は、令和元（2019）年度では118件の募集案内が本学に寄せられており、学内の就職コーナーに配置した資料を自由に閲覧することができる。また同情報をアクティブ・アカデミーからも配信しており、学外でも閲覧が可能である。

3) 日本学生支援機構奨学金、高等教育の修学支援新制度

令和元(2019)年度、本学は高等教育の修学支援新制度の対象機関として認定され、国の方針に従い在学生を対象に在学予約採用の説明会を複数回開催し、概要や申し込み方法を丁寧に説明した。また、日本学生支援機構の奨学金については、予約採用、在学採用等対象者別の説明会を開催し、各種手続方法から返還まで概要を説明した。令和2（2020）年4月15日現在の日本学生支援機構奨学生数を表2-4-1に示す。

表 2-4-1 日本学生支援機構奨学生数

第一種 奨学金 貸与者数	第二種 奨学金 貸与者数	第一種・第二種 貸与者延べ数	第一種・第二種 貸与者実数	給付奨学金 給付者数
291人	388人	679人	520人	75人

(イ) 学生の課外活動への支援

1) 学友会活動の支援

学生の課外活動の基幹的な役割を担っているのは、学生が主体となって運営している学友会である。学友会は「学業と同様に大きな意義を持つ課外活動を円滑に行うと共に学生相互の親睦を図り、学生生活をより豊かに、かつ充実したものにすること（学友会会則第3条）」を目的とした組織である。学友会は全学生から役員（会長、副会長、会計、書記）を選出し、その役員により学友会執行部が組織され、様々な課外活動の主体となっている（図2-4-2）。また、学友会活動の拠点として、1号館1階に学友会室を設置している。なお、学友会の活動に対しては、学生自治を尊重することを念頭に置きながら、学生委員会が助言及び支援を行っている。

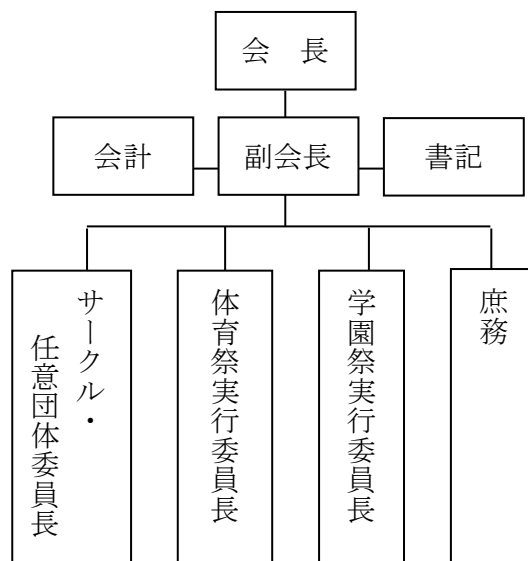


図2-4-2学友会組織図

学友会執行部管理のもと、サークル活動が行われており、学生は才能や趣味に合わせ自由に選択、入会ができる。各サークルには顧問として本学専任の教職員が就き、活動に関する助言、支援を行っている。また、サークル活動に関する経費については、同窓会及び保護者後援会のサークル支援費と学友会費を合わせて、学生委員会の助言のもと学友会執行部が配分し執行している。令和2（2020）年5月現在の公認サークルの一覧を以下に示す。

公認サークル一覧（22団体）

- ・卓球サークル
- ・テニスサークル
- ・Winter Sports サークル
- ・陸上サークル
- ・サッカーサークル
- ・バスケットボールサークル
- ・軽音サークル
- ・アカペラサークル
- ・バドミントンサークル
- ・音サークル
- ・コーラスサークル
- ・バレーボールサークル
- ・カルタサークル
- ・ダンスサークル
- ・フットサルサークル
- ・漫画研究会
- ・ボードゲームサークル
- ・野球・ソフトボールサークル
- ・自転車サークル
- ・トレーナーズサークル
- ・ボランティアサークル
- ・ボクシング and ボクササイズサークル

予算的支援はないが、任意団体を結成することが本学では認められている。令和2（2020）年5月現在の任意団体は、学生消防分団と東北県人会の2団体である。

任意団体もサークル活動と同様に、学友会執行部管理のもと活動が行われ、各団体に顧問として本学専任の教職員が就き、活動に関する助言・支援を行っている。

2) 公認部活動に関する支援

公認部活動は本学で公式に認定された部活動で、体育会・文化会の活動を通して学生の自立心や人間形成を促進することにより学生生活を充実させるとともに、本学の伝統を構築し、帰属意識を高めることを目的にしている。

公認部の設立は構成人数が複数学年に渡り10人以上として、全国規模の大会があり、その大会を運営する大学連盟に所属していなければならない。設立の条件を満たした上で、規定の書類を学生委員会に提出し、学生委員会、教授会、学園運営会議で審議及び承認を得る必要がある。なお、令和2（2020）年5月現在の公認部は硬式野球部のみである。

硬式野球部においては、専任教職員が各種助言・支援を行うとともに、本学として活動の資金的支援を行っている。また、3号館（体育棟）には、硬式野球部専用のブルペン練習場、バッティング練習場を整備し、練習環境の支援も行っている。

(ウ) 学生への心身に関する健康相談、心的支援、生活相談など

1) 保健室

保健室は、学生委員会の下部会である健康管理部会の管理のもと運営されている。健康管理部会は月1回の頻度で開催され、保健室の利用状況、インフルエンザなどの罹患状況、法令に基づく定期健康診断の実施及び健康診断結果に伴う助言及び指導方法等について協議し、保健室の運営と共に学生保健全般を管理している。

保健室は、学生の健康管理、健康相談の窓口として1号館1階及び4号館2階に設置している。保健室職員は、養護教諭と看護師の資格を有するパート職員2人、看護師と助産師の資格を有するパート職員1名、看護師の資格を有するパート職員2人の計5人で構成されている。通常はそれぞれの保健室に1人が常駐し、日々の保健室業務とともに学生の健康に関する不測の事態にも対応できる体制を整えている。

その他、「日常の健康相談・傷病等発生時の対応」、「近隣病院・診療所リスト」、「感染症発生時の対応図」（図 2-4-3）、「感染症の種類等に応じた出席停止の期間の基準」などを定めている。

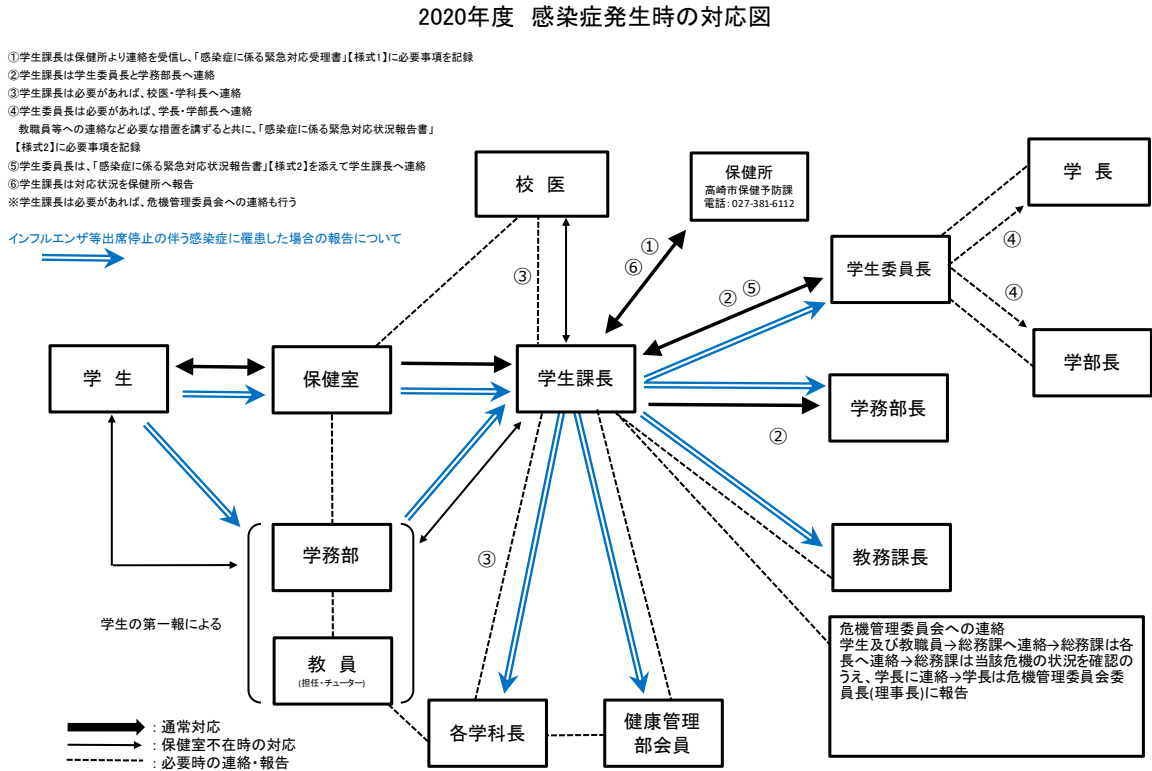


図 2-4-3 感染症発生時の対応図

2) 学生相談室

学生相談室は、学生委員会の下部会である学生相談部会の管理のもと運営されている。学生相談部会は、理学療法学科長を委員長として、看護学科長、検査技術学科長、放射線学科長、臨床工学科長、学生相談室カウンセラー、及び事務職員で構成されている。各学科の学生が抱えている心の諸問題について話し合わせ、学生相談室及び各学科での学生の心理的・精神的な問題を共有し、即座に全学的に対応できる体制を整えている。

学生相談室（1号館1階及び4号館2階）では、専任の臨床心理士の資格を有するカウンセラーがカウンセリングを中心とした専門的な適応支援・教育的支援を行い、学生の心理的援助・発達・回復を促している。また、学生相談に関する不測の事態に備え、学生相談室来談ケースの対応において、通常対応に加え緊急時も含めた対応図を作成している（図 2-4-4）。

なお、令和2（2020）年度より、相談員を2名増員し、計3名による学生相談を行う予定である。

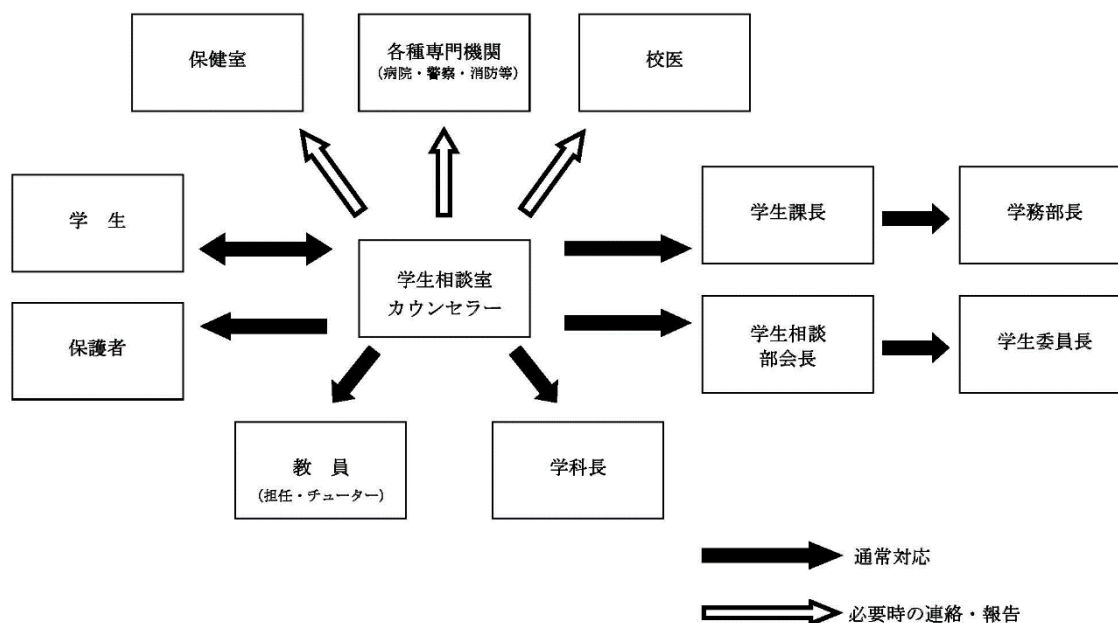


図2-4-4 学生相談室来談ケースの対応図

3) その他、各学科における個別支援の取り組み

保健室や学生相談室以外においても、担任やチューターが、学生の個別支援を行っている。必要に応じて保護者との連携を図りながら、きめ細やかな個別支援を行っている。学科別の取り組みについては以下に示す。

①看護学科

チューターが新学期開始後、夏・冬・春季休業前と、必要に応じて随時個別面談を行っている。担任は、クラス運営に関する学生からの相談を受け、指導を行っている。学生とのコミュニケーションを通じて、学修支援、学修環境、学生生活に対する意見や要望を把握し、さらなる向上に努めている。

②理学療法学科

各学年の担任と学生全体の担当教員が協働し、学習や生活に関して相談に応じる体制をとり、学生の個別の状況把握と基づき時宜にかなった個別指導が行えるようにしている。指導の状況は学科会議で共有され、学生の心身にかかわる支援の方法について検討を加えより良い支援を目指している。

③検査技術学科

1～3年の各学年に担任2名、副担任2名を選任し、学生面談や相談窓口となることできめ細やかな指導を行っている。また、担任だけでは解決できない問題については学科会議で情報を共有し、問題解決にむけて協議している。さらに、4年生については、少人数のゼミ単位で各ゼミ担当教員が国家試験対策や就職活動を含めた様々なサポート

を行っている。

④放射線学科

各学年に担任を2名配置していることに加え、学生を少人数グループに分け、各グループに担当教員を配置して指導を行っている。

⑤臨床工学科

担任制度を導入し、1学年から卒業年度まで同一担任が中心となって学生指導にあたるが、担任の他に副担任1名、補助担任2名を配置し、学生の学習生活や日常生活の相談に応じている。担任が抱える学生の問題点については学科全体で問題点を共有し問題解決へ向け協議を行っている。さらに、学科教員間及び保護者との連絡も密にし、学生の状況変化に速やかに対応できる体制を整えている。

(3) 2-4 の改善・向上方策（将来計画）

令和2（2020）年には、学生数の増加に対応するため、カウンセラーを2名増員し、学生生活の安定のための支援を強化する。また、学生委員会とその下部会を改組し、キャリアサポート部会はキャリアサポートセンター、健康管理部会は健康管理センター、学生相談部会は学生支援センターとする予定である。この改組は、組織的な取り組みとしての学生生活の安定と更なる学生サービスの向上を目的としている。

2-5 学修環境の整備

2-5-① 校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理

2-5-② 実習施設、図書館等の有効活用

2-5-③ バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性

2-5-④ 授業を行う学生数の適切な管理

(1) 2-5 の自己判定

「基準項目 2-5 を満たしている。」

(2) 2-5 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-5-① 校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理

(ア) 適切な施設整備

本学の校舎は平成22（2010）年4月に完成した1号館（看護学科・理学療法学科・図書館棟）、平成25（2013）年2月に完成した2号館（検査技術学科棟）、同年10月に完成した3号館（体育棟）、平成29（2017）年3月に完成した4号館（放射線学科・臨床工学科棟）である。各校舎の施設概要を表2-5-1及び図2-5-1に示す。

表 2-5-1 校舎の施設概要（平成 30（2018）年度）

名称	校舎敷地	校舎面積	階	主要施設
1号館	3,141m ²	9,357m ²	8階	学長室、会議室、事務室、図書館、講義室、演習室、ゼミ室、実習室、解析室、研究室、保健室、学生相談室、グループ学習室、学友会室・部室、売店、学生ホール、印刷室、ロッカー室
2号館	764m ²	2,402m ²	6階	学科長室、管理室、会議室、応接室、講義室、実験室、実習室、測定室、準備室、研究室、共同ゼミ室、印刷室、ロッカー室
3号館	1,483m ²	2,705m ²	3階	野球ブルペン練習室、野球バッティング練習場、更衣室、アリーナ、ホール、多目的スペース
4号館	897m ²	6,447m ²	12階	副学長室、会議室、事務室、応接室、保健室、学生相談室、実習室、実験室、解析室、撮影室、準備室、講義室、ゼミ室、研究室、図書室、印刷室、ロッカー室、ブックカフェ（カフェ・書店）、キャリアサポートセンター

1号館は8階建てで、3階から8階に20人から230人（8階大講義室）の講義室を整備している。実習室として5階に2室、6階に3室、7階に5室が整備され、各教室に実習に必要な機器及び設備を設置している。これらの講義室及び実習室には規模に応じた視聴覚機器を設置している。また、小規模のゼミや学生指導を実施する教室として、3階に4室、4階に9室、7階に6室のゼミ・演習室が各々設けられている。

2号館は6階建てで、2階及び3階に70人の講義室が整備されている。実習・実験室は3階に1室、4階に4室、5階に3室が整備され、実習に必要な機器及び設備を設置している。6階には共同ゼミ室が1室設けられている。

3号館は3階建ての体育棟で、2階にバスケットボール、バレーボール、フットサル、バドミントン等を行うことが可能なアリーナを整備している。3階には多目的スペース及び観覧スペースを整備している。

4号館は12階建てで、5階から12階に60人から240人（12階大講義室）の講義室を整備している。実習・実験室は3階に学科教員が管理する放射線実習エリアとして9室、4階に3室、10階に3室、11階に4室が整備され、実習に必要な機器及び設備を設置している。また、小規模のゼミや学生指導を実施する教室として、6階に10室、10階に6室のゼミ室が各々設けられている。

1) 飲食スペースの設置

1号館1階に学生の就学時間に営業時間（平日9:00～18:00 営業）を合わせた売店（コンビニエンスストア）及び軽食コーナーを整備し、4号館1階には外部の方も利用できるブックカフェを設置している。ただし、これらのスペースですべての学生が食事をするには十分でないため、昼休みに限り、普通教室（1号館：7室、2号館：3室、4号館：6室）で飲食できるようにしている。

また、学生と周辺地域を結びつけ、周辺店舗の利用により学生自身も利益享受ができるよう周辺店舗の協力を受け「CAMPAZ（キャンパス）」という本学独自のクーポン付きフリーペーパーを作成し、全学生に配付している。

2) 個人用ロッカーの設置

演習時に活用する個別の白衣や用具等を収納できるように1号館1階に看護学科及び理学療法学科、2号館3階・4階・5階に検査技術学科、4号館4階・10階に放射線学科及び臨床工学科の全学生用の個人用ロッカーを設置している。

3) 駐輪場の整備

本学の学生の通学形態の約3割を占める自転車通学の学生支援として、490台分の駐輪場を5箇所に分けて整備している。

4) 学生ホール等の設置

1号館1階・3階・6階には開校時間中に学生が自由に利用できる学生ホール及びオープンスペースを設けている。

4号館1階には開校時間中に学生が自由に利用できるブックカフェを設けている。学生

ホール及びブックカフェは自由に飲食ができるスペースであり、昼休みの昼食の際の主要な場所として活用されている。

これらの施設は、学生の自己学習、グループワーク、各種サークル活動等にも利用される。

(イ) 施設・備品の維持管理の体制

校地及び校舎の維持、管理等は施設管理課が担当し、各施設設備の状況を把握して日常管理や定期点検を実施している。清掃業務は一部外部業者に委託している。教育設備に関する維持、管理等は教務課が担当している。図書館・図書室の維持、管理は附属図書館運営委員会で協議の上、図書館司書及び補助員が行っている。学生の貸与パソコンの故障等の対応窓口は1号館及び4号館事務室で、修理は外部業者が行う体制を整備している。学内無線LANやパソコン関連機器の維持、管理はネットワーク管理者や学生課で行っている。

また、横長の教室において、両端の座席からスクリーンが見え難いという学生からの意見や遠隔授業等にも対応するため、全6教室にプロジェクターとスクリーンを2台ずつ設置するなど、常に学生の要望や社会情勢に配慮した施設維持管理を心掛けている。

2-5-② 実習施設、図書館等の有効活用

(ア) 実習施設

医療職を養成する本学では、全ての学科で各養成施設指定規則等に基づき必要な演習・実習室が完備されている。演習・実習室の管理は各学科が行っている。

(イ) 図書館・図書室の整備

1号館1階及び2階に図書館、4号館5階及び8階に図書室が整備されている。

1号館図書館は床面積800㎡、閲覧席数168席で、書架、書庫、閲覧スペース、グループ学習室、パソコンスペース等で構成されている。開館時間は月曜日から金曜日が9時～21時、土曜日が9時～17時となっており、学生が長時間学習及び研究ができるよう対応している。また、定期試験期間中には土日を除く開館日の開館時間を8時30分～21時30分と延長することで、試験に備える学生へ学習場所の提供を行っている。4号館図書室は5階、8階合わせて床面積92㎡、閲覧席数48席で、月曜日から金曜日の9時～20時の開室時間となっている。学生及び教職員は1号館図書館及び4号館図書室共に自由に利用することができる。

附属図書館には図書館長（教員兼務）の他専任職員として司書が1名、非常勤職員が4名（うち2名司書）配置され、その運営と利用者サービスに努めている。専任の司書は業務全般、非常勤職員は主に閲覧、雑誌受入などを担当している。また、通常業務以外に蔵書点検を1年に一度実施している。附属図書館では、群馬県大学図書館協議会、日本看護図書館協会に加盟しており、各協会が主催する研修に定期的に参加することで、職員の質を高め、図書館運営や学習、研究支援に役立てている。

蔵書数は図書館、図書室合わせて図書50,637冊、雑誌1,196誌（うち外国雑誌131誌）、視聴覚資料1,380点であり、電子書籍を導入するなど、蔵書数を増やしている。蔵書は全

てシステムによってデータベース化されていて検索が可能である。その他電子リソースとして電子ジャーナル、文献検索データベースも体系的に整備している（表 2-5-2）。また、学内の入館者数や貸出点数などの利用実績は、表 2-5-3 の通りである。

表 2-5-2 電子ジャーナル・文献検索データベース一覧

電子ジャーナル	文献検索データベース
メディカルオンライン(1,289 誌)	医学中央雑誌 Web 版
CINAHL Plus with Full Text(730 誌)	最新看護索引 Web
MEDLINE with Full Text(1,470 誌)	CiNii Articles
外国雑誌個別購読誌 38 誌	

表 2-5-3 過去 3 年間の図書館利用実績

年度	入館者数		貸出冊（点）数	
	学内利用者	学外利用者	学内利用者	学外利用者
平成 29（2017）年度	68,834	571	14,007	221
平成 30（2018）年度	67,311	599	14,575	313
令和元（2019）年度	72,769	338	14,195	201

電子ジャーナルや文献検索データベースは図書館内に設置しているパソコン（2 台）だけでなく、学内無線 LAN に接続することで、全学生に貸与されているモバイルパソコンでも利用でき、学習及び研究に有効に機能している。蔵書検索システムはインターネット環境があれば学内外を問わず利用することが可能である。

学生への図書館・図書室利用ガイダンスは、教員と連携し、初年次教育の一環として 1 年次全員を対象とした授業「大学の学び入門」の 1 コマで、レポート作成のための初歩的な情報検索の方法も含め、講義として行っている。また、教員からの依頼によって看護学科 3 年次を対象とした授業「看護研究概説」の 1 コマで論文執筆のために、初年次と比較しより高度な文献検索の演習を行っている。その他、個別のガイダンスや他館からの資料貸借、文献複写の取り寄せなども含めたレファレンスの希望にも対応している。附属図書館ホームページも開設し、学内外に利用案内や各種情報収集ツールのガイドを行っている。

（ウ）IT 施設の整備

本学では、入学時に全学生にモバイルパソコンを貸与するとともに、全館無線 LAN 環境を整備し、学習・情報収集環境を整えている。

平成 30（2018）年度からは IC 機能付学生証を利用して印刷したいデータをインターネットで送信して印刷することができる学内プリンタを 1 号館 4 階及び 7 階、2 号館 3 階、4 号館 6 階及び 10 階に設置し、学習成果や収集した情報をアウトプットできるようにしている。また、デスクトップ PC を図書館に 2 台設置し、学生がインターネットによる情報収集や各種作業が可能な環境を整備している。

(エ) アクティブ・アカデミーの整備活用

アクティブ・アカデミーとは、インターネットを利用して休講・補講情報など大学から発信された情報をパソコン・スマートフォン等で確認したり、履修登録や成績表の閲覧をしたりすることも可能なシステムで、学生が主体的に日々の学習活動に取り組めるようサポートすることを目的として導入された（表 2-5-4）。

表 2-5-4 アクティブ・アカデミーの機能名称と内容

機能名称	内容
個人へのお知らせ・連絡事項	大学・教員からの連絡事項の確認
休補講情報	授業変更の確認（休講・補講・教室変更）
履修登録	履修科目の登録
レポート提出	<p>【講義資料の事前配付】</p> <p>各授業科目について、事前配付資料がある場合はここからダウンロード・印刷</p> <p>【課題提出】</p> <p>各授業科目について、課題（レポート等）が課される場合はここから内容を確認し、適宜作成した課題をここからアップロードして提出</p>
シラバス	シラバスの閲覧
修学ポートフォリオ	<p>学生自身の基本情報の確認、履修状況の確認、成績（修得単位・GPA 等）の確認、欠席率の確認</p> <p>【修学記録】</p> <p>学修目標にそって自己評価を入力、反省点を記録</p>
キャリア相談予約	キャリア相談の予約
企業検索	求人票の検索 ※大学に届いている求人
授業評価アンケート	学生による授業アンケートへの回答 ※学期末に実施
アンケート	その他アンケートへの回答
Web フォルダ	各種届出用紙や操作マニュアル等のダウンロード・印刷

(オ) 施設・設備の安全性（耐震など）の確保

本学の校舎は、平成 22（2010）年 4 月に完成した 1 号館（看護学科・理学療法学科・図書館棟）、平成 25（2013）年 2 月に完成した 2 号館（検査技術学科棟）、同年 10 月に完

成した3号館（体育棟）、平成29（2017）年3月に完成した4号館（放射線学科・臨床工学科棟）である。各校舎の設計は昭和56年（1981年）6月1日の建築基準法改正（新耐震基準）を満たし設計されている。安全性に関しては震度7の地震に耐えうる構造で耐震性が確保され、十分な構造安定性を備えている。

2-5-③ バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性

本学では、障害を有する学生や講師、高齢者等の来校を想定し、障害者・高齢者に配慮した環境を整備している。

バリアフリー環境の確保のために、1号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1基）、1階・2階・4階・6階・8階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。2号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1基）、2階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。3号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1基）、1階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。4号館は段差のない構造、手すりの設置、車いす用エレベータの設置（1基）、2階に車いす用トイレの設置、車いす用駐車場の整備をしている。

2-5-④ 授業を行う学生数の適切な管理

（ア）保健科学部

学科、学年ごとに講義を行う上での適切なクラスサイズを確保した上で、実施されるよう努めている。複数学科にまたがる合同講義においては、1号館8階大講義室や4号館12階大講義室を使用している。また、英語と情報処理科目はクラスを分割し、少人数教育を実施している。各講義室の収容定員及び収容定員充足率を表2-5-5に示す。

表 2-5-5 講義室の収容人数と在籍者数（保健科学部）

学部学科・学年	在籍者数	校舎	使用教室	面積	収容人数	充足率	
保健科学部合計	1,433人	-	-	-	-	-	
看護 学科	学科合計	349人	-	-	-	-	
	1年生	95人	1号館	403講義室	143.0m ²	90人	1.05 倍
	2年生	83人		402講義室	143.9m ²	90人	0.92 倍
	3年生	86人		401講義室	145.6m ²	90人	0.95 倍
	4年生	85人	-	-	-	-	-
理学 療法 学科	学科合計	270人	-	-	-	-	
	1年生	69人	1号館	801講義室	145.6m ²	70人	0.98 倍
	2年生	67人		802講義室	143.9m ²	70人	0.95 倍
	3年生	69人		803講義室	143.0m ²	70人	0.98 倍
	4年生	65人	-	-	-	-	-
検査 技術 学科	学科合計	266人	-	-	-	-	
	1年生	69人	2号館	221講義室	129.4m ²	70人	0.98 倍
	2年生	69人		322講義室	129.6m ²	70人	0.98 倍
	3年生	70人		321講義室	124.0m ²	70人	1.00 倍
	4年生	58人	-	-	-	-	-
-	-	-	1号館	大講義室	361.3m ² *	230人	-
放射線 学科	学科合計	320人	-	-	-	-	
	1年生	87人	4号館	4501講義室	142.0m ²	80人	1.08 倍
	2年生	76人	4号館	4502講義室	145.0m ²	80人	0.95 倍
	3年生	75人	4号館	4601講義室	145.0m ²	80人	0.93倍
	4年生	82人	-	-	-	-	-
臨床工 学科	学科合計	228人	-	-	-	-	
	1年生	59人	4号館	4901講義室	118.6m ²	55人	1.07 倍
	2年生	58人	4号館	4902講義室	118.6m ²	55人	1.05 倍
	3年生	57人	4号館	4903講義室	121.0 m ²	55人	1.03倍
	4年生	54人	-	-	-	-	-
-	-	-	4号館	大講義室	292.5m ² *	240人	-

*控室、調整室、倉庫の面積も含まれた数値である。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科で使用する講義室は 1 号館 3 階の 301 講義室及び 302 講義室となっている。各講義室に対する大学院生数の充足率は 0.45 倍以下であり、使用環境として適切に活用されている。また、大学院生には個別の調査研究活動に使用可能な大学院生室 1 (22.8 m²)、大学院室 2 (22.8 m²) が 3 階に設けられている。各講義室の収容定員及び収容定員充足率を表 2-5-6 に示す。

表2-5-6 講義室の収容人数と使用学生数 (保健科学研究科)

研究科	使用学年	在籍者数	使用教室	面積	収容人数	充足率
保健科学 研究科	合計	19 人	-	-	-	-
	博士前期 1 年生	4 人	301 講義室	47.0 m ²	20 人	0.20 倍
	博士前期 2 年生	9 人	302 講義室	46.5 m ²	20 人	0.45 倍
	博士後期 1 年生	2 人	302 講義室	46.5 m ²	20 人	0.10 倍
	博士後期 2 年生	1 人	302 講義室	46.5 m ²	20 人	0.05 倍
	博士後 期 3 年生	3 人	302 講義室	46.5 m ²	20 人	0.15 倍

(3) 改善・向上方策 (将来計画)

授業を行う環境整備は適切であるため、全学的に収容定員を適切に保持する努力が必要となる。また、通学時の自転車利用率の高まりに対し、駐輪場の増設を行ったが、今後も学生の通学方法の把握など、学生の状況変化に注視する。令和 3 (2021) 年の新学部設置に伴い、1 号館の増築を進めている。また、学生の厚生補導施設 (学習支援センター、健康管理センター、キャリアサポートセンター) と国際交流センター、地域連携センターに本学学生専用マンション (全 40 室) を加えた 5 号館を新築中であり、令和 2 (2020) 年 9 月竣工予定である。

2-6 学生の意見・要望への対応

2-6-① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

(1) 2-6 の自己判定

「基準項目 2-6 を満たしている。」

(2) 2-6 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

2-6-① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

2-6-③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用

学生の意見をくみ上げる仕組みの一つとして、学生委員会が実施している「学生生活実態・満足度調査」がある。この調査は毎年実施し、学科、学年問わず全ての学生を対象として意見、要望を集約している。令和元（2019）年度に実施した満足度調査は、在籍している 1,324 人のうち 1,145 人が回答（回答率 86.5%）し、この調査で集めた意見、要望については学生委員会で協議し、回答が必要と判断されたものについては学生に対してフィードバックしている。

なお、学生からの意見要望が多い項目については、大学の回答も含め Q&A 方式で学生に周知している。

(ア) 学修支援に関する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

前述の「学生生活実態・満足度調査」が学修支援に関する学生の意見・要望をくみ上げるものとして挙げられる。調査では自主学習、履修、講義、国家試験対策など様々な学修関連の意見・要望が寄せられるため、それらの分析や改善の検討を学生委員会が中心に行っている。体制改善への反映の具体例として自主学習に関する意見・要望については、近年の対応として、一部教室の授業時間外の開放、教室施設時間の延長、図書館の開館時間の延長などがある。令和 2（2020）年には、横長の教室において既設のプロジェクターの両サイドに新たにプロジェクターをそれぞれ配置し、教室の隅の席から映像が見え難いという意見に対し改善を施した。

また、平成 30（2018）年の 3 月には、卒業生を対象とした「卒業時アンケート」と、令和元（2019）年 8 月には同対象者に「卒業後アンケート」を本学で初めて実施した。この両アンケートは、在学中に受けた教育やサービス等に関する設問もあり、今後の本学における学生の意見・要望への対応における重要な基礎資料となると同時に、「学生生活実態・満足度調査」と同様に学修支援及び学習環境の改善と向上に寄与する調査であると考えられる。なお、卒業時アンケートは卒業生 197 人のうち 68 人が回答（回答率 34.5%）、卒業後アンケートは 42 人が回答（回答率 21.3%）した。この調査で集めた意見、要望については学生委員会から各学科にフィードバックし、改善に役立てることとした。

(イ) 学生生活支援に関する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

学生生活の意見や要望については、日常的に各学科の担任やチューター、及び 1 号館・4 号館の事務室で受け付け、適宜対応している。聞き入れた学生の意見や要望の中で、専門的な対応が必要とされる場合には、キャリアサポート部会、健康管理部会、学生相談部会を経てキャリアサポートセンター、保健室、学生相談室などの機関で適切な対応が可能な仕組みを構築している。

また、アクティブ・アカデミーでは修学支援ツールとして学生個々の成績や履修の状況、

教員から学生への指導記録等の項目が確認でき、これを教職員で共有することができる。このシステムを利用し、教職員全体で学生の生活改善の反映に役立てている。

(ウ) 施設・設備に対する意見をくみ上げるシステム構築とその反映状況

施設・設備に対する学生の意見などのくみ上げも前述の「学生生活実態・満足度調査」を中心に行っている。調査で集めた意見・要望をもとに行った学内の施設・設備の改善として主なものを以下に挙げる。

1) 校舎の開錠・施錠時間の変更について

防犯上の理由から、校舎の無人の出入口については早めの時間帯に施錠をしていたが、この施錠の時間帯が学生の授業時間帯や帰宅時間帯と重なり、他の出入口と同様に施錠を延長して欲しいと要望があった。不審者の侵入や感染防止対策として不特定多数の外来者の無断侵入を防ぎながら、学生の利便性を損なわないため、令和2(2020)年度より、無人の出入口にカードリーダーを設置して、学生証をかざすと自動ドアが開錠されるシステムを導入した。併せて、3号館の体育棟入口にも同様なシステムを導入した(表2-4-2)。

表 2-4-2 各校舎開錠・施錠時間

校舎	フロア	開館時間(平日)	
		令和元(2019)年度まで	令和2(2020)年度から
1号館 【看護学科・理学療法学科・図書館棟】	1階自動ドア※	8:30~17:00	8:00~22:00
	2階自動ドア	8:00~22:00	8:00~22:00
2号館 【検査技術学科棟】	1階自動ドア※	8:00~19:00	8:00~22:00
	3階1・2号館 連絡ブリッジ自動ドア	8:00~22:00	8:00~22:00
3号館 【体育棟】	1階自動ドア※	9:00~22:00	8:00~22:00
4号館 【放射線学科・臨床工学科棟】	1階自動ドア	10:00~19:00	10:00~19:00
	1階エレベーター ホール自動ドア※	8:00~21:00	8:00~22:00
	2階自動ドア	8:00~22:00	8:00~22:00

※入館の際に学生証を自動ドアのカードリーダーにかざして入館。

2) 体育棟の遮光カーテンの設置

体育棟のアリーナを使用している学生（特に球技種目）が、活動中に日差しが眩しいため体育棟 3 階の東側全ての窓に遮光カーテンを設置して欲しいとの要望があり、令和元（2019）年に遮光カーテンを設置した。

3) 「森林再生プロジェクト(株式会社 COSY)」の参画について

「学生生活実態・満足度調査」で学生の意見を取り入れ、平成 30（2018）年より導入している学内プリンタシステムについて、システムの運営企業である株式会社 COSY（兵庫県神戸市中央区八幡通 3-2-5）が実施している森林再生プロジェクトに令和 2（2020）年より本学は参画することになった。当該プロジェクトは、学内プリンタの利用頻度によってブラジル、ドミニカ共和国、インド、アイルランド、メキシコ、アメリカ、マダガスカル の 7 か国で植林するものであり、環境保護活動の取り組みと同時に、学内プリンタを利用する学生の環境問題への意識向上と、ペーパーレス化の推進も期待しての参画である。

以上の取り組みから、学生からの施設・設備に対する意見をくみ上げ、施設・設備の改善に反映させているといえる。

また、令和元（2019）年、本学は文部科学省と国立教育政策研究所の共同による、全国の大学生を対象としたアンケート調査（全国学生調査）の試行実施に参加した。大学での学習状況や学習時間、知識や能力を身に付けるにあたって大学教育が役に立っているかなどが質問項目にあり、この調査で得られた学生の意見、要望は学生委員会から各学科にフィードバックした。なお、この調査は 3 年生 372 名を対象に実施し、回答者は 252 名、回答率 68%であった。令和 3（2021）年より全国学生調査が本格的に実施されるため、本学が独自で行っている調査やアンケートと同様にこの全国学生調査を大いに活用し、学生の意見をくみ上げ学びの実態を把握するとともに、大学教育の改善に役立てたい。

(3) 2-6 の改善・向上方策（将来計画）

学生の支援については、学生委員会に設けられている各専門的な相談室等とともに、学科にチューターや学年担任、副担任を設け、学生に対して多角的で、且つ重層的な支援体制を整備している。

平成 29（2017）年度、放射線学科及び臨床工学科開設に伴い 4 号館が新たに建設された。学生の増加及び校舎間との連携に対応すべく、学生委員会を中心としたきめ細やかな配慮、問題意識への共有等、学生目線に立った学生生活の安定のための支援を継続したい。

【基準 2 の自己評価】

教育目的（教育目標）を踏まえ、保健科学部と保健科学研究科ごとに求められる人物像を示すアドミッション・ポリシーを策定して周知し、それらに応じた多様な入試を公正かつ適切に実施し、収容定員を満たす学生を確保している。

TA 等の活用をはじめとする学修支援は教務委員会、博士前期課程運営委員会及び博士後期課程運営委員会を中心に、検討・実施している。

学生生活支援及びキャリア支援は、学生委員会において教職員が協働し、学生の満足度を高める努力を行っている。また、国家試験対策委員会により国家試験の高い合格率が、キャリアサポート部会によりほぼ 100%の就職率が維持されている。

キャリアサポートセンターの業務の一部をメディカル・サフランに委託することにより、国家試験不合格者や、中途退学者へのきめ細かい就職支援を実現している。

学生サービスでは、学外の奨学金に加え、本学独自の奨学金制度である特待生奨学金、神戸奨学金、兄弟姉妹奨学金、同窓生奨学金（大学院生対象）を制定している。

課外活動支援では、22 の公認サークル活動と 1 つの公認部活動と 2 つの公認団体の支援、及び学園祭や学内スポーツ大会、私立大学スポーツ大会など学内外で行われる行事の支援を行っている。

学生への心身に関する援助として、1 号館と 4 号館の保健室と学生相談室に専門員を配置し、即時対応と予約対応が行われている。学生相談部会では、5 学科の学科長と学生相談室のカウンセラーが毎月情報交換を行い、実効性の高い相談活動を行っている。

教員の日々の学生対応については、担任やチューターがきめ細かな対応にあたっている。

学生の要望に応えるために、毎年「学生生活実態・満足度調査」を実施し、大学の対応をフィードバックしており、過去の実施例も含め、学内プリンタの設置、学内実習時の着替えスペースの設置、講義室内のプロジェクターの増設、学生証で入館できるシステムの構築などが実現しており、学生の満足度を高めバリアフリーに配慮した学修環境作りを進めている。

平成30（2018）年から毎年実施することとなった「卒業時アンケート」と「卒業後アンケート」では、在学中の学生生活支援、キャリア支援、学修環境の整備、学生サービス等について卒業生を対象に調査することにより、在学生対象の「学生生活実態・満足度調査」と併せて学生の意見・要望へのきめ細やかな対応はできると考える。

以上のことから、基準 2 を満たしていると判断できる。

基準 3. 教育課程

3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

3-1-① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知

3-1-② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知

3-1-③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用

(1) 3-1 の自己判定

「基準項目 3-1 を満たしている。」

(2) 3-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-1-① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知

(ア) 保健科学部

保健科学部のディプロマ・ポリシーは、「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献する」という大学の目的と、それを具現化する学部目標（教育目的）を踏まえ、平成 25（2013）年度に策定された。このディプロマ・ポリシーは、本学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

令和 3（2021）年の学部新設に伴う組織再編により、ディプロマ・ポリシーを学科ごとに策定する準備を進めた。

1) 保健科学部のディプロマ・ポリシー

本学は、建学の精神に基づき保健医療専門職の質を高め、地域保健医療の発展に寄与することを教育の目標に掲げ、ここに、本学の学士課程に共通する学位授与の方針を定めている。

【知識・理解】

- ・保健医療専門職としての基礎的知識と、社会人としての教養を身につけている。
- ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。

【思考・判断】

- ・保健医療分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。

【技能・表現】

- ・先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供することができる。
- ・チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力を身につけている。

【関心・意欲】

- ・生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲を持っている。
- ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。

【態度】

- ・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科のディプロマ・ポリシーは、博士前期課程、博士後期課程それぞれの目

的、及びそれらを具現化する教育目標を踏まえ、課程ごとに策定している。それらは、本学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

1) 博士前期課程のディプロマ・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科の博士前期課程を修了し、次に該当するものに修士（保健学）の学位を授与する。

1. 保健医療専門職としての基礎的知識、科学的根拠及び高い倫理観に基づいて問題の探求・解決を図る高度な研究能力を有する
2. 保健医療分野の諸課題に関して、科学的な手続きと洞察に基づく的確な判断能力を有する
3. 先進・高度化する専門分野の基本的技術を提供する実践能力を有する
4. 地域保健医療の実践現場で他の分野と連携して社会に貢献できる教育能力を有する

2) 博士後期課程のディプロマ・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科保健科学専攻（博士後期課程）を修了し、次に該当するものに博士（医療科学）の学位を授与する。

1. 独創性・創造性に優れ国際的に通用する研究能力を備えた人材
2. 医療・保健科学分野の教育を行う大学あるいは大学院における教育・研究指導ができる人材
3. 医療現場において、高い倫理観と高度な専門知識に基づいた実践能力を持ち、自立的な研究ができる人材
4. 科学的エビデンスを構築しながら研究開発ができる人材

3-1-② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知

(ア) 保健科学部

保健科学部における単位認定基準は、各科目の目的を指標化した「学修到達目標」に対する到達度が6割以上であることとしている。各科目の目的はディプロマ・ポリシーを踏まえて定め、その対応はシラバスに明示している。また、医療職を養成するという保健科学部の教育課程の性質上、学修は段階を追って積み上げていく必要があるため、各学年の進級基準を満たすことを進級の要件としている。進級基準は各学科、各学年で開講される必修科目の単位を全て修得することである。保健科学部の卒業認定基準は、本学に4年以上在学し、学則に定める授業科目を履修して所定の単位を修得することとしている。これらの定めは学生便覧に明記し、学生へ周知している。

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科の単位認定基準は、ディプロマ・ポリシーを踏まえて定められた各科目の目的を指標化した「学修到達目標」に対する到達度が、6割以上であることとしている。修了認定基準は、博士前期課程にあつては2年以上、博士後期課程にあつては3年以上、本大学院に在学し、大学院学則に定める所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受

けた上で学位論文の審査及び最終試験に合格することとしている。学位論文等の審査基準は「群馬パース大学学位規程」に詳細を定め、学生便覧への掲載により学生へ周知している。

3-1-③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用

(ア) 保健科学部

保健科学部の単位認定は、「群馬パース大学履修規程」第11条（単位認定）に基づいて行われている。成績評価方法は、シラバスに示す学修到達目標及び成績評価方法に従って点数化し、成績評価基準に基づいて評価している。編入学を除き他大学等での既修得単位は60単位を上限に、教務委員会の審議を経て学長が認定している。

進級及び卒業認定は、学科ごとに定められた基準に基づき、学科別の進級判定会議、教務委員会、教授会の議を経て学長が承認する形で厳正に適用されている。

表 3-1-1 保健科学部成績評価基準

点数区分	評価の表示方法	GP (グレード・ポイント)	合否
100 ～ 90 点	A+	4.0	合格
89 ～ 80 点	A	3.0	
79 ～ 70 点	B	2.0	
69 ～ 60 点	C	1.0	
59 点以下	F	0	不合格

(イ) 保健科学研究科

保健科学研究科の単位認定は、「群馬パース大学大学院履修規程」第12条（単位認定）に基づいて行われている。評価方法については学部と同様シラバスに示す学修到達目標及び成績評価方法に従って点数化し、成績評価基準に基づいて評価している（表3-1-2）。

保健科学研究科における進級基準は定めていないが、大学院生の実情を勘案し弾力的に指導している。修了認定は、定められた基準に基づき、修了判定会議、研究科委員会の議を経て学長が承認する手続きにより、厳正に適用されている。

表 3-1-2 保健科学研究科成績評価基準

点数区分	評価の表示方法	合否
100 ～ 90 点	A+	合格
89 ～ 80 点	A	
79 ～ 70 点	B	
69 ～ 60 点	C	
59 点以下	F	不合格

(3) 3-1 の改善・向上方策（将来計画）

ディプロマ・ポリシーは本学の目的と使命から導き出されたものであり、保健科学部及び保健科学研究科でそれぞれ共通の普遍的な内容の記述となっている。これ自体は適切な内容であるが、本学が養成する医療職は、直接的対人サービスの頻度が高い看護師及び理学療法士、主としてテクノロジーを使って診断に従事する臨床検査技師及び診療放射線技師、工学の知識を駆使しつつ人とも接する臨床工学技士と多岐に渡る。今後は、中長期計画に基づく学部再編に合わせて慎重に改正することも検討する。

3-2 教育課程及び教授方法

3-2-① カリキュラム・ポリシーの策定と周知

3-2-② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性

3-2-③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成

3-2-④ 教養教育の実施

3-2-⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施

(1) 3-2 の自己判定

「基準項目 3-2 を満たしている。」

(2) 3-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-2-① カリキュラム・ポリシーの策定と周知

3-2-② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性

(ア) 保健科学部

保健科学部のカリキュラム・ポリシーは、保健科学部ディプロマ・ポリシーの策定を受けて平成 25 (2013) 年度に教務委員会で審議され、教授会の承認を経て学長が決定し、平成 26 (2014) 年 4 月に正式に定められた。その中には、保健科学部ディプロマ・ポリシーの構成要素である「知識・理解」、「思考・判断」、「技術・表現」、「関心・意欲」、「態度」を、4 年間を通して達成するよう各科目を体系的に配置することを明記している。さらに、学科ごとのカリキュラム・ポリシーを策定し、ディプロマ・ポリシーの各構成要素とカリキュラム・ポリシーを体現した各学科の教育課程の関係を明記したカリキュラム・マップにより、

ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの関係性に基づく一貫性を示している。
これらは、本学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

1) 保健科学部のカリキュラム・ポリシー

群馬パース大学保健科学部は、その建学の精神に基づき、地域保健医療の発展に寄与する人材を養成するため、看護学科、理学療法学科、検査技術学科、放射線学科、臨床工学科を置き、次のとおり学部の教育課程の編成方針を定めている。

1. 保健科学部の教育課程は、教養科目群・共通基盤科目群、専門基礎科目群、専門科目群から構成される。
2. 教養科目群は社会人としての教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるため、「人と社会及び自然の理解」の科目群と「情報と言語の理解」の科目群に大別された広範な科目を 5 学科共通科目として開設する。
3. 共通基盤科目群は、初年次において大学での学習に対する準備状態を整え、専門領域の学習への関心と意欲を高めるための科目を開設する。また、今日の医療において必須事項であるチーム医療に関する意識を高めるための科目を配置する。
4. 専門基礎科目群は、医療専門職を養成する 5 学科それぞれに展開される専門領域の理論、技能の習得のための学術的基盤となる科目を開設する。
5. 専門科目群は各学科の専門領域とそれに関連する理論、技能を学ぶ科目を開設する。
6. 各科目は「知識・理解」、「思考・判断」、「技能・表現」、「関心・意欲」、「態度」の要素からなる本学のディプロマ・ポリシーを達成するよう、4 年間を通して体系的に配置する。さらに、これら 5 つの要素を総合的に発揮することによる高い実践力を獲得するため、専門科目群に実習科目を置く。

各学科のカリキュラム・ポリシーは、年次ごとのカリキュラム編成の考え方を科目群及びディプロマ・ポリシーの 5 つの構成要素との関係を踏まえて示している。

(イ) 保健科学研究科

大学院博士前期課程のカリキュラム・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーに掲げる研究能力、判断能力、実践能力、教育能力の 4 つの要素ごとにその達成に必要な教育課程編成の方針を明示している。同カリキュラム・ポリシーは、大学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

1) 大学院博士前期課程のカリキュラム・ポリシー

群馬パース大学大学院は学位授与の方針（ディプロマポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施する。

1. 研究者としての基盤の涵養

研究能力の基盤を形成するために、共通科目に「研究方法特論」、「研究方法論Ⅰ～Ⅴ」、「応用英語」、「保健医療統計学特論」などの科目を設置する。又、専門の領域における研究実践の方法、すなわち研究テーマの設定から学位論文の完成までを段階を追って教育するために、専門科目に各領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を設置

する。

2. 高度な実践力とリーダーシップの涵養

保健医療分野におけるリーダーに必要な、専門領域の枠を超えた総合的・学際的な教育を行うために、共通科目に「医療倫理学特論」、「医療経営・管理学特論」、「人体の構造と機能学特論」、「加齢医学特論」、「家族社会学特論」、「保健学特別セミナー」などの科目を設置する。特に、「保健学特別セミナー」は幅広い視野の育成という目的に加え、協働（チームアプローチ）の重要性に鑑み必修科目として設置する。

3. 専門領域における教育能力の涵養

教育機関での教育志向だけでなく、保健医療の様々な場面における教育活動を想定した医療専門領域における教育学の教育を行うために、共通科目に「教育学」を設け、さらに専門科目の「特論」、「演習」のなかで領域ごとに、より実践的な内容を盛り込む。

履修計画では、体系化された所属専門領域の「特論」、「演習」、「特別研究」を基本に置く。並行して学ぶ共通科目は一部を除き、学習ニーズ、学習進度に合わせて年次にかかわらず柔軟に履修できるように配置する。また、家庭や職場など社会的事情により標準修業年限（2年）での修業が困難な場合に、標準修業年限を超えて履修可能な長期履修制度を設ける。以上のように、少人数教育の利点を活かし、学習者の志向・ニーズに対応できる柔軟で特色のある大学院プログラムを提供する。

大学院博士後期課程のカリキュラム・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーに掲げる創造性、高い倫理観、国際的に通用する研究能力、研究開発・研究指導能力の涵養という主旨を踏まえ、その達成に必要な教育課程の編成方針を定めており、本学 HP 及び学生便覧を通じて周知している。

2) 大学院博士後期課程のカリキュラム・ポリシー

群馬パース大学大学院保健科学研究科保健科学専攻（博士後期課程）は学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる人材を養成するため、以下のとおり教育課程を編成し、実施する。

1. 高い倫理性と強い責任感、課題遂行力の涵養

共通科目において、社会的理解を得るための生命倫理に則った研究デザインと倫理的行動能力を修得することを目的とした「生命研究倫理論」と、自らの研究分野以外の幅広い知識と課題に適した研究方法を選択できる能力を修得することを目的とした「医療科学研究法」の科目を設置する。

2. 創造性豊かな優れた研究・開発能力の涵養

専門科目において、科学的エビデンスを構築するための高度解析技術や最新評価法などを修得することを目的とした「特講科目」と、各領域の解決すべき課題を広く探求し、課題解決思考を発展させるため、英文文献講読と教員との討論により、研究の評価・応用能力を養い、国際的な情報発信ができることを目的とした「演習科目」、さらに、医療科学における新たな知見を得るための研究を行い、英文論文として公表できることを目的とした「特別研究」を設置する。

3-2-③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成

(ア) カリキュラム・マップの作成

保健科学部の教育課程は、学則第 24 条（授業科目）において学科ごとに定められており、各学科の教育課程はカリキュラム・ポリシーに従って体系的に編成され、効果的に教授が展開されるよう工夫されている。このことは、学科ごとに定めるカリキュラム・マップにより説明されている。カリキュラム・マップは、アクティブ・アカデミー上で公開し学生に周知している。

以下に学科ごとのカリキュラム・マップを示す（図 3-2-1～5）。

群馬パース大学保健科学部看護学科 カリキュラムマップ【29年度カリキュラム】

	知識・理解	思考・判断	技能・表現	関心・意欲	態度							
	<ul style="list-style-type: none"> 保健医療現場としての基本的知識と、社会人としての教養を身につけている。 多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> 保健医療分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先進・高度化する専門分野の基本技術を提供することができる。 チーム医療を实践するための、コミュニケーション能力を身につけている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生涯にわたって専門分野を探究し、その発展に貢献する意欲を持っている。 人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。 							
4年次	卒業研究											
<p>在学看護学実習 総合実習をとおして4年間の学習の統合を図る。さらに、保健実習、臨床実習、研究実習、卒業研究への取り組みを通じて看護学の体系的知識・技能を学び、生じた、深まるべき領域の探求の機会とする。</p>	公衆衛生看護学実習		助産学実習									
	助産学基礎 助産基礎医学 母子と家族の心理・社会学 助産実習	妊娠期胎産診断技術学 分娩期胎産診断技術学 産褥期胎産診断技術学 新生児・乳幼児期胎産診断技術学	助産診断技術学実習	基礎看護学特論 老年看護学特論 小児看護学特論 母性看護学特論	成人看護学特論 小児看護学特論 精神看護学特論							
	公衆衛生看護学概論	公衆衛生看護学動機論	公衆衛生看護学技術演習									
	療養実習											
在宅看護学実習												
臨床看護学実習	臨床解剖学 臨床看護学 臨床薬理学	臨床生理学 臨床薬理学										
3年次	成人看護学領域実習		成人看護学領域実習		老年看護学実習		小児看護学実習		母性看護学実習		精神看護学実習	
<p>前年度学習により対象の学生に合わせた基礎的・応用的な実習を行う。内容は、臨床実習実習により、対応・技術の統合的向上、実践力を高める。また、看護職としての態度について学ぶ。</p>	災害看護論 看護研究概論 産科看護学 保健統計 地域保健行政	成人看護学法論Ⅱ ケア・カルテ看護論 母性看護学方法論	成人看護学法論Ⅰ 母子保健看護論 母性看護学方法論	成人看護学実習 救急法 老年看護学実習 小児看護学実習 母性看護学実習 精神看護学実習 在宅看護学法論Ⅱ 高機能アロマセラピー・ライティング	救急法 老年看護学実習 小児看護学実習 母性看護学実習 精神看護学実習 在宅看護学法論Ⅰ 高機能アロマセラピー・ライティング	医療看護論						
	基礎看護学実習Ⅱ											
2年次	成人看護学概論 母性看護学概論 精神看護学概論 公衆衛生看護学概論 臨床看護学Ⅰ・Ⅱ 臨床看護学Ⅲ 社会福祉・社会保健制度論 多職種連携と連携		老年看護学概論 小児看護学概論 看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 在宅看護学方法論Ⅰ 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅱ 看護学方法論Ⅱ 在宅看護学方法論Ⅱ 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	治療看護学実習 看護学実習Ⅰ カンセリオン 医療実習Ⅰ・Ⅱ 実習合宿	地域ボランティア活動論	生命倫理					
1年次	基礎看護学実習Ⅰ											
<p>社会人としての幅広い職業を身につける。また、自らの成長を促すための基礎的知識を学ぶ。特に、1年間の看護学の学びの入口に立ち、そのめどと応用を確立し、主体的に取り組む姿勢を身につける。</p>	看護学概論Ⅰ・Ⅱ 解剖学Ⅰ・Ⅱ 生理学Ⅰ・Ⅱ 生化学 産婆学 看護学（看護倫理） 公衆衛生学 リハビリテーション概論 大学の学びの入口 心理学 教育学 教育心理学 健康スポーツ理論 法學（日本憲法を含む） 経済学 経営学 生物学A・B 数学A・B 化学A・B 情報学A・B 情報リテラシー	看護学概論 両科で学ぶ情報概論	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学
	看護学概論Ⅰ 解剖学Ⅰ・Ⅱ 生理学Ⅰ・Ⅱ 生化学 産婆学 看護学（看護倫理） 公衆衛生学 リハビリテーション概論 大学の学びの入口 心理学 教育学 教育心理学 健康スポーツ理論 法學（日本憲法を含む） 経済学 経営学 生物学A・B 数学A・B 化学A・B 情報学A・B 情報リテラシー	看護学概論 両科で学ぶ情報概論	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学	看護学概論Ⅰ 看護学方法論Ⅰ 小児看護学方法論 公衆衛生看護学方法論 臨床心理学

図 3-2-1 群馬パース大学保健科学部看護学科カリキュラム・マップ

群馬パース大学

群馬パース大学 保健科学部 理学療法学科 カリキュラムマップ【29年度カリキュラム】

	知識・理解	思考・判断	技能・表現	関心・意欲	態度				
	・保健医療専門職としての基本的知識と、社会人としての教養を身につけている。 ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。	・保健医療分野の課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。	・先進・高度化する専門分野の基本技術を提供することができる。 ・チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力を身につけている。	・生涯にわたって専門分野を追求し、その発展に貢献する意欲を持っている。 ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。	・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。				
4年次	総合臨床実習Ⅰ・Ⅱ 卒業研究								
	運動療法論 理学療法管理論 安全管理								
3年次	理学療法実習 理学療法セミナー 理学療法研究論								
	小児理学療法学 理学療法特許講義 地域理学療法学 運動生理学 臨床神経学Ⅱ(小児神経学・脳神経外科学) 臨床医学 救急・急症・救急学Ⅱ スポーツ医学 緩和医療学 リハビリテーション関連領域	臨床動作分析学 理学・健康・代謝系理学療法評価・治療学 筋力学 鍼灸学 遠隔理学療法学演習 生活福祉学 生体計測工学	運動系理学療法評価・治療学演習Ⅱ 神経系理学療法評価・治療学演習Ⅱ 呼吸・循環・代謝系理学療法評価・治療学演習 整理療法学演習 徒手理学療法学 スポーツ傷害理学療法学 臨床理学療法学 リハビリテーション工学 英語アカデミックリーディング・ライティング		生命倫理				
2年次	理学療法実習								
	運動療法論 運動系理学療法評価・治療学 神経系理学療法評価・治療学 運動学Ⅱ 人間発達学 栄養学 臨床検査・画像検査学 臨床医学特許講義 内科学 整形外科学Ⅰ・Ⅱ 臨床神経学Ⅰ(神経内科学) 小児科学 リハビリテーション医学 老年医学 カウンセリング 臨床統計学 社会福祉・地域サービス論 多職種理解と連携	理学療法実習演習 運動系理学療法評価・治療学演習Ⅰ 神経系理学療法評価・治療学演習Ⅰ 整理療法学 日常生活動作学	日常生活動作学演習 解剖学演習 生体学演習 運動学演習 臨床英語リーディング 英語会話	地域ボランティア活動論					
1年次	理学療法概論 基礎理学療法学 理学療法評価学 解剖学Ⅰ・Ⅱ 生体学Ⅰ・Ⅱ 生化学 運動学Ⅰ 栄養学(食品食品学) 医療概論 看護学 公衆衛生学 リハビリテーション概論 臨床心理学 大学の学び入門 心理学 教育学 教育心理学 健康スポーツ理論 法学(日本国憲法含む) 経済学 経済学 経済学 生体学A・B 数学A・B 化学A・B 物理学A・B 情報リテラシー					基礎理学療法学 英語で学ぶ情報概論	健康スポーツ実務 現代文学 英語リーディング 臨床英語会話 中国語 コリア語 トイツ語 ポルトガル語 情報処理	大学の学び―専門への誘い― 社会学 生活文化と医療	障害者スポーツ レクリエーション論 哲学 人間と倫理 芸術

図 3-2-2 群馬パース大学保健科学部理学療法学科カリキュラム・マップ

群馬パース大学 保健科学部 検査技術学科 カリキュラムマップ【30年度カリキュラム】

	知識・理解	思考・判断	技能・表現	関心・意欲	態度				
	・保健医療専門職としての基本的知識と、社会人としての教養を身につけている。 ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。	・保健医療分野の課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。	・先進・高度化する専門分野の基本技術を提供することができる。 ・チーム医療を実践するための、コミュニケーション能力を身につけている。	・生涯にわたって専門分野を追求し、その発展に貢献する意欲を持っている。 ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。	・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。				
4年次	臨床実習 卒業研究								
			臨床検査学総合演習Ⅱ						
3年次	臨床検査学実習								
	ピットフォール解析学 生理機能検査学演習 画像診断検査学 血液検査学演習 臨床検査学 臨床検査学演習Ⅰ 臨床化学検査学演習 健康食品学 食品衛生学 遺伝子工学 ELISA検査学 臨床検査学演習 看護補助学演習	臨床検査概論学(Reversed CPC)Ⅰ 臨床検査概論学(Reversed CPC)Ⅱ 臨床検査学演習Ⅰ 生体計測工学	関係法規 情報科学概論 臨床検査学実習Ⅰ 英語アカデミックリーディング・ライティング						
2年次	臨床検査学実習								
	生理機能検査学 医用電子工学 医用電子工学演習 臨床検査学概論 臨床検査学特許講義 医療安全管理演習 血液検査学 臨床検査学 臨床化学検査学 遺伝子検査学 近江子検査学演習 血液検査学 看護補助学演習 生体計測技術学 解剖学演習 生体学演習 栄養学 臨床医学特許講義 内科学 老年医学 臨床統計学 社会福祉・地域サービス論 多職種理解と連携	臨床検査学 臨床心理学	医療システムとマネジメント カウンセリング 臨床英語リーディング 英語会話	地域ボランティア活動論	生命倫理				
1年次	理学療法概論 基礎理学療法学 理学療法評価学 解剖学Ⅰ・Ⅱ 生体学Ⅰ・Ⅱ 生化学 医学概論 看護学 公衆衛生学 医療概論 健康と生活 リハビリテーション概論 大学の学び入門 心理学 教育学 教育心理学 健康スポーツ理論 法学(日本国憲法含む) 経済学 経済学 経済学 生体学A・B 数学A・B 化学A・B 物理学A・B 情報リテラシー					臨床心理学 英語で学ぶ情報概論	健康スポーツ実務 現代文学 英語リーディング 臨床英語会話 中国語 コリア語 トイツ語 ポルトガル語 情報処理	大学の学び―専門への誘い― 社会学 生活文化と医療	障害者能力論 哲学 人間と倫理 芸術

図 3-2-3 群馬パース大学保健科学部検査技術学科カリキュラム・マップ

群馬パース大学 保健科学部 放射線学科 カリキュラムマップ

	知識・理解	思考・判断	技能・表現	関心・意欲	態度
	・保健医療専門職としての基本的知識と、社会人としての教養を身につけている。 ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。	・保健医療分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。	・先進・高度化する専門分野の基本技術を提供することができる。 ・チーム医療を実現するための、コミュニケーション能力を身につけている。	・生涯にわたって専門分野を探索し、その発展に貢献する意欲を持っている。 ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。	・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。
4年次 臨床実習を通して診療放射線技師としての知識、技術、態度を確立して臨床実習で取得する。専門分野の発展に寄与する科学的態度や倫理観を獲得する。	診療放射線学総合実習		診療放射線学研究Ⅱ		放射線科学特別講義
3年次 診療放射線技師の臨床実習での知識と基本技術を習得し、実践・演習を通して高い倫理的・科学的態度を培い、放射線専門職としての責任と安全意識に對する能力を獲得する。	診療放射線学総合実習		診療放射線学研究Ⅰ		放射線文化概論Ⅰ・Ⅱ
2年次 診療放射線技師の臨床実習での知識と基本技術を習得し、実践・演習を通して高い倫理的・科学的態度を培い、放射線専門職としての責任と安全意識に對する能力を獲得する。	診療放射線学総合実習		診療放射線学研究Ⅰ		放射線文化概論Ⅰ・Ⅱ
1年次 社会人としての幅広い知識と専門知識としての知識・態度を身につけている。多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。	診療放射線学総合実習		診療放射線学研究Ⅰ		放射線文化概論Ⅰ・Ⅱ

図 3-2-4 群馬パース大学保健科学部放射線学科カリキュラム・マップ

群馬パース大学 保健科学部 臨床工学科 カリキュラムマップ

	知識・理解	思考・判断	技能・表現	関心・意欲	態度
	・保健医療専門職としての基本的知識と、社会人としての教養を身につけている。 ・多様な情報を適切に分析し、問題解決する方法を理解している。	・保健医療分野の諸課題を見出し、科学的洞察による的確な判断ができる。	・先進・高度化する専門分野の基本技術を提供することができる。 ・チーム医療を実現するための、コミュニケーション能力を身につけている。	・生涯にわたって専門分野を探索し、その発展に貢献する意欲を持っている。 ・人と社会に深い関心を持って、地域の保健医療に寄与できる。	・人権を尊重し、高い倫理観を持って社会に貢献する姿勢を身につけている。
4年次 習得した知識や技術を確立し、連携させることにより総合的な医療現場での、卒業研究を通して創造的な研究を行う能力、問題解決能力を養う。	卒業研究		臨床工学総合実習Ⅱ		
3年次 講義で学んだ知識・技術を、医療現場での実践に必要となる実践的知識と技術を身につける。さらに、チーム医療の一員としての臨床工学技士の責任と役割を深く、臨床としての自覚を育成する。	臨床工学総合実習Ⅱ		臨床工学総合実習Ⅱ		医用レザ工学 医用画像処理工学
2年次 臨床工学に必要な基礎知識を学び、両者を有機的に統合して医療現場に適用するための知識・技術を学ぶ。	臨床工学総合実習Ⅱ		臨床工学総合実習Ⅱ		医用安全工学
1年次 社会人として必要な教養を身につけ、臨床工学の基礎知識と工学の基礎となる知識・技術を学ぶことにより、医療者としての基礎を身につける。	臨床工学総合実習Ⅱ		臨床工学総合実習Ⅱ		医用安全工学

図 3-2-5 群馬パース大学保健科学部臨床工学科カリキュラム・マップ

(イ) シラバスの適切な整備

各科目の授業内容が、ディプロマ・ポリシー及び学科の教育目標から導出される学習到達目標を体現したものとなるよう、シラバスの記載項目に改良を重ねている。各科目の単位認定者により作成されたシラバスは、各学科教務委員によりその適切性について点検・確認作業が行われ、必要に応じて単位認定者へ加筆修正を求めている。

また、シラバスに沿った授業展開がなされているか毎学期末に実施する「学生による授業アンケート」により検証を行っている。

(ウ) 授業内容・方法などの工夫

1) 保健科学部

保健科学部では、保健医療専門職としての能力を育成するため、カリキュラム・マップに示すように4年間の学修進度において、知識・理解から思考・判断、技術・表現へと重点を移しながら講義、演習・実技、実習をバランスよく配置するよう工夫がなされている。特に、実習科目は認知、行動、情意を統合する機会として重視し、学内実習から学外実習へと学修の進度に応じて段階的、体系的に配置している。また、問題解決能力の育成のため、各学科が演習科目においてグループワーク等による課題解決型の学習方法を多用している。

以下、学科ごとの授業内容・方法などの工夫を示す。

①看護学科

1 学年に「大学の学びー専門への誘いー」を開講し、現職の看護職をゲストスピーカーに迎えた講義と小グループによる PBL（課題解決型学習）により、学修の動機付けとキャリア教育を早期から展開している。また、対象理解と看護倫理観の涵養のため患者等を招き療養体験を聴く語りの授業を設けている。さらに、実践能力を高める授業展開としてシミュレーション教育や段階的に問題解決能力を高めるための PBL を取り入れている。

②理学療法学科

「身体的に弱い立場におかれた人たちへの援助をするために必要なこと」の理解を基本にしている。教授方法の工夫として、討論と発表によるアクティブ・ラーニングを初学年より行っている。また患者様との治療場面を想定した立ち居振る舞いや適切なボディコンタクト、患者様の立場を実感する練習のために OSCE を実施している。また、臨床実習後には振り返りのセミナーを討論形式で実施し、臨床体験を定着させる工夫を行っている。令和 2（2020）年度より指定規則改定による教育課程変更にあたり、臨床実習の変更などの検討を行った。

③検査技術学科

「学生による授業アンケート」結果を基に、よりよい教授方法の工夫について考え、さらに本学の SD 部会で実施している授業相互見学などを活用し、それぞれの教員が教

授方法の改善に取り組んでいる。学内実習では単位認定者以外に2名以上の専任教員を配置し、必要に応じて認定検査技師資格等を有するスペシャリストを非常勤講師（又は非常勤補助者）として招き、効果的な実習内容となるよう工夫している。

④放射線学科

医療専門職としての知識を修得し、その能力を現場で発揮させるために4年間において基礎知識の理解から思考力、判断力、技術力の養成へと重点を移しながら教育を行えるよう配置してある。当学科の特徴として、専門科目内の各分野は明確なすみ分け（縦割りの講座体）をすることではなく、それぞれ関連する講義内容で構成されている。専門科目においては、学内・外実習を、各科目を統合する機会として重視している。また、学外実習においては、実践現場に身を置くことを通じてチーム医療に対する理解を深めることを狙いの一つとしている。

⑤臨床工学科

授業は臨床工学科の講義に加え、学生授業アンケートを重要視し学生中心とした体制を整えている。「人としての豊かな心」を教育の背景に、専門科目ではグループディスカッションを多く取り入れチーム医療の第一歩とする。学生には医療をテーマに課題選択させディスカッションからプレゼンテーションへと授業を連携させる。ディスカッションやプレゼンテーションの場には学科の全教員が参加し、身近で個別性の高い学習支援を行う。

2) 保健科学研究科

保健科学研究科は少人数教育の利点を活かし、共通科目の多くを各専門領域に所属する学生が合同で履修できる内容とし、それぞれの専門性を基盤に共同活動によって課題を探究するよう授業を展開している。このことは、保健医療分野においてリーダーシップを発揮する実践者・指導者の育成という教育目的の達成のために有効に機能している。

3-2-④ 教養教育の実施

組織規程第8条に基づき、本学では全学的視点に立って、教養教育に関する教育活動を円滑かつ有効に実施する組織として教養共通教育部を学科と等位に位置付けている。構成員は教養科目及び専門基礎科目である解剖学と生理学の担当教員で、そのうち教養科目担当の教員が教養教育責任者として教養共通教育部を統括している。

本学では大学生にふさわしい教養、知識を身につけ、将来豊かな教養と人間性を兼ね備えた医療人を育成するために、教養教育を教養科目群と共通基盤科目群の2つの科目群に分けている。

教養科目群では、基礎的教養、問題解決能力、コミュニケーション能力を身につけるために、「人と社会及び自然の理解」、「情報と言語の理解」の2つの上位区分とそれを構成する7つの下位区分から満遍なく学べるよう授業科目を配置し、多様な知識、思考力を身に付けられるように多種多様な科目を提供している。また、学科によって多少の差異はあるが、選択と必修のバランスにも配慮している。学科合同で開講する科目も多く設定

し、幅広い授業科目で扱う多様な知識を他学科の学生と共に学ぶことにより、学生が様々な考え方の違いを理解し、柔軟な思考力を身につけることを狙っている。

共通基盤科目群では、初年次教育として、大学での学びに必要な姿勢やスキルを学ぶ科目を1年前期に全学科合同開講科目として開講し、大学での学びへの円滑な移行を促すとともに、共に学ぶことによる学科の壁を越えた学生間の交流を図っている。また、入学後早期から専門科目への関心・意欲を高めるための科目を、同じく1年次に開講し、専門教育の導入部分を提示し、或いは、実務者をゲストスピーカーとして招き卒業後の職業人としてのイメージの具体化を促す等の工夫により、学生の学習意欲の向上を図っている。さらに、異なる医療職種を養成する5学科を擁する本学の特徴を活かし、2年次には、5学科の教員が5職種それぞれの立場からチーム医療に関する話題を提示する科目を開講し、専門性、役割、立場等の違いを理解して協働していく力の基礎を育てている。

幅広い教養を身につけることと同時に、群馬パース大学の学生として学科の専門にとらわれない共通の教養、意識を身につけるといふことも教養教育の目指すところである。そのために教養科目群の科目と大学の学びの姿勢やスキルを学ぶ科目、および教養共通教育部の教員の担当科目である解剖学と生理学においても、内容を全学共通としている。さらに教養共通教育部が企画・実施している、本学の理事長と学長、本学のグループ病院の院長による一年生へ講義一本学の歴史、建学の精神、教育理念、教育目標、医療についての講義一を通じて、学科を超えた全学共通の意識、連帯感、医療職としての基本的姿勢の養成を目指している。これらを通じて教養共通教育部が専門基礎教育と専門教育への接続の一翼を担っている。

教養教育の実施について、今年度加えるべきことは次のとおりである。来年度新学部（リハビリテーション学部）がスタートするにあたって、教養科目群、共通基盤科目群、専門基礎教育（解剖学、生理学）についてカリキュラム上の再編、クラス数の見直しを行い、新学部と既存学部の両方にとって質、量ともにバランスの良いカリキュラムを整えていくことが必要である。

また、新型コロナウイルス感染拡大により、今年度はスタートの時点から変則的であるが、遠隔授業、動画配信、課題も取り入れて、学生の学修の質を保っていくよう対応している。

3-2-⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施

（ア）教授方法の改善を進めるための組織体制の整備と運用

教育方法の改善を進めるため、保健科学部においてはFD委員会を設置し、計画的にFD(Faculty Development)の推進を図っている。平成30(2018)年度には、相互授業見学、研修会及びワークショップ、「学生による授業アンケート」を実施している。特に、保健科学部の授業アンケートについては、結果を受けて各教員が授業改善計画を立案し、FD委員会が取りまとめている。

保健科学研究科においては、学部とは独立したFD委員会を設置し、大学院独自のFDに関する事項を協議し、取り組んでいる。

また、本学の教員がカリキュラム・ポリシーに基づく教育の展開における個々の役割を認識し、他の授業科目と連携し合いながら、適切な教育技術を用い、教員として相応しい

態度で学生の指導に当たるための基本的な考え方を示す「教育ガイドライン」を教務委員会が制定し、教育の質の保証とその向上を目指すべく全教員に周知した。

(イ) 履修登録単位数の適切な上限設定と単位制度の実質を保つための工夫

単位制度の実質を保つため CAP 制を導入し、履修登録可能な単位数の総数を年間 48 単位と定めている。ただし、成績優秀者（直前学期 GPA が 3.50 以上の者）には次学期の履修登録時に、定められた履修登録単位の上限以上の履修を認めることとしている。

本学の全ての学科は、国家資格を要する医療職の養成課程であることに鑑み、医学的知識と医療技術を段階的に修得させる進級制度をとっている。進級制度では、上位学年へ進級するために取得すべき科目を指定しているが、進級に必要な科目の単位数は CAP 制で指定する上限の範囲内であり、実際の履修単位数を見ても年間 48 単位以内に収まっており、学修の質が担保されている点から単位制の実質が保たれている。

(3) 3-2 の改善・向上方策（将来計画）

カリキュラムとそれを実行する授業の展開は、社会の要請と学生の実態に応じて発展させなければならない。医療職を養成する本学において検討すべき点は、一般教養科目の構成内容と学年配当、専門基礎科目及び専門科目の学習内容の精選と学習時間の担保、国家試験受験準備学習と卒業研究の比重按分、養成施設指定規則等の変更などがある。

今後、これらの点を注視し、社会に貢献できる人材養成を目指す。

3-3 学修成果の点検・評価

3-3-① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用

3-3-② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック

(1) 3-3 の自己判定

「基準項目 3-3 を満たしている。」

(2) 3-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

3-3-① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用

三つのポリシーを踏まえた学修成果の達成状況について、学生の学修状況、資格取得状況、就職状況、「学生による授業アンケート」により学修成果を点検・評価したものを以下に明示する。次年度より「卒業時アンケート」も評価の対象に加えることを検討している。

(ア) 学生の学修状況

保健科学部における令和元（2019）年度の学生の修得単位数は、1 年次では 31 単位から 40 単位を修得した者が 25.0%、41 単位以上を修得した者が 73.0%であった。2 年次では 31～40 単位を修得した者が 61.4%、41 単位以上を修得した者が 36.3%であった。3 年次では 21 から 40 単位を修得した者が 97.5%、4 年次では 11 から 20 単位を修得した者が 80.8%であった。当該年次に必要な単位を修得し、進級又は卒業した学生は、1 年次 366

人中 344 人、2 年次 357 人中 341 人、3 年次 372 人中 343 人、4 年次 229 人中 227 人であり、1～3 年次の進級率は 93.9%、4 年次の卒業率は 99.1%であった。また、成績評価の平均点は保健科学部で 75.9 点から 88.5 点の範囲に分布し平均は 81.4 点であった。

保健科学部では、前掲「表 3-2 保健科学部成績評価基準」の GP 基準に則り GPA を算出している。この結果は、アクティブ・アカデミー上の修学ポートフォリオの頁に掲載することにより、学年担任、チューター等教員が随時閲覧し、個々の学生の学習成果の点検・評価及び学習支援に活用している。さらに、学科・学年ごとの学習成果の点検・評価のため、学科ごとに全在籍者の GPA を各学科の学科長及び学科教務委員が学内グループウェア・システム上で閲覧できる仕組みをつくっており、過年度からの推移や学年による特徴を比較検討し、教育活動の改善に活用している。学年進行に応じた適切な単位取得状況、良好な進級状況および高い卒業率および妥当な成績分布の状況は、良好な修学状況を示しており、ディプロマ・ポリシーに基づく教育が適切に進められている証左である。

(イ) 学生の資格取得状況

令和元（2019）年度の保健科学部卒業生の資格取得状況は、看護学科卒業生 82 人のうち看護師国家試験合格者は 80 人（1 人の未受験を除いた合格率 98.8%）、理学療法学科卒業生 82 人のうち理学療法士国家試験合格者は 78 人（95.1%）、検査技術学科卒業生 63 人のうち臨床検査技師国家試験合格者は 62 人（98.4%）であった。看護師国家試験、理学療法士国家試験、臨床検査技師国家試験のいずれにおいても合格者率の全国平均を上回っている。高い国家試験合格率は、ディプロマ・ポリシーの優れた達成度合いを示している。

(ウ) 就職状況

令和元（2019）年度保健科学部卒業生の就職状況は、看護学科卒業生の就職率 98.8%、理学療法学科卒業生の就職率 100%、検査技術学科の就職率 98.3%であった。同じく保健科学研究科修了生 7 人の状況は、入学時に在職している社会人の 6 人が在学中から勤務していた医療機関又は教育機関に引き続き就労している。社会人の 1 名は本学研究生として研究活動を続けることとなった。また、看護学科保健師課程卒業生のうち保健師として就職した学生が 3 人、助産師課程卒業生のうち助産師として就職した学生が 4 人と、その取得資格を活かして就職している。検査技術学科では一般企業等への就職もみられるが、検査会社や研究施設など医療に関連する企業への就職が多い。高い就職率は、ディプロマ・ポリシーの良好な達成度合いを示している。

(エ) 学生による授業アンケート

学生自身による学修状況の評価を把握するために、「学生による授業アンケート」の結果も活用している。アンケートは、授業の内容・教員の教える姿勢・学生の学ぶ姿勢の三つの視点からなる 18 項目の質問に対して、学生の感じたことを、そう思う・どちらかというと思う・どちらかというと思う、そう思う、そう思う、そう思う、そう思うの 4 段階で答えるもので、4 点満点で降順に点数化されるものである。自由記載項目も配置されている。

授業の内容については計画性・興味・構成・理解し易さ・進度の 5 項目、担当教員の教える姿勢については、内容の準備・学生の観察・時間遵守・質問への対応・教材選定・声

の大きさ・板書とプレゼンテーション・課題提示・学修環境管理の9項目、学生自身の学修姿勢は、出席・態度・予復習・質問の4項目であるが、それぞれの領域について4点満点平均点で評価している調査である。

アンケートの3つの領域の平均点及び自由記載項目の抄録は授業科目ごとに、学年学科別に本学HPにて公開されている。学生の主観的評価の総体ではあるが、全科目の平均でみれば、4点満点中で授業の内容は平均3.6点、教員の教え方は3.6点、学生の姿勢は3.5点であり、教育水準及び満足度ともよい水準に保たれていると考える。この学生による評価が比較的高い点は、ディプロマ・ポリシーによる教育が実行されされている経過にあることを示している。

(オ) 就職先機関のアンケートの活用

就職先機関のアンケートは、ディプロマ・ポリシーに沿って知識・理解、思考・判断、技能・表現、意欲・関心、態度の各側面についての評価を受ける内容とし、大学が主催する就職説明会の機会を利用して実施した結果、卒業生の評価は概ね良好であった。この点はディプロマ・ポリシーの良好な達成度合いを示している。

3-3-② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック

(ア) 教育内容・方法及び学修指導方法改善へ向けてのフィードバック

学生の学修状況については、年度末に各学科の進級判定会議及び卒業判定会議において学生の単位修得状況が単位認定者となっている全専任教員に報告され、学科の学習指導方針等に関する協議の機会となっている。また、各学生の単位取得状況及びGPAはアクティブ・アカデミー上の修学ポートフォリオの頁に掲載され、学年担任、チューター等、学生指導を行う教員が随時閲覧し、個々の学生の学習成果の点検・評価及び学習支援に活用している。

学生の資格取得状況は国家試験対策委員会、就職状況はキャリアサポート部会が各学科と協力して集約・分析し、教授会、学科会議を通して全教員にフィードバックされている。

「学生による授業アンケート」の集計結果及び自由記載の内容は、「学生による授業アンケート集計・分析結果シート」を用いて各教員にフィードバックされている。同シートには、前年度のアンケート結果を受けて行った工夫・留意点の振り返り、当該年度のアンケート結果に対する今後の改善計画を教員自身が記載する欄が設けられており、各授業科目のPDCAサイクルに学生自身による学習成果の評価を反映させる仕組みとなっている。さらに、同シートはFD委員会への提出を義務づけることにより実施が担保されており、提出率は専任教員95.8%、非常勤講師69.1%となっている（平成30年度後期）。

また、「教育研究年報」として本評価書の巻末に年度ごとの各授業科目の開講状況、授業の方法、使用した教材、素点平均等の記録や研究活動の記録を掲載したり、アクティブ・アカデミーのWebフォルダページ上に成績分布状況を公開したり、教員間で共有することにより、教授方法改善の資料としている。

(イ) 学生に対する学修状況評価のフィードバック

個々の学生の学修状況は、担任またはチューターがアクティブ・アカデミーで確認し、学生にフィードバックし、学修の振り返りを促している。加えて、科目担当者による試験後の解答解説や正答開示など学修到達状況のフィードバック、学生が確認できるアクティブ・アカデミーで公開された成績分布状況により学生が到達度を自己評価できるよう支援している。学修の到達目標に達しない学生に対しては対面による直接指導も行っている。

また、必要に応じて保護者に対しても個々の学生の学修状況をフィードバックし、家庭における学修環境の整備等について相談・助言を行っている。

(3) 3-3 の改善・向上方策（将来計画）

アクティブ・アカデミーの導入により学修状況を一元管理し、学修指導に活用できる環境が整いつつあるが、学修に関する情報を教職員・学生間で共有するための修学ポートフォリオの活用は未だ途上である。今後、修学ポートフォリオ上で教職員・学生間が共有する情報の種類と双方向コミュニケーションの在り方を検討し、学生自身が学修状況を随時確認して自己の学修課題とその後の取り組みについて教員の助言を得ながら自主的・主体的に学習を進めるための、合理的かつ汎用性の高い修学指導システムを確立する予定である。

平成 25（2013）年度から新たに導入した GPA を修学支援の実質的で合理的な指標とするため、教務委員会と IR 推進室との連携により、現行の進級基準、卒業認定基準との関連等について検証を進め、適正な評価基準や運用方法を検討していく。

「学生による授業アンケート」の結果を直ちに授業改善に反映させるため、アンケート実施時期を授業実施期間の中間と終了時の 2 回とする等、実施方法を検討する。

ディプロマ・ポリシーに基づく学修成果の点検・評価の項目に「卒業時アンケート」を新たに追加し、多様な指標から学修成果の点検・評価をおこなうと同時にそれらの評価を全学で共有する方法について検討する。

【基準 3 の自己評価】

大学及び大学院の教育目標から導かれたディプロマ・ポリシーと、それを達成するためのカリキュラム・ポリシーを有し、広く公開している。教育課程はカリキュラム・ポリシーに基づき、一般教養を重視して編成され、カリキュラム・マップによりディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの一貫性がわかり易く示されている。教育課程を実践する授業にあっては、保健医療専門職として必要な能力を育成するための様々な工夫がなされ、明確な成績評価基準、単位認定基準によって評価されている。学年進行にあたっては、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等が学則等で明示され厳正に適用されている。学修成果の点検・評価は、学修状況、資格取得状況、就職状況、「学生による授業アンケート」、就職先機関アンケートを用いて多面的に行われ、教育内容・方法及び学修指導の改善のために適切にフィードバックされている。

以上のことから、基準 3 を満たしていると判断できる。

基準 4. 教員・職員

4-1 教学マネジメントの機能性

4-1-① 大学の意思決定と教学マネジメントにおける学長の適切なリーダーシップの確立・発揮

4-1-② 権限の適切な分散と責任の明確化に配慮した教学マネジメントの構築

4-1-③ 職員の配置と役割の明確化などによる教学マネジメントの機能性

(1) 4-1 の自己判定

「基準項目 4-1 を満たしている。」

(2) 4-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-1-① 大学の意思決定と教学マネジメントにおける学長の適切なリーダーシップの確立・発揮

学長がリーダーシップを適切に発揮するための補佐体制として、平成 26(2014)年度に「群馬パース大学・群馬パース大学大学院大学協議会規程」（以下、「協議会規程」という。）を整備し大学協議会を毎月 1 回のペースで開催している。大学協議会は学長を議長と定め（協議会規程第 5 条）、その構成メンバーは学長、副学長、研究科長、学部長、各学科長、教養教育責任者、事務局長、企画部長、IR 推進室長、（協議会規程第 4 条）である。

審議事項は学園運営会議への提案事項及び教授会と研究科委員会へ審議を要請する事項（全学的な教育課程の編成方針、本学の将来構想、本学の予算、競争的資金の獲得に関すること及び学長が必要と認める事項）であることが協議会規程第 6 条に定められており、大学協議会での審議を経て学長が審議要請を決定し、学園運営会議への提案及び教授会への審議要請指示は学長が直接行っている。また、大学協議会の下部会議として教学マネジメント会議と財務マネジメント会議が定められており（協議会規程第 3 条）、それらに特化しかつ十分な協議の必要性を学長が認めた場合、必要な人材を加えて（協議会規程第 4 条 2 項）会議が開催されている。

群馬パース大学／群馬パース大学大学院

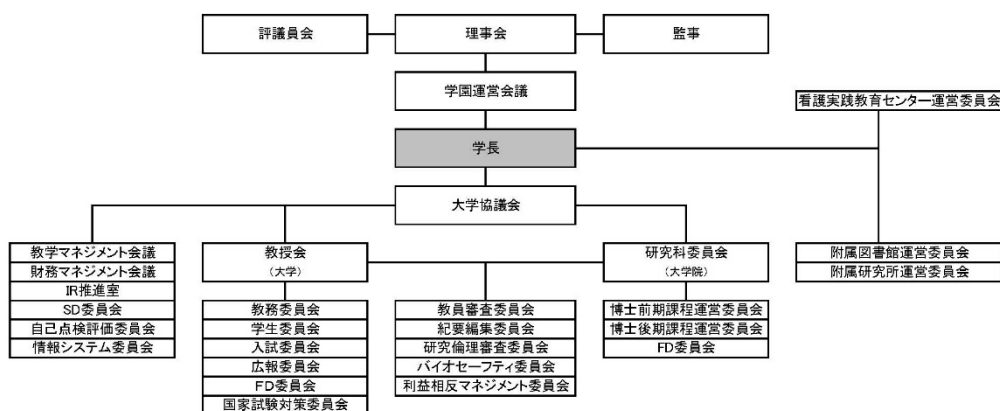


図 4-1-1 群馬パース大学・群馬パース大学大学院組織図

4-1-② 権限の適切な分散と責任の明確化に配慮した教学マネジメントの構築

学則に定めた使命・目的の達成のために、学則第8条に基づき、学長・教授及び事務局長をもって構成される教授会を設置、大学における学生の入学、卒業及び課程の修了、学位の授与、教育研究に関する重要事項（①教育課程の編成、②教員の教育研究業績等の審査、③中長期目標・中長期計画）を審議すると同時に学長による決定が下される場として位置付けられている。教授会は毎月1回開催されている他、学長が必要と認めたときは臨時教授会を開くことができる。

また、教授会は教学マネジメントを適切に行う上で必要な事項を調査・審議するために各種委員会（教務委員会等）を置き、各委員会規程において、全ての審議結果を学長に報告し承認を受けることを定めている。各委員長は教授会開催に先立ち、学内グループウェア・システムを通じて審議結果を学長及び教授会メンバーに報告・公表し、教授会において学長の一括承認を得ている。

なお、本学大学院については、大学院学則第12条に基づき、同大学院の教授にて構成される研究科委員会を設けている。

学長は、組織規程第12条により、「教育、研究に関する校務をつかさどり、所属職員を監督して学内の教育運営全般を管理し、大学を代表する」と規定されている。

また、学長は（後述の）学園運営会議の構成員であるとともに理事・評議員を兼任しており、大学及び法人の意思決定と執行責任を負っている。

以上に示したとおり、大学の意志決定及び教学マネジメントは大学の使命・目的に沿って、適切かつ円滑に行われている。

4-1-③ 職員の配置と役割の明確化などによる教学マネジメントの機能性

「群馬パース大学 委員会等担当者一覧」に示されているように、本学・本学大学院におけるすべての会議には、必ず事務職員を配置し、教職協働を実施している。各種委員会等の規程においても職員の担当課を明確にしている。教職員は常に学内における問題点・検討課題を共有し、その解決・実施のために協働している。

(3) 4-1の改善・向上方策（将来計画）

2 学科増設による学生数・教職員の増加等、拡大・発展する中で、さらに強い学長のリーダーシップを確立するために、IR推進室のさらなる有効活用を行う。今後は教職員の協働強化のため、FD・SD活動の全体参加や職員の個々の職能開発のための研修にも教員参加を促すなど、教職員それぞれの立場の相互理解に力を入れる。

4-2 教員の配置・職能開発等

4-2-① 教育目的及び教育課程に即した教員の採用・昇任等による教員の確保と配置

4-2-② FD(Faculty Development)をはじめとする教育内容・方法等の改善の工夫・開発と効果的な実施

(1) 4-2の自己判定

「基準項目4-2を満たしている。」

(2) 4-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-2-① 教育目的及び教育課程に即した教員の採用・昇任等による教員の確保と配置

本学においては大学設置基準上の教員数【基礎資料：様式1（データ編）】はもとより、各指定規則に定められた教員数を上回るよう確認しながら、独自に学科別の教員採用上限である「学科別・職位別教員定数」を大学協議会において定め、教育の質が担保されるよう努めている。全学科長が各基準を上回りながら、採用上限に達するまで教員審査委員会に諮ることができる仕組みとしている。

本学大学院においては、大学院設置基準上の教員数【基礎資料：様式1（データ編）】を満たすよう適切に配置している。

教員の採用・選考にあたっては、公募（本学 HP・JREC-IN 等）を基礎として応募された中から、各学科長等が推薦する教員を教員審査委員会に諮り、「群馬パース大学教員選考規程」に基づき審議され、教授会の議を経て学園運営会議で採用が決定される。ただし、教授の任命においては理事会の承認を必要としている。

また、教員の昇任や特別昇給等は、「群馬パース大学教員評価規程」（以下、「教員評価規程」という。）に基づき、評価対象教員全員に自己評価報告書・教員個人調書（履歴書）・教育研究業績書を提出させ、教員評価委員会で審議される。教員評価委員会では、特に優れた活動を行ったと評価された教員の昇任について、教員審査委員会に推薦することができる仕組みとしている（令和元（2019）年度実績：昇任3名、特別昇給1名）。

4-2-② FD(Faculty Development)をはじめとする教育内容・方法等の改善の工夫・開発と効果的な実施

平成31（2019）年4月1日付で委員会組織の再編を行い、群馬パース大学 FD 委員会（以下、「学部 FD 委員会」という。）、群馬パース大学大学院 FD 委員会（以下、「大学院 FD 委員会」という。）をそれぞれ独立の委員会として設置している。

学部教員を対象とする FD は、学部 FD 委員会が年間活動計画に基づき学生による授業アンケート、教員間の相互授業見学・評価、教育研修、ワークショップ等の活動を組織的、計画的に展開している。研修については、集合研修と OJT を連動させた段階的、持続的研修体系「群馬パース大学教育研修体系」を構築し、平成30（2018）年度より運用を開始している。活動実績と評価は学部 FD 委員会定例会議に随時報告し検討を行い、さらに、年次報告書を作成し、次年度の活動計画立案の資料とすると共に、本学 HP に掲載し、内外へ周知している。

また、平成29（2017）年度まで「(旧)群馬パース大学年報」に収録してきた教員の教育活動の記録のうち、各授業科目の開講状況、授業方法、使用教材等の記録を、平成30（2018）年度分から「群馬パース大学教育研究年報」に移行し、毎年発刊することにより、自己評価と関係者への説明の機会としている。また、同じく「(旧)群馬パース大学年報」に収録してきた各授業科目の成績分布、素点平均を、アクティブ・アカデミーをとおして、学生および全教員の閲覧に供し、教授方法改善の資料としている。

この他、各学科、又は教育研究領域ごとの取り組みとして、新任教員、若手教員の教育能力育成のため、補助者としての授業への参加、教壇に立つ前の模擬授業等のトレーニング、指導案の点検・検討会等の活動を行っている。また、同じく新任教員、若手教員の研

究能力向上のため、共同研究組織内での指導、新任教員、若手教員が単独で行う研究への助言、科学研究費補助金応募の支援をはじめとする内外の研究費獲得の支援等を行っている。

大学院の教員を対象とした FD については、学生による授業アンケートの継続実施に加え、新たに発足した大学院 FD 委員会のもとで活動している。

(3) 4-2 の改善・向上方策（将来計画）

本学では、大学（院）設置基準を満たす教員編成であることはもとより、全ての学科が職業資格関連の指定基準に定められた教員数を上回るよう配置している。今後もそれらの基準及び学内における基準を意識しながら教員採用に努める。また、指定規則の改正や学生数の増減等、推測される状況を意識しながら、特に若手教員（助手を含む）の採用を積極的に推進し、教員の年齢構成が永続的に保たれるよう注視する。

年間活動計画に基づく FD 関係各事業を継続の上、充実させていく。特に、「群馬パース大学教育研修体系」に基づく体系研修の年次計画を円滑に進め、完成を目指す。また、教員間の相互授業見学・評価の結果を授業改善に活用するための方策に重点を置く。

4-3 職員の研修

4-3-① SD (Staff Development) をはじめとする大学運営に関わる職員の資質・能力向上への取組み

(1) 4-3 の自己判定

「基準項目 4-3 を満たしている。」

(2) 4-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

全学教職員を対象とする SD の推進は、SD 委員会が全教職員の SD を統括する委員会として大学協議会の基に設置され、年間活動計画に基づき教職員 SD 研修、ワークショップ、事務職員研修等の活動を組織的、計画的に展開している。また、平成 30 (2018) 年 6 月に作成された「群馬パース大学教職員研修の概要 (図 4-3-1)」に従い、教職員研修の体系化を図っている。

群馬パース大学教職員研修の概要

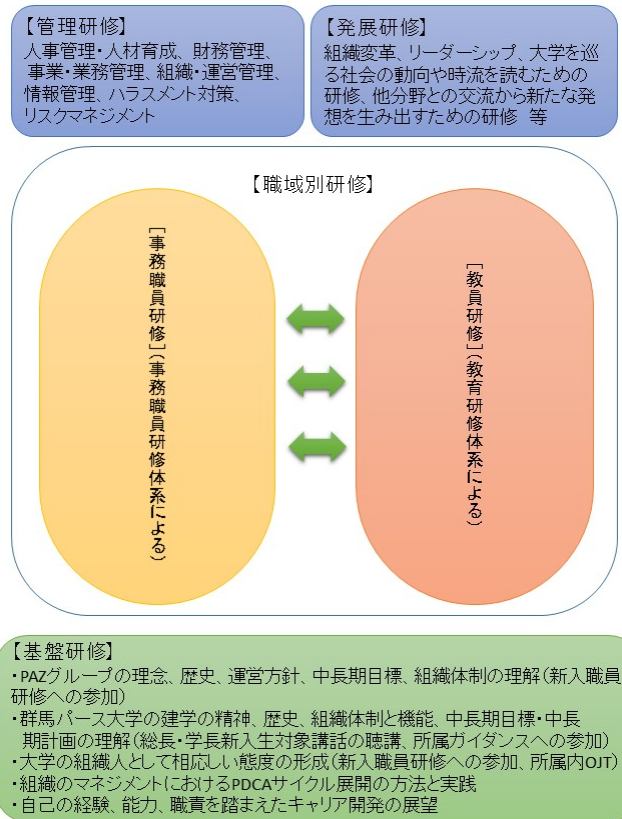


図 4-3-1 群馬パース大学教職員研修の概要

さらに年次報告書を作成し、次年度の活動計画立案の資料とすると共に本学 HP に掲載し内外へ周知している。

また、SD 委員会では SD 研修等の実績に基づき、今後の研修計画の見直しを行っている。教職員 SD 研修・ワークショップは、事後アンケートにより研修内容及び企画に対する参加教職員の満足度を評価すると共に、SD 活動に対するニーズを把握し次期企画に反映させている。令和元（2019）年度については、10 月に「大学における自殺予防」、2 月に「ハラスメントの考え方と職場環境づくり」をテーマに全教職員対象の研修会を開催した。

事務職員研修については、時事の話題や本学の運営上の課題を取り上げ年度ごとに企画・実施してきた従来の方法を見直し、階層別、部門別研修を含む研修体系「群馬パース大学事務職員研修体系」を構築し、平成 30（2018）年度より運用を開始している。令和元（2019）年度は、「私立大学等経常費補助金から見る 今、私学に求められていること」をテーマに研修会を開催し、全事務職員が受講するとともに教員も多数聴講した。

(3) 4-3 の改善・向上方策（将来計画）

現行の SD 関係研修を継続の上、充実させていく。特に、教職員それぞれの職責に応じ

た職務遂行能力に係る研修（教職員研修・事務職員研修）の一部共有により、大学の諸活動に対する教職員の理解を促進する。また、教職員共通の大学運営・経営能力の開発に関する研修の充実、強化を図る。

4-4 研究支援

4-4-① 研究環境の整備と適切な運営・管理

4-4-② 研究倫理の確立と厳正な運用

4-4-③ 研究活動への資源の配分

(1) 4-4 の自己判定

「基準項目 4-4 を満たしている。」

(2) 4-4 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

4-4-① 研究環境の整備と適切な運営・管理

研究環境の整備として、大学における研究活動の一層の発展と地域貢献を促進することを目的に群馬パース大学附属研究所を設置し、「群馬パース大学附属研究所規程」を定め、主として、研究者に対する研究活動支援及び研究活動に基づく社会連携、地域貢献を行っている。

運営に関しては、附属研究所運営委員会にて、個人研究費や特定研究費、研究予算に関する事項を審議し、適切な運営・管理を行っている。また、本学に交付された公的研究費は、管理・監督体制を明確にするため、「群馬パース大学公的研究費の管理・監督に関する規程」を制定し、研究費を有効かつ円滑に運営・管理している。

教職員等の研究活動について不正行為の防止、不正行為が生じた場合又はその恐れがある場合の措置等に関しても、「群馬パース大学研究活動の不正行為及び研究費の不正使用の防止等に関する規程」にて必要な事項を定めている。

4-4-② 研究倫理の確立と厳正な運用

個人の尊厳、人権の尊重・個人情報保護の保護、その他倫理的観点から研究者等がより円滑に研究を実施することができるよう、本学では、平成 17（2005）年「群馬パース大学・群馬パース大学大学院 研究倫理審査委員会規程」（以下、「研究倫理審査委員会規程」という。）を定め、研究の的確な推進を図ってきた。

また、本学では、「科学者の行動規範」（日本学術会議 平成 18 年 10 月 3 日）に準拠し、「群馬パース大学研究活動の不正行為及び研究費の不正使用の防止等に関する規程」を平成 27（2015）年 4 月に定め、研究者の責任・行動、説明・公開、法令順守など研究者の倫理的な行動と判断とともに説明責任を果たすことを求めてきた。研究倫理に関する学内審査機関については、本学及び本大学院に所属する教員や教員の指導のもとに学生が「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」（平成 29 年 2 月 28 日一部改正 文部科学省・厚生労働省）及び「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」（平成 29 年 2 月 28 日一部改正 文部科学省・厚生労働省・経済産業省）に該当する研究及び関連する研究を実施

する場合の適否について、倫理面からの正当性を審査するため、研究倫理審査委員会規程に従い、研究倫理審査委員会で審査している。研究倫理審査委員会は、「臨床研究・疫学研究倫理審査」の場合、委員長、副委員長、保健科学部代表（社会学者を含む）、学外学識経験者（弁護士）、一般人、事務系職員で構成している。さらに、「遺伝子解析倫理審査」の場合は、他大学の遺伝子学研究者を加え審査に当たっている。

研究倫理審査は、教員等からの申請に基づき、実施計画の内容等を、主として（1）研究等の対象となる個人の人権擁護、（2）研究等の対象となる者に理解を求め同意を得る方法、（3）研究等によって生ずる個人への不利益並びに危険性並びに医学上の貢献の予測等から、説明書と同意書の提出を求めた上で、その内容や表現に至るまで審査を行っている。審査の判定は、「群馬パース大学・群馬パース大学大学院研究倫理審査委員会規程」に基づき、厳正に行われている。

研究倫理審査は、基本的に「研究倫理審査フローチャート」に従い審査される。審査を希望する教員及び学生は、各自、「群馬パース大学における研究倫理審査に関するチェックシート」（以下、「チェックシート」という）を含む申請書類一式を研究倫理審査委員会に提出する。

研究倫理審査申請は、随時受け付けており、記載されたチェックシートを参考に、申請された案件ごとに、研究倫理審査委員長から指名された担当委員 2 名により、指針に基づき事前審査が行われる。共同研究機関において研究倫理審査委員会の承認を受け、その実施について適当である旨の意見を得ている場合や、侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する場合などは、迅速審査として審査・判定される。迅速審査によることが不相当と判断された場合は、年 4 回（4 月・7 月・10 月・1 月）の通常審査に回され審査・判定される。

通常審査の結果、改訂が必要な場合は意見書を作成し、申請者に送付し、改訂を求める。改訂後の再申請書類を委員長・副委員長が検討し必要があれば再度改訂を求める。迅速審査で侵襲性が少なく介入研究でないものについては、予め指名された委員・委員長の合意が見られた場合、審査結果を学長に報告する。これらの審査を経たものについて、学長に審査結果を報告する。学長は、承認の是非を判定し判定結果通知書を発行する。

本学に所属する教員が研究を実施する場合の適否その他の事項について、利害関係が想定される企業等との関わり（利益相反）を含めて調査審議し、適当な管理措置について検討することを目的として利益相反マネジメント委員会を設置し、利益相反に関する審査を行っている。

4-4-③ 研究活動への資源の配分

教員の研究費については、教育研究の成果を上げることを目的に「群馬パース大学研究費規程」を定め、個人研究費、特定研究費、学科研究費、及び研究旅費が配分されている。

また、学外からの研究費を獲得するため、科学研究費補助金及び各種団体等が募集する助成金の申請を奨励するとともに、共同研究の受入れを積極的に行っている。

個人研究費は、教員 1 人あたり一律 10 万円（年間）である。これは各教員の研究活動を支援するための基礎となる費用で、主に通信費、消耗品費等に充てられる。

学内研究支援費としては課題応募型研究としての「特定研究費」等、学科別に配分を任

される「学科学研究費」がある。「特定研究費」は主に若手研究者を育成し、その研究費を使い実績を作ることにより、科学研究費又は外部の助成金に申請し、採択に繋げることが目的である。特定研究費に応募する教員は、原則として申請年度から2年以内に科学研究費又は外部の助成金に申請することを条件とする。

学科学研究費は学科支援型研究費であり、個人研究費で不足となる必要研究経費を学科学研究費で補充し、実績を作ることにより、学科内の科学研究費等の外部助成金への申請及び採択率向上に繋げることが目的とする。

また、研究旅費を予算化し、利用方法の詳細を定め、全教員に周知している。国内外問わず学会発表や情報収集など、教員が研究活動を遂行する際に使用可能とする。

実際の運用に当たっては、個人研究費、特定研究費、及び研究旅費とも「学内研究費利用の手引き」に従って運用されている。

(3) 4-4 の改善・向上方策（将来計画）

専門業務型裁量労働制を導入し研究時間の確保についての自己管理を薦めている。学内の教育研究体制とその環境については改めて整備し、科学研究費を始めとした外部研究費の獲得に向け取り組みをさらに強化していきたい。

特に、文部科学省等の科学研究費への全教員における応募率は57%、採択率も14%と決して高い水準にあるとは言えないことから、学科ごとに科研費採択推進プロジェクトチームを編成し学科内の申請書のチェック体制などを強化しながら採択率の向上にさらに努力していきたい。また、若手研究者に対する支援が必ずしも十分ではなく、外部資金の獲得による研究の活性化を図るため、研究費の配分比率を見直すなど、各学科内における協力共同体制の構築を推進するよう努力したい。

研究倫理では学内外での不一致を是正する。具体的には、本学HPへの問題事例集の掲載などの検討も必要である。また、卒業研究や大学院生による研究などでも研究計画書、説明と同意等基本的な倫理事項で課題があり、教員に対して倫理に関する指導法を教授するなどのFD研修会（研究倫理の基本的な理解、研究計画書の作成方法、説明と同意の手続き、個人情報保護等）や、学生向け講習会も開催していきたい。

【基準4の自己評価】

教学マネジメントは、学長のリーダーシップのもとで複層に機能と責任が分担された実行体制を有している。学科会議を除き、すべての会議体には事務職員が配置され教職員の協働により日常的な業務が円滑に進んでいる。

教員の採用にあつては、公募を基本に教員審査委員会が行う。昇任にあつては、教員評価規程に基づき公平・適切に評価される仕組みとなっている。

教員配置については、大学設置基準だけでなく、各養成施設の指定規則を上回ることを確認しながら、本学で定めた教員上限定数までの範囲で管理している。

大学協議会のもとに設置されたSD委員会は、年間活動計画に基づき教職員SD研修、ワークショップ、事務職員研修等の活動を組織的、計画的に展開している。また、平成30（2018）年6月に作成された「群馬パース大学教職員研修の概要（図4-3-1）」に従い、教職員研修の体系化を図っている。

主として研究支援を行う附属研究所が、研究倫理審査委員会と連携して研究のコンプライアンスを強化保障している。研究資金については、個人研究費、特定研究費及び学科学研究費が配分されている。外部資金の導入については、科学研究費の獲得にあたって啓発を行っている。

以上のことから、基準 4 を満たしていると判断できる。

基準 5. 経営・管理と財務

5-1 経営の規律と誠実性

5-1-① 経営の規律と誠実性の維持

5-1-② 使命・目的の実現への継続的努力

5-1-③ 環境保全、人権、安全への配慮

(1) 5-1 の自己判定

「基準項目 5-1 を満たしている。」

(2) 5-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 組織倫理に関する規程に基づいた適切な運営

本法人の組織の基本となる「学校法人群馬パース学園寄附行為」（以下、「寄附行為」という。）第 3 条及び本学の組織の基本となる学則第 1 条において教育基本法及び学校教育法に従うことを明確に定めている。なお、「学校法人群馬パース学園理事会の運営に関する規程」（以下、「理事会運営規程」という。）第 6 条に基づき年 4 回の定例理事会を、毎月 1 回の学園運営会議を開催している。また、本学においては、協議会規程に基づき毎月 1 回の大学協議会を、教授会規程に基づき毎月 1 回の教授会を開催している。

(イ) 使命・目的を実現するための継続的な努力

大学運営を円滑に行うため、将来計画の資金として第 2 号基本金の組入れ、常時かつ継続的に保持すべき運転資金として、第 4 号基本金の組入れを行っている。

(ウ) 環境や人権への配慮

地域社会や自然環境との共存を目指し東京電力初となるオール電化キャンパス（1 号館及び 4 号館）を建築、また、保健医療専門職を目指す学生を養成する教育機関として敷地内全面禁煙（県より禁煙認定施設として認定）とし、禁煙教育等を併せて実施することにより、環境保全のみならず学生の健康管理も促している。

「学校法人群馬パース学園個人情報保護に関する規程」、「学校法人群馬パース学園ハラスメント防止規程」、「学校法人群馬パース学園危機管理規程」、「学校法人群馬パース学園安全衛生管理規程」、「学校法人群馬パース学園ストレスチェック制度実施規程」を制定し、人権・安全への配慮に努めている。

(エ) 学内外に対する危機管理体制の整備とその機能

学生、教職員及び近隣住民等の安全等を図るため「学校法人群馬パース学園危機管理規程」を設け、危機事象への対処が必要と判断した場合には危機対策本部を設置することとしている。危機事象への対応については危機管理基本マニュアルに記載している。なお、危機管理の対象となる事象を以下に示す。

表 5-1-1 危機管理対象

大 区 分	小 区 分	具 体 例
(1)教育研究活動の遂行に 重大な支障のある事態	海外渡航等	海外研修、海外留学、海外出張
	教育、実験、実習業務	教育・実験・実習等の事故
(2)学生等の安全に関わる 重大な事態	地震	地震による人的・物的被害
	火災、爆発	火災・爆発による人的・物的被害
	台風、豪雨、落雷等	台風・豪雨・落雷等による人的・物的被害
	有害物質	毒・劇物・放射性物質等紛失・流出
	廃棄物	廃棄物による汚染
(3)施設管理上の重大な事 態	不審者侵入	不審者侵入による盗難・傷害
	施設の管理	施設に起因する事故
	危険有害業務	危険作業・有害作業での事故
	労働災害	労働災害
	コンピューターネッ トワーク	ネットワーク障害、ハッキング、 ウィルス感染
(4)社会的影響の大きな事 態	機密情報	機密情報漏洩
	個人情報	個人情報漏洩
	入試業務	入試ミス
(5)本学園に対する社会的 信頼を損なう事態	セクシュアルハラス メント	セクシュアルハラスメント
	その他のハラスメン ト	パワーハラスメント、アカデミッ クハラスメント、差別、いじめ
	知的財産権侵害	著作権侵害、特許侵害
	ねつ造、盗用	実験結果のねつ造、論文盗用
	横領	保管金等の横領
	不正使用	研究費等の不正使用
	不祥事、犯罪	学生・教職員の不祥事・犯罪
(6)前各号と同等以上の重 大な事態	一般疾病	学生・教職員の病気
	メンタルヘルス	学生・教職員精神的病気
	感染症	学生・教職員の感染症
	食中毒	学生・教職員の食中毒

上記、危機管理の対象となる事象で、学生等の安全にかかわる重大な事態のうち、発生する可能性が高い地震については、「地震発生からの行動マニュアル」を全講義室に掲示するとともに教職員へ配付・周知している。また、火災については毎年11月に避難訓練を実施している。その他、学生におよぶ可能性のある様々な危険等に対する事象について、毎年度、学生部が主体となりセミナーや講習会を以下の通り開催している（表5-1-2）。

表 5-1-2 セミナー・講習会一覧

内容	対象学年（全学科）			
	1年	2年	3年	4年
交通安全教室	○			
防犯教室	○			
健康教育・禁煙教育	○			○
薬物乱用防止教室			○	
情報モラル講習（サイバーセキュリティー）		○		
SNSに係わる防犯教室（男女別に開催）	○	○		

(3) 5-1の改善・向上方策（将来計画）

大学を取り巻く社会情勢や法令、社会的責任やニーズの変化に対し、各種規程の制定・改廃や積極的な情報公開等、今後とも柔軟に対応する。

環境への配慮として、学内のペーパーレス化をさらに強化する。具体的には、平成27（2015）年度後期より、講義資料を学生ヘデータで配信することを全教員に周知している。さらに、学内における各委員会等の資料においても、iPadを活用しペーパーレス化に努めている。

5-2 理事会の機能

5-2-① 使命・目的の達成に向けて意思決定ができる体制の整備とその機能性

(1) 5-2の自己判定

「基準項目5-2を満たしている。」

(2) 5-2の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 使命・目的の達成に向けて意思決定ができる体制の整備と機能

本法人の運営管理は私立学校法に基づき理事会、評議員会が行っている。理事会は業務の決定とその執行にあたり、評議員会は諮問機関として置かれている。理事長は本法人を代表して、法令及び寄附行為に規定する職務を行い、内部の業務を統括する。

学校法人（理事会・評議員会）と大学（大学協議会・教授会・研究科委員会）との意思疎通、連携、協議を円滑にすることによって「豊かな教養と人間愛を備えた質の高い保健医療専門職を育成し、保健・医療・福祉サービスとの協働及び知の創造を通じて、国際社会、地域社会に貢献する」という本学の目的の追求・実現に資するため、学校法人（理事会・評議員会）と大学（大学協議会・教授会・研究科委員会）の間に学園運営会議を設置

(理事会運営規程第 3 条 2 項・組織規程第 6 条・学校法人群馬パース学園運営会議規程(以下、「学園運営会議規程」という。)) し、機動的な意思決定がなされている。

(イ) 理事会の適切な運営（選任、事業計画の執行など）

寄附行為第 15 条により設置される理事会は、同寄附行為第 5 条に規定される役員（理事 6 人以上 8 人以内、監事 2 人又は 3 人）にて組織されており、理事の選任条項は以下のとおりである。

- (1) 学長（大学長） 1 人
- (2) 校長（専門学校長） 1 人
- (3) 評議員のうちから評議員会において選任した者 2 人
- (4) 学識経験者のうち理事会において選任した者 2 人以上 4 人以内

また、「学校法人群馬パース学園 理事職務分担等に関する内規」で示してあるとおり、本学専任理事の職務に関しては、財務担当・教学担当・広報担当・地域連携推進担当が理事長から委嘱される。理事長に事故があるとき、又は、理事長が欠けたときは、その職務を代理する順序は、財務担当・教学担当・広報担当・地域連携推進担当の順としている。職務分担においては適宜見直すことができる仕組みとし、円滑に業務が遂行できるように規定している。

理事会の開催については、理事会運営規程第 6 条に規定されたとおり、毎年度 5 月、9 月、12 月及び 3 月に定例理事会を開催する他、必要に応じて臨時理事会を開催している。5 月の定例理事会においては、前年度決算について、12 月は補正予算、3 月は次年度事業計画及び予算に関する事項が主な審議事項である。

(ウ) 理事の出席状況及び欠席時の委任状など

過去 2 年間の理事会における理事の出席状況は表 5-2-1 のとおりで、適切な運営がなされている。なお、委任状には、議案に対する賛否及び意見がある場合は、記して提出することとしている。

表 5-2-1 過去 2 年間の理事会における理事の出席状況

開催年月日等		出席者数	開催年月等		出席者数	
平成 30 年度	5/24	第 82 回	5	5/9	臨時	4
	9/20	第 83 回	6	5/30	第 86 回	6
	11/29	第 84 回	6	5/30	第 87 回	6
	3/28	第 85 回	6	9/12	第 88 回	6
				11/28	第 89 回	6
				3/17	第 90 回	6

(3) 5-2 の改善・向上方策（将来計画）

理事会は寄附行為等に定められているとおり適切に運用されているが、今後もこれを維

持することはもちろん、理事の職務分担における責任体制を明確にし、変化する大学を取り巻く環境に法人全体で対応する。

5-3 管理運営の円滑化と相互チェック

5-3-① 法人及び大学の各管理運営機関の意思決定の円滑化

5-3-② 法人及び大学の各管理運営機関の相互チェックの機能性

(1) 5-3 の自己判定

「基準項目 5-3 を満たしている。」

(2) 5-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-3-① 法人及び大学の各管理運営機関の意思決定の円滑化

(ア) 法人及び大学の各管理運営機関の意思疎通と適切な連携

理事会運営規程第 3 条第 2 項、組織規程第 6 条及び学園運営会議規程により、法人の組織（理事会・評議員会）と大学の組織（大学協議会・教授会・研究科委員会）の意思疎通を図り協議及び意思決定を行うとともに教職員の提案などをくみ上げることを目的とした学園運営会議を設置し、毎月 1 回開催している。学園運営会議の構成員は、理事長、学長、副学長、研究科長、学部長、学科長、教養教育責任者、専門学校長、事務局長、事務局各部長及び理事長が必要と認めた者としている。構成員のほか、監事は会議に出席し、意見を述べることにしている（学園運営会議規程第 3 条）。

また、学園運営会議の審議事項は、理事会・評議員会から執行を委任された事項、理事会・評議員会に提案する事項、法人業務の執行に関する重要な事項、教育及び研究に関する事項、教員人事に関する事項、大学協議会への諮問事項、大学協議会からの理事会・評議員会への建議事項などである（学園運営会議規程第 4 条）。

(イ) 理事長のリーダーシップと内部統制環境

理事長は学校法人を代表し、法令及び寄附行為に規定する職務を行い、法人内部の業務を統括している（寄附行為第 11 条）。学校法人の最高意思決定機関である理事会、その諮問機関である評議員会を通じて本法人の業務を決定し、執行にあたっている。大学組織に対しては、「寄附行為第 6 条 1 項(1)」により学長を第 1 号理事として選任していることなどからも理事長の運営方針など意思の疎通が図られている。また、学園運営会議を設置していることにより、学長をはじめとする教学の各責任者及び事務部門の責任者に対しても理事長の意向が伝えられ、その意思の疎通が図られており、理事長のリーダーシップと理事長の意思を反映する体制を整えている。

5-3-② 法人及び大学の各管理運営機関の相互チェックの機能性

(ア) 監事の適切な選任、管理運営機関の相互チェック体制と機能、監事の理事会及び評議員会への出席状況

本法人は 2 人又は 3 人の監事（寄附行為第 5 条）を置き、その選任は、寄附行為第 7 条にこの法人の理事、職員（学長（大学長）、校長（専門学校長）、教員その他の職員を含む）、評議員又は役員配偶者若しくは三親等以内の親族以外の者であって理事会において選任した候補者のうちから、評議員会の同意を得て、理事長が選任した者と規定している。た

だし、選任に当たっては、監事の独立性を確保し、かつ、利益相反を適切に防止することができる者を選任することとしている。これに則り、本法人は2人の監事のうち、1名は地方自治体の首長経験者、1名は金融機関の監査業務の経験者を選任している。

監事の職務については、寄附行為第14条及び監事監査規程に規定しており、本法人の業務若しくは財産及び理事の業務執行状況について適正かつ効率的な運営に資するため、監事は監査計画書及びそのスケジュールを作成し、教学・学生支援を含む業務監査、財務関係を含む会計監査を実施している。監査の結果について、監事は監査調書を作成し、学園運営会議で報告しており、法人及び教学組織の相互チェック体制を整えている。

また、監事は法人の運営に関する重要事項についての諮問機関である評議員会、方針を決定する理事会、決定された方針に基づいて業務を執行する理事長が適切に機能するよう理事会及び評議員会に出席し、法人業務並びに財務状況等に関する意見等発言している。

過去2年間の理事会及び評議員会における監事の出席状況は表5-3-1のとおりで、積極的な参加がなされ、有効に機能している。

更に、理事長のもとに内部監査室を設置し、(内部監査規程)内部監査機能の充実を図るとともに、監事が行う監査を支援するほか、公認会計士(監査法人を含む)が行う監査の実施に関し協力している。

表 5-3-1 過去 2 年間の理事会及び評議員会における監事の出席状況

開催年月日等		出席者数	開催年月等		出席者数		
平成 30 年度	5/24	第 82 回	2	令和 元 年度	5/9	臨 時	2
	9/20	第 83 回	2		5/30	第 86 回	2
	11/29	第 84 回	2		5/30	第 87 回	2
	3/28	第 85 回	2		9/12	第 88 回	2
					11/28	第 89 回	2
				3/17	第 90 回	2	

(イ) 評議員の選任と出席状況並びに評議員会の適切な運営

「寄附行為」第18条により、法人の運営に関する重要事項についての諮問機関である評議員会を設置、「学校法人群馬パース学園評議員会規程」第6条に規定のとおり、各年度5月、9月、12月及び3月に定例評議員会を開催し、適切に運営されている。

同寄附行為第22条に規定される評議員の選任条項は以下のとおりである。

1. この法人の職員で理事会において推薦された者のうちから、評議員会において選任した者 6人
2. この法人の設置する学校を卒業したもので年齢25歳以上のものうちから、理事会において選任した者 3人
3. 学識経験者のうちから、理事会において選任した者 8人

過去2年間の評議員会における評議員の出席状況は表5-3-2のとおりで、積極的な参加がなされ、有効に機能している。

表 5-3-2 過去 2 年間の評議員会における評議員の出席状況

		開催年月日等		出席者数	開催年月等		出席者数
平成 30 年度	5/24	第 82 回	17	令和 元 年度	5/30	第 86 回	17
	9/20	第 83 回	16		9/12	第 87 回	17
	11/29	第 84 回	17		11/28	第 88 回	17
	3/28	第 85 回	17		3/17	第 89 回	17

(ウ) 教職員の提案などをくみ上げる仕組み

評議員 17 人の中には、第 1 号評議員として教職員 6 人が含まれており、教職員等の意見を反映させる体制を築いている。

(3) 5-3 の改善・向上方策（将来計画）

学園運営会議の開催により、成し得ている法人の組織と大学の組織の連携・協働を今後も継続、発展させていく。

監事の監査報告は学園運営会議にて口頭で行われているが、今後、提出された報告書に基づき、改善の余地がある事項等は理事会に諮るよう努める。

5-4 財務基盤と収支

5-4-① 中長期的な計画に基づく適切な財務運営の確立

5-4-② 安定した財務基盤の確立と収支バランスの確保

(1) 5-4 の自己判定

「基準項目 5-4 を満たしている。」

(2) 5-4 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-4-① 中長期的な計画に基づく適切な財務運営の確立

財務運営については、各委員会等から提出された予算申請を集計、進行年度の予算・実績対比の確認と調整して中長期計画を基に予算案を編成し、理事会・評議員会の承認を受けている。また、実際の予算執行時には起案書を作成・回覧し、改めて使用内容等の詳細について確認・検討を行うこととしている。

5-4-② 安定した財務基盤の確立と収支バランスの確保

平成 22（2010）年 4 月、群馬県の中心部である高崎市問屋町に校舎新築及び移転以後、学生募集状況は順調であり、平成 25（2013）年度には検査技術学科（入学定員 60 名、収容定員 240 名）を設置、また平成 29（2017）年度には放射線学科（入学定員 70 名、収容定員 280 名）及び臨床工学科（入学定員 50 名、収容定員 200 名）を 2 学科同時に設置し、学生数は増加の一途を辿っている。大学の収容定員充足率についても各年度 100%超で安定的に推移しており、学生生徒等納付金を主たる収入源とする本学の財務体制は健全に保たれている（表 5-4-1）。また、教育活動収支差額比率及び経常収支差額比

率ともに日本私立学校振興・共済事業団発行の「令和元年度版 今日の私学財政」内で公表されている平成 30（2018）年度の財務比率平均値を大きく上回っている（表 5-4-2）。

表 5-4-1 収容定員に対する現員及び学生生徒等納付金収入の推移一覧

年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
収容定員	752 名	812 名	932 名	1,056 名	1,180 名
現員 ※5 月 1 日現在	806 名	898 名	1,071 名	1,213 名	1,346 名
収容定員 充足率	107.1%	110.5%	114.9%	114.8%	114.0%
学生生徒等 納付金 (単位：千円)	1,282,080	1,427,392	1,699,033	1,939,207	2,157,735
備 考			放射線学科 臨床工学科 設置	博士後期課程 設置	

表 5-4-2 事業活動収支計算書関係財務比率の比較一覧

比 率	計 算 式	「令和元年度版 今日の私学財政」より		
		系統別	規模別	ブロック別
		(単一学部) 保健系学部平均	1～2 千人平均	北関東平均
経常収支 差額比率	経常収支差額 ／ 経常収入	4.4% (前年度比 -0.3%)	-8.8% (前年度比 -1.0%)	-5.6% (前年度比 +0.5%)
教育活動収支 差額比率	教育活動収支差額 ／ 教育活動収入計	3.9% (前年度比 -0.4%)	-9.2% (前年度比 -0.9%)	-5.9% (前年度比 +0.5%)

比 率	計 算 式	群馬パース大学		
		平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
経常収支 差額比率	経常収支差額 ／ 経常収入	23.1%	24.0%	26.7%
教育活動収支 差額比率	教育活動収支差額 ／ 教育活動収入計	25.1%	25.5%	28.1%

各新学科設置に係る施設設備取得資金については、高崎市より校舎新築事業に対する補助金交付を受けている（表 5-4-3）。

また、寄付金額 10,000 円以上の寄付者につき葉をモチーフとしたメモリアルプレートを作成・校舎内に展示する等、寄付意欲に繋がるような工夫を図るとともに、平成 23(2011)年の税制改正時当初から税額控除法人としての証明を受け、日本私立学校振興・共済事業団の受配者指定寄付金制度と併せて、寄付者に対する税的優遇措置に関する情報提供を積極的に行っている。

表 5-4-3 高崎市からの校舎等新築事業に係る補助金交付一覧

年度	平成 21 年度	平成 25 年度	平成 28 年度
補助金 対象事業	校舎新築（1 号館）	校舎新築（2 号館） ※検査技術学科 体育棟（3 号館）	校舎新築（4 号館） ※放射線学科、臨床工学科
補助金額	24,000 千円	20,000 千円	20,000 千円

(3) 5-4 の改善・向上方策（将来計画）

学生生徒等納付金を主たる収入源とする本学の、安定した財務基盤を確立するためには、引き続き堅調な学生確保を維持することが必要である。社会情勢の変化や地域からの要請に柔軟に対応すべく、「中長期計画」も随時見直しを行いながら、新学部・新学科の設置等により大学の拡充を図っていく。

また、収入財源の多様化を図るべく、科学研究費補助金を始めとする外部競争的研究資金の獲得に向け、研究施設・設備の整備等支援強化の取り組みに着手している。

5-5 会計

5-5-① 会計処理の適正な実施

5-5-② 会計監査の体制整備と厳正な実施

(1) 5-5 の自己判定

「基準項目 5-5 を満たしている。」

(2) 5-5 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

5-5-① 会計処理の適正な実施

本法人の会計処理については、学校法人会計基準に準拠し、「学校法人群馬パース学園 経理規程」、「学校法人群馬パース学園 経理規程施行細則」に則した上、適宜、公認会計士の指導・助言を仰ぎながら実施している。

また、日本私立学校振興・共済事業団や群馬県、その他の外部団体が開催する実務研修等へ参加することにより、学校法人会計基準への理解を深め、スキルアップと会計処理の適正化を図っている。

前年度 3 月に承認された予算に対し、4 月から 10 月の半期決算に基づき補正予算を編

成し、11月の理事会で承認を得ている。

5-5-② 会計監査の体制整備と厳正な実施

本法人の会計監査については、(ア) 公認会計士による外部監査、及び(イ) 監事による学内監査、から成っている。

(ア) 公認会計士による外部監査

平成14(2002)年度から現在まで、加藤会計事務所による期中監査及び決算監査を受けている。なお、監査契約書に定められている監査従事者の監査見積時間数は以下のとおりである。

監査責任者	50時間	
公認会計士	80時間	
その他	80時間	※合計210時間

(イ) 監事による学内監査

「学校法人群馬パース学園 監事監査規程」に基づき作成された監査計画に沿った監査が行われている。

理事会及び評議員会への出席に加え、学校法人の管理運営を適正に行うため、理事会と教学間の意志疎通を図ることを目的として毎月1回開催される学園運営会議に監事も出席しており、学校法人の業務全般を状況把握した上で、期中・期末には決算等概要について、会計課及び公認会計士より概況聴取及び意見交換を実施している。

(3) 5-5の改善・向上方策(将来計画)

監事や公認会計士の監査は適正に実施されているが、学内における会計担当者の更なる知識の向上や技能の習得のため、学内SD研修等への積極的参加を促す。また、外部研修にも積極的に参加させ、学校法人会計への更なる理解を深める。

今後も公認会計士及び監事との連携を密にしながら、適正な会計処理の継続を図る。

【基準5の自己評価】

本法人では組織倫理に関する規程に基づいた適切な運営を行うため、各種会議を適切に開催している。また、大学運営を円滑に行うため、将来計画の資金として第2号基本金の組入れ、常時かつ継続的に保持すべき運転資金として、第4号基本金の組入れを行っている。

環境への配慮としてオール電化キャンパス及び敷地内全面禁煙を、人権への配慮は「学校法人群馬パース学園個人情報保護に関する規程」をはじめ諸規程を整備している。

危機管理については、学生等の安全にかかわる重大な事態を中心として、各種マニュアルの整備やセミナー・講習会を実施している。

理事会は理事・監事がほぼ毎回全員が出席し学園の重要事項の審議と決議を行っている。評議員会は評議員がほぼ毎回全員が出席し理事会に意見を述べている。なお、監事は理事会での監査だけでなく、学内監査も一年かけて順次行い、管理体制チェックを保障し

ている。また、令和2（2020）年4月1日の改正私立学校法施行に伴い、寄付行為が改正され、役員の職務及び責任の明確化が規定され、本法人においては、運営基盤の強化・教育の質の向上・運営の透明性の確保のための取り組みとして、役員の定数（理事は6人以上8人以内、監事は2人又は3人）を改めることとした。

予算は中長期計画等を基に編成され、理事会・評議員会の承認を受けている。

大学の収容定員充足率が各年度100%超で安定的に推移する中で学生生徒等納付金は十分に確保されており、経常収支差額比率をはじめとする各種の財務、比率も概ね良好で、財務基盤は安定している。また、科学研究費補助金を始めとする外部競争的研究資金への申請促進や、グループ内企業の株式取得を中心とした資産運用により、外部資金の獲得が図られている。

法人の会計処理は、「学校法人群馬パース学園 経理規程」「学校法人群馬パース学園 経理規程施行細則」に則して行い、公認会計士の指導・助言及び外部監査、監事による内部監査を経る形で誠実に適正に実施している。

以上のことから、基準5を満たしていると判断できる。

基準 6. 内部質保証

6-1 内部質保証の組織体制

6-1-① 内部質保証のための組織の整備、責任体制の確立

(1) 6-1 の自己判定

「基準項目 6-1 を満たしている。」

(2) 6-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

6-1-① 内部質保証のための組織の整備、責任体制の確立

本学では、自ら掲げる目標に向けて教育研究活動を行う中で、定期的な自己点検・評価の取り組みを踏まえた自主的・自律的な質保証への取り組みが基本であることを踏まえ、大学組織のみならず、法人全体として自律的な改革サイクルとしての質保証に関与する組織体制を整備している（図6-1-1 群馬パース大学・大学院 内部質保証組織図及び責任体制）。

大学全体の内部質保証に責任を負う組織として、大学協議会の下に、学生のエンロールメント・マネジメントの支援を主業務とする IR 推進室、本学の教職員が必要な知識及び技能を習得し、その能力及び資質を向上させるために必要な取り組みを行うことを目的とする SD 委員会、本学における教育・研究上の活動及び運営について、自ら点検評価するとともに、第三者評価に付すことを通じて、本学の教育・研究に係る適切な水準の維持及びその向上を図ることを目的とする自己点検評価委員会を置く。

大学協議会では上記組織の活動の詳細を報告・協議し、必要に応じ教授会及び研究科委員会に審議を要請している。審議された事項のうち、重点的な課題については最終的に外部監事が参画する学園運営会議で承認される。

群馬パース大学／群馬パース大学大学院 内部質保証組織図及び責任体制

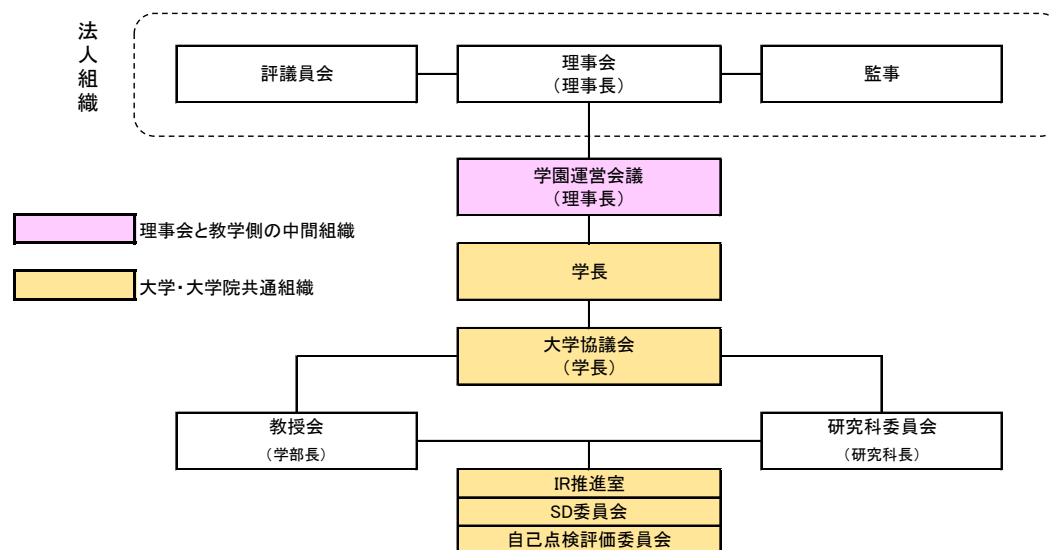


図6-1-1 群馬パース大学・大学院 内部質保証組織図及び責任体制

(3) 6-1 の改善・向上方策（将来計画）

内部質保証のための組織は整備され、その責任体制も確立されつつあるが、組織体制やその仕組みを外部に向けてさらに理解しやすく公表するよう努める。また、学内でもその認識を高めるために、示された方針にもとづき、6基準に加え中長期計画の視点からもPDCAを実施する「可視化による意識化」に取り組んでいく。

ホームページやソーシャルメディアを利用し、本学の内部質保証への取り組みを分かりやすく、さらに、外部の意見も取り入れることができる仕組みを今後確立させていく予定である。

6-2 内部質保証のための自己点検・評価

6-2-① 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価の実施とその結果の共有

6-2-② IR(Institutional Research)などを活用した十分な調査・データの収集と分析

(1) 6-2 の自己判定

「基準項目 6-2 を満たしている。」

(2) 6-2 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

6-2-① 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検・評価の実施とその結果の共有

(ア) 内部質保証のための自主的・自律的な自己点検評価の実施とその体制

1) 自己点検評価の実施体制

自己点検評価を恒常的に実施するため、自己点検評価委員会では、自己点検評価・認証評価に関する報告書の作成及び公表と自己評価・認証評価の実施に係る作業を行う。委員会は、教授会において選出された教員、企画部長、企画課長、事務職員で構成されている。

2) 自己点検・評価項目

自己点検評価活動とその結果を确实・最大限本学の教育研究水準の改善・向上に還元するため、以下のとおり自己点検・評価項目を設定し、それらが常に最適・最善のものであるよう見直す体制としている。

評価項目は、認証評価受審と有効に連動させるため、認証評価機関の評価項目を用い、これに本学の使命・目的の追求達成に必要な項目を独自に設定する（表 6-2-1）。

表 6-2-1 自己点検・評価項目

① 使命・目的等	② 学生	③ 教育課程
④ 教員・職員	⑤ 経営・管理と財務	⑥ 内部質保証
⑦ 地域への貢献	⑧ 国際交流の推進	

3) 評価結果の共有と社会への公表

自己点検評価書は本学 HP に掲載して公表するとともに、学内では、グループウェア・システムを通じて全教職員に配布し、全員が内容を共有している。

また、評価の結果、良好順調と判断された点を成熟・伸長させ、不十分・課題ありと判断された点を改善するための取り組みを、自己点検評価委員会の取りまとめのもと、各項を所掌する委員会・部門で検討し、教授会、大学協議会の審議、学長の承認を経て、実行に移す。

(イ) エビデンスに基づく、自己点検評価の定期的な実施

自己点検評価の結果を自己点検委員会がエビデンスに基づいて集約し、毎年度自己点検評価書をまとめる形で進め、毎年7月にその内容を大学HPで公表する形で、評価の継続性と公開性を保っている。

平成23（2011）年度に受審した初回の機関別認証評価の3年後の平成26（2014）年度に中間評価として自己点検評価書をまとめ、その後平成30（2018）年に2度目の審査を受け、平成31（2019）年3月に日本高等教育評価機構が定める大学評価基準に「適合している」と認定された。

6-2-② IR(Institutional Research)などを活用した十分な調査・データの収集と分析

現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行う体制として、平成26（2014）年より IR 推進室を整備している。

IR 推進室では、年度ごとの全体的な指標データとして、各学科の入試区分別合格者数及び入学者数と入学率、各学科の収容定員数及び充足率と学年別在籍者数、各学科の学年別の留年者数と休学者数及び退学者数、各学科の卒業生数及び4年間での卒業率、各学科の国家試験合格者数及び合格率、各学科の就職率を収集している。

また、学生個々の年次データとしては、性別、入学時年齢、出身地域、入試区分、入試成績、各セメスターの素点平均及び GPA、留年と休学及び退学などの学籍異動、課外活動、奨学金受給、賞罰、国家試験合否、就職先と種別について収集している。

IR 推進室では、データ収集活動が主であるため、IR 推進室会議は年に数回の開催となっているが、集積されたデータ情報を学長のみならず学科や委員会などから要請があれば開示可能とし、要望に沿った解析も行えることを周知している。実際に、毎年の入試制度の策定においては、過去の入学生の入試区分と入学後の成績や学籍異動の状況を詳細に検討し、現行入試で適正に選抜を行っていることを検証するなどの活動を行っている。

(3) 6-2 の改善・向上方策（将来計画）

自己点検評価委員会が収集したデータと IR 推進室が集積したデータを集約・検証することで、学生が感じている問題の背景を分析できる仕組みを構築する。

IR 推進室では、学長がエンrollment・マネジメントにおける懸案事項等を直接指示し、各種データ解析を実施しているが、今後は各委員会等が問題解決のために積極的に IR 推進室を活用できるよう周知する。

6-3 内部質保証の機能性

6-3-① 内部質保証のための学部、学科、研究科等と大学全体の PDCA サイクルの仕組みの確立とその機能性

(1) 6-3 の自己判定

「基準項目 6-3 を満たしている。」

(2) 6-3 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学では前述のとおり、学部教育においては保健科学部ディプロマ・ポリシーと、その達成のための学部全体及び学科ごとのカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを一体的に定めている。そして、あらゆる教育活動はこれをより高度な水準で達成することを目指して組織的、かつ継続的に改善が図られている。

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーは本学 HP 及び学生便覧への掲載により教職員に共有され、教員個人及び学部、学科の教育活動の評価に活用されている。各教員による授業改善は FD 委員会が実施する FD 諸活動（詳細は基準 4 に記載）により、組織的に支援されている。また、各学科はそれぞれ多様な内部組織を機能させ、教育課程、教育方法の持続的な点検・評価と改善を行っている。さらに、学部全体としては教務委員会の主導によりディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえて教育課程、成績評価、学籍、その他の教育活動をモニタリングし、学部に通ずる課題について決定し、具体策を遂行している。特に、平成 29（2017）年度の放射線学科、臨床工学科新設を契機に、学部全体の教育課程の大幅な見直しを行い、本学が擁する医学系の各学問分野に通ずる能力についてディプロマ・ポリシーを起点として組織的に検討した。この結果、必要な教育内容を充実させるべく既存の学科においても教育課程の再編を行っている。

大学院教育においては、保健科学研究科博士前期課程、後期課程それぞれにディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを一体的に定め、それらは本学 HP 及び学生便覧への掲載により教職員に共有され、教員個人及び研究科の教育活動の評価に活用されている。

平成 23（2011）年度に受審した日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において、改善を要する点、又は参考意見として付された事項は、教授会において項目ごとに担当部署を割り当てて取り組みの進捗を監視し、全ての項目について概ね改善が確認された。

令和元（2019）年度より毎年作成している自己点検評価書は学内グループウェア・システムに登録され、全教職員の閲覧に随時供されている。記載された改善・向上方策は、担当する委員会等の活動計画に適宜盛り込み、持続的に改善を図っている。また、これに基づく PDCA サイクルの展開を大学運営全体の取り組みとして位置づけ、機能させるため、中長期計画に自己点検評価に関する目標を大項目として明記している。

本学保健科学部は、平成 29（2017）年度に放射線学科、臨床工学科を新設したことに伴い、令和 2（2020）年現在、設置計画履行状況等調査の対象となっている。平成 29（2017）年度に実施された 1 年目調査では、保健科学部臨床工学科入学定員超過に対する改善意見が付され、平成 30（2018）年度入学者選抜において履行済みである。

(3) 6-3 の改善・向上方策（将来計画）

本学は、平成 29（2017）年度に保健科学部放射線学科、臨床工学科、平成 30（2018）年度に大学院保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程を開設し、組織の大幅な再編を行ったところである。今後、新たな組織体制が円滑に機能し、PDCA サイクルが個人レベル、組織レベルともに適正に展開されるよう、教職員全体による現状と課題の共有及び、更なる向上を目的とした組織的取り組みを強化していく。そのために、6 基準に加え中長期計画の視点からも PDCA を実施できるロードマップとそれに基づくフォーマットを作成することや、その内容をホームページに掲載することで「可視化による意識化」に取り組み、自己点検評価が持続的に進む環境を整えていく。

【基準 6 の自己評価】

内部質保証のための自己点検・評価の体制は、責任が明確にされて整備されている。学内の様々なエビデンス（データ）に基づく自主的・自律的な自己点検・評価を定期的を実施しており、それらの結果を学内グループウェア・システムで共有し、本学 HP で広く社会に公表している。現状把握のための十分な調査・データの収集と分析を行う組織としては IR 推進室を整備している。

また、内部質保証は三つのポリシーを起点として行われ、自己点検・評価、認証評価及び設置計画履行状況等調査などの結果を大学運営の改善・向上に活用している。

以上のことから、基準 6 を満たしていると判断できる。

IV. 大学が独自に設定した基準による自己評価

基準 A. 地域への貢献

A-1 地域への貢献

A-1-① 高崎市への地域貢献にむけた取り組み

A-1-② 渋川市への地域貢献にむけた取り組み

(1) A-1 の自己判定

「基準項目 A-1 を満たしている。」

(2) A-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

本学は、学則 1 条（目的）で「地域社会に貢献する」ことを目的としている。その目的達成に向け、「群馬パース大学地域連携センター規程」に基づき、地域連携センターを設置している。同センターでは、本学の所在地である高崎市と、本法人が運営する群馬パース大学福祉専門学校が所在する渋川市への地域連携活動を行っている。

A-1-① 高崎市への地域貢献にむけた取り組み

高崎市は本学がキャンパスを置く地域であり、地域の各種団体や行政との接点を持ち以下の地域貢献活動を行っている。

(ア) 高崎卸商社共同組合との連携による「まちづくり委員会」を通じた地域貢献

本学が所在する高崎市問屋町は、昭和 42（1967）年に全国に先駆けて完成した卸商業団地を主とする地域である。時代の推移によって生ずる産業構造の変化により卸商業団地が従来の姿から変化する中で、平成 22（2010）年に本学が高崎市問屋町に移転設置された。本学は設置当初より地域の活性化のために貢献する立場から、高崎卸商社街協同組合に業界側委員として参加し、活動を進めている。

現在の活動は、同組合の組織である「まちづくり委員会」の活動（詳細は「団地再整備事業報告書」）が主である。そこで検討されているのは、駅前開発、共同駐車場整備、セントラルパーク整備、本学が接する道路を含むシンボルロード景観形成に加えて大学との連携である。本学との連携にあたっては、本学学生からアンケートをとったところ、「多くの学生や若者が行き交う賑わいのあるまち」「居住環境が整った、住みやすいまち」という意見が多く寄せられた。それらの意見や地域住民・企業の意見を背景に、「ビジネスと暮らし・学びが融合したまち～ダイバーシティ高崎問屋街」という、産・学・住の複合により若者の活気に満ちた新しい高崎問屋街の形成を目指す基本方針を持つに至っている。

この高崎問屋街の産・学・住の複合の具体化案としては、大学の現場実習と組合員の健康診断が同時に実現できる「無料健康診断・献血応援プロジェクト」、大学の課外活動と組合の活動が同時に実現できる「課外活動支援プロジェクト」が挙げられているところである。この課外活動支援プロジェクトの実行として、平成 30（2018）年には、学園祭である「流星祭」と群馬県の名産品を一同に集めるイベントである「上州どっと楽市」を同日に連携させて開催した。

(イ) 高崎市との連携による防災活動による地域貢献

高崎市との防災協定の締結により、本学は地域住民及び労働者の一次非難の区域・施設となっている。緊急時には避難場所を提供するだけでなく、備蓄してある食糧も地域住民・労働者に提供する。

(ウ) 高崎市の各種事業を通じての地域貢献

本学理学療法学科の専門性を活かし、平成 29 (2017) 年度より高崎市介護予防事業として高崎市の「高齢者あんしんセンター希望館」で地域貢献活動を行っている。春夏期には浜尻地区に、秋冬期には塚沢地区にて開催される「希望館運動教室」へ理学療法士である教員がそれぞれ月 1 回程度出向き、運動方法指導、腰痛予防体操、骨盤底筋群トレーニング、ボール体操、自主運動マネジメント、ウォーキング、バランストレーニング等の指導を行っている。

また、平成 29 (2017) 年度より、高崎市が支援する高齢者の自主グループである「高崎市いきいきサロン」へ理学療法士である教員が出向き、腰痛予防体操、骨盤底筋群トレーニング、ストレッチ等の指導を行っている。令和元 (2019) 年度には、継続した支援を 5 回行った。

(エ) 大学の企画したイベントを通じて発信する高崎市への地域貢献

平成 30 (2018) 年に「音とダンスの祭典 2018」を大学が主催して、高崎卸商社街協同組合のイベント施設である「ビエント高崎」で開催した。大学の学生サークルの一つである舞踏研究会の研究成果を市民に公開することに加え、「日本介護予防ダンス協会」との連携により介護予防ダンスも知ることができ、大学も呼応してダンスと介護予防の関連性について講話も行った。このイベントは大学と地域の交流、楽しくできる介護予防の啓発という点で地域貢献に資するものとなった。このイベントには地域の方々が 300 人集まり地元紙でも報道された。

(オ) 企業・団体を対象としたオープンレクチャー（出前講義）実施による地域貢献

保健医療専門職や医療について関心を持ってもらえるよう、高等学校向けに案内・実施しているオープンレクチャーを、平成 30 (2018) 年度、企業・団体を対象に、(ア) に記載されている「まちづくり委員会」へ提案した結果、開催依頼が 1 件あり理学療法士である教員が出向いて、肩こり解消についての講座を行った。

また、令和元 (2019) 年度には、高崎卸商社街共同組合より年 10 回の講座依頼があり、4 回の健康にかかわる講座を実施した。浜尻小学校のキャリア教育の一環で看護学科の教員が出向き看護師の仕事について小学生に伝える活動を行っている。

A-1-② 渋川市への地域貢献にむけた取り組み

渋川市は、群馬パース大学福祉専門学校（以下、「専門学校」という。）の所在地でもあり、行政や地域の諸団体と接点を持ち、以下の地域貢献活動を行っている。

(ア) 渋川市との業務協定に基づく地域貢献

専門学校が「渋川市渋川総合病院」の移転にあたって生ずる跡地に移転するにあたり、「渋川市渋川総合病院跡地利用事業協定書」を平成 28 (2016) 年に締結している。この協定の第 15 条には、本法人は、地域活性化のために法人の人材・情報・資源を活用し、市民や地域と連携や協働により実効性の高い地域貢献・地域連携方策を講ずることが明示されており、次の (イ) (ウ) に示す地域貢献に取り組んでいる。

(イ) 渋川市赤城地域いきいきサロンへの地域貢献

平成 29 (2018) 年よりそれぞれ 3 回、渋川市の赤城地域にある「宮田地区いきいきサロン」及び、「勝保沢地区いきいきサロン」の 2 箇所、本学及び専門学校教員にて訪問し、指導を行っている。宮田地区では体組成測定に加えて健康維持のためのロコモティブシンドローム、心理的健康、食生活の講話を行っている。勝保沢地区では体組成測定に加えて健康維持のためのストレッチ、ウォーキング、骨盤底筋群の講話を行っている。また、赤城地区全体に対して、健康運動推進員主催の健康教室に介護予防に関する講演を行っている。令和元 (2019) 年度には、渋川市の社協および地域包括支援センターの関連組織に対して理学療法学科の教員が出向き 3 回の健康増進に関する講演を行った。

(ウ) 地域連携センター企画の公開講座を通じての地域貢献

平成 30 (2018) 年に「子育て支援に関する公開講座」を地域連携センターが主催し、保育学科のある専門学校（渋川市）で開催した。「障がいを持つ子ども達の子育てを考える」をテーマに、理学療法士の教員及び外部講師 2 名を招いて講演を行い、35 名の保育・福祉関係者、保護者が参加した。令和元 (2019) 年度には、「発達障害に対する療育」に関する公開講座を行い、理学療法士の教員及び外部講師 2 名を招いて講演を行い、50 名の保育・福祉関係者、保護者が参加した。

(3) A-1 の改善・向上方策（将来計画）

「地域社会に貢献する」ことを目的とする本学では、今後も更なる地域貢献活動を推進する。現在、本法人が設置する大学及び専門学校の所在地である高崎市と渋川市を主な対象地域としているが、今後、隣接する市町村にも拡大する。

また、本法人全体で取り組む地域貢献については、本大学の地域連携センターと専門学校の教職員が行う地域貢献活動を一体管理する組織である「学校法人群馬パース学園地域連携推進委員会」と協働で実施する。

【基準 A の自己評価】

産・学・住共同の取り組みとして、学園祭である「流星祭」と高崎卸商社街協同組合が実施する「上州どっと楽市」を令和元 (2019) 年度も同日開催した。また、「上州どっと楽市」の実行委員会に本学学生が委員として参画し、「上州どっと楽市」にも学生から提案された企画を実施した。

専門学校が所在する渋川市とは協定に基づく具体的な健康増進のための地域貢献活動が進められている。本学における地域貢献活動は、組織的にも実践的にも、緒に就いた段階であるが、地域連携を実行する体制の強化と具体的活動を着実に進めている。

以上のことから、基準Aを満たしていると判断できる。

基準 B. 国際交流の推進

B-1 国際交流の推進

B-1-① 国際交流にむけた取り組み

(1) B-1 の自己判定

「基準項目 B-1 を満たしている。」

(2) B-1 の自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

(ア) 概要

「群馬パース大学国際交流センター規程」に基づき、本学に国際交流センターを置いている。国際交流センターは、海外の高等教育機関・医療機関等との学術・文化の交流及び国内での国際交流を通じて教育研究の充実・発展を図り、国際的視野を持ったリーダーシップのとれる保健医療専門職の育成を目的とする。

「群馬パース大学海外研修補助規程」第 2 条に基づき、本学が許可した研修に限り海外研修費用の一部を補助する。補助については、本学学生一人当たり在学中一回限りとし、本学が許可したプログラム費用の 4 分の 3、但し上限 20 万円までとしている。

本学の目的には「国際社会に貢献する」という文言が含まれていることから、本学では国際交流を積極的に推進している。具体的な国際交流について以下に示す。

1) 海外の大学との協定

①ハワイ大学（アメリカ ハワイ）との協定

協定名「STUDENT CONFERENCE ON HEALTH PROFESSIONS IN USA Gummapaz College John A.Burns School of Medicine(JABSOM)」

②リンカーン大学(マレーシア クアラルンプール)との協定

協定名「AGREEMENT FOR ACADEMIC EXCHANGES AND COOPERATION BETWEEN Lincoln University college,Malaysia AND Gunma Paz University,Japan」

(イ) 協定を締結している大学への訪問

1) ハワイ大学

ハワイ大学との協定に基づき、希望者を募りアメリカ ハワイ研修を例年実施している。しかしながら、令和元（2019）年度のハワイ研修は、募集の段階で最少催行人数に達しなかったため催行を中止した

予定していたアメリカ・ハワイ研修の行程（全学科の学生対象）

3/08 出国及びホノルル着

3/09 Global Nursing Education & Consultation による研修 レクチャー

・グローバル スタンダードケア アメリカの看護師～クリティカルシンキング～

・アメリカの看護師～コメディカルとの連携医療～

ホノルル市内の総合病院 見学

3/10 Global Nursing Education & Consultation による研修

シミュレーション実習 (University of Hawaii Manoa)

3/11 自由行動

3/12・13 ホノルル発及び帰国

2) リンカーン大学

リンカーン大学との協定に基づき、理学療法学科の希望者(2~3学年)を対象にマレーシア クアラルンプール研修を例年実施している。令和元(2019)年度は、2学年の15名、3学年2名と同伴の教員3名の計20名で、リンカーン大学を訪問する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、研修を取りやめた。

予定していたマレーシア・クアラルンプール研修の行程(理学療法学科2・3学年対象)

3/09 出国及びマレーシア入国

3/10 自由行動

3/11 リンカーン大学の教育プログラム受講

3/12 リンカーン大学施設見学

リンカーン大学の学生と交流会

国立博物館、独立広場、王宮など見学後、クアラルンプール国際空港へ

3/13 帰国

※現地の総合病院(Sunway Medical Centre)の見学をスケジュールに組んでいたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、研修直前に見学受入れ不可の連絡があり、スケジュールから除く。

(ウ) その他、本学が許可した海外研修プログラム

上記の協定を締結している海外研修以外に本学が許可した海外研修プログラムは以下のとおりである(令和元(2019)年度実績)。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. アメリカ ロサンゼルス研修 | 3月09日(月)~3月14日(土) |
| 2. スウェーデン スtockホルム研修 | 3月09日(月)~3月14日(土) |
| 3. オーストラリア キーンズランド研修 | 3月16日(月)~3月21日(土) |

上記の1. アメリカロサンゼルス研修及び2. スウェーデン スtockホルム研修については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、催行を取りやめた。オーストラリア キーンズランド研修とアメリカ ニューヨーク研修は、募集の段階で希望者が最小催行人数に達しなかったため、催行中止とした。

例年実施しているアメリカ ロサンゼルス研修は、20名の学生(看護学科2学年13名、検査技術学科1学年2名、放射線学科2学年5名)と、同伴の教員2名の参加を予定していた。

主な研修内容は、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校の訪問(看護学科長を含めた学

部関係者と看護学生との交流、学部内のシミュレーションセンターの見学)の他、ロサンゼルス市内にあるトランス・メモリアル・メディカルセンター訪問(院内見学:急性期病棟、リハビリ、ラボラトリー)、高齢者ケア施設サン・ライズ訪問(施設内見学、リハビリ見学、入居者との交流)、マクドナルド・チルドレンズハウス訪問(難病を持つ子供の支援施設)であった。

令和元(2019)年度より新たに催行される予定であった、スウェーデン スtockホルム研修には、14名の学生(看護学科1学年10名、検査技術学科2学年2名、放射線学科2学年2名)と同伴の教員1名が参加を予定していた。

主な研修内容は、カロリンスカ医科大学訪問(キャンパスツアー、学生交流)、ダンデリード大学病院訪問(院内見学:急性期病棟、リハビリ、ラボラトリー)、高齢者ケア施設ホームシュクローケンズ認知症ホーム訪問(施設内見学、入居者との交流)、市内見学(旧市街、ノーベル賞晩餐会会場の市庁舎、ノーベル博物館、王宮ほか)であった。

(エ) 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、研修に参加できなかった学生への対応

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和元(2019)年度の研修に参加できなかった学生51名については、次年度の研修に優先して申込みができるよう配慮することとした。また、マレーシア研修に参加予定であった3年生の2名については、2~3年生を対象とした研修ではあるが、特例として4年生でも申し込みをすれば参加できることとした。

(オ) カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校とのMOU(基本合意書)締結について

本学と海外の大学との協定は2校のみであり、他大学と比較して決して多くはない協定数である。そのため、平成30(2018)年度より訪問しているカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校とのMOU(基本合意書)締結に向けて、令和元(2019)年度のロサンゼルス研修には、本学から国際交流センター長と看護学科長が同行する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため訪問は取りやめとなり、次年度に再度MOU(基本合意書)締結に向け準備をすることとした。

(カ) 国際交流センター主催学内特別講演

学内においても保健医療分野の国際的な繋がりを意識させるため、平成28(2016)年度より国際交流センター主催の特別講演を毎年開催し、以下の特別講演は4回目の開催となる。

令和元(2019)年度に実施した本田一馬氏(オーストラリアのシドニーで急性期訪問看護に従事)による講演の詳細について以下に示す。

日 時 : 2019年5月15日(水) V限 (16:20~17:50)

場 所 : 1号館8階 PAZ ホール

講 師 : 本田一馬 氏

(Hospital In The Home/Central Coast Local Health District/Australia)

演 題 : オーストラリアの看護事情について

受講者 : 学生19名(看護学科2学年9名、3学年4名、4学年6名)、教員22名

講演終了後、学生に実施したアンケート結果（回答者 8 名）は、「非常に良かった」8 票、海外での活動に対する関心について非常に関心が高まったが 4 票、まあまあ関心が高まったが 4 票、今後の国際交流に係わる講演の参加希望については、強く希望するが 7 票、やや希望するが 1 票であった。

(3) B-1 の改善・向上方策（将来計画）

「国際社会・地域社会に貢献する」ことを目的とする本学では、今後も更なる国際交流活動を推進する。

国際交流センターは、平成 28（2016）年度に設立された新しい学内組織であり、センター長の強いリーダーシップのもと本学の国際交流活動を推進している。

本学と海外の大学との協定については、現状では学術交流や学生間交流等の協定を締結している海外の大学が 2 大学と多くない状況である。そのため本学の各学科に合わせた大学間協定を今後締結し、学生の有益となる海外研修プログラムを作成していかなければならない。平成 30（2018）年度の春季に実施したアメリカロサンゼルス研修は、コーディネーターを介してカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校と本学との大学間協定も視野に入れた訪問も兼ねていた。令和元（2019）年度の同研修には国際交流センター長と看護学科長が赴き、同校と MOU（基本合意書）の締結を前提とした事前打ち合わせをする予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、訪問が取りやめとなった。次年度以降、引き続き、大学間協定を締結できるよう注力する。

また、協定校であるリンカーン大学との単位互換制度に係わる協定の改定のため、国際交流センター長と理学療法学科長が連携しリンカーン大学と調整を継続する。

最後に、本学の学生が協定大学に赴く研修だけではなく、海外からの学生を受け入れる体制も今後構築していく必要がある。単位互換や教員間の研究に係わる交流も推進していく。

【基準 B の自己評価】

海外研修においては、大学間協定を締結している海外の大学を中心とした研修プログラムを毎年実施しているが、令和元（2019）年度については、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学生の安全を第一に考え全ての研修プログラムの催行を取りやめた。そのため研修に参加できなかった学生については、次年度の研修に優先して申込みができることとし、国際的モチベーションの持続ができるよう配慮した。

大学間協定については、リンカーン大学と本学との単位互換制度に係わる協定の改定や、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校との MOU(基本合意書)の新規締結に向け引き続き注力する。

学内で行われる国際交流センター主催の令和元（2019）年度の特別講演は、オーストラリアで看護師として働く本田一馬氏を演者としてお招きし、オーストラリアでの実体験や医療に対する考え方の違い等を学ぶことができ、学生の海外の知見を広める良い機会となった。

以上のことから、基準Bを満たしていると判断できる。

V. エビデンス集一覧

エビデンス集（データ編）一覧

コード	タイトル	備考
【共通基礎】	認証評価共通基礎データ	
【表 F-1】	理事長名、学長名等	
【表 F-2】	附属校及び併設校、附属機関の概要	
【表 F-3】	外部評価の実施概要	
【表 2-1】	学部、学科別在籍者数（過去 5 年間）	
【表 2-2】	研究科、専攻別在籍者数（過去 3 年間）	
【表 2-3】	学部、学科別退学者及び留年者数の推移（過去 3 年間）	
【表 2-4】	就職相談室等の状況	
【表 2-5】	就職の状況（過去 3 年間）	
【表 2-6】	卒業後の進路先の状況（前年度実績）	
【表 2-7】	大学独自の奨学金給付・貸与状況（授業料免除制度）（前年度実績）	
【表 2-8】	学生の課外活動への支援状況（前年度実績）	
【表 2-9】	学生相談室、医務室等の状況	
【表 2-10】	附属施設の概要（図書館除く）	該当なし
【表 2-11】	図書館の開館状況	
【表 2-12】	情報センター等の状況	該当なし
【表 3-1】	授業科目の概要	
【表 3-2】	成績評価基準	
【表 3-3】	修得単位状況（前年度実績）	
【表 3-4】	年間履修登録単位数の上限と進級、卒業（修了）要件（単位数）	
【表 4-1】	学部、学科の開設授業科目における専兼比率	
【表 4-2】	職員数と職員構成（正職員・嘱託・パート・派遣別、男女別、年齢別）	
【表 5-1】	財務情報の公表（前年度実績）	
【表 5-2】	事業活動収支計算書関係比率（法人全体のもの）	
【表 5-3】	事業活動収支計算書関係比率（大学単独）	
【表 5-4】	貸借対照表関係比率（法人全体のもの）	
【表 5-5】	要積立額に対する金融資産の状況（法人全体のもの）（過去 5 年間）	

※該当しない項目がある場合は、備考欄に「該当なし」と記載。

第 2 部
教育研究年報
(2019 年度)

教育研究年報の背景

本学においては 2005 年度より、医療系高等教育機関としての質の向上を図る活動の一環として、本学の教育活動と研究活動の実績を社会に公表し、社会的責任を果たすことを目的に「群馬パース大学年報」を年 1 回発行してきた。

この年報については、発行以来何度か見直しを行い、(1) 各領域の教育活動の総括、(2) 教育活動の諸記録、(3) 研究活動の諸記録、(4) FD 活動の記録、(5) 学生サービスの記録、の内容を掲載してきた。

2018 年度からは上記 (1) (4) (5) の内容を自己点検評価書に組み入れ、(2) (3) の内容を「群馬パース大学教育研究年報」として、「教育活動の記録」及び「研究活動の記録」の 2 部で構成し、自己点検評価書とともに毎年度作成・公表している。

I. 教育活動の記録

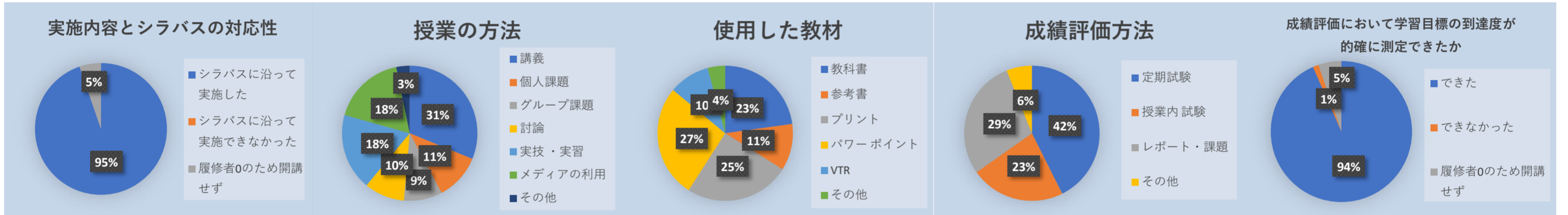
教育活動の記録は、各専任教員が担当した科目において実施内容とシラバスとの対応性、授業の方法、使用した教材、成績評価における学習目標の到達度の測定などを教育実績として収集したデータである。

個人、また各学科で毎年教育実績を振り返ることで改善の促進をはかり、PDCA サイクルを機能させることで、大学に求められる役割の一つである「学生の教育の充実」に対する継続的な教育活動の質の向上に繋げ、教育面での自己点検の一環として、一つの指標となっている。

本年度、各専任教員が担当した学部、大学院の各科目の実施内容とシラバスの対応性においては、全体で 98%の科目でシラバス通りに講義が進められており、成績評価における学習目標の到達度の測定においては全体で 99%の科目において的確に測定できているという結果となった。シラバスに沿って実施できなかった、または学習目標が的確に測定できなかった科目については、個々に原因を究明することで課題を明確にし、次年度への改善向上に役立てることとした。

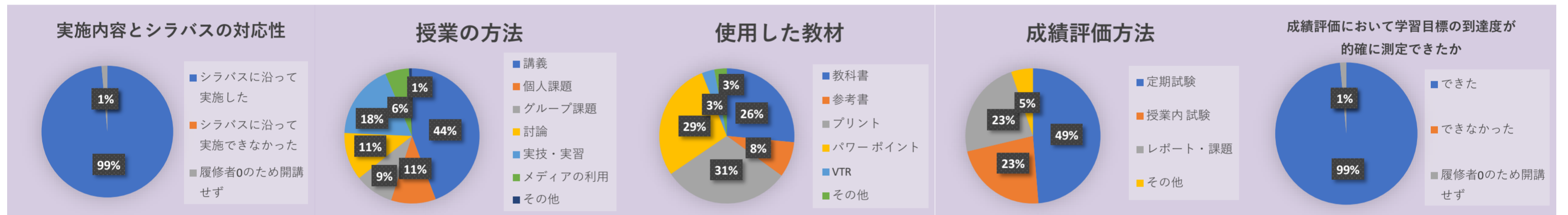
理学療法学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
神経系理学療法評価・治療学演習Ⅰ	2	後期	必修	1	鈴木 学	シラバスに沿って実施した		○					○			○				○	○					○	○			できた		
神経系理学療法評価・治療学演習Ⅱ	3	前期	必修	1	鈴木 学	シラバスに沿って実施した		○					○							○						○				できた		
神経・循環・代謝系理学療法評価・治療学演習	3	後期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○		○			○	○	SMBG演習	○		○			○					○				できた		
小児理学療法学	3	後期	必修	1	中 徹	シラバスに沿って実施した		○					○			○					○					○				できた		
理学療法特殊講義	3	後期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○		○			○			○					○					○				できた		
物理療法学	2	後期	必修	2	黒川 望	シラバスに沿って実施した		○		○			○	○		○					○				○		○			できた		
物理療法学演習	3	前期	必修	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○				○		○			できた		
装具学	3	前期	必修	2	橋口 優	シラバスに沿って実施した		○					○			○					○	○	○			○	○	○		できた		
徒手系理学療法学	3	後期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○	○	○		○	○				○				○		○			できた		
スポーツ傷害理学療法	3	後期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した		○			○	○	○	○		○	○	○			○				○		○			できた		
日常生活活動学	2	前期	必修	2	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○	○							杖・車いす				○		○			できた		
日常生活活動学演習	2	後期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○					○	○							杖・車いす				○		○			できた		
地域理学療法学	3	前期	必修	2	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○							○	○				できた		
地域理学療法学演習	3	後期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○				○		○									○				できた	
生活環境学	3	前期	必修	2	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○		○				できた	
環境理学療法学	3	後期	必修	2	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○		○				できた	
見学実習	2	後期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○			○	○			学外実習														実習前OSCE-学外実習成績-実習後報告会	できた		
評価学実習	3	後期	必修	3	橋口 優	シラバスに沿って実施した					○	○																症例報告会	できた			
理学療法特論	4	後期	必修	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○		○	○								○		○			できた		
理学療法管理学	4	後期	選択	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○								○		○			できた		
卒業研究	4	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○									○			できた		
総合臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	7	鈴木 学	シラバスに沿って実施した															学外実習						○			できた		
総合臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	7	鈴木 学	シラバスに沿って実施した															学外実習						○			できた		



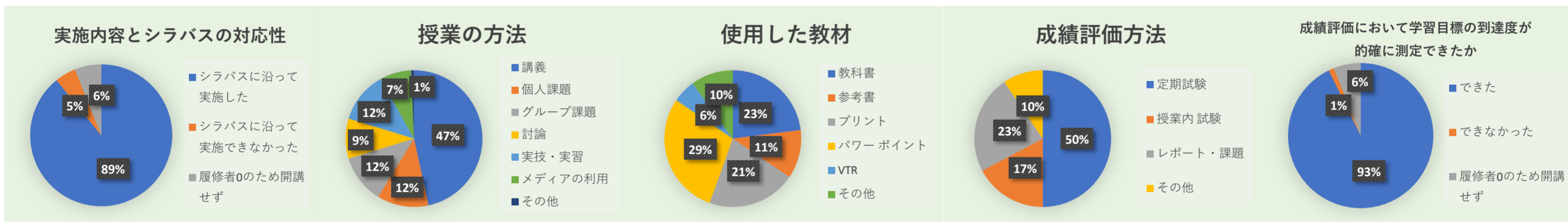
検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか				
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考		
画像解析検査学	3	前期	必修	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○								○						○					できた	
画像解析検査学実習	3	前期	必修	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○		○							○	○			できた	
関係法規	3	前期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○					できた	
情報科学概論	3	後期	必修	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○				○		○			できた	
臨床検査学総合演習 I	3	後期	必修	3	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した		○									○	○				○			模擬試験	できた		
免疫検査技術学実習	3	前期	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○	○				○		○		できた		
輸血検査学	3	後期	必修	1	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○					○			○		○				○				できた		
微生物検査学実習	3	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○					○			○		○		○				○		できた		
臨床化学検査学実習	3	後期	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○					○			○		○				○	○	○		できた		
健康食品学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○	○			できた		
食品衛生学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○	○			できた		
遺伝子工学	3	前期	選択	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○		○				○	○			できた		
RI検査学	3	後期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○				○	○			できた		
血液検査学実習	3	前期	必修	2	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した										○	○	○				○		○		できた		
病理細胞検査学実習	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した			○							○		○				○		○		できた		
英文講読Ⅱ	4	後期	選択	1	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○							授業での発表	できた		
臨床検査学総合演習Ⅱ	4	後期	必修	4	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○	○			できた		
臨地実習	4	前期	必修	7	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した											○					○			実習施設からの配布物	実習施設評価表	できた	
卒業研究	4	通年	必修	8	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した				○							○	○								発表・論文	できた	



臨床工学科 教育活動の記録 (専任教員)

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか										
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考							
医用超音波工学	2	前期	必修	1	阿部 薫	シラバスに沿って実施した		○									○										○			できた			
放射線工学概論	2	後期	必修	1	齋藤 祐樹	シラバスに沿って実施した		○									○											○			できた		
医用レーザ工学	3	前期	選択	2	阿部 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○										○			できた			
医用画像処理工学	3	前期	選択	2	佐藤 求	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○		imageJ C++							○			発表	できた		
生体物性工学	3	前期	必修	2	阿部 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○									○			できた			
人間工学	2	後期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○	○									○		○		できた		
医用機器学概論	1	後期	必修	2	吉岡 淳	シラバスに沿って実施した		○										○									○			できた			
医用治療機器学	3	前期	必修	2	吉岡 淳	シラバスに沿って実施した		○								○		○									○			できた			
医用治療機器学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○				○	○	○	○								○	○			できた		
生体計測装置学	2	前期	必修	2	阿部 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○									○			できた			
生体計測装置学実習	2	後期	必修	1	阿部 薫	シラバスに沿って実施した		○		○							○	○										○		プレゼンテーション	できた		
生体機能代行装置学Ⅰ	3	前期	必修	2	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○	○								○										○			できた			
生体機能代行装置学Ⅱ	3	前期	必修	2	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○	○								○										○			できた			
生体機能代行装置学実習	3	後期	必修	1	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○		○							○	○									○		出席率と実習態度	できた			
呼吸療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○								○			できた			
呼吸療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○	○	○				○	○	○	○								○	○		実技試験	できた		
体外循環装置学	3	前期	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○							○	○		できた			
体外循環装置学実習	3	後期	必修	1	草間 良昌	シラバスに沿って実施した				○	○	○				○	○	○	○	○							○	○		できた			
血液浄化療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○								○			できた			
血液浄化療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○	○	○				○	○	○	○								○	○		実技試験	できた		
医用機器安全管理学Ⅰ	2	前期	必修	2	吉岡 淳	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○									○		○		できた		
医用機器安全管理学Ⅱ	2	前期	必修	2	吉岡 淳	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○									○		○		できた		
医用機器安全管理学実習	2	後期	必修	1	吉岡 淳	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○									○		○		できた		
医療安全工学	2	後期	選択	2	小野 哲治	シラバスに沿って実施した		○								○	○										○		板書	○		できた	
臨床医学総論Ⅰ	2	前期	必修	2	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○										○									○	○		できた			
臨床医学総論Ⅱ	2	後期	必修	2	尾林 徹	シラバスに沿って実施した		○										○									○	○		できた			
臨床医学総論Ⅲ	3	前期	必修	2	尾林 徹	シラバスに沿って実施できなかった		○										○									○			できた			
救急救命医学	3	前期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○							○			できた			
臨床実習Ⅰ	3	後期	必修	4	芝本 隆	シラバスに沿って実施した			○																					臨床実習先評価表	できた		
臨床実習Ⅱ	3	後期	必修	3	芝本 隆	シラバスに沿って実施した			○																					臨床実習先評価表	できた		
臨床工学総合演習Ⅰ	3	通年	必修	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○								○	○	○	できた			
臨床工学英文講読	3	後期	選択	2	草間 良昌	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○								○			できた			

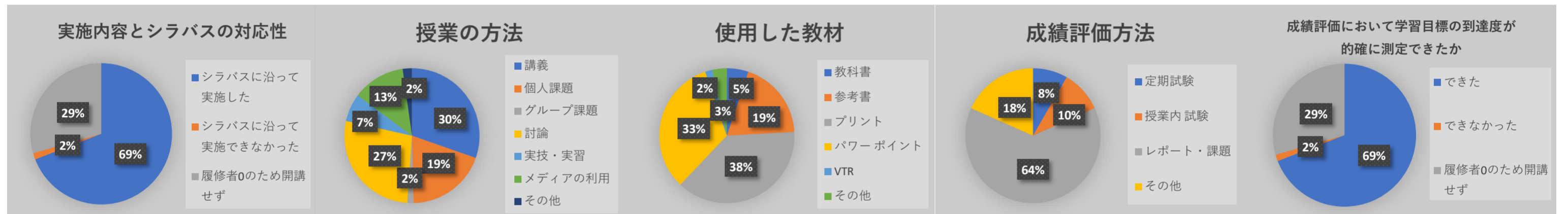


博士課程（前期） 教育活動の記録（専任教員）

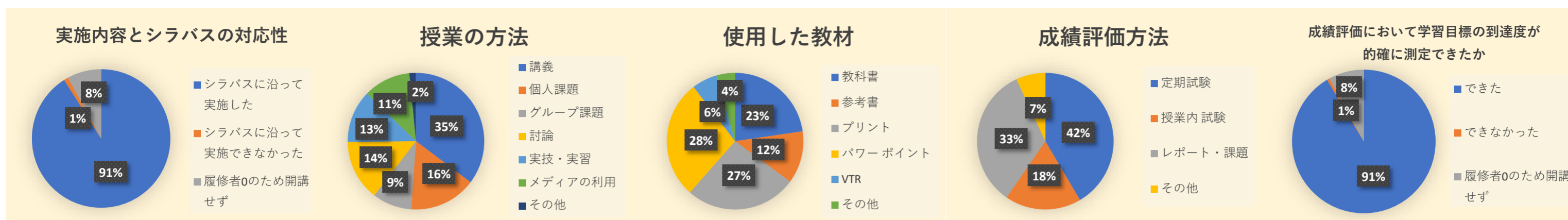
授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考					
医療倫理学特論	1・2	前期	選択	2	吉田 幸恵	シラバスに沿って実施した		○			○		○					○	○	○							○		できた		
医療運営・管理学特論	1・2	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○		○								○	○								○		できた		
人体の構造と機能学特論	1・2	前期	選択	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○						○	○	できた		
加齢医学特論	1・2	前期	選択	2	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○																○					できた		
生殖補助医療技術学概論	1・2	前期	選択	2	荒木 康久	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○				○	○	○			できた		
応用英語	1・2	前期	選択	2	杉田 雅子	シラバスに沿って実施した		○	○									○										授業内での発表		できた	
研究方法特論	1	前期	必修	1	中 徹	シラバスに沿って実施した	オムニバス	○																		○		できた			
研究方法論 I	1	前期	選択	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた			
研究方法論 II	1	前期	選択	1	木村 朗	履修者0のため開講せず																									
研究方法論 III	1	前期	選択	1	小河原はつ江	シラバスに沿って実施した		○																				担当教員と協議し判定	できなかった	出席状況、授業態度で判定	
研究方法論 IV	1	前期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた			
研究方法論 V	1	前期	選択	1	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○	○																			研究の考え方を発表	できた		
保健学特別セミナー	1	後期	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた			
基礎看護学特論	1	前期	選択	2	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○																	○	プレゼン	できた			
基礎看護学演習	1	後期	選択	2	上星 浩子	シラバスに沿って実施した		○	○																	○	プレゼン	できた			
基礎看護学特別研究	2	通年	選択	10	上星 浩子	履修者0のため開講せず																									
成人看護学特論	1	前期	選択	2	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○																	○	プレゼンテーションの内容、討議内容	できた			
老年看護学特論	1	前期	選択	2	伊藤まゆみ	履修者0のため開講せず																									
老年看護学演習	1	後期	選択	2	伊藤まゆみ	履修者0のため開講せず																									
老年看護学特別研究	2	通年	選択	10	伊藤まゆみ	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○																修士論文	できた		
母性看護学・助産学特論	1	前期	選択	2	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた		
母性看護学・助産学演習	1	後期	選択	2	早川 有子	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた		
母性看護学・助産学特別研究	2	通年	選択	10	早川 有子 中島久美子	履修者0のため開講せず																									
公衆衛生看護学特論	1	前期	選択	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
公衆衛生看護学演習	1	後期	選択	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
公衆衛生看護学特別研究	2	通年	選択	10	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した			○																		○		できた		
基礎理学療法学特論	1	前期	選択	2	高橋 正明	履修者0のため開講せず																									
基礎理学療法学演習	1	後期	選択	2	高橋 正明	履修者0のため開講せず																									
基礎理学療法学特別研究	2	通年	選択	10	高橋 正明	履修者0のため開講せず																									
臨床神経理学療法学特論	1	前期	選択	2	中 徹	履修者0のため開講せず																									
臨床神経理学療法学演習	1	後期	選択	2	中 徹	履修者0のため開講せず																									
臨床身体活動学特論	1	前期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																									
臨床身体活動学演習	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																									
臨床理学療法学特別研究	2	通年	選択	10	中 徹	シラバスに沿って実施した		○	○																			修士論文	できた		
高齢者理学療法学特論	1	後期	選択	2	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた		
地域理学療法学特論	1	後期	選択	2	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
病態検査解析学	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
病態免疫化学検査学特論	1	前期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた		
病態免疫化学検査学演習	1	後期	選択	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○																		○		できた		
遺伝子情報検査学特論	1	前期	選択	2	長田 誠	シラバスに沿って実施できなかった		○																			○		できた		
遺伝子情報検査学演習	1	後期	選択	2	長田 誠	履修者0のため開講せず																									
病態血液検査学特論	1	前期	選択	2	小河原はつ江	履修者0のため開講せず																									
病態血液検査学演習	1	後期	選択	2	小河原はつ江	履修者0のため開講せず																									
生体分子情報検査学特論	1	前期	選択	2	亀子 光明	履修者0のため開講せず																									
生体分子情報検査学演習	1	後期	選択	2	亀子 光明	履修者0のため開講せず																									
病原体ゲノム検査学特論	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
病原体ゲノム検査学演習	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた		
生殖補助医療技術学特論	1	前期	選択	2	荒木 康久	シラバスに沿って実施した		○	○																		○	○	○	できた	
生殖補助医療技術学演習	1	後期	選択	2	荒木 康久	シラバスに沿って実施した		○	○																		○	○	○	できた	
生体機能検査学特論	1	前期	選択	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○																				口答審問	できた		
生体機能検査学演習	1	後期	選択	2	古田島伸雄	履修者0のため開講せず																									
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																					できた		
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○																			発表・論文審査	できた		

博士課程（前期） 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考					
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○										○	○							○			できた		
放射線医療安全管理学特論	1	前期	選択	2	土屋 仁	履修者0のため開講せず																									
放射線医療安全管理学演習	1	後期	選択	2	土屋 仁	履修者0のため開講せず																									
放射線情報学特論	1	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○			○												○			できた		
放射線情報学演習	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○			○												○			できた		
放射線教育学特論	1	前期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○								○	○			できた		
放射線教育学演習	1	後期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○								○	○			できた		
放射線学特別研究	2	通年	選択	10	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○			○	論文指導、学会発表指導		○	○	○							○	論文・学会発表		できた		
放射線学特別研究	2	通年	選択	10	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した			○		○						○	○								○			できた		
放射線学特論	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○			○												○			できた		
放射線情報システム特論	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○			○												○			できた		
生体医工学特論	1	前期	選択	2	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○	○		○			○												○			できた		
生体医工学演習	1	後期	選択	2	芝本 隆	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○								ソフト作成プログラム						○			できた		
臨床工学特別研究	2	通年	選択	10	芝本 隆	シラバスに沿って実施した			○		○																		できた		
医療安全管理学特論	1	前期	選択	2	小野 哲治	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○									○		○		できた	



全学科 教育活動の記録 (統計)



II. 研究活動の記録

研究活動の記録は、専任教員の研究活動状況について収集したデータである。

研究活動状況を広く社会へ公表してすることにより、地域の方々と連携した生涯学習や課題解決に取り組んだり、企業等との受託研究や共同研究などのかたちで研究成果の社会還元を促進したりすることを通じて、大学の目的である「地域社会への貢献」を恒常的に実施し、定着させることを目的としている。

また、個人で毎年研究実績を振り返ることにより PDCA サイクルを機能させ、研究活動の推進と質の向上を図っている。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 矢島正榮

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
51 脳血管疾患で片麻痺となった後期高齢者の回復期における心理プロセス	共著	平成31年1月	足利大学看護学研究紀要第7巻1号、p. 1～12	脳血管疾患により片麻痺となった後期高齢者の回復期における心理プロセスを、明らかにすることを目的とし、当事者4名のインタビューデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した。その結果、22概念、7カテゴリー、3個あかテゴリー【壊れた自己像】、【自己像を作り直す作業】、【未来に向かっていく自分】が生成された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (尾島清美、矢島正榮、伊藤まゆみ)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
63. 発達障害児等早期支援における市区町村保健師と発達障害者支援センター相談員の役割認識	—	平成31年1月	第7回日本公衆衛生看護学会学術集会、山口	発達障害児等の早期支援における役割意識を明らかにすることを目的に、全国の市区町村524か所の保健師および発達障害者支援センター93か所の相談員を対象にアンケート調査を実施した。その結果、対象児の支援方針・支援計画立案、医療・児童発達支援の利用の支援、就学支援に双方の認識の差がみられ連携の課題が明らかになった。 (主たる研究者) (矢島正榮、奥野みどり、小林亜由美、廣田幸子)
64. 産業看護職による発達障害者支援の現状と課題	—	令和元年5月	第29回日本産業衛生学会	本研究では産業看護職による発達障害者（疑いを含む、以下「発達障害者等」）の支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。産業看護職による発達障害者等の支援は、日常的に人事労務担当者や直属の上司との連携と、産業医等、産業保健スタッフと協働した発達障害者等本人及び職場の上司や同僚に対する個別的な対応を主としていた。発達障害者等に対する適切な配置や作業内容、職場の管理監督者に対する助言等の具体的な支援内容に関する課題があり、発達障害者支援専門機関による後方支援体制及び事業場として発達障害者等支援体制構築の必要性が示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (廣田幸子、矢島正榮、奥野みどり、小林亜由美)

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 早川有子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 小林 亜由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
産業看護職による発達障害者支援の現状と課題	共同	令和元年5月	第29回日本産業衛生学会	本研究では産業看護職による発達障害者（疑いを含む、以下「発達障害者等」）の支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。産業看護職による発達障害者等の支援は、日常的に人事労務担当者と直属の上司との連携と、産業医等、産業保健スタッフと協働した発達障害者等本人及び職場の上司や同僚に対する個別的な対応を主としていた。発達障害者等に対する適切な配置や作業内容、職場の管理監督者に対する助言等の具体的な支援内容に関する課題があり、発達障害者支援専門機関による後方支援体制及び事業場として発達障害者等支援体制構築の必要性が示唆された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）（廣田幸子、矢島正榮、奥野みどり、小林亜由美）

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 上星 浩子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1対1評価に基づく慢性腎臓病患者用eラーニングの改訂	共著	2019年3月	群馬保健学研究 第39巻19頁-30頁	<p>【目的】慢性腎臓病（以下、CKD）患者用eラーニングに対する1対1評価を行って改善点を見出す【方法】外来CKD患者4名を評価者として、1対1評価を行った。その結果に基づき、改訂箇所を検討した。【結果・結論】評価者4名から、本eラーニングの説明文は読みやすかったという意見を得た。サイドバーに目次掲載するように改訂した。</p> <p>高橋さつき, 岡美智代, 廣村桂樹, 池内秀和, 上星浩子, 清水美和子, 佐藤正樹,</p>
看護学領域における冷え性に関する文献検討	共著	2019年3月	群馬パース大学紀要 第24号 21頁-26頁	<p>冷え性に関する看護学領域の文献を抽出、検討し、効果の評価指標、冷え性の対策に対する評価手法を検討した。</p> <p>真砂涼子, 佐藤晶子, 上星浩子</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
入院支援における必須の視点 在宅療養・セルフケア支援の最前線 第1回 予定外の再入院率とその原因 ~在宅療養におけるセルフケアを考えるための基礎	共著	2019年11月	日総研出版, 月刊ナースマネジャー	<p>在宅療養におけるセルフケアを考えるための基礎として、予定外の再入院について、その実態と原因および入院支援加算やDPCなど各施策について執筆した。</p> <p>岡美智代, 本井裕二, 上星浩子, 木嶋千枝, 松本光寛</p>
入院支援における必須の視点 在宅療養・セルフケア支援の最前線 第2回 予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策	共著	2019年12月	日総研出版, 月刊ナースマネジャー	<p>予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策として、退院後の生活を見据えて対象者を包括的に情報収集する際の必要項目の紹介、理論や概念を使ったセルフケアのアセスメントと対策について予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策について、理論も含めて紹介した。</p> <p>岡美智代, 本井裕二, 上星浩子, 木嶋千枝, 松本光寛</p>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
入院支援における必須の視点 在宅療養・セルフケア支援の最前線 第1回 予定外の再入院率とその原因 ~在宅療養におけるセルフケアを考えるための基礎	共著	2019年11月	日総研出版, 月刊ナースマネージャー	在宅療養におけるセルフケアを考えるための基礎として、予定外の再入院について、その実態と原因および入院支援加算やDPCなど各施策について執筆した。 岡美智代, 本井裕二, 上星浩子, 木嶋千枝, 松本光寛
入院支援における必須の視点 在宅療養・セルフケア支援の最前線 第2回 予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策	共著	2019年12月	日総研出版, 月刊ナースマネージャー	予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策として、退院後の生活を見据えて対象者を包括的に情報収集する際の必要項目の紹介、理論や概念を使ったセルフケアのアセスメントと対策について予定外の再入院を防ぐためのアセスメントと対策について、理論も含めて紹介した。 岡美智代, 本井裕二, 上星浩子, 木嶋千枝, 松本光寛
「患者さんの立場からの想いと本音」 「CKD-MBD病態と治療」 「聞き書き」を受けた透析患者の意識・感情の変化 (学会発表)	—	2019年5月	第55回東日本腎不全研究会	研究会講演会における企画、講演座長を行った。
	—	2019年6月	第64回日本透析医学会学術集会 (横浜)	患者が「聞き書き」活動に参加することは、信頼関係の構築に寄与。患者は、日頃関わる看護師から承認を受けることで、【自尊心の向上】につながり、よりセルフマネジメントを意識し透析療法に対して前向きに取り組むことが示唆された。 丸山 真実, 岡美智代, 井手段幸樹, 上星浩子, 清水美和子, 石倉美穂子, 瀬尾幸子, 木村 和美, 北爪友樹
聞き書き活動における透析患者と家族の透析への思い (学会発表)	—	2019年9月	日本看護技術学会第18回学術集会	透析患者に聞き書きを行い、透析への思い、聞き書き後の気持ちの変化および透析患者を支える家族が一冊の冊子を読むことで透析患者に対する思いの変化を明らかにした。看護師がその人なりの生活パターンや人生を知ることで個性のある看護援助に繋がるということが示唆された。
ぐんま看護ケアを考える会～活動のあゆみ～ (学会発表)	—	2019年11月	群馬県看護学会	天笠端規, 上星浩子 「その人らしさ」を支える看護ケアについて、語り合うことを通して考える機会を継続的に持つために活動を行っている。2017年度と2018年度に開催した会の内容を報告した。 柳奈津子, 上星浩子, 鈴木恵理 桐山勝枝ほか
臨床看護師の看護アセスメント能力に関する認識と行動 (学会発表)	—	2019年11月	日本看護科学学会第39回学術集会	看護アセスメント能力とは何かを問い、その能力に内包する臨床看護師の認識と行動を明らかにすることを目的に調査した。 川島美佐子, 上星浩子, 岡美智代
病棟勤務の男性看護師の戸惑いや悩みとその対処方法に関する研究 (学会発表)	—	2019年12月	日本看護科学学会第39回学術集会	男性看護師が病棟で働く中で、どのような戸惑いや悩みを持ち、対処しているのかその対処方法を明らかにした。 佐藤晶子, 上星浩子
看護センスの概念と構成要素-看護におけるセンスってなに?センスが良い看護師ってどんな人?- (交流集会)	—	2019年12月	日本看護科学学会第39回学術集会	看護のセンスの概念と構成要素を明らかにするために、今まで行ってきた看護教員、看護管理者、臨床看護師を対象とした看護センスの研究と国際的視点からの看護センスの捉え方について紹介した。さらに交流集会では参加者とともに看護のセンスについてグループワークを行い、知見の共有と今後の課題についてディスカッションを行った。 上星浩子, 川島美佐子, 佐藤晶子, 堀込由紀

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 萩原 英子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	共著	令和元年8月	第45回看護研究学会学術集会 大阪	<p>ストーマ装具の装着体験をした学生の学びを明らかにするため、看護学生73名を対象として調査票を配布し、調査を実施した。調査票の回収率は25枚(34.2%)であり、「学び」に関する自由記述部分について分析した結果、体験をした学生は身体的・精神的・社会的苦痛といった否定的な面と、装具を装着したまま日常生活を過ごせるといった肯定的な面を理解していた。また、患者に必要な看護に関する気づきも得ていたことが明らかになった。ストーマ装具を装着した際の身体的な知覚のみならず、排泄経路が腹部に変更となった患者の心理・社会的特徴の理解も深められており、さらに看護の必要性にも気づくことができていたことから、患者体験は有用であったと考えられる。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (安田弘子、湯澤香緒里、金子吉美、小池菜穂子、佐藤亜紀、堀越政孝、萩原英子)</p>

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 廣田 幸子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29 発達障害児等早期支援における市区町村保健師と発達障害者支援センター相談員の役割認識	-	平成31年1月	第7回日本公衆衛生看護学会学術集会	本研究は発達障害児及び発達障害が疑われる児の早期支援における市区町村保健師と発達障害者支援センターの相談・支援事業担当者による重層的な支援体制の構築に向け、双方の役割認識を明らかにすることを目的とした。市区町村保健師は生活に即した観察と身近な支援や専門支援機関利用の支援の役割があり、発達障害者支援センター相談員は障害特性に関わる専門的評価と支援、医療に関する情報提供、市区町村が行う保健事業への情報提供・助言や保健師のOff-JTの支援の役割があることが共通に認識されていた。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (矢島正榮、奥野みどり、小林亜由美、廣田幸子)
30 保育園・幼稚園・認定子ども園における「気になる子ども」に対する保育者の認識と支援の現状	-	令和元年5月	第25回日本保育保健学会	本研究は保育士等が何らかの支援が必要だと認識している「気になる子ども」の実態と保育者の関わり現状から、今後の支援の在り方を明らかにすることを目的とした。保育者は幼児期早期に「気になる子ども」の行動を認識しており、その気づきが支援に繋がるきっかけづくりとなり得ることが示された。そのために、「気になる子ども」への継続的な支援が図られる園内の体制づくり、それをサポートする巡回相談やコンサルテーション等の専門的な支援や、個別支援計画作成を促す研修会等の充実を図る必要性が示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (奥野みどり、廣田幸子、東泉貴子)
31 産業看護職による発達障害者支援の現状と課題	-	令和元年5月	第29回日本産業衛生学会	本研究では産業看護職による発達障害者（疑いを含む、以下「発達障害者等」）の支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。産業看護職による発達障害者等の支援は、日常的に人事労務担当者と直属の上司との連携と、産業医等、産業保健スタッフと協働した発達障害者等本人及び職場の上司や同僚に対する個別的な対応を主としていた。発達障害者等に対する適切な配置や作業内容、職場の管理監督者に対する助言等の具体的な支援内容に関する課題があり、発達障害者支援専門機関による後方支援体制及び事業場として発達障害者等支援体制構築の必要性が示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (廣田幸子、矢島正榮、奥野みどり、小林亜由美)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 中島 久美子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
				特記事項なし

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
				特記事項なし

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
中島久美子, 臼井淳美, 廣瀬文乃, 早川有子. 産後1カ月から3カ月において高年初産婦の夫が認識する妻が満足と感じる夫の関わり	-	2019年3月	第32回日本助産学会 (福岡国際展示場)	産後1カ月から3カ月において高年初産婦の夫が認識する妻が満足と感じる夫の関わりについて発表した。
廣瀬文乃, 中島久美子, 臼井淳美, 早川有子. 助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討-分娩期の演習を通して	-	2019年3月	第32回日本助産学会 (福岡国際展示場)	助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討として、分娩期の演習を通じた学びを発表した。
Kumiko Nakajima, Atumi Usui, Yuko Hayakawa The practice of small group participatory programs that enhance the physical and mental health of older primipara and marital intimacy	-	2019 27 June to 1 July	International Council of Nurses 2019 Congress, Singapore.	In this study, we developed and carried out a program based on our previous study to increase physical and mental health and enhance marital intimacy for older primipara couples during pregnancy. Furthermore, we evaluated the program's efficiency.
池下貴子, 中島久美子, 早川有子. ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連-初乳中 sIgA濃度の測定と出産ストレス感情測定スケールの活用	-	2019年9月	第34回日本母乳哺育学会 (岡山医師会館)	ソフロロジー式分娩と出産ストレスの関連について、初乳中 sIgA濃度の測定と出産ストレス感情測定スケールを活用した研究成果を発表した。
中島久美子, 臼井淳美, 早川有子. 親への移行期における高年初産婦夫婦の認識から見た夫婦の関係性の変化	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会 (ヒルトン東京ベイ)	親への移行期における高年初産婦夫婦の認識から見た夫婦の関係性の変化について発表した。
中島久美子, 吉野めぐみ, 臼井淳美, 廣瀬文乃, 早川有子. 助産学生による看護学生へのピアエディケーションを用いた性教育の学習効果-看護学生の学びを通して-	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会 (ヒルトン東京ベイ)	助産学生による看護学生へのピアエディケーションを用いた性教育の学習効果として、看護学生の学びから発表した。
臼井淳美, 中島久美子, 廣瀬文乃, 早川有子. 助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討-出生直後の新生児ケア演習を通して	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会 (ヒルトン東京ベイ)	助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討について、出生直後の新生児ケア演習を通じた教育の検討を発表した。

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 堀越 政孝

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 佐藤 晶子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
11. 看護学領域における冷え症に関する文献検討 (査読付)	共著	2019年3月	群馬パース大学紀要第24号 p. 21-27	<p>冷え症対策の評価指標を検討することを目的に、医学中央雑誌Web版において1981年から2017年まで、キーワードを「冷え症」に設定し、「看護分野」「原著及び会議録」に絞って検索し、得られた137文献を対象として文献検討をした。主観的指標では「冷えの自覚症状」、客観的指標では「抹消皮膚温」「抹消血流」「深部温」が用いられており、主観的な自覚症状と同時に複数の客観的指標を測定する必要がある。</p> <p>今後、冷え症の定義の検討および生活習慣などの冷えへの影響要因の調査、冷え症改善を目的とした介入方法に関する研究、継続介入による効果の検証が必要である。</p> <p>(担当：データ整理) (真砂涼子, 佐藤晶子, 上星浩子)</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5) 病棟勤務の男性看護師の戸惑いや悩みとその対処方法に関する研究 (査読付)	—	2019年12月	日本看護科学学会第39回学術集会 示説発表 石川県金沢市	<p>男性看護師の病棟で働く中での戸惑いや悩みとその対処方法について明らかにすることを目的に、病棟業務には慣れ管理をする立場にはない病棟勤務の卒後3-4年目の男性看護師5名に面接ガイドを用いたフォーカスグループインタビューを実施した。戸惑いや悩みについて【男性は少数派である職場環境に対する悩み】【異性患者へのケアに対する悩み】【ライフステージやライフイベントにおける悩み】など7カテゴリーが抽出された。また、対処方法では3カテゴリーが抽出された。<家族を養うため、自分のキャリア構築よりも稼ぐことが必要だと自分に言い聞かせる>といった対処方法から、安定した収入が減少するぐらいなら、自身のキャリアを積むために研修に行ったり興味のある分野にチャレンジするために病院を変わったりすることに躊躇している現状があることが推察された。</p> <p>(担当：主たる研究遂行者) (佐藤晶子, 上星浩子)</p>
6) 看護センスの概念と構成要素の解明—看護におけるセンスってなに？センスが良い看護師ってどんな人？— (査読付)	—	2019年12月	日本看護科学学会第39回学術集会 交流集会 石川県金沢市	<p>看護センスの概念とその構成要素を解明し、看護センスを評価する尺度開発、育成モデルの構築を目指す。これまでに報告した看護教員や看護管理者に加え、国際的視野からの検討も行った。</p> <p>本交流会では、これまでの結果を報告し、センスの良い看護師はどのような要素を持つか、そしてセンスの良い看護師を育成するための方法について、参加者の皆様とともに考えていきたい。</p> <p>(担当：データ収集, データ分析, 発表) (上星浩子, 佐藤晶子, 堀込由紀, 川島美佐子)</p>

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 星野泰栄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. メンタルヘルス不調・疲労と微量元素 — 夜間勤務における疲労と微量元素栄養との関連 —	共著	2019年10月	講談社MOOK, 食と医療	メンタルヘルス不調・疲労は、近年、様々な世代、特に青少年や勤労世代にかけて、大きな社会問題となっている。本報では、微量元素、特に亜鉛にフォーカスし、先ず、うつ病・メンタルヘルス不調との関連についてレビューを行った。また、夜間勤務による疲労は、産業保健領域で重要な課題であり、迅速な疲労評価が求められている。我々が病院職員を対象に行った疲労調査と微量元素の関連を紹介。さらに公衆衛生的な観点から、亜鉛欠乏を改善することによる疲労・メンタルヘルス不調からくるうつ病の予防、さらに食生活の提言を行いたい。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (亀尾聡美、原田暢善、星野泰栄、小山洋)

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 看護職・介護職の夜間勤務におけるフリッカーによる疲労評価および主観的疲労評価	—	2019年5月	第92回 日本産業衛生学会 演題抄録	産業保健領域において、職域の健康管理・疲労の把握は、重要な課題である。特に、医療職において夜間勤務・交代制勤務はさけられないが勤務に伴う過度の疲労の予防は課題となっており、医療従事者の健康管理および事故回避のため、夜間勤務時の疲労の客観的かつ簡便な評価法が求められている。今回の調査では、夜間勤務時に疲労・ストレスを客観的に評価し、また主観的疲労を同時に測定し、検討した。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (亀尾聡美、星野泰栄、近藤泰之、上島可奈子、秋山徹郎、高橋健太郎、山崎千穂、原田暢善、小山洋)
9. Zinc and mental health related to fatigue in workplace	—	2019年9月	ISTERH2019 (International Society of Trace Element Research in Human), 国際微量元素学会2019, Bali, Indonesia,	In the present study, we will address issues related to zinc (Zn) and mental health. We will focus on (1) a review of an association between Zn deficiency and depression, (2) Zn and several trace elements status under the fatigue in the occupational field, (3) Importance of dietary Zn intake in the promotion of mental health. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) Satomi Kameo, Yasue Hoshino, Yasuyuki Kondo, Nobuyoshi Harada, Chiho Yamazaki, Hiroshi Koyama

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 小池 菜穂子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	—	2019年8月	日本看護研究学会 第45回学術集会	看護基礎教育に求められているのは、対象者を理解し必要な看護を考える看護実践能力の育成である。その能力の育成に効果的な教育方法のひとつとして患者体験がある。患者体験は、学生が健康問題を抱えた人と同じ視点に立つことで、その身体的特徴や心理・社会的特徴の理解を深める学習方法である。本学における成人看護学演習「ストーマ管理」ではストーマ増設患者の生活や思い、患者が求めている援助について理解を深めることを目的に、希望者には、ストーマ装具を装着する体験をしてもらっている。そこで本研究は、この患者体験を通して学生が得た学びを明らかにすることを目的とした。結果は43サブカテゴリ、11カテゴリを抽出した。ストーマ装具を装着した学生は、身体的・精神的・社会的苦痛といった否定的な面と装具を装着したまま日常生活を過ごせるといった肯定的な面を理解していた。患者体験を通して得た学びを看護実践に結びつけるためには、患者体験後に学生間で学びを共有し、具体的な援助方法を検討する機会を設けることが有効であると考えた。 (安田弘子・湯沢香緒里・金子吉美・小池菜穂子・佐藤亜紀・堀越政孝・萩原英子)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 臼井淳美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討 分娩期の助産学演習を通して	-	平成31年3月	第33回日本助産学会学術集会 (福岡県)	共同作成であるが調査、分析を筆頭著者とともにに行った。廣瀬文乃、中島久美子、臼井淳美、早川有子 32巻3号 P547 分娩期のシミュレーション教育を通じた学びの内容と、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のありかたを検討した。
産後1ヵ月から3ヵ月において高年初産婦の夫が認識する妻が満足と感じる夫の関わり	-	平成31年3月	第33回日本助産学会学術集会 (福岡県)	共同作成であるが調査、分析を筆頭著者とともにに行った。 中島久美子、臼井淳美、廣瀬文乃、早川有子 32巻3号 P379 高年初産婦の夫が認識する産後1ヵ月から3ヶ月の妻が満足と感じる関わりについて明らかにすることを目的に研究を行った。
The practice of small group participatory programs that enhance the physical and mental health of older primipara and marital intimacy	-	25th Jun 2019	International Council Nurses Congress 2019(Singapore)	K. Nakajima, A. Usui, A. Hirose, Y. Hayakawa We developed and carried out a program based on our previous study to increase physical and mental health and enhance marital intimacy for older primipara couples during pregnancy. Furthermore, we evaluated the program's efficiency. Conclusion: The program strengthened the physical and mental health of older primiparas and the intimacy of the married couple by increasing understanding of the wife's mind, body.
助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討 出生直後の新生児ケア演習を通して	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会学術集会(千葉県)	共同作成であるがfirst authorとして全文の責任著者 臼井淳美、中島久美子、廣瀬文乃、早川有子 60巻3号 P292 出生直後の新生児ケアのシミュレーション教育を通じた学びの内容と、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のありかたを検討した。学生はシミュレーション教育で実践場面を想定した出生直後の新生児のケアを実践し理解することにより、課題が明確になって実習に臨めた。またシミュレーション教育の学びを実習で活用できており、演習から実習へ効果的な繋がりができたと考える。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
親への移行期における高年初産婦夫婦の認識からみた夫婦の関係性の変化	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会学術集会(千葉県)	共同作成であるが調査、分析を筆頭著者とともに行った。 中島久美子、臼井淳美、早川有子 60巻3号 P223 親への移行期にある高年初産婦の夫婦がどのような夫婦の関係性の変化を認識していくかを明らかにすることを目的とした。親への移行期における夫婦の関係性は3タイプに分類され、妊娠期からの夫婦関係が影響していると推察された。また、夫婦の関係性の認識の際を相互に理解しあえるような妊娠期から夫婦の関係性への支援の重要性が示唆された。
助産学生による看護学生へのピアエデュケーションを用いた性教育の学習効果 看護学生の学びを通して	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会学術集会(千葉県)	共同作成であるが調査、分析を筆頭著者とともに行った。 中島久美子、吉野めぐみ、臼井淳美、廣瀬文乃、早川有子 60巻3号 P242 助産学性による性と生殖に関するピアエデュケーションを受講した看護学生の学びからピアエデュケーションの学習効果を明らかにすることを目的に研究を行った。看護学生は助産学性のピアエデュケーションを受講することで、自分自身の性に向き合い、相手の意思や価値観を尊重することの重要性に気づく機会となった。また、看護職として、性と生殖に関する健康問題を考える機会が得られていた。

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 金子 吉美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	—	2019年8月20日	日本看護研究学会第45回学術集会，大阪。	成人看護学演習において、ストーマ装具の装着体験を行った学生はそこからどのような学びが得られたのかを質的帰納的に研究を行い、発表した。 (安田弘子、湯澤香緒里、金子吉美、佐藤亜紀、高橋翔、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子)

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 堀込由紀

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
該当なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療安全管理者が感じている困難—FGI(フォーカス・グループインタビュー)の結果より	-	2019/7/20	第21回日本医療マネジメント学会学術集会、ミニシンポジウム、名古屋国際会場	医療安全管理者の業務遂行上の困難について質的な分析を発表した。困難の様相は「組織的支援を受けられていない」や「医療安全文化の醸成が困難」等多様であった。堀込由紀・佐々木美奈子・中山純果・末永由理・本谷園子・野崎俊剛・坂本すが・宮崎久義
医療安全管理者の地域連携活動の現状と課題	-	2019/7/20	第21回日本医療マネジメント学会学術集会、名古屋国際会場	医療安全管理者の地域に果たす役割についてFGIから分析した。グループ内の施設間で実施している、その準備をしているという語りが得られた。その反面、多忙で出来ない、総合評価の評価基準の設定が難しい等の語りがあり、課題もあった。堀込由紀・佐々木美奈子・中山純果・末永由理・本谷園子・野崎俊剛・坂本すが・宮崎久義
看護職員確保に向けた採用活動・就業支援制度と効果の実感に関する施設横断的実態調査	-	2019/8/23	第23回日本看護管理学会学術集会、朱鷺メッセ	医療施設横断的に質問紙調査を行った結果、採用活動では「ナースセンター・ハローワークの活用」が最も多かった。採用への効果は「有料紹介業の利用」が最も高かった。支援制度については、「ワークバランスを考慮した柔軟な雇用形態」に効果を感じていた。「子育て・介護支援」、「施設内外での教育支援」が定着の効果を感じていた。木田亮平・佐々木美奈子・國江慶子・堀込由紀・米倉佑貴・市川奈央子・武村雪絵
看護職員の採用方針に関する施設横断的実態調査	-	2019/11/3	第57回日本医療・病院管理学会学術集会、朱鷺メッセ	医療施設横断的に今後の採用方針について質問紙調査で尋ねたところ、有床診療所や介護施設、訪問看護ステーションでは、定期採用していないとする施設が多く、募集においては既卒の看護師を募集する傾向にあった。新卒を募集すると答えたのは病院73%で他の施設は20%程度であった。2019年度の募集数については増やす方針であると答えた施設が多かった。医療ニーズや診療報酬等の医療計画の影響があることが示唆された。佐々木美奈子・國江慶子・木田亮平・堀込由紀・佐伯昌俊・井上真帆・米倉佑貴・市川奈央子・武村雪絵
看護センスの国際的探索-センスって世界共通？	-	2019/12/1	第39回日本看護科学学会、交流集会、ホテル金沢扇の間	テーマ「看護センスの概念と構成要素—看護におけるセンスってなに？センスが良い看護師ってどんな人？」の中でオーストラリアでの調査結果を発表した。段取りがいい、柔軟性がある等の個人的特性のほかアセスメントスキルが高い、ホリスティック、思いやりがある等の態度・行動を語っていた。上星浩子・川島美佐子・佐藤晶子・堀込由紀

特記事項

平成29年度～平成31年度科学研究費助成事業基盤 (C) (一般) 「看護センス育成モデル構築に向けた看護センスの概念の解明と尺度開発」、研究分担者
H31年度厚生労働行政推進調査事業費「看護師と看護補助者の協働の推進に向けた実態調査研究 (19CA2001)、研究分担者
H31年度～平成34年度 科学研究費助成事業基盤 (C) (一般) 「看護師の異文化コミュニケーション強化のためのシミュレーション教育モデルの開発」、新規採択 研究代表者

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 内山かおる

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 清水美和子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1対1評価に基づく慢性腎臓病患者用eラーニングの改訂	共著	2019年3月	群馬保健学研究 第39巻19頁-30頁	<p>【目的】慢性腎臓病（以下、CKD）患者用eラーニングに対する1対1評価を行って改善点を見出す</p> <p>【方法】外来CKD患者4名を評価者として、1対1評価を行った。その結果に基づき、改訂箇所を検討した。【結果・結論】評価者4名から、本eラーニングの説明文は読みやすかったという意見を得た。サイドバーに目次掲載するように改訂した。</p> <p>筆頭著者：高橋さつき、分担研究者：岡美智代、廣村桂樹、池内秀和、上星浩子、清水美和子、佐藤正樹、</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「聞き書き」を受けた透析患者の意識・感情の変化	—	2019年6月	第64回日本透析医学会学術集会（横浜）	<p>患者が「聞き書き」活動に参加することは、信頼関係の構築に寄与。患者は、日頃関わる看護師から承認を受けることで、【自尊感情の向上】につながり、よりセルフマネジメントを意識し透析療法に対して前向きに取り組むことが示唆された。</p> <p>筆頭演者：丸山 真実 共同演者：岡美智代、井手段 幸樹、上星浩子、清水美和子、石倉美穂子、瀬尾幸子、木村 和美、北爪 友樹</p>

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 萩原 一美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 桐生 育恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
生活習慣病予防に関する保健指導は家族に影響を与えるのか 保健指導がきっかけで家族に生じた健康に関するよい変化と、それに関連する参加者の影響 (査読付)	共著	2019年2月	家族看護学研究 24 (2) p.156-163	生活習慣病予防に関する保健指導の対象となった者が保健指導を受けたことをきっかけに、家族に生じた健康に関するよい変化と影響を明らかにすることを目的に、特定保健指導を受けた者とその家族1名に対し、無記名自記式質問紙調査を行った。その結果、95通(58.3%)で、家族で健康に関するよい変化があった者は33名であった。家族は【健康づくりに関する学習機会の増加】等の影響を受けて、【セルフケア行動の改善】等の健康に関するよい変化をしていた。 (主たる研究遂行者) (桐生育恵、佐藤由美)
Does health guidance concerning lifestyle disease prevention spread to spouses? A qualitative study (生活習慣病予防に関する保健指導は配偶者に波及するののか:質的研究) (査読付)	共著	2019年12月	Journal of Clinical Nursing 28(23-24) p. 4332-4341	個人に提供された保健指導プログラムが、その配偶者の保健行動の変化に影響を与えるプロセスを明らかにすることを目的に、生活習慣病予防に関する保健指導プログラムに参加した者の配偶者11名に対し半構造化面接調査を行った。その結果、影響のプロセスは「私はあくまでもサポーター」というパートナーを支援する立場の段階から、「私もプレイヤー」という自分も健康づくりの実践者の段階に変化するものであった。(主たる研究遂行者) (桐生育恵、佐藤由美)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
群馬県市町村国保における特定健診等の分析 (第1報) 実態調査結果の全国との比較	—	2019年10月	第78回 日本公衆衛生学会総会、高知県高知市	群馬県市町村国保における特定健康診査・特定保健指導の実態把握と現状分析から、実施率向上に向けた具体的方策を検討するための基礎資料を得ることを目的に、厚生労働省が平成30年度に実施した調査結果と群馬県内35市町村の回答内容について、比較を行った。その結果、現状分析に基づく保健事業の優先付け、実施率向上対策の検証、対象者個々に対するアプローチ等が、全国と比較して実施割合が低いことが明らかとなった。(石川麻衣、佐藤由美、桐生育恵、風間順子、林邦彦、齋藤貴之、高橋理恵)
群馬県市町村国保における特定健診等の分析 (第2報) 実施率上位自治体へのヒアリング	—	2019年10月	第78回 日本公衆衛生学会総会、高知県高知市	群馬県市町村国保における特定健康診査・特定保健指導の実態把握と現状分析から、実施率向上に向けた具体的方策を検討するための基礎資料を得ることを目的に、実施率・伸び率の高い10市町村の担当者に対するヒアリングにより、実施率向上につながる方法・工夫を抽出した。その結果、現状分析に基づき地域の状況を考慮した対策の試行と検証というPDCAサイクルを実践していた。また、対象者個人に対するアプローチの工夫と、連携等の体制づくりの工夫を同時に行っていた。(佐藤由美、石川麻衣、桐生育恵、風間順子、林邦彦、齋藤貴之、高橋理恵、大庭志野)

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 山野 えり子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 安田 弘子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	-	令和元年8月	第45回日本看護研究学会(大阪)	本研究より、ストーマ装具の装着体験をした学生は、身体的・精神的・社会的な苦痛を体験し、患者への看護の必要性を理解するとともに、装具を装着していても日常生活を過ごせることを学んでいることが示唆された。今後は、今回の学びとストーマの受容過程を関連させ、ストーマ造設患者へ必要な看護を学生が理解できるような教授方法を検討していく。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (安田弘子、湯澤香緒里、金子吉美、小池菜穂子、佐藤亜紀、堀越政孝、萩原英子)

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 湯澤香緒里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	—	2019年8月	日本看護研究学会第45回学術集会（大阪府）	成人看護学演習「ストーマ管理」における患者体験をした学生の学びを明らかにすることを目的に、学生73名を対象とし質問紙調査を実施した。その結果、214コードから34サブカテゴリ、11カテゴリを抽出した。 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （安田弘子、湯澤香緒里、金子吉美、小池菜穂子、佐藤亜紀、堀越政孝、萩原英子）

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 長嶺めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
日本の医療通訳を取り巻く現状と課題に関する文献検討 (査読あり、P. 8-17)	共著	平成31年1月	日本国際看護学会誌 2巻 1号	在留外国人及び訪日外国人の増加により、外国人が日本国内の病院を受診する機会が増えている。また日本政府は、深刻化する人手不足の克服に向け、外国人材の受け入れ拡大を図っており、今後ますます日本国内において外国人が増加することが予想される。医療従事者、外国人患者双方にとって、言語の不安なく治療や看護を受けられる、また実施するためには医療通訳の存在は不可欠といえる。そこで既に報告されている文献のレビューを行い、日本の医療通訳の現状を明らかにする必要があると考えた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
CURRENT SITUATION AND ISSUES SURROUNDING MEDICAL INTERPRETATION IN JAPAN (日本における医療通訳を取り巻く現状と課題)	-	平成31年1月	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars	Presently, there is an increasing number of foreign residents and foreign visitors in Japan. In addition, the Japanese government is trying to accept foreign workers to overcome the serious manpower shortage. Owing to the increase number of foreigners, situations where foreigners come to the hospitals in Japan are increasing. Moreover, in order for patients to receive treatment and nursing care without the anxiety of a language barrier, the existence of medical interpreters is indispensable. Therefore, I reviewed the literature already reported and found that it is necessary to clarify the present condition of medical interpreter in Japan.
派遣医療通訳の課題から見えてきた医療通訳の形 -派遣医療通訳実施報告書からの分析-	-	平成31年2月	日本遠隔医療学会スプリングカンファレンス2019	現在我が国における在留外国人の数は年々増加し、今後も外国人労働者の受入れ拡大に伴い、増加が見込まれている。また訪日外国人の数も増加し、観光地の病院などに患者が受診する機会も増えた。医療機関は国際化対応を迫られており、医療通訳の設置などが望まれる。医療通訳は通訳者の確保や費用など様々な課題を抱えており、課題解決に向けて遠隔医療通訳やITの活用が検討されている。特定非営利活動法人地域診療情報連携協議会と群馬大学病院は平成22-23年度にかけて医療通訳の派遣事業を行った。今回どのような介入が行われていたのか、派遣医療通訳の課題を整理することで、効果的な医療通訳のあり方を明らかにしたいと考えた。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
The way of educational support for medical interpreter in Japan (日本の医療通訳に必要とされる教育支援のあり方)	-	令和元年6月	Critical Link International 9	Currently the number of foreign nationals residing in Japan is increasing every year. Along with the expansion of acceptance of foreign workers, the number of foreign nationals in Japan is expected to increase in future. Some of these people cannot fully communicate in Japanese, and when they visit a medical institution, medical interpreter support is required. To clarify educational support required for medical interpreter in Japan, from the medical interpreter implementation report conducted in 2010 to 2011, we analyzed the sense of difficulty that medical interpreters have in interpreting scenes.
4か国における医療通訳の現状に関する文献検討 ー日本の医療通訳との比較ー	-	令和元年9月	日本国際看護学会 第3回学術集会	現在、日本の在留外国人は260万人、訪日外国人は3,100万人と増加しており、今後も増加が予測されている。彼らが安心して日本で治療を受けるためには、医療通訳の存在は不可欠といえる。筆者らは、既に報告されている文献のレビューを行い、日本の医療通訳の現状を明らかにした(長嶺ら,2019)。今後、日本の医療通訳の現状を改善していくにあたり、海外での医療通訳の取り組みを参考にすることは意義のあることと考えた。

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 反町真由

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 廣瀬 文乃

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討-妊娠期の助産学演習を通して-	-	2017年10月	第58回日本母性衛生学会学術集会	助産学教育での、妊娠期のシミュレーション教育を通じた学びの内容等から、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のあり方を検討した。その結果、学生はシミュレーション学習で実習前に助産技術やコミュニケーション等の課題を明確にした上で臨むことで、効果的に妊婦に関わることができたと感じていた。
2妊娠期における高齢初産婦の思いと夫の関わり	-	2018年3月	第32回日本助産学会学術集会	高齢初産婦が抱く妊娠期の思いと夫の関わりに対する満足感を明らかにするために、出産準備クラスを開催し参加者に対し半構造面接を行った。高齢初産婦は高齢妊娠に伴う身体的リスクへの不安や若い妊婦と比較して公開する等、否定的感情を抱く一方、高齢で子どもをもつことも覚悟や年齢をプラスに捉えられる心の余裕等、肯定的感情を抱いていた。
3デジタル教材を活用した母性看護教育：特に、新生児のバイタルサインを含む生理機能の理解を深めるために	-	2018年6月	第20回日本母性看護学学術集会	本学の母性看護学講義では、新生児の映像を見ながら呼吸数を数えたり、イラスト上でステートを当てる位置と一緒に確認している。イラスト、動画、音声ファイルなどのデジタル教材を活用することによって、学生の理解度と満足度が顕著に高められることが確認された。
4職場のマタニティハラスメントで生じる心身の自覚症状の変化	-	2018年10月	第20回日本母性衛生学会学術集会	就労女性が妊娠中にマタニティハラスメント被害を受けることで、どのような心身の自覚症状の変化を実感しているのかを明らかにした。マタハラ被害による影響は、マイナートラブル症状やストレス症状を増強させ、妊娠経過の逸脱や、妊娠中だけでなく産後の母児にも影響を及ぼす恐れが考えられた。
5職場のマタニティハラスメント被害の実態	-	2018年10月	第20回日本母性衛生学会学術集会	妊娠中に起きた職場でのマタニティハラスメント被害の実態を明らかにした。17.4%がマタハラ被害を受けていた。被害の内容は、居心地の悪い職場環境や過剰な労働による流産の恐れを妊娠初期に上司の男性から受けた者が多かった。そのため、妊婦自身が自己防衛できる為の支援や、社会への啓発が必要である。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6産後1か月から3か月における高年書産婦の心身の健康状態と夫の関わり	-	2018年10月	第20回日本母性衛生学会学術集会	高年初産婦の産後1か月から3か月に焦点を当て、妻の心身の健康状態と夫の関わりに対する満足度を明らかにした。結果、産後の妻が満足と感じる夫の関わりは、妻の心身の健康を安定へと導き、夫婦の共同を図る上で重要である。
7助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討-母乳育児支援の助産学演習を通して-	-	2018年10月	第20回日本母性衛生学会学術集会	母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容と助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育のあり方を検討した。学生は、シミュレーション教育で実践場面を想定した母乳育児支援を実践し理解することにより、課題が明確になって実習に臨んでいた。
8看護・助産教育支援フォーラム-IT技術を取り入れた教育方法の開発、共有及び相互支援を目指して-	-	2018年10月	第20回日本母性衛生学会学術集会	看護・助産教育支援フォーラムのサイトに登録されている教材の共有・相互支援について報告を行った。登録されている教材を活用した先生方からの意見から、より充実した内容を含められるよう努力していく
9助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討	-	2019年3月	第33回日本助産学会学術集会	分娩気温シミュレーション教育を通じた学びの内容、および助産学実習に活かされた内容を明らかにすることにより、助産学実習への効果的な移行を検討した。学生は、技術だけでなく自分の助産ケア能力、判断力の不足に気づく機会となった。
10産後1か月から3か月において高年初産婦の夫が認識する妻が満足と感じる夫の関り	-	2019年3月	第33回日本助産学会学術集会	産後1か月から3か月において高年初産婦の夫が認識する妻が満足と感じる夫の関りを明らかにした。高年初産婦の夫は妻の高年出産による心身の影響や生活リズムに気を使い、育児の連携・共同が行えていると認識していた。
11 The practice of small group participatory programs that enhance the physical and mental health of older primipara and marital intimacy	-	2019年6月	ICN	高年初産婦の妊娠期からの介入プログラムを行い、妊娠・出産・育児への影響を明らかにした。夫が妻の心身を理解し支援することで、出産後の夫婦関係をより良いものにできる可能性があることが明らかになった。
12助産学生による看護学生へのピアエデュケーションを用いた性教育の学習効果-看護学生の学びを通して-	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会	助産学生による性と生殖に関するピアエデュケーションを受講した看護学生の学びからピアエデュケーションの学習効果を明らかにした。看護学生は助産学生のピアエデュケーションを受講することで自分自身の性と向き合い相手の意思や価値観を尊重することの重要性に気づく機会となった。
13助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討-出生直後の新生児ケア演習を通して-	-	2019年10月	第60回日本母性衛生学会	出生直後の新生児ケアのシミュレーション教育を通じた学びの内容と助産学実習に活かされた内容を明らかにした。学生は、実践場面を想定した出生直後の新生児ケアを実践し理解していた。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 佐藤亜紀

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
精神科看護師が患者に抱いた陰性感情とその対処に関する実態調査	共著	2019年3月	群馬保健学研究 vol. 38, p47-56	本研究は、精神科看護師が患者に陰性感情を抱いた出来事、その時の感情および対処行動について実態を明らかにすることを目的とした。A県内8施設の精神科病棟の看護職505名を対象に、無記名質問紙調査を行ない、304名の有効回答を得た。看護師が抱く様々な陰性感情の軽減には約1年を必要とすること、また陰性感情を抱いた出来事への対処行動については、その実施率の高さと肯定的な評価が一致しないことが明らかとなった。今後は精神科看護師が抱いた陰性感情を軽減するための効果的な対処行動を明らかにすることが課題である。「共同研究のため担当部分抽出不可能」(佐藤亜紀, 近藤浩子)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ストーマ装具の装着体験をした看護学生の学び	-	2019年8月	日本看護研究学会学術集会	本研究の目的は、ストーマ装具の装着体験をした学生の学びを明らかにすることである。ストーマ装具の装着体験を希望したA大学3年次の看護学生73名を対象に、調査票を配布し「装具装着体験をして思ったことや気づいたこと、考えたこと」の記述を依頼した。回収された調査票から学びに関する自由記述部分をデータとし、Berelson. Bの内容分析を参考に分析した。有効回答率は34.2%であった。カテゴリは、[便漏れへの危惧(19.2%)] [装具装着による不快感(18.2%)] [患者へのセルフケア支援の必要性(12.1%)] など11カテゴリが抽出された。ストーマ装具の装着体験をした看護学生は、身体的・精神的・社会的な苦痛を体験し、患者への看護の必要性を理解するとともに、装具を装着していても日常生活を送ることができることを学んでいることが示唆された。「共同研究のため担当部分抽出不可」(安田弘子、湯澤香緒里、金子吉美、小池菜穂子、佐藤亜紀、堀越政孝、萩原英子)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
精神科看護師が患者に抱いた陰性感情の軽減に関する研究	-	2019年8月	日本看護管理学会学術集会	<p>精神科看護師が患者に対して抱いた陰性感情の軽減に関連する要因を明らかにすることを目的とした。A県内の精神科病棟を有する8病院の看護師を対象に、無記名自記式質問紙を用いた留め置き調査を行った。質問紙は474名から回収され、うち301名の有効回答を分析に使用した。多重応答分析の結果、対処行動は24項目が6タイプに分類された。重回帰分析の結果、陰性感情の軽減に関連していた独立変数は、出来事が起きた時の感情の強さ ($\beta = 0.274, p < 0.001$)、出来事からの時間経過のうち1か月以上半年以内 ($\beta = 0.218, p < 0.05$)、半年以上1年以内 ($\beta = 0.208, p < 0.05$)、1年以上前 ($\beta = 0.419, p < 0.01$) であった。また対処行動のうち「起きた出来事を前向きに捉えて関わる対処」 ($\beta = 0.152, p < 0.05$)、「距離を保ち折り合いをつける対処」 ($\beta = -0.223, p < 0.001$) であった。自由度調整済み決定係数は、0.192であった。精神科看護師が抱いた陰性感情の軽減は、出来事が起きた時の感情の強さ、出来事からの時間経過によって影響を受けることが明らかとなった。また陰性感情の軽減と関連する対処行動は、起きた出来事を前向きに捉えて患者と関わることであり、患者と距離をとることや起きた出来事に折り合いをつけることは陰性感情の軽減に負の影響を与えることが示唆された。「共同研究のため担当部分抽出不可能」(佐藤亜紀, 近藤浩子)</p>

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 看護学科 氏名 吉野 めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
助産学生による看護学生へのピアエデュケーションを用いた性教育の学習効果—看護学生の学びを通して—	—	2019年 10月11日	第60回日本母性衛生学会	本研究の目的は、助産学生による看護学生への性と生殖に関するピアエデュケーションの学習効果を明らかにすることである。看護学生へのピアエデュケーション後の学習内容を調査し、授業内容や助産学生の評価は4段階評定、学習内容は自由記載として回答を得た。授業の理解度や助産学生の評価はほぼ全員が「そう思う、どちらかと言えばそう思う」と回答した。また、自由記載では、自分の人生や性に関する学び、性に関する相手の価値観や自己理解に関する学び、性と生殖に関する健康問題への看護の学びにおいてそれぞれ4カテゴリに集約された。
2 ; 助産学生への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の検討—出生直後の新生児ケア演習を通して—	—	2019年 10月12日	第60回日本母性衛生学会	本研究の目的は、出生直後の新生児ケアのシミュレーション教育を通じた学びの内容と助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の在り方を検討することである。シミュレーション教育によって実践場面を想定した出生直後の新生児のケアを理解することができ、課題を明確にした上で実習に臨むことできていた。

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 佐藤 美保

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 林 恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 看護学科 氏名 高橋 翔

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科 氏名 中 徹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
26 運動機能障害児者における姿勢による自律神経応答について～循環器系パラメータによる検討～	共 著	2019年 5月	理学療法科学 34巻5号 pp683-688	[目的]仰臥位, 伏臥位, 前傾座位が脳性まひ児者の自律神経活動に与える影響を検討した. [対象と方法]若年成人11名, 脳性まひ児者22名 (GMFCS I-IV群9名, 同V群13名)に, 仰臥位, 伏臥位, 前傾座位を15分ずつ実施, 心拍データを記録し自律神経指標 (副交感神経指標: logHF, 交感神経指標: LF/HF) を算出した. [結果]姿勢比較では対照群でLF/HFは前傾座位より伏臥位で低くなったがV群は自律神経指標に差はなかった. 重症度比較では伏臥位でV群は対照群よりlogHFが低くLF/HFが高かった. [結語]重症児は姿勢間では自律神経指標に差は認められないが, 健常者に比べると仰臥位でLF/HFが高まりやすい可能性が示された. . (多田智美, 中 徹コレスポンディングオーサー)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
【総説など】 17 『小児リハビリテーション』巻頭言	単 著	2019年10月	小児リハビリテーション 5巻 (12-13頁)	変化が小さいといわれる重症心身障害にあって, 医学的な評価から包括的な評価, 生理機能から姿勢保持機能および感覚・知覚機能にいたる評価, 学校場面での評価, 更には子ども達に活用できる比較的新しい既成の評価指標までを網羅することが重症児の問題解決になることを強調した.
18 評価総論 重症心身障害の評価は「評価のすべて」が揃うお評価のお手本です	単 著	2019年10月	小児リハビリテーション 5巻 (23-26頁)	重症心身障害と日本に生活する人の使命, 重症心身障害という障害を持って生活する人たち, 時間で変わる評価と区分のための時間で変わらない評価, ICFにおける健康の状態と生活機能の評価, ICFにおける背景因子の評価, ICFの障害の価値観に沿った評価 主観的障害と客観的障害を評価, 間隔尺度化されている評価, 改良器具などへ挑戦しその評価について解説した.
【学会発表など】 30 Study on the relationship between ages and changing "LIFE" score for 3 years as evaluation index in rehabilitation for severe motor and intellectual disabilities (SMID), Naka Toru 1), Enose Michihiko, Kobe Japan	—	2019年 6月	ISRPM 13rd. (Kobe)	It is reasonable from the developmental viewpoint that the score of physiological function and activities in communications and daily living increases as the age group is younger. Therefore, "LIFE" has time series validity in part 1 and 3. As the result of part 2 may indicate the characteristic of SMID having difficulties of getting physical function, there is a possibility that time series validity in part2 is not so weak. Further study is required. <u>Naka Toru</u> , Enose Michihiko

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
31 重症心身障害児(者)の生活機能評価指標-LIFE-の開発の到達点	—	2019年 6月	第53回日本リハビリテーション医学会学術集会(神戸)	ICFの概念により考案した生命維持機能・姿勢と運動・日常生活場・機能的活動・参加の4パート各16問で計64問の評価指標を用い、9名の療法士が2名の検者となり、初回27名、2回目30名の重心に測定を実施し、検査者間信頼性を検証した。続いて妥当性検証として66名に対しGMFCSおよびGMFMとLIFEの相関をスピアマンの順位相関で検証した。その結果、LIFEは重心の評価指標として信頼性、基準関連妥当性とも良好で、信頼性と妥当性の一部が検証された。臨床での試行が可能な段階であるとした。継続して構成概念妥当性を検証し応答性を確認してゆくこととする。 (中 徹、榎勢道彦)
32 理学療法学生の初めての長期実習前レジリエンスと評価学実習でのストレスとの関連について	—	2019年 8月	第32回教育研究大会(愛知県春日井市)	A大学理学療法学科を対象とし評価学実習前に、S-Hレジスト連乗検査を実施し、実習終了後にSRS-18による心理的ストレス反応尺度を測定し、両者の関連性を検討した。その結果、ストレス反応である無気力と総合レジリエンスの間に弱い負の相関の傾向が認められた。(鈴木学、北村達夫、浅田春美、橋口優、鳥海亮、中徹 考察について検討した)
34 研究会特別セッション 発達障害 座長	—	2019年 9月	第17回日本神経理学療法学会学術大会(愛知県春日井市)	小児神経系疾患に対する理学療に結びつく(理学療法を導く)評価の再考 ～福山型筋ジストロフィーを通して～の提案を東京女子医科大学病院リハビリテーション部 安達みちるPTに行っていたいただき、討議と合わせて座長を行った。
35 調査報告座長	—	2019年 11月	第6回日本小児理学療法学会学術大会(福岡市博多)	同学会が2018年に実施した「大学病院・一般病院以外における小児理学療法実施に関するアンケート調査報告」について、齋藤大地氏(株式会社はこぶね)および井上和広氏(北海道立子ども総合医療・療育センター)に発表いただいた。討議十合わせて座長を行った。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科 氏名 木村 朗

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
30 地域理学療法	共著	31年(2019年)	メジカルビュー社	メジカルビュー社, 全320頁, 編集: 浅川 康吉, 分担執筆: 木村朗他34名。担当: 第4章2「住民への関わり方」 1 ヘルスプロモーション、 2 公衆衛生理学療法 (267頁～273頁)。 ヘルスプロモーションでは、地域住民の健康管理における運動の関係について最新知見を加えて記述した。公衆衛生理学療法では理学療法士が関わる公衆衛生活動について述べた。本書は、地域における理学療法の科学と技術の基本原則を初学者に理解しやすいように図解を加え、理学療法のさらなる発展に貢献する人材を育成することを念頭に置きながら企画、編集された本邦における代表的な教科書である。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 通電警告装置を用いた歩行中の視覚障害者が実際に制止可能な接近者の上限速度の検討	単著	平成31年(2019年) 3月	情報処理学会 研究報告 アクセンビリティ (AAC) (2019)6. pp. 1-5	模擬駅ステーションのプラットフォーム環境にて電気刺激警報装置を使用させ、歩行中の人との衝突を回避するための接近者の速度の上限値を明らかにすることであった。対象と方法は、全盲者もしくはアイマスクを用いて視覚を遮断した弱視者 18 名に対し、5m の歩行路を白杖により歩行するよう指示し、ランダムに人が接近する状況を設定した。装置のON/OFF もランダムに設定したうえで、人接近の認識の可否を調べ、接近する人の速度を算出し、装置の反応速度に加え、警告を受けてから、制止するまでの時間および、直前の速度を求めた。通電警告装置が機能する、接近する人の速度の平均値にもとづく、可能上限速度を調べた。結果、装置使用者がおおよそ 0.9 m/秒で歩行し、接近者がおおよそ 1.3 m/秒の速度で近づく条件で、本装置の通電アラートは使用者への人接近情報を伝達し、使用者も自ら制止可能であった。
2 Degree of Information Literacy and Accessibility to Information Utilization of Pre-collision Detection Support Technology for Blind Persons	単著	平成31年(2019年) 3月	JJPHT Vol.7 No.1 (2019) pp. 1-6	視覚障害者の当事者のニーズと期待を検討し、支援技術を開発および普及させるために、情報リテラシーの程度と、視覚障害者を中心とした研究開発を促進する必要性との関係を明らかにするため、調査方法の開発をあきらかなくするとともに、ニーズ調査を行った。日本盲人連盟の協力の下にアンケート調査票を開発し、会員を対象に調査を行った。2019年5月から6月にかけて支援技術へのアクセスに関するアンケート調査票を失明者の立場からテキストベースで作成することを試みた。回答者の属性、アクセス方法、支援技術への期待を決定した。10ポイント法を使用して実行され、支援技術に対する態度と期待との関係について記述統計分析が実行されました。結果、118件の回答が得られました。電子メール使用グループと非電子メール使用グループの比較結果は、前者の方が低くなる傾向があった。(英文)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
3 超指向性スピーカーによる音のカーテンは失明者に安全な空間知覚をもたらせることができるか？ 音楽の違いの影響はあるか？	単著	令和元年 (2019年) 8月	情報処理学会 研究報告 アクセシビリティ (AAC) (2019) 12. pp. 1-6	模倣的な駅のプラットフォーム環境で超指向性スピーカー音による ”音のカーテン” に用いる音楽の違いが及ぼす、失明者が移動開始後、指示された停止線で停止する成績への影響をあきらかにすることであった。対象と方法：被験者は草津町および前橋市、東京都で生活する失明者 (n = 19)。デザイン：単一盲検無作為化対照試験。シミュレートされた環境において、被験者に白線まで垂直に歩行するよう指示し、全方向性スピーカーのノイズの中で白線に平行な方向に垂直方向に縦に 3 台の超指向性スピーカーを配置した音を面的に知覚した場合に、この音のカーテン前で止まることとした。介入条件は、音がある状態とし、365 歩のマーチと津軽三味線の 2 つを用いた。結果、全試行でノイズの中で超指向性の音を聞くことに成功した。成功率は行進曲が 89.6%、95% CI (88.7~90.1, 三味線が 98.2%、95% CI98.1~98.3, 対照条件では 5.3%、95% CI4.5~5.6であった。失明者が移動開始後、指示された停止線で有意に止まれる確率が高くなる。この組み合わせによる安全な空間知覚・定位をもたらすことが期待される。
4 Dose the Polymorphism of PGC1α Influence the PWV of the Long-lived person born in the 1940s who Experienced a Rough Meal in Early Childhood?	単著	令和元年 (2019年) 9月	JJPHPT Vol.7 No.2 (2019) pp. 1-5	沖縄県は平均寿命順位が90年代1位を保っていたが、2000年代に入り、26位になったが、依然、長寿を維持している大宜味村の超高齢者集団のコホート研究のサブ研究の1つとして、運動関連遺伝子の多型性と脈波伝搬速度の関連性を調べ、同時に、彼らの子供の頃から食事を調査し、身体の使用（習慣）の特徴を抽出した。同地域の住民85歳以上の男女、20名が参加した。結果、1940年以前の生活では低炭水化物食が中心であったことが確認された。また、PGC-1α多型S / Sは、G / Gと比較して、非優性の足のPWVを遅くする影響を示した。（英文）
5 視覚障害者における行動支援技術情報へのアクセシビリティリテラシー調査からみた支援技術への態度と期待感の現状	単著	令和元年 (2019年) 12月	情報処理学会 研究報告 アクセシビリティ (AAC) (2019) 12. pp. 1-6	模倣的な駅のプラットフォーム環境で超指向性スピーカー音による ”音のカーテン” に用いる音楽の違いが及ぼす、失明者が移動開始後、指示された停止線で停止する成績への影響をあきらかにすることであった。対象と方法：被験者は草津町および前橋市、東京都で生活する失明者 (n = 19)。デザイン：単一盲検無作為化対照試験。シミュレートされた環境において、被験者に白線まで垂直に歩行するよう指示し、全方向性スピーカーのノイズの中で白線に平行な方向に垂直方向に縦に 3 台の超指向性スピーカーを配置した音を面的に知覚した場合に、この音のカーテン前で止まることとした。介入条件は、音がある状態とし、365 歩のマーチと津軽三味線の 2 つを用いた。結果、全試行でノイズの中で超指向性の音を聞くことに成功した。成功率は行進曲が 89.6%、95% CI (88.7~90.1, 三味線が 98.2%、95% CI98.1~98.3, 対照条件では 5.3%、95% CI4.5~5.6であった。失明者が移動開始後、指示された停止線で有意に止まれる確率が高くなる。この組み合わせによる安全な空間知覚・定位をもたらすことが期待される。

その他 学会発表

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 Study of Practical Energizing Alert for Blind Persons to Know The Approach of People	単著	2019年 12月	Archives of Physical Medicine and Rehabilitation, Vol. 100, Issue 10, e125 Published in issue: October 2019 https://doi.org/10.1016/j.apmr.2019.08.373	失明者において対物、対人接近を警告するアウトプットとして従来、音や振動を利用してきたが、通電刺激を感覚情報として用いた行動支援機器を開発し、詳細な適応条件について、探索した。使用者の検知率を100%に保つ歩行速度上限値が1.3m/秒であることを示した。
1 通電警告装置を用いた歩行中の視覚障害者が実際に制止可能な接近者の上限速度の検討	—	平成31年(2019年) 3月8日	情報処理学会 第9回アクセシビリティ研究会 筑波技術大学 (茨城県つくば市)	失明者において対物、対人接近を警告するアウトプットとして従来、音や振動を利用してきたが、通電刺激を感覚情報として用いた行動支援機器を開発し、その情報システムおよび電子回路設計内容を開示し、パイロット試験にて試験した結果、90%以上の衝突回避ができたことを報告した。
181 EFFECT OF SLEEP DEPRIVATION IN STROKE PATIENTS ON VASCULAR FUNCTION: A PSEUDO RCT	—	令和元年(2019年) 5月8日～5月14日	2019年世界理学療法会議(WCPT) 学会	脳血管障害者における疑似RCTを傾向スコアマッチング手法を用いて解析した。24時間の血圧脈波伝搬速度との関連性は、彼らの体動を許した状況で24時間のABPMを腕時計型ウェアラブル血圧計で測定し、夜間、睡眠中から早朝にかけて、血圧の変動傾向の高い群と低い群に分け、群間の血圧脈波伝搬速に有意差を示したことを報告した。(英語)
182 EFFECT OF THREE DAY CONTROLLED DIET AND STEPPING MOVEMENTS WITH VIDEO FEEDBACK ON GLUCOSE METABOLISM OF YOUNG WITH PHYSICAL INACTIVITY	—	令和元年(2019年) 5月8日～5月14日	2019年世界理学療法会議(WCPT) 学会	大学生における食後血糖値の急上昇(血糖値スパイク)を持つ者が増えている実態を調査して報告した。(英語)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科

氏名

鈴木 学

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
理学療法学生の初めての長期実習前レジリエンスと評価学実習でのストレスとの関連について、	-	2019年8月	第32回教育研究大会 (中部大学春日井キャンパス)	評価学実習前にS-Hレジリエンス検査を実施し、実習終了後にSRS-18(心理的ストレス反応測定尺度)を実施し、ストレス反応の「無気力」と「総合レジリエンス」との間には弱い負の相関 ($\rho = -0.35$)があるが、有意差はみられなかった。発表：鈴木学, 北村達夫, 浅田春美, 橋口優, 鳥海亮, 中徹
理学療法学生における実習前後の認知症者イメージに関する研究	-	2019年10月	第38回関東甲信越ブロック理学療法士学会 (前橋ベイシア文化ホール)	理学療法学生のより認知症者イメージについて調査し共通因子は、1回目は6つで累積寄与率が69.54%, 3回目は5つで68.45%であった。そして、3群間において有意差がみられた。発表：藤井由衣, 鈴木学

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 理学療法 氏名 村田和香

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
キールホフナーの人間作業モデル改定第5版 翻訳（山田孝監訳，医学書院） R. Taylor : Kielhofner's Model of Human Occupation .5th edition F.A.Davis company, USA, 2017 .	単著	令和1年6月	医学書院	本書は人間作業モデルの概念的基礎を説明し、作業療法専門職としての知識と実践ための方向性を示すテキストである。第4章意志（p46-p69）、第9章作業的生活を加工すること（p151-p173）、第14章介入の過程（p243-p268）の翻訳を担当した。
作業療法の話をしよう（吉川ひろみ編）	単著	令和1年9月	医学書院	作業療法の歴史及び理論の解説本である。第2章作業療法のことば 「人間作業モデルから作業療法10の戦略へ」（p28-p43）を担当した。作業療法概論で活用している。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
脳卒中後の高次脳機能障害者が就労継続に至るまでのプロセス	共著	令和1年	作業療法の実践と科学 1 : 23-31	脳卒中後の高次脳機能障害者が就労継続に至るまでのプロセスを当事者の視点から明らかにするために実施したインタビューの分析により、障害を作ることができるような会社への働きかけや、障害の説明スキル向上に向けた当事者への支援の必要性が示された。江口みのり，高島理沙，坂上真理，村田和香
在宅復帰困難な介護老人保健施設入所者が生活する中で抱く思い	共著	令和1年	作業療法の実践と科学 1 : 32-39	在宅復帰困難な入所者が生活する中で抱く思いを明らかにするために、犯行性的面接から質的記述的分析を実施した。その結果、今後への漠然として不安が大きく、本人と共に「今後」に向き合うことの必要性が示された。杉田千秋，高島理沙，坂上真理，村田和香

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 理学療法学科 氏名 _____

目黒力 _____

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 理学療法学科 氏名

宗宮 真

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
1. 神経疾患のリハビリテーション	共著	令和元年11月 15日	南山堂	書籍の内容：神経疾患のリハビリテーションに必要な評価や治療手技が理解できるビジュアルテキストで、リハビリテーション医療が必要な神経疾患を取り上げ、疾患特性・評価・治療手技をく解説した書籍。主要な共著者、江藤文夫、和田直樹。総ページ数 306ページ、担当部分の題名 脊髄障害のリハビリテーション、担当部分 pp141-169

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科

氏名

浅田 春美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
理学療法学生の初めての長期実習前レジリエンスと評価学実習でのストレスとの関連について、	-	2019年8月	第32回教育研究大会 (中部大学春日井キャンパス)	評価学実習前にS-Hレジリエンス検査を実施し、実習終了後にSRS-18(心理的ストレス反応測定尺度)を実施し、ストレス反応の「無気力」と「総合レジリエンス」との間には弱い負の相関 ($\rho = -0.35$) があるが、有意差はみられなかった。発表：鈴木学, 北村達夫, 浅田春美, 橋口優, 鳥海亮, 中徹

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 理学療法学科 氏名

岡崎大資

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
表在温熱刺激による自律神経への影響～心拍変動による周波数解析を用いて～	-	2019. 9. 20	第27回日本物理療法学会学術大会	心拍変動を用いてホットパックの自律神経への影響を検討した。ホットパック施行中は副交感神経優位となり、施行後はその効果は減衰した。 佐藤雅浩、芥川知彰、出口純次、岸敏生、岡崎大資、井関博文、倉田浩充

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科 氏名

城下 貴司

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Morphologic Relationship between Toe Exercises and the Medial Longitudinal Arch. (足趾エクササイズと内側縦アーチとの関係)	単著	2019. 9. 4	J Nov Physiother 2019, 9: 420. open access https://www.omicsonline.org/archive/jnp-volume-9-issue-5-year-2019.html .	母趾での底屈エクササイズと母趾以外の足趾での底屈エクササイズそしてタオルカールエクササイズをそれぞれ3群に分類しナビキュラードロップテストで介入前後を比較したRCTを行った。その結果母趾外の足趾底屈エクササイズがもっとも内側縦アーチとの剛性が形成できた、各足趾を分離して運動学的に考えることの重要性を示した。一方でタオルカールエクササイズはむしろアーチが低下する傾向をしめした、臨床でイメージしている現象と異なる結果となった。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「運動器系理学療法が果たすべき役割」 —教育現場から—	—	2019. 10.	第38回関東甲信越ブロックシンポジスト	「運動器系理学療法が果たすべき役割」 —教育現場から—というテーマで講演した。本邦の理学療法教育と他国との比較をした。会員数がトップレベルに対して教育レベルはかなり遅れていることを強調した。
「運動器系理学療法が果たすべき役割」	—	2019. 10.	第38回関東甲信越ブロック 座長	「運動器系理学療法が果たすべき役割」のセッションの座長を担当した
Initial foot contact affects dynamic parameters during running	—	2019. 10.	The Third World Congress of Sports Physical Therapy	発表は近年ランニング動作解析で着目されている足部の初期接地について発表した。さらにGeneral meetingでは日本代表の一人として出席させていただいた。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科 氏名

黒川 望

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
運動機能解剖学	共著	令和元年	北國新聞社	共著者：藤原勝夫, 中村 彩, 中村 天, 清田直恵, 矢口智恵, 国田賢治, 伊禮まり子, 清田岳臣, 黒川 望

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
高齢者における森歩き運動と水中運動の健康増進効果 (査読付)	共著	令和元年	Health and Behavior Sciences, 17巻2号、67～76	健康な高齢者を対象に、森歩き運動と水中運動を実施し、そのトレーニング効果を比較した。トレーニング期間の前後に、形態、股関節可動域、血圧、下腿筋力、脚パワー、最大酸素摂取量、片脚立ち時の安定性および床振動時の予測的姿勢制御能を測定した。両運動に共通した健康増進効果は、体脂肪率の減少、底屈力、脚パワーおよび予測的姿勢制御能の向上であった。特異的な健康増進効果は、森歩き運動では片脚立ち時の左右の安定性の向上であり、水中運動では股関節可動域、背屈力および有酸素的作業能の向上であった。 (共著者：藤原勝夫、清田直恵、外山 寛、伊禮まり子、中村 天、中村 彩、清田岳臣、黒川 望) (分担：実験の実施)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
高齢者における6週間の森歩き運動と水中運動の健康増進効果	—	令和元年9月	日本健康行動科学会第18回学術大会 (札幌)	同一地域で生活する健康な高齢者を対象に、森歩き運動と屋内温水プールでの水中運動を6週間実施し、そのトレーニング効果を比較した。トレーニング期間の前後に、形態、股関節可動域、血圧、下腿筋力、脚パワー、最大酸素摂取量、片脚立ち時の安定性および床振動時の予測的姿勢制御能を測定した。両運動に共通した健康増進効果は、体脂肪率の減少、底屈力、脚パワーおよび予測的姿勢制御能の向上であった。特異的な健康増進効果は、森歩き運動では片脚立ち時の左右の安定性の向上であり、水中運動では股関節可動域、背屈力および有酸素的作業能の向上であった。 発表者：藤原勝夫, 清田直恵, 外山 寛, 伊禮まり子, 中村 天, 中村 彩, 清田岳臣, 黒川 望

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 理学療法学科 氏名

橋口 優

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
3 Crosslink 理学療法学テキスト 日常生活活動学	共著	令和2年1月31日	メジカルビュー社	脳性麻痺児者の日常生活活動に対する評価、治療に関して「脳性麻痺児者の日常生活活動 (p297-315)」の章にて、具体的方法や事例を基に執筆した。 [著者]白田 滋, 橋口優, 他

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 理学療法学生の初めての長期実習前レジリエンスと評価学実習でのストレスとの関連について果)	-	令和1年8月29日	第32回教育研究大会・教育研修会	A大学理学療法学科3年生24名を対象とし、評価学実習前にS-Hレジリエンス検査を実施し、実習終了後にSRS-18(心理的ストレス反応測定尺度)を実施し、両者の関連についてSpearmanの順位相関分析にて検討した。ストレス反応の「無気力」と「総合レジリエンス」との間には弱い負の相関($\rho = -0.35$)があるが、有意差はみられなかった。
17 学校教育現場に求められる小児の理学療法士の役割を考える	-	令和1年10月26日	第38回関東甲信越ブロック理学療法士学会 座長	学校教育現場にて勤務する理学療法士の経験と、治療効果や問題点について議論した。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 理学療法学科

氏名

北村 達夫

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
理学療法学生の初めての長期実習前レジリエンスと評価学実習でのストレスとの関連について	一	令和元年8月	第32回教育研究大会・教育研修会 (於：春日井)	A大学理学療法学科3年生24名を対象とし、評価学実習前にS-Hレジリエンス検査を実施し、実習終了後にSRS-18(心理的ストレス反応測定尺度)を実施し、両者の関連についてSpearmanの順位相関分析にて検討した。ストレス反応の「無気力」と「総合レジリエンス」との間には弱い負の相関($\rho = -0.35$)があるが、有意差はみられなかった。発表者:鈴木学, 北村達夫, 浅田春美, 橋口優, 鳥海亮, 中徹

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名 藤田 清貴

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. 臨床検査学講座 免疫検査学 第1版	共著	2019年1月	医歯薬出版	編集：窪田哲朗、藤田清貴、細井英司、梶原道子、 分担執筆：窪田哲朗、藤田清貴、細井英司、梶原道子、他 担当：第3章 (pp107-109, pp110-115, pp122-125, pp134-143, pp199-209, pp220-232) 沈降反応・凝集反応・非標識免疫測定法・免疫電気泳動法・自己免疫疾患関連検査・血清蛋白異常症関連検査
2. 臨床検査学講座 検査機器総論	共著	2019年1月	医歯薬出版	編集：三村邦裕、山藤賢 分担執筆：三村邦裕、山藤賢、藤田清貴、他 担当：第3章 E 免疫血清 (p215, pp215-216, p217, pp217-218, pp218-219) 水平回転機 (スライディングローター)・マイクロタイター (用手法)・プレートリーダー・ブロットング装置・イムノクロマトリーダー
3. 臨床検査で遭遇する 異常蛋白質 基礎から発見・解析法まで	単著	2019年3月	医歯薬出版	免疫グロブリンを中心としたヒト血清蛋白質の性状と異常蛋白質の分析法、 異常蛋白質についての考え方、および対処法など

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 植物塩基性7Sグロブリンの機能 -研究の現状と課題-	共著	2019年4月	Proteome Letters 4巻 pp19-30	マメ科植物以外ではBg7Sに結合する活性をもったペプチドであるレグインスリンがなかった。マメ科植物とそれ以外の植物のBg7Sは、相同タンパク質ではあるが、機能的に異なる方向に進化してきた可能性がある。一方、Bg7Sやレグインスリンには、血糖調節作用、血圧や血漿コレステロールの調節作用、がん細胞抗増殖作用など、ヒト、ラット、マウスに対する機能性が明らかになった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：・平野 久、藤田 清貴

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
1. 免疫血清検査におけるピットフォールの発見メカニズムとその対処法	—	2019年6月	第26回 日臨技 首都圏・関甲信支部 合同免疫血清検査研修会	特別講演：藤田清貴
2. 臨床検査におけるピットフォール発見の端緒とその発見メカニズムについて	—	2019年6月	第13回 1都2県 (東京・埼玉・千葉) 臨床化学検査研究班合同研修会	特別講演：藤田清貴
3. 極めて稀なIgE型M蛋白の発見の経緯と分子性状の解析 (ワークショップ)	—	2019年9月	第59回日本臨床化学会年次学術集会	共同演者：高橋香保里、鈴木信三1、亀子文子、藤田清貴
4. ピットフォール事例を振り返る～生体内成分と結合する免疫グロブリンの不可思議 (ワークショップ)	—	2019年9月	第59回日本臨床化学会年次学術集会	演者：藤田清貴
5. 無機リン測定値に影響を及ぼした異常蛋白質の1症例	—	2019年9月	第59回日本臨床化学会年次学術集会	共同発表者：藁谷結花、渡邊智美、蛭田沙知、長田誠、藤田清貴

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
6. 質量分析計による monoclonal IgA-アルブミン 複合体の構造解析	—	2019年9月	第59回日本臨床化学会年 次学術集会	共同発表者：川田悠貴、宮野ゆかり、木村鮎子、 古田島伸雄、 長田誠、平野久、藤田清貴
7. Cibacron Blue F3G-Aを用 いた硫酸基と反応する monoclonal IgG1の分離・分 別法に関する検討	—	2019年9月	第59回日本臨床化学会年 次学術集会	共同発表者：宮野ゆかり、石井一歩、奈良拓弥、 川田悠貴、 長田誠、平野久、藤田清貴

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 検査技術学科 氏名

亀子 光明

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
臨床検査データブック LAB DATA2019-2020	共著	令和元年年1月	医学書院	医学書院, 全1059頁, 高久文麿 監修. 担当: 検査各論 生化学検査 (103頁～104頁). この章でアミノ酸分析2種類 (チロシン, フェニ ルアラニン) の測定法, 基準値, 疾患との関連性 について解説した.
新版 臨床化学 第3版	共著	令和元年1月	講談社	講談社, 全307頁, 山善三・柏森裕三・長村洋一 (編) 担当: Chapter 3 (3.3.1; 50頁～52頁, 3.3.2; 52頁～54頁). 3.3.1では, 免疫学的測定法の免 疫化学分析法の特徴について, 3.3.2では, 免疫 比濁法, 免疫比濁法について解説した.

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

小河原 はつ江

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
最新臨床検査学講座 血液検査学 第1版第5刷	共著	2019年1月10日	医歯薬出版株式会社	臨床検査技師教育用教科書。第8章I 血小板機能検査とV凝固・線溶系分子マーカーについて分担執筆

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ノック式胸腺刺激法によるNK細胞活性の評価 (第三報)	—	2019年11月17日	第26回日本未病システム学会学術総会 (名古屋)	健常人を対象にノック式胸腺刺激法を実施し、活性化NK細胞の増加および増加した細胞上にごん化やウイルス感染などのストレスによって誘導される標的細胞を認識するNGK2D (CD314)が高発現していることを報告した。(熊谷美優、橋本梨央、白土佳子、小河原はつ江、福生吉裕)
ノック式胸腺刺激が及ぼす抑制性免疫応答への影響	—	2019年11月17日	第26回日本未病システム学会学術総会 (名古屋)	健常人を対象にノック式胸腺刺激法を実施し、NK細胞活性化時には制御性T細胞 (Treg細胞) の減少が認められ、NK細胞の活性を助長するように働いていることが示唆された。一方、このTreg細胞中のCD45RA陽性のナイーブ型Treg細胞の割合は有意の増加を認め、生体内の免疫応答はナイーブ型Treg細胞を増やすことで、免疫応答を抑制的に導く準備をしていることが示唆された。(橋本梨央、熊谷美優、白土佳子、小河原はつ江、福生吉裕)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名 木村 博一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
呼吸器診療ANDS BOOK	共著	令和元年9月	中外医薬社	喘息発作を引き起こすウイルスと診断治療について概説した。
呼吸器診療ANDS BOOK	単著	令和元年9月	中外医薬社	疫学の始祖ジョン・スノウが行った疫学研究の重要性を概説した。
呼吸器診療ANDS BOOK	単著	令和元年9月	中外医薬社	後藤新平博士が関与したとされる塩素消毒による水道水の消毒法について概説した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Antidiabetic-like Effects of from Edible Chrysanthemum "Kotobuki" and Naringenin by Activation of the PI3K/Akt Pathway and PPAR γ . (抗糖尿病薬Edible Chrysanthemum由来のNaringenin-7-O-glucosideはPI3K/Akt経路とPPAR γ を活性化する) (査読付)	共著	平成31年1月	Chem Biodivers. 2019;16(1):e1800434.	Edible Chrysanthemum由来の Naringenin-7-O-glucosideの抗糖尿病薬としての効果を検証した(研究企画、実験および主要部分の論文執筆を行った)。Nishina A, Sato D, Yamamoto J, Kobayashi-Hattori K, Hirai Y, <u>Kimura H</u> .
Predicting directions of changes in genotype proportions between norovirus seasons in Japan. (ノロウイルス遺伝子型の流行予測) (査読付)	共著	平成31年2月	Front Microbiol. 2019;10:116.	独自のアルゴリズムによるノロウイルス遺伝子型の流行予測を行った(研究企画、実験および主要部分の論文執筆を行った)。Suzuki Y, Doan YH, <u>Kimura H</u> , Shinomiya H, Shirabe K, Katayama K.
The association between documentation of Koplik spots and laboratory diagnosis of measles and other rash diseases in a national measles surveillance programme in Japan. (コプリック斑とウイルス学的な麻疹ウイルスと発熱発疹性ウイルス検出の関連) (査読付)	共著	平成31年2月	Front Microbiol. 2019;10:269.	コプリック斑とウイルス学的な麻疹ウイルスと発熱発疹性ウイルス検出の関連に関する研究を行った(筆頭著者として主要実験、論文執筆を行った)。 <u>Kimura H</u> , Shirabe K, Takeda M, Kobayashi M, Tsukagoshi H, Okayama K, Ryo A, Nagasawa K, Okabe N, Minagawa H, Kozawa K.
Detection of the Onset of the Epidemic Period of Respiratory Syncytial Virus Infection in Japan. (日本におけるRSウイルス感染症流行開始の予測) (査読付)	共著	平成31年3月	Frontiers in public health, 2019, 7:39.	日本におけるRSウイルス感染症流行開始の予測に関する研究を行った(主要著者として論文執筆を行った)。Yamagami H, <u>Kimura H</u> , Kusuda S, Kusakawa I, Hashimoto T.
PIM kinases facilitate lentiviral evasion from SAMHD1 restriction via Vpx phosphorylation. (PIMキナーゼはVpxリン酸化を介するSAMHD1制限からのレンチウイルスの回避を促進する) (査読付)	共著	平成31年4月	Nat Commun. 2019;10(1):1844.	PIMキナーゼは、Vpxリン酸化を介するSAMHD1の制限によりレンチウイルスの回避を促進することを発見した(研究企画、実験および主要部分の論文執筆を行った)。Miyakawa K, Matsunaga S, Yokoyama M, Nomaguchi M, Kimura Y, Nishi M, <u>Kimura H</u> , Sato H, Hirano H, Tamura T, Akari H, Miura T, Adachi A, Sawasaki T, Yamamoto N, Ryo A.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Variation of Human Norovirus GII Genotypes Detected in Ibaraki, Japan, During 2012-2018. (2012/18シーズンの茨城県におけるノロウイルスGII遺伝子型のバリエーション) (査読付)	共著	令和元年5月	Gut Pathog. 2019;11:26.	2012/18シーズンの茨城県におけるノロウイルスGII遺伝子型の流行バリエーションに関する研究を行った(責任著者として主要実験、論文執筆を行った)。Motoya T, Umezawa M Saito A, Goto K, Doi I, Fukaya S, Nagata N, Ikeda Y, Okayama K, Aso J, Matsushima Y, Ishioka T, Ryo A, Sasaki N, Katayama K, <u>Kimura H.</u>
Non-biogroup 1 or 2 strains of the emerging zoonotic pathogen Escherichia albertii, their proposed assignment to biogroup 3, and their commonly detected characteristics. (新興人獣病原体Escherichia albertiiの非バイオグループ1または2系統バイオグループ3への割り当ての提案と一般的に検出される特性) (査読付)	共著	令和元年7月	Front Microbiol. 2019, 10:1543.	新興人獣病原体Escherichia albertiiの非バイオグループ1または2系統バイオグループ3への割り当ての提案と一般的に検出される特性に関する研究を行った(主要著者として論文執筆を行った)。Murakami K, Maeda-Mitani E, <u>Kimura H</u> , Honda M, Ikeda T, Sugitani W, Konno T, Kawano K, Etoh Y, Sera N, Mizukoshi F, Saitoh T, Kawamura Y, Ishioka T, Ohnishi M, Oishi K, Fujimoto S.
Nationwide Molecular Epidemiology of Measles Virus in Japan Between 2008 and 2017. (2008年から2017年までの日本における麻疹ウイルスの全国分子疫学) (査読付)	共著	令和元年7月	Front Microbiol. 2019, 10:1470.	2008年から2017年までの日本における麻疹ウイルスの全国分子疫学に関する研究を行った(共著者として論文執筆を行った)。Seki F, Miyoshi M, Ikeda T, Nishijima H, Saikusa M, Itamochi M, Minagawa H, Kurata T, Ootomo T, Kajiwara J, Kato T, Komase K, Taya K, Sunagawa T, Oishi K, Okabe N, <u>Kimura H</u> , Suga S, Kozawa K, Otsuki N, Mori Y, Shirabe K, Takeda M.
Evolutionary Analysis of the VP1 and RNA-dependent RNA Polymerase Regions of Human Norovirus GII. P17-GII. 17 in 2013-2017. (2013~2017年のヒトノロウイルスGII. P17-GII. 17のVP1およびRNA依存RNAポリメラーゼ領域の進化的解析) (査読付)	共著	令和元年9月	Front Microbiol. 2019, 10:2189.	2013~2017年のヒトノロウイルスGII. P17-GII. 17のVP1およびRNA依存RNAポリメラーゼ領域の進化的解析に関する研究を行った(責任著者として研究企画、論文執筆を行った)。Matsushima Y, Mizukoshi F, Sakon N, Doan YH, Haga K, Ueki Y, Shinohara M, Motoya M, Tsukagoshi H, Nakamura N, Shigemoto N, Yoshitomi H, Okamoto-Nakagawa R, Suzuki R, Tsutsui R, Terasoma F, Takahashi T, Shimizu H, Okabe N, Nagasawa K, Aso J, Ishii H, Kuroda M, Ryo A, Katayama K, <u>Kimura H.</u>
NMR characterization of the interaction between Bcl-xL and the BH3-like motif of hepatitis B virus X protein. (Bcl-xLとB型肝炎ウイルスXタンパク質のBH3様モチーフとの相互作用のNMR特性評価) (査読付)	共著	令和元年10月	Biochem Biophys Res Commun. 518(3):445-450.	Bcl-xLとB型肝炎ウイルスXタンパク質のBH3様モチーフとの相互作用のNMR特性評価に関する研究を行った(主要著者として論文執筆を行った)。Kusunoki H, Tanaka T, Kohno T, <u>Kimura H</u> , Hosoda K, Wakamatsu K, Hamaguchi I.
Epidemiological Aspects of Escherichia albertii Outbreaks in Japan and Genetic Characteristics of the Causative Pathogen. (日本におけるEscherichia albertiiの発生の疫学的側面と原因病原体の遺伝的特徴) (査読付)	共著	令和元年10月	Foodborne Pathog Dis. 17(2):144-150.	日本におけるEscherichia albertiiの発生の疫学的側面と原因病原体の遺伝的特徴に関する研究を行った(主要著者として論文執筆を行った)。Masuda K, Ooka T, Akita H, Hiratsuka T, Takao S, Fukada M, Inoue K, Honda M, Toda J, Sugitani W, Narimatsu H, Ishioka T, Hirai S, Sekizuka T, Kuroda M, Morita Y, Hayashi T, <u>Kimura H</u> , Oishi K, Ohnishi M, Fujimoto S, Murakami K.
Molecular evolution of the hemagglutinin-neuraminidase (HN) gene in human respirovirus 3. (ヒトレスピロウイルス3の血球凝集素-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子の分子進化) (査読付)	共著	令和元年11月	Virus Res. 277:197824.	ヒトレスピロウイルス3の血球凝集素-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子の分子進化に関する研究を行った(責任著者として研究企画、論文執筆を行った)。Aso J, <u>Kimura H</u> , Ishii H, Saraya T, Kurai D, Nagasawa K, Matsushima Y, Ryo A, Takizawa H.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
(-)-0-Methylcubebin from Vitex trifolia Enhanced Adipogenesis in 3T3-L1 Cells via the Inhibition of ERK1/2 and p38MAPK Phosphorylation. (ミツバハマゴウ由来0-オルトメチルクベピンはERK1/2ならびにp38MAPKリン酸化を阻害し、3T3-L1細胞の脂肪新生を促進する) (査読付)	共著	令和元年12月	Molecules. 2019, 25(1):73.	ミツバハマゴウ由来0-オルトメチルクベピンはERK1/2ならびにp38MAPKリン酸化を阻害し、3T3-L1細胞の脂肪新生を促進に関する研究を行った(主要実験および論文執筆を行った)。Ukiya M, Sato D, Kimura H, Koketsu M, Phay N, Nishina A.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

長田 誠

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
小学生を対象とした細胞観察と染色実験の試み (査読付)	共著	平成31年3月	臨床検査学教育. 第11巻 第1号: 15-18.	夏休みの自由研究に役立つ実験を高学年の小学生に体験させた. タマネギの細胞を染色し観察することで細胞の構造や仕組みについて知ることが出来た. (データの確認と論文の校正を行った.) 岡山香里, 川田悠貴, 小河原はつ江, 木村博一, 高橋克典, 石垣宏尚, 古田島伸雄, <u>長田 誠</u> , 大河戸光章, 藤田清貴.
Soluble CLEC-2 is generated independently of ADAM10 and is increased in plasma in acute coronary syndrome: comparison with soluble GPVI. (査読付) (可溶性CLEC-2はADAM10とは無関係に生成され, 急性冠症候群では血漿中で増加する: 可溶性GPVIとの比較)	共著	令和元年9月	Int J Hematol. Vol. 110(3):285-294.	可溶性C型レクチン様受容体2(sCLEC-2)がシェードフラグメント(シェドCLEC-2)または血小板微粒子(MP-CLEC-2)と結合した全分子として放出されることを報告した. しかし, sCLEC-2生成の機構は完全には解明されていない. メタロプロテアーゼ阻害剤/刺激剤を用いた実験は, ADAM10/17がGPVIの脱離を誘導するが, CLEC-2脱離は誘導せず, sCLEC-2がMMP-2により部分的に生成されることを明らかにした. (sCLEC-2の測定と脱離に関する検討を行った.) Inoue O, <u>Osada M</u> , Nakamura J, Kazama F, Shirai T, Tsukiji N, Sasaki T, Yokomichi H, Dohi T, Kaneko M, Kurano M, Oosawa M, Tamura S, Satoh K, Takano K, Miyachi K, Daida H, Yatomi Y, Ozaki Y, Suzuki-Inoue K.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

古田島伸雄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 小学生を対象とした細胞観察と染色実験の試み (査読付)	共著	平成31年3月	臨床検査学教育 11(1) : 15-18. 2019	我々は臨床検査技師の仕事内容の理解を目的とし、小学生を対象として夏休み自由研究につながる細胞観察と染色実験を行った。小学生にとって顕微鏡を用いた細胞観察は困難であったが、自らが染色液で染色した細胞が染色されている様子に大変興味を示していた。今後は中学生、高校生を対象とした実験も企画していきたい。 (試料収集、データ解析) 共著者：岡山香里，川田悠貴，小河原はつ江，木村博一，高橋克典，石垣宏尚，古田島伸雄，長田誠，大河戸光章，藤田清貴。
2. 化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA) による骨型アルカリフォスファターゼ (BAP) 測定法の基礎性能評価および慢性腎臓病のBAPに関する検討 (査読付)	共著	平成31年4月	日本臨床検査自動化学会誌. 44 (2) : 165 - 9.	化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA) により骨型アルカリフォスファターゼ (BAP) 測定の基礎的検討を行い良好な結果が得られた。また、CKD重症度GFR 区群における血中BAP濃度の検討を行った。CKD重症度と骨折の危険度の関係性が示唆された。CKD患者におけるBAPの高値が心血管疾患の予測因子となるとの報告があるように生命予後や血管石灰化と関連していることが示されており、心血管イベントの指標としても活用できることを明らかにした。 (研究計画、検体収集、測定分析、データ解析、考察、論文執筆) (筆頭論文) 共著者：古田島伸雄，中嶋清美，町田弘樹，高橋克典，石垣宏尚，町田哲男，村上正巳，藤田清貴。
3. Association between skeletal muscle mass and serum concentrations of lipoprotein lipase, GPIHBP1, and hepatic triglyceride lipase in young Japanese men. (査読付)	共著	平成31年4月	<i>Lipids Health Dis.</i> 2019 Apr 4;18(1):84. doi: 10.1186/s12944-019-1014-7.	骨格筋における脂質代謝において、リポ蛋白質リパーゼ (LPL) は運動により骨格筋局所で活性が増加し、血中中性脂肪 (TG) 分解により得られた遊離脂肪酸をエネルギーとして利用することが知られている。骨格筋量が多いレスリング選手では、血清LPL濃度のみならず glycosylphosphatidylinositol anchored HDL binding protein 1(GPIHBP1)濃度も有意に高いことが明らかとなった。骨格筋量の増加が、循環LPLおよびGPIHBP1の増加を介してトリグリセリドに富むリポタンパク質加水分解を促進することによってエネルギー代謝の改善をもたらすことを明らかにした。 (試料収集、データ解析) 共著者：Matsumoto R, Tsunekawa K, Shoho Y, Yanagawa Y, Kotajima N, Matsumoto S, Araki O, Kimura T, Nakajima K, Murakami M.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

高橋 克典

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. 化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA) による骨型アルカリホスファターゼ (BAP) 測定法の基礎性能評価および慢性腎臓病のBAPに関する検討 (査読付)	共著	平成31年4月	日本臨床検査自動化学会 会誌 44(2) p165-169	化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA) により骨型アルカリホスファターゼ (BAP) 測定法の基礎的検討を行い良好な結果が得られた。また、CKD重症度GFR区群にける血中BAP濃度の検討を行った。CKD重症度と骨折の危険度の関係性が示唆された。CKD患者におけるBAPの高値が心血管疾患の予測因子となるとの報告があるように生命予後や血管石灰化と関連していることが示されており、心血管イベントの指標としても活用できる可能性を示した。 (測定データの考察を担当) 共著者：古田島伸雄、中嶋清美、町田弘樹、高橋克典、石垣宏尚、町田哲男、村上正巳、藤田清貴
2. Antimicrobial Activities of Dictyostelium Differentiation-Inducing Factors and Their Derivatives. (DIFおよびその誘導体による抗菌活性) (査読付)	共著	令和元年5月	Biomolecules 9(5)163-174	細胞性粘菌由来の生理活性物質DIF-1 (Differentiation-Inducing Factor-1) を化学的に修飾した30種類の合成DIF 誘導体を用いて、様々な細菌に対する抗菌活性を調べた。その結果、いくつかのDIF誘導体においてメチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) やバンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) などを含む数種のグラム陽性球菌に対する抗菌作用が確認された。ただし、今回検討したDIF誘導体の中からは、グラム陰性菌に対して抗菌活性を示す誘導体は見出されなかった。(抗菌作用の解析実験、データ解析、データの考察を担当) 共著者：Kubohara Y., Shiratsuchi Y., Ishigaki H., <u>Takahashi K.</u> , Oshima Y., Kikuchi H.
3. Halogen-Substituted Derivatives of Dictyostelium Differentiation-Inducing Factor-1 Suppress Serum-Induced Cell Migration of Human Breast Cancer MDA-MB-231 Cells in Vitro. (乳がんのモデルであるMDA-MB-231細胞におけるハロゲン化DIF誘導体による転移抑制作用) (査読付)	共著	令和元年7月	Biomolecules 9(7)256-267	ヒト乳がんモデル細胞であるMDA-MB-231細胞を用いて、各種DIF誘導体 (DIF-1、26種のDIF-1誘導体) 共存下における増殖阻害効果の解析を試みた。その結果、DIF-1の塩素基を臭素に置換したBr-DIF-1共存下において乳がん細胞の転移抑制効果 (IC50、3.8 μM) および増殖抑制効果 (IC50、>20 μM) が確認できた。また、Br-DIF-1の構造をベースにアルキル基の長さ等を改変した誘導体を作成し、MDA-MB-231細胞による同様の解析を実施したところ Br-DIF-1(+1)、Br-DIF-1(+2)、Br-DIF-3(+2) において強力な転移抑制効果が確認できた。 (データ解析、測定データの考察等を担当) 共著者：Totsuka K., Makioka Y., Iizumi Y., <u>Takahashi K.</u> , Oshima Y., Kikuchi H., Kubohara Y.

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属

検査技術学科

氏名

岡山香里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 小学生を対象とした細胞観察と染色実験の試み	共著	平成31年4月 (2019年)	日本臨床検査学教育学会, 11 (1), 15-18.	我々は、臨床検査技師の仕事内容の理解を目的とし、小学生を対象として夏休み自由研究につながる細胞観察と染色実験を行った。小学生にとって顕微鏡を用いた細胞観察は困難であったが、自らが染色した染色液で細胞が染色されている様子に大変興味を示していた。今後は中学生、高校生を対象とした実験も企画していきたい。 岡山香里, 川田悠貴, 小河原はつ江, 木村博一, 高橋克典, 石垣宏尚, 古田島伸雄, 長田誠, 大河戸光章, 藤田清貴.
2. ヒトメタニューモウイルス感染症	共著	平成31年4月 (2019年)	感染制御と予防衛生 3(1), 19-22, 2019.	ヒトメタニューモウイルスは調査が進むにしたがって、世界各国で急性呼吸器ウイルス感染症を引き起こしていることが明らかになり、院内・集団感染への関与も示されている。 木村博一, 麻生純平, 岡山香里, 皿谷健, 塚越博之
3. The association between documentation of Koplik spots and laboratory diagnosis of measles and other rash diseases in a national measles surveillance programme in Japan.	共著	平成31年4月 (2019年)	Frontiers in microbiology, 10, 269.	Koplik spotsは、はしかの病気特有の兆候と考えられていますが、包括的なウイルス学的研究はこれまで行われていない。本研究により、斑点のある症例のいくつかでは、風疹ウイルス、パルボウイルス、およびヒトヘルペスウイルス6型などの2つまたは3つのウイルスも検出された。はしかの診断マーカーとしてのKoplik spotsの感度と特異性は、それぞれ48%と80%であった。以上より、コプリックスポットは麻疹だけでなく、風疹などの他のウイルス感染症にも臨床徴候として現れることが示唆された。 Kimura H, Shirabe K, Takeda M, Kobayashi M, Tsukagoshi H, Okayama K, Ryo A, Nagasawa K, Okabe N, Minagawa H, Kozawa K. (2019).
4. ノロウイルスによる食中毒・感染性胃腸炎に関する最近の知見	共著	令和元年月 (2019年)	感染制御と予防衛生 (3)2, 103-107, 2019.	ノロウイルスは世界的にウイルス性胃腸炎の主要な原因であることが示されている。本稿において、ノロウイルスを原因とする食中毒・感染性胃腸炎の疫学や分子疫学を中心とした新たな知見を示す。 木村博一, 本谷 匠, 松島勇紀, 麻生純平, 岡山香里, 砂川爽代香, 長澤耕男.

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
5. Variation of human norovirus GII genotypes detected in Ibaraki, Japan, during 2012-2018	共著	令和元年月 (2019年)	Gut pathogens, 11(1), 26, 2019.	ヒューマンノロウイルス (HuNoV) HuNoV GIIの中で GII. 4に加えて、他のノロウイルス遺伝子型であるGII. 2、GII. 6、およびGII. 17も近年流行しているが、詳細な疫学的研究はほとんど行われていない。本研究の結果より、GII. 2、GII. 4、GII. 6、およびGII. 17を含むさまざまなHuNoV遺伝子型は、さまざまなタイプのアウトブレイクサイトと関連していることが示された。さらに、遺伝子型間の発生部位と患者のウイルス量の違いが確認された。 Motoya T, Umezawa M, Saito A, Goto, K, Doi I, Fukaya S, N Nagata, Y Ikeda, <u>K Okayama</u> , J Aso, Y Matsushima, T Ishioka, Ryo, Sasaki, K Katayama, H Kimura.
6. A study of the relationship between nuclear contour thickening, nuclear enlargement and human papillomavirus infection in squamous cells.	共著	令和元年8月 (2019年)	Cytopathology	本研究ではNILMその結果、およびASC-USの核拡大細胞とヒトパピローマウイルス (HPV) 感染の形態的特徴の関連を調べた。その結果、NILMおよびASC-US症例の核肥大細胞における核輪郭の肥厚がHPV感染に関連する細胞所見である可能性があることを示唆しています。 Iijima J, <u>Okayama K</u> , Teruya K, Hata H, Shiina N, Yabusaki H, Okodo M.
7. A Comparison of Cytomorphological Features of ASC-H Cells Based on Histopathological Results Obtained from a Colposcopic Target Biopsy Immediately after Pap smear Sampling. Asian Pacific journal of cancer prevention.	共著	令和元年8月 (2019年)	APJCP, 20(7), 2139-2143.	本研究では、液体検体塗抹標本で観察されたASC-Hの細胞形態学的特徴と、細胞診検査と同時に採取された組織標本を用い、形態学的特徴を比較した。その結果、液状検体塗抹標本でクロマチン増量、核縁の肥厚、顕著な核小体を示す小さな異形成細胞の存在は、ASC-H症例におけるCINの存在を強く示唆していることが明らかになった。 Hata H, <u>Okayama K</u> , Iijima J, Teruya K, Shiina N, Caniz T, Yabusaki H, Okodo M.

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

木村 鮎子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Network-guided analysis of hippocampal proteome identifies novel proteins that colocalize with A β in a mice model of early-stage Alzheimer's disease (初期アルツハイマー型認知症モデルマウスの海馬を用いたプロテオームのネットワーク解析による、アミロイド β 共局在タンパク質の同定)	共著	令和元年12月	Neurobiology of Disease, 2019 Dec;132:104603. doi: 10.1016/j.nbd.2019.104603. Epub 2019 Sep 5.	初期のアルツハイマー型認知症に特異的なタンパク質を同定するために、同疾患モデルマウスの海馬を用いたプロテオーム解析と、検出されたタンパク質と相互作用するタンパク質をコンピューター上で検索する、ネットワーク解析を行った。検出された8つのタンパク質について免疫プロットおよび免疫染色を行った所、これらはアルツハイマー型認知症モデルマウスにおいて特異的に増加しており、しかもアミロイド β タンパク質と共局在していたことから、本疾患のバイオマーカーとして有効であることが明らかになった。 共著者：Caleb AA, Akiyama T, Kimura A, Kimura Y, Takahashi-Jitsuki A, Nakamura H, Makiyama H, Masukawa D, Nakabayashi J, Hirano H, Nakamura F, Saito T, Saido T, Goshima Y、

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学会発表) 1 定量プロテオーム解析による骨粗鬆症の血清バイオマーカー探索	—	令和元年7月25日	日本プロテオーム学会2019年大会/第70回日本電気泳動学会総会	予測診断の難しい骨粗鬆症における骨折リスクを可能とする血清バイオマーカーの開発を目指し、27人の重症度の異なる骨粗鬆症患者の血清検体を用いたプロテオーム解析を行った。結果として、骨粗鬆症に伴う骨折(脆弱性骨折)を起こした群で特異的に見られる炎症反応や補体反応などに関わる72種類のタンパク質の検出に成功し、骨代謝と免疫系との相互作用が脆弱性骨折と大きく関わることを明らかにした。 共著者：中居 佑介・木村 鮎子・森山 佳谷乃・香川 裕之・井野 洋子・熊谷 研・齋藤 知行・木村 弥生・平野 久
2 質量分析計による monoclonal IgA-アルブミン複合体の構造解析	—	令和元年9月27日	第59回日本臨床化学会年次学術集会	免疫グロブリンのうちIgAの異常な増加が見られるIgA型多発性骨髄腫の病態機構解明を目指し、同疾患に特徴的に見られるIgA-アルブミン複合体の構成因子の解析を行った。カラム精製したIgA-アルブミン複合体を非還元SDS-PAGEで分離し、ゲルから複合体のバンドを切り出して質量分析を行った結果、本複合体は免疫グロブリンJ鎖でつながれた2量体を構成する可能性が示された。 共著者：川田 悠貴、宮野ゆかり、木村 鮎子、古田島伸雄、長田 誠、平野 久、藤田清貴、仙台国際センター

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 検査技術学科 氏名

荒木 泰行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ヒトGV期卵の体外成熟培養における卵胞液添加培養液と胚盤胞用培養液の比較検討	-	2019年5月25～26日	第60回日本卵子学会学術集会	低刺激周期で得られたGV期卵を成熟培養するため、30%卵胞液を媒精用培養液に加えた群（FF群）と卵胞液不含有の胚盤胞培養液（BL群）、および媒精用培養液のみ（G-IVF群）について比較検討を行った。BL群で1例のみ出産例が確認されている。 中楯 真朗, 藤村 佳子, 荒木 泰行, 加藤 喜愛, 剣持 智恵美, 椛嶋 香央里, 神沢 典子, 大場 奈穂子, 大貫 稔, 久保 祐子, 佐藤 雄一
抗酸化剤添加ワンステップメデイウムを用いた培養成績の検討	-	2019年11月7～8日	第64回日本生殖医学会学術講演会	抗酸化剤添加培養液について検討を行った。媒精から初期胚移植、あるいは胚盤胞までの培養に同社の抗酸化剤不含有培養液との臨床成績を比較した結果、受精率には差が無かったが、初期良好胚率において、抗酸化剤含有群で有意に良好な結果であった。 藤村佳子, 大村生和子, 加藤喜愛, 中楯真朗, 剣持智恵美, 椛嶋香央里, 神沢典子, 大場奈穂子, 荒木泰行, 大貫稔, 久保祐子, 佐藤雄一
3前核由来胚盤胞の染色体核型の検討	-	2019年11月7～8日	第64回日本生殖医学会学術講演会	ICSI後の3PN胚由来胚盤胞のTEを採取して、NGSによるPGT-A解析を行った。また、タイムラプス画像を用いてPNの直径を測定して、PGT-Aの結果を交えて考察を行った3PN胚由来胚盤胞には、3倍体の可能性が高い胚に加えて2倍体の可能性が高そうな胚も存在していた。 兼子由美, 松井有紀, 土屋翔太郎, 板倉和也, 和田淳史, 尾崎智哉, 荒木泰行, 荒木康久, 西村満

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

林 由里子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Mutations in <i>Caenorhabditis elegans</i> actin, which are equivalent to human cardiomyopathy mutations, cause abnormal actin aggregation in nematode striated muscle.	共著	2019 年	F1000Research 8, 279, 2019	Hayashi Y. , Ono K., Ono S. 【概要】肥大型心筋症においてみられる2つの代表的なアクチン遺伝子の変異(E99K, P164A)について、 <i>C. elegans</i> をモデル動物として用いた解析をおこない、それぞれの遺伝子変異が筋肉の収縮能には異常を示さないものの、野生型に比べて異常なアクチンの凝集塊を蓄積することを明らかにした。これにより、 <i>C. elegans</i> の筋肉構造がアクチンの遺伝子変異によって引き起こされる異常の特性を明らかにするための有益なモデルシステムとなることが確認された。
2. Microglial SIRP α regulates the emergence of CD11c ⁺ microglia and demyelination damage in white matter.	共著	2019 年	eLife 8, e42025, 2019 (IF=7.551)	Sato-Hashimoto M., Nozu T., Toriba R., Horikoshi A., Akaike M., Kawamoto K., Hirose A., Hayashi Y. , Nagai H., Shimizu W., Saiki A., Ishikawa T., Elhanbly R., Kotani T., Murata Y., Saito Y., Naruse M., Shibasaki K., Oldenborg P.-A., Jung S., Matozaki T., Fukazawa Y., Ohnishi H. 【概要】脳内のミクログリアに発現するSIRP α の機能を解明するため、ミクログリア特異的にSIRP α の発現を抑えた変異マウスを用いて脳の観察をおこなった。通常、ミクログリアは組織の損傷に反応して活性化し組織の修復作用および破壊作用といった働きを示すが、SIRP α 変異マウスでは修復作用のみが働き、損傷作用を持たないことを明らかにした。これらの結果から、SIRP α の組織に対する回復・修復作用のブレーキを解除することでミクログリアにおける組織への破壊作用を抑え、保護的作用のみを活性化できることが示唆された。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

石垣 宏尚

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4. 化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA)による骨型アルカリフォスファターゼ (BAP)測定法の基礎性能評価および慢性腎臓病のBAPに関する検討 (査読付)	共著	2019年4月	日本臨床検査自動化学会誌 44(2) p165-169	古田島 伸雄, 中嶋 清美, 町田 弘樹, 高橋 克典, 石垣 宏尚, 町田 哲男, 村上 正巳, 藤田 清貴 化学発光酵素免疫測定法 (CLEIA) を用い、骨型アルカリフォスファターゼ (BAP) 測定の基本検討を行った。慢性腎臓病におけるBAP測定を検討し、CKD重症度と骨折の危険度の関係性が示唆された。(測定データの考察を担当)
5. Antimicrobial Activities of Dictyostelium Differentiation-Inducing Factors and Their Derivatives. (DIFおよびその誘導体による抗菌活性) (査読付)	共著	2019年5月	Biomolecules 9(5)163-174	Kubohara Y, Shiratsuchi Y, <u>Ishigaki H</u> , Takahashi K, Oshima Y, Kikuchi H. 細胞性粘菌由来の生理活性物質DIF-1をシード化合物としたDIF誘導体を対象として、抗菌活性を解析した。その結果、黄色ブドウ球菌などのグラム陽性菌の発育阻害を認めた。(抗菌作用の解析実験、データの解析を担当)
6. Prolonged plasma glucose elevation on oral glucose tolerance test in young healthy Japanese individuals (健常若年日本人の経口糖負荷試験における血糖上昇の遷延) (査読付)	共著	2019年10月	Endocrinol Diabetes Metab. 3(1) e00098	<u>Ishigaki H</u> , Yoshida A, Araki O, Kimura T, Tsunekawa K, Shoho Y, Nara M, Aoki T, Ogiwara T, Murakami M 75g OGTTを実施した若年学生を対象に、2型糖尿病の将来リスクの解析を行った。その結果、若年日本人において約75%で2型糖尿病の高リスク群であることが示唆された。(データの解析、データの考察を担当)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 健常成人におけるこんにゃく粥の血糖上昇抑制効果の検討	-	2019年4月	第62回 糖尿病学会 (宮城)	葭田 明弘, 常川 勝彦, 木村 孝穂, 荒木 修, 牛木 和美, 正保 佳史, 石垣 宏尚, 須田 いつみ, 平本 卓, 奈良 誠人, 町田 哲男, 村上 正巳 こんにゃく粥が血糖上昇に対し、抑制効果を有する健常成人を対象に検討を行った。方法は75g OGTTとコントロールとして120分まで採血を行い検討した。(データの収集、解析を担当)
9. マウス骨格筋C2C12細胞における甲状腺ホルモン活性化とサルコペニアの病態への関与	-	2019年10月	第62回日本甲状腺学会 (群馬)	石垣宏尚, 荒木修, Larasati Martha, 常川勝彦, 木村孝雄, 村上正巳 マウス骨格筋C2C12細胞における甲状腺ホルモン活性化とサルコペニアの病態への関与について検討を行った。その結果、骨格筋分化前後においてTNF- α 、DEXによりD2発現が低下し、分化後の筋管細胞においてINSとFSKの同時添加にてD2発現の著明な上昇が認められた。(解析実験、データの解析を担当)

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 検査技術学科 氏名 藤本 友香

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Survey of the effects of internet usage on the happiness of Japanese university students	共著	2019.1	Health and Quality of Life Outcomes (2019) 17:151	日本の大学生を対象にインターネット依存に関してアンケート調査を行った。睡眠の品質、注意欠如多動性障害（ADHD）傾向、落ち込みと不安徴候データなどの集積を行った結果、非PIUグループに比して、PIUグループにはより長くインターネットを使用していた（ $P < 0.001$ ）。また、睡眠品質（ $P < 0.001$ ）の低下などが認められ、インターネットによる障害が確認された。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 検査技術学科 氏名

三浦 佑介

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
10. Determination of total, free and esterified short-chain fatty acid in human serum by liquid chromatography-mass spectrometry (LC-MS/MSによるヒト血清中の遊離型、エステル型および総短鎖脂肪酸の測定) (査読付)	共著	2019年3月	Annals of clinical biochemistry 56(2) 190-197	短鎖脂肪酸は、糖尿病や一部の癌に対して効果的であるという報告例がある。しかし、ヒトの血清中における短鎖脂肪酸の測定に関する報告は限られている。本研究ではLC-MS/MSによる測定法を確立し、健康者血清中の短鎖脂肪酸について年齢別・性別に分析した。(本人の担当部分: 実験の実施) 著者: Chen Z, Wu Y, Shrestha R, Gao Z, Zhao Y, Miura Y , Tamakoshi A, Chiba H, Hui SP
11. Serum 25-hydroxyvitamin D3 levels and poor sleep quality in a Japanese population: the DOSANCO Health Study (日本人の血清中25-ヒドロキシビタミンD3と睡眠の質の悪さ) (査読付)	共著	2019年5月	Sleep medicine 57 135-140	本研究では、ある地域の成人日本人における血清25-ヒドロキシビタミンD3と睡眠の質の低下との関係を調査した。睡眠の質の低下は、自己管理アンケートを使用して評価された。血清25-ヒドロキシビタミンD3はLC-MS/MSによって測定された。統計解析の結果、血清25-ヒドロキシビタミンD3の最低四分位群は、睡眠の質の低下と関連していた。(本人の担当部分: 実験の実施) 著者: Nakamura K, Hui SP, Ukawa S, Okada E, Nakagawa T, Okabe H, Chen Z, Miura Y , Chiba H, Tamakoshi A
12. Identification of molecular species of phosphatidylcholine hydroperoxides in human native and copper-oxidized triglyceride-rich lipoproteins (ヒトのトリグリセリドリッチリポ蛋白における銅酸化処理によるホスファチジルコリン過酸化物の分子種同定) (査読付)	共著	2019年10月 [Epub ahead of print]	Annals of clinical biochemistry	トリグリセリドが豊富なりポ蛋白(VLDLやIDL)は、アテローム性動脈硬化症の独立した予測因子だと考えられている。しかし、アテローム発生の分子レベルでの機序は不明である。本研究では、VLDLやIDL中のホスファチジルコリンについて、酸化処理前後の分子種の変化について、質量分析法を用いて分析した。今回得られたデータをもとに、ホスファチジルコリンの変化とアテローム生成についてさらなる検討を進める予定である。 Shrestha R, Chen Z, Miura Y , Yamamoto Y, Sakurai T, Chiba H, Hui SP
13. Multivariate analysis for molecular species of cholesteryl ester in the human serum (ヒト血清中におけるコレステリルエステル分子種の多変量解析) (査読付)	共著	2019年11月 [Epub ahead of print]	Analytical sciences	血中のコレステロール代謝は複雑であり、情報科学的な手法から新たな知見が得られる可能性がある。本研究では、主成分分析と因子分析をLC-MS/MSによる日本人集団の血清CEデータセットに適用した。因子分析は主成分分析よりも正確な結果をもたらすことが明らかとなった。とくにドコサヘキサエン酸エステルは一意性を持つことが、因子分析によって示唆された。(本人担当部分: 実験の実施、原稿作成) 著者: Chen Y, Hui SP, Miura Y , Kato S, Sakurai T, Chen Z, Okada E, Ukawa S, Nakagawa T, Nakamura K, Tamakoshi A, Chiba H, Minami H, Mizuta M

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24. HK-2細胞における脂肪滴とカルジオリピンの関連性についての検討	-	2019年9月	第59回日本臨床化学会年次学術集会 仙台国際センター（宮城）	ヒト近位尿細管上皮細胞に各種脂肪酸を添加し、細胞内のカルジオリピン（CL）について、質量分析によって半定量的に分析した。脂肪酸添加によってCLが有意に減少し、CL過酸化物が増加した。さらに、細胞内に形成された脂肪滴量とCL量には負の相関がみられた。脂肪酸の添加や脂肪滴の形成によって酸化ストレスが生じ、CLの減少が生じた可能性が考えられた。 ○三浦佑介，櫻井俊宏，陳 震，千葉仁志，惠淑萍
25. リゾホスファチジルエタノールアミンの定量系開発のための標準品および内部標準物質の合成	-	2019年9月	第59回日本臨床化学会年次学術集会 仙台国際センター（宮城）	我々はこれまでに、リゾリン脂質の一種であるリゾホスファチジルエタノールアミン（LPE）について、NASHモデルマウスの肝臓中LPEがコントロールマウスの肝臓中LPEより有意に減少することを見いだした。本研究では、質量分析による分子種別LPE定量法の開発を目指し、定量系に必要な内部標準物質と各標準品の合成を行った。 ○山本祐輔，櫻井俊宏，三浦佑介，陳 震，千葉仁志，惠淑萍
26. LC/MSによる糖尿病性腎症患者の尿中コレステリルエステル定量分析	-	2019年11月	第66回日本臨床検査医学会学術集会 岡山コンベンションセンター（岡山）	尿中コレステリルエステル（CE）が糖尿病性腎症の早期発見バイオマーカーとなり得るか検討した。アルブミン・クレアチニン比はコントロールと糖尿病性腎症第1期で差はみられなかった。一方、CE18:2、CE18:3、CE20:4、CE20:5は第1期で有意な増加が見られ、CE18:1では有意な減少が見られた。尿中コレステリルエステルは、糖尿病性腎症の早期診断に有用な可能性がある。 ○惠 淑萍，三浦佑介，櫻井俊宏，辻川諒哉，高田康徳，千葉仁志

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 検査技術学科

氏名

川田 悠貴

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 質量分析計を用いた monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状の解明	—	2019年9月27日	日本臨床化学会第59回 年次学術集会	IgA型多発性骨髄腫で特異的に増加する monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状を解明するため、質量分析計による構成因子の解明を行った。その結果、構成タンパク質にIgA同士を結合するために必要なJ鎖が検出されたことから、複合体形成にJ鎖が関与している可能性が高く、複合体を構成しているIgAは従来考えられてきた単量体ではなく、二量体であることが強く示唆された。 共著者：川田 悠貴、宮野 ゆかり、木村 鮎子、古田島 伸雄、長田 誠、平野 久、藤田 清貴

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. 硫酸基と反応する monoclonal IgG1の段階的 NaCl濃度勾配法による分離・精製に関する検討	-	2019年9月27日	日本臨床化学会第59回 年次学術集会	硫酸基を有するCibacron Blue F3G-Aを用い、硫酸基と反応するM蛋白を温和な条件で容易に分離・精製できるか検討を行った結果、比較的温和な条件で硫酸基と反応するIgG1のみを分離・精製する事ができた。100 mmol/L NaCl以下の濃度では分離はできず、500 mmol/L NaClでのみ分離できたことから、100～500mmol/L NaClの間にCibacron Blue F3G-Aに吸着されたIgG1を分離できるイオン強度があると考えられる。 共著者：宮野ゆかり、川田悠貴、石井一步、奈良拓弥、藤田清貴
3. monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状および構造解析	-	2019年10月13日	第64回 群馬県医学検査学会	IgA 型多発性骨髄腫で増加することが知られている monoclonal IgA-アルブミン複合体は良性疾患であるMGUSとの鑑別で注目されている。しかし、複合体の分子性状などについては明らかになっていないため、種々の解析法を用いて解明をおこなった。 非還元SDS-PAGEで分子量が推定され、質量分析計によりIgA同士を結合するJ鎖が検出されたことから複合体は二量体のIgA1分子にアルブミンが1分子もしくは2分子結合していることが示された。 共著者：川田 悠貴、宮野 ゆかり、木村 鮎子、古田島 伸雄、長田 誠、平野 久、藤田 清貴
4. 硫酸基と反応する monoclonal IgG1の分離・精製に関する検討～affinity chromatography を用いた段階的 NaCl 濃度勾配法～	-	2019年10月13日	第64回 群馬県医学検査学会	従来、寒天ゲルと反応する monoclonal (M) 蛋白例が報告され、M蛋白の判定に影響を及ぼすことが問題視されている。これらのM蛋白は、寒天ゲル中に含まれるアガロペクチンの主成分である硫酸基と反応することが報告されている。硫酸基を有するCibacron Blue F3G-Aを用い、硫酸基と反応するM蛋白を温和な条件で容易に分離・精製できるか検討を行った。その結果、比較的温和な条件 (500 mmol/L NaCl) で硫酸基と反応するIgG1のみを分離・精製する事ができた。 共著者：宮野ゆかり、川田悠貴、石井一步、奈良拓弥、古田島伸雄、藤田清貴

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 検査技術学科 氏名 宮野 ゆかり

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 硫酸基と反応する monoclonal IgG1の段階的 NaCl濃度勾配法による分離・精製に関する検討	-	2019年9月27日	第59回日本臨床化学会年次学術集会	硫酸基を有するCibacron Blue F3G-Aを用い、硫酸基と反応するM蛋白を温和な条件で容易に分離・精製できるか検討を行った結果、比較的温和な条件で硫酸基と反応するIgG1のみを分離・精製する事ができた。100 mmol/L NaCl以下の濃度では分離はできず、500 mmol/L NaClでのみ分離できたことから、100～500mmol/L NaClの間に Cibacron Blue F3G-Aに吸着されたIgG1を分離できるイオン強度があると考えられる。 共著者：宮野ゆかり・川田悠貴・石井一步・奈良拓弥・藤田清貴

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2 質量分析計を用いた monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状の解明	-	2019年9月27日	第59回日本臨床化学会年次学術集会	IgA型多発性骨髄腫で特異的に増加する monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状を解明するため、質量分析計による構成因子の解明を行った。その結果、構成タンパク質にIgA同士を結合するために必要なJ鎖が検出されたことから、複合体形成にJ鎖が関与している可能性が高く、複合体を構成しているIgAは従来考えられてきた単量体ではなく、二量体であることが強く示唆された。共著者：川田悠貴・宮野ゆかり・木村鮎子・古田島伸雄・長田誠・平野久・藤田清貴
3 硫酸基と反応する monoclonal IgG1の分離・精製に関する検討～affinity chromatography を用いた段階的 NaCl 濃度勾配法～	-	2019年10月13日	第64回群馬県医学検査学会	従来、寒天ゲルと反応する monoclonal (M) 蛋白例が報告され、M蛋白の判定に影響を及ぼすことが問題視されている。これらのM蛋白は、寒天ゲル中に含まれるアガロペクチンの主成分である硫酸基と反応することが報告されている。硫酸基を有するCibacron Blue F3G-Aを用い、硫酸基と反応するM蛋白を温和な条件で容易に分離・精製できるか検討を行った。その結果、比較的温和な条件 (500 mmol/L NaCl) で硫酸基と反応するIgG1のみを分離・精製する事ができた。共著者：宮野ゆかり・川田悠貴・石井一步・奈良拓弥・古田島伸雄・藤田清貴
4 monoclonal IgA-アルブミン複合体の分子性状および構造解析	-	2019年10月13日	第64回群馬県医学検査学会	IgA 型多発性骨髄腫で増加することが知られている monoclonal IgA-アルブミン複合体は良性疾患である患MGUSとの鑑別で注目されている。しかし複合体の分子性状などについては明らかになっていないため、種々の解析法を用いて解明をおこなった。非還元SDS-PAGEで分子量が推定され、質量分析計によりIgA同士を結合するJ鎖が検出されたことから複合体は二量体のIgA1分子にアルブミンが1分子もしくは2分子結合していることが示された。共著者：川田悠貴・宮野ゆかり・木村鮎子・古田島伸雄・長田誠・平野久・藤田清貴

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 土屋 仁

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 星野修平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
診療放射線技師養成機関における教育目標の比較検討	共著	令和元年12月	日本診療放射線学教育 Vol. 7, 2019, 1 p-6 p	<p>診療放射線技師養成学校である四年生学士過程は、大学設置基準における学士過程の要件に加え、診療放射線技師国家試験を取得するための診療放射線技師養成学校指定規則の制限を受ける。したがって、大学および学部・学科としての教育目標は、各大学の特色として明確化されることを、テキストマイニングによって明らかにした。</p> <p>本人担当本人担当；研究方法の選定、結果の評価を担当した。</p> <p>共著者；徳重佑美子、星野修平</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
医療系専門職の国家試験出題基準による学術体系分類、徳重 佑美子、大宮	—	令和元年9月	第35回日本診療放射線技師学術大会、埼玉県大宮市	<p>医療系国家資格の医療専門職は、国家試験出題基準などのガイドラインが厚生労働省から提示され、これらの用語集から、それぞれの専門職種学術体系の体系化を数理的に評価する方法として、テキストマイニングを用いて、分類した。</p> <p>本人担当箇所：研究計画、データ収集、データのコーディング、評価を担当した。</p> <p>共著者：星野修平、徳重佑美子</p>
診療放射線技師教育における臨床実習の現状に関する調査、徳重 佑美子、大宮	—	令和元年9月	第35回日本診療放射線技師学術大会、埼玉県大宮市	<p>臨床実習における教育内容、教育方法及び、臨床実習における実習生が実施可能な行為について検討するために、診療放射線技師要請所指定規則に基づく大学および臨床実習施設の調査を行い、データマイニングによって、その特徴と実践を調査検討を行った。</p> <p>本人担当箇所：研究計画、評価を担当した。</p> <p>共著者：徳重佑美子、星野修平</p>

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 酒井 健一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科

氏名

倉石 政彦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 放射線学科 氏名

渡邊 浩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
9 X線CT室の漏えい線量計算マニュアル 第1版 (公益社団法人日本放射線技術学会 関係法令委員会)	共著	2019年1月	日本放射線技術学会 https://www.jsrt.or.jp/data/wp-content/uploads/2019/01/c7c90cd1e18518b827fecb51c7dfdf4.pdf	放射線機器は設置前の事前安全評価方法として遮へい計算が義務付けられている。X線CTの遮へい計算法を示したものでわが国の標準法となっている。(能登公也, 庄司友和, 藤淵俊王, 渡邊 浩, 山口一郎, 木田哲生, 平木仁史, 堀次元気, 北山早苗, 前原善昭) (共同執筆のため担当部分抽出不可能)

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
27 医療における医療被ばくと職業被ばくの課題について (査読付)	単著	2019年6月	保健物理, 54 (1), 74 ~ 76 (2019)	医療被ばくの規制と職業被ばくの眼の水晶体の被ばく限度引き下げが放射線防護法令の改正により行われることとなっている。日本保健物理学会主催のシンポジウムの報告を兼ねて放射線診療における医療被ばくと職業被ばくの課題について報告した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
77 予防規程改訂のポイント	—	平成31年2月	日本放射線公衆安全学会第28回講習会 (東京)	平成29年4月に公布された改正放射線障害防止法により対象事業所では放射線障害予防規程の改訂が求められた。そこで、改正放射線障害防止法に基づく放射線障害予防規程を改定する場合のポイントを示した。(講演 渡邊 浩)
78 事前アンケート結果と理解の仕方	—	平成31年2月	日本放射線公衆安全学会第28回講習会 (東京)	平成29年4月に公布された改正放射線障害防止法により対象事業所では多くの対応が求められた。各事業所でどのように対応したかあるいはする予定かを聞くことはまだ対応していない事業所に参考になる。そこで、第28回講習会の参加者ならびにスタッフに行ったアンケートの結果とそのデータの理解の仕方を示した。(講演 渡邊 浩)
79 一般撮影調査結果の持つ意味と診療放射線技師の役割	—	平成31年2月	平成30年度神奈川県診療放射線技術講習会 (横浜)	(公社) 神奈川県放射線技師会では平成27年度に放射線診療の一つである一般撮影領域の医療被ばく線量の調査を行った。この結果の持つ意味と医療被ばく低減を責務とする診療放射線技師の役割について示した。(講演 渡邊 浩)
80 医療放射線安全管理のための 職員研修について (Practical proposal of a radiation safety training program for medical radiation workers)	—	2019年4月	第75回日本放射線技術学会総会学術大会 (横浜)	平成30年4月に公布された改正医療法施行規則により医療機関は医療放射線の安全管理のために関係職員に対して研修を行うことが義務付けられた。そこで、実践的な職員研修の考え方と具体例について示した。(講演 渡邊 浩)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
81 PET施設に係る放射線管理	—	2019年4月	第19回日本核医学会春季大会（東京）	PETは核医学診療技術の一つであり放射線防護関係法令を順守して実施する必要がある。主な放射線防護関係法令の一つが放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律であり、この法令では放射性同位元素等の放射線管理を義務付けている。本講演では平成29年4月に改正された放射線障害防止法の内容を中心に法令について示した。（講演 渡邊 浩）
82 放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律	—	2019年5月	2019年度放射線診療業務従事者の教育訓練（川崎）	医療放射線は放射線防護関係法令を順守して実施する必要がある。主な放射線防護関係法令の一つが放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律であり、この法令では放射性同位元素等を使用する放射線（診療）業務従事者の教育訓練を義務付けている。本講演では平成29年4月に改正された放射線障害防止法の内容を中心に法令について示した。（講演 渡邊 浩）
83 改正省令に基づく医療機関の対応と診断参考レベルの改訂状況について	—	2019年6月	FUJIFIRM MEDICAL SEMINAR 管理者向けセミナー（郡山）	医療被ばくの最適化は世界的な課題であるが、わが国は2019年3月11日に医療被ばくの適正管理等を求めた改正医療法施行規則（改正省令）を公布し、2020年4月施行とした。この改正省令に基づく管理作業は現在の医療機関の放射線部門にとって最大の関心事であることから、改正省令に基づく医療機関の具体的対応方法と最適化のツールである診断参考レベルの改訂状況を解説した。（講演 渡邊 浩）
84 研究・発表・論文作成を基礎から学んでみよう！	—	2019年7月	神奈川県放射線技師会主催セミナー（横浜）	医療機関に勤める診療放射線技師は積極的に学会発表を行っているが論文化するまでには至っていないことが多い。また、中小の医療機関では学会発表や論文作成に関するスキルが乏しく十分な教育が受けられないこともある。そこで、診療放射線技師が研究を行い、学会で発表し、論文を作成するための基礎スキルの教育講義を行った。（講演 渡邊 浩）
85 放射線診療における医療被ばくの適正管理とは？	—	2019年7月	第420回神奈川核医学研究会定例会（横浜）	医療被ばくの最適化は世界的な課題であるが、わが国は2019年3月11日に医療被ばくの適正管理等を求めた改正医療法施行規則（改正省令）を公布し、2020年4月施行とした。この改正省令に基づく管理作業は現在の医療機関の放射線部門にとって最大の関心事であることから、核医学分野を中心に改正省令に基づく医療機関の具体的対応方法を解説した。（講演 渡邊 浩）
86 神奈川県内における血管撮影/IVR分野のDRL調査	—	2019年6月	2019年度関東甲信越診療放射線技師学術大会（東京）	医療被ばくは世界的な課題であり、DRLを用いた線量管理が医療法施行規則に基づき義務化された。神奈川県内の血管撮影/IVR分野のDRL指標線量を調査し現状を報告した。この分野の線量評価には測定器とファントムが必要であり、多くの医療機関で測定できていないことを明らかにした。（岩崎真之，山本和幸，渡邊 浩）
87 Guiding light 医療放射線の管理と防護を担う	単著	2019年9月	日本放射線公衆安全学会誌 第16号 12-13p 2019	医療放射線の現場で放射線管理や放射線防護を担っているのは診療放射線技師である。一方、放射線防護関係法令の改正が続いており、作業量が増大している。このような現状の中で、どのように医療放射線管理と防護を担保していくべきかを解説した。
88 改正RI法に基づく放射線管理の具体的な対応	—	2019年9月	第35回日本診療放射線技師学術大会（大宮）	2019年に改正RI法が全面的に施行した。放射性物質を多く保管、使用しているのは医療機関である。医療機関における改正RI法に基づく放射線管理の具体的な対応について解説した。特に、放射線障害予防規程に基づく的確な放射線管理を行うことの重要性を説いた。（講演 渡邊 浩）

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
89 神奈川県におけるX線CT検査の診断参考レベル	—	2019年9月	第35回日本診療放射線技師学会大会（大宮）	医療被ばくは世界的な課題であり、線量管理は診断参考レベルを用いて最適化することが世界的に推奨されている。神奈川県内のX線CTを設置する医療機関に対する線量調査を行い、その結果を報告した。（小川泰良，曾我部和美，飯塚芳弘，渡邊 浩）
90 神奈川県内における血管撮影/IVR分野の線量	—	2019年9月	第35回日本診療放射線技師学会大会（大宮）	医療被ばくは世界的な課題であり、DRLを用いた線量管理が医療法施行規則に基づき義務化された。神奈川県内の血管撮影/IVR分野のDRL指標線量を調査し現状を報告した。現在のDRLはすべてのIVRにおいて一つの線量率を提示しているだけだが、治療部位等によって分けてDRLを提示すべきであることを提案した。（山本和幸，岩崎真之，渡邊 浩，前原善昭，田島隆人）
91 一般撮影領域の医療被ばくの最適化活動の現状について	共著	2019年9月	かながわ放射線だより 2019;72(3):26-31	J-RIMEによるわが国で初めての診断参考レベルを公開したことを受けて、神奈川県放射線技師会が県内の医療機関を対象に一般撮影領域の医療被ばくの最適化状況について調査した結果を報告した。（芹田 樹，渡邊 浩，新田正浩，関 将志，山本和幸，前原善昭）（担当 総括責任者）
92 一般撮影の撮影条件を見直そうー一般撮影における被ばく低減方法ー	共著	2019年11月	かながわ放射線だより 2019;72(4):16-18	2020年4月1日より医療法施行規則に基づいて医療被ばくを最適化することが義務付けられたことを受けて、一般撮影領域の医療被ばく線量を最適化するための方法を解説した。（坂野智一，関 将志，白川光平，新田正浩，渡邊 浩）（担当 総括責任者）
93 核医学領域におけるDRL改定準備状況報告	—	2019年12月	日本保健物理学会第52回研究発表会（青森）	2015年にわが国で初めて医療被ばくを最適化するための診断参考レベル（DRL）が公開されマスコミにも取り上げられた。それから5年経過するのを機に改訂作業が行われている。核医学領域において2019年に実施された全国調査に基づき改訂を行っているがその現況を報告した。（伊藤照生，細野 眞，阿部光一郎，飯森 隆志，五十嵐隆元，石黒雅伸，對間博之，長畑智政，渡邊 浩）

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 菅 和雄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 小川 清

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
放射性医薬品の取扱に関するアンケート調査報告	共著	2019年1月	日本核医学学会「核医学」2019年56巻1号p. 25-31	日本核医学学会「核医学領域における薬剤師の在り方検討委員会」と「放射性医薬品取り扱いガイドライン講習会ワーキンググループ」は、協働して院内調製される放射性医薬品の取扱がどのように変化しているのか調査する目的でアンケート調査を行った。全国の核医学診療施設 1,242 施設を対象として611 施設より 回答を得ており、回収率は49.2%であった。放射性医薬品取り扱いガイドラインの作成と、同講習会の有効性が示された。業務実態調査研究のため全体討議は行っているが執筆の担当部分を抽出することは不可能。間賀田 泰寛、久下 裕司、柴原 健、小泉 潔、鈴木 貴明、藤塚 一行、八島 秀明、荒野 泰、岡沢 秀彦、小川 清、小野 欽也、片瀬 哲朗、川井 恵一、倉橋 達人、小池 克美、小泉 潔、中川 貴之、藤塚 一行

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 加藤英樹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 診療放射線技師を養成する大学への訪問（実施二か年目の報告）	単著	令和01年7月	日本放射線技術学会関東部会部会誌第22号（2019年）	加藤 英樹 学会事業としての大学訪問（群馬県立県民健康科学大学、国際医療福祉大学）行い学会と大学の協力関係構築をした。編集委員長として会員向け報告を執筆した。

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名

小池正行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称 又は発表学会等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
二重スライディングボードを用いたポータブル省力化撮影法	—	2019.9	第35回日本診療放射線技師学術大会 埼玉県大宮市	<p>【目的】病棟のポータブル撮影時において患者背部へのカセット挿入は介助者を必要とすることが多く、看護師、看護助手あるいは診療放射線技師二人係という場面も少なくない。ポータブル撮影時に患者、看護師等の負担を軽減することを目的とする。</p> <p>【方法】リハビリや看護で使用する様々なスライディングシート（以下シートという）やスライディングボード（以下ボードという）等を試用して挿入しやすさの検討を行った。</p> <p>【結果】ボードを二重に重ね、その中間にカセットを挿入する撮影法を試み、患者にとって撮影時の負担が少なく、撮影者にとっても撮影の自由度を損なわないことが分かった。</p> <p>【まとめ】ポータブル撮影の省力化撮影法として提案した。</p>

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 岩井 譜憲

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 放射線学科

氏名

齋藤祐樹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 パルス X 線に対応した簡易形線量計の検討	—	2019年5月	第73回日本放射線技術学会 東京支部春期学術大会	これまで我々は半導体で構成された簡易型線量計を開発、普及に努めていた。その測定器は1パルスのみ対応であるため、パルス透視を使用している装置には適応できなかった。そこで、今回、パルス透視でも使用できるように開発したので報告する。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：小倉泉，根岸徹，齋藤祐樹
43 機械学習を用いた診断用X線装置品質管理データの異常検出の検討	—	2019年10月	第47回日本放射線技術学会秋季学術大会	開発した簡易型線量計を用いて診断用X線装置の品質管理を行っている。X線装置の安定性を確認するため、これまで基礎値を用いた時系列管理を行っているが、今回、機械学習を用いて統計処理（1変数正規分布に対する異常度）を行うことで異常を検出できるか検討し、基礎値範囲内でも有意水準5%以下の異常データを検出できたので報告する。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：齋藤祐樹，小倉泉，根岸徹
44 乳房撮影領域の簡易形半価層測定器における線質補正	—	2019年10月	第47回日本放射線技術学会秋季学術大会	4つのホトダイオードAl板を用いて、1回のX線照射で線量、照射時間、半価層を測定できる測定器を開発した。この測定器の半価層誤差は30%程度あったが、今回、新たに電離箱との一次近似線質補正を行ったことで1%以下にすることができた。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：小倉泉，根岸徹，齋藤祐樹
45 歯科口内法X線装置の精度管理システムの構築	—	2019年10月	第47回日本放射線技術学会秋季学術大会	歯科用X線装置の品質管理普及を目的に線量計講習および校正を取り入れた品質管理システムを構築した。電離箱との相互構成により、開発した測定器は2%台の高精度を示し、臨床施設で運用できることを確認した。 本人担当部分：共同執筆のため抽出不可 共同研究者：小倉泉，根岸徹，齋藤祐樹

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 谷口 杏奈

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
RT臨床実習ルートマップ	共著	令和1年5月	株式会社メジカルビュー社	臨床実習を行う基本的能力を有する学生が、臨床現場にて実習を行う際に、診療放射線業務（単純X線検査乳房撮影や超音波検査を担当）の一連の流れを提示し、実習の道標として活用できるような著書である。谷口担当 第2章 1単純X線検査 9乳房 p 58-60 第2章 VI超音波検査 44超音波検査の基礎知識と腹部の検査 p 179-184 共著者：橋本光康 星野修平 五十嵐博 樋口清孝 室井健三 谷口杏奈 他10名

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 放射線学科 氏名 今尾 仁

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 一般撮影用X線領域におけるカイワレダイコンの放射線ホルミシス効果についての検討 (査読付)	共著	平成31年2月	日本医療科学大学研究紀要 (第11号) pp. 79-85	カイワレダイコンの種子にX線を照射したのちに水耕栽培にて育成を行うことで成長速度の向上がみられるという先行研究について、一般撮影装置を用いて投与線量を変えて検証し、先行研究と同様の結果が得られなかった。(全ての統計解析処理、結果の考察、本文校正を担当した) 共著者: 吉本絵夢、秋葉憲彦、延澤忠真、今尾仁、ほか
2 操作室ドアの開閉時での診療放射線技師の被ばく (査読付)	共著	令和1年12月20日	日本医療科学大学研究紀要 (第12号) pp. 17-24	胸部一般撮影の撮影条件における操作室のドアの開扉、閉扉時での診療放射線技師の被ばくの差について比較検討した、使用状況によるが開扉時の線量は等価線量・実行線量ともに線量限度を超えないが、妊娠中の腹部表面の線量限度を超える可能性があることが確認された。(全体の考察、本文校正を担当した) 共著者: 鈴置大樹、海藤航、赤羽根秀現、今尾仁、ほか
3 表在用リニアプローブを用いた超音波画像における方位分解能測定の可能性 (査読付)	共著	令和1年12月20日	日本医療科学大学研究紀要 (第12号) pp. 75-80	医用超音波画像検査における精度管理は視覚評価に頼る部分が多く、画像の物理測定方法及び評価法は確率していない。本研究は医用放射線画像で用いられるピンホール法を応用し、PSFからMTPを求めることを試みたが、レスポンス関数の適応条件になじまない問題があり、単純な応用が不適切であることを示した。(全体の考察、校正を担当した) 共著者: 吉本絵夢、秋葉憲彦、延澤忠真、今尾仁、ほか

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27 Reduction of radiation exposure in patients and cardiologists using a noise reduction technique in cardiac catheterization and percutaneous coronary intervention(心臓カテーテル検査およびPCIにおける雑音低減技術を用いた患者と術者の被ばく低減効果) (査読付)	共著	平成31年2月1日	日本診療放射線技師会誌 J. J. A. R. T 2019. 2, vol. 66/No. 796, p. 45-57	日本診療放射線技師会誌に掲載された Dr. Masayuki Kumashiroの原著論文において、統計解析結果、ROC解析を行い、謝辞に掲載された。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28 Effects of differences in diagnostic X-ray energy on the growth of white radish sprouts	-	平成31年3月9日	The 52nd Annual Meeting of TWSRT and the International Conference of Medical Imaging	カイワレダイコンの種子にX線を照射したのちに水耕栽培にて育成を行うことで成長速度の向上がみられるという先行研究について、一般撮影装置及び、マンモグラフィ撮影装置を用いて検証し、X線照射群の方が発育速度が有意に低下するという、先行研究と同様の結果が得られなかった。(全ての統計解析処理、結果の考察、本文校正を担当した) 共著者：吉本絵夢、秋葉憲彦、延澤忠真、 <u>今尾仁</u> 、ほか。
29 仮説検定を用いた仮説検定の評価の検討	-	令和1年6月29日	2019年度関東甲信越診療放射線技師学会大会	東日本大震災以降、様々な地域と環境の放射線量の測定がされているが、仮説検定を用いた検討は散見されない。短期的な空間線量率の低下の根拠として仮説検定の適応を検討し、有効である事が示唆された。(主研究担当者として研究計画、統計解析、結果の考察、本文の構成を担当した) 共同研究者：増田大誠、 <u>今尾仁</u> 、ほか。
27 Reduction of radiation exposure in patients and cardiologists using a noise reduction technique in cardiac catheterization and percutaneous coronary intervention(心臓カテーテル検査およびPCIにおける雑音低減技術を用いた患者と術者の被ばく低減効果)(査読付)	共著	平成31年2月1日	日本診療放射線技師会誌 J. J. A. R. T 2019. 2, vol. 66/No. 796, p. 45-57	日本診療放射線技師会誌に掲載された Dr.Masayuki Kumashiroの原著論文において、統計解析結果、ROC解析を行い、謝辞に掲載された。
28 Effects of differences in diagnostic X-ray energy on the growth of white radish sprouts	-	平成31年3月9日	The 52nd Annual Meeting of TWSRT and the International Conference of Medical Imaging	カイワレダイコンの種子にX線を照射したのちに水耕栽培にて育成を行うことで成長速度の向上がみられるという先行研究について、一般撮影装置及び、マンモグラフィ撮影装置を用いて検証し、X線照射群の方が発育速度が有意に低下するという、先行研究と同様の結果が得られなかった。(全ての統計解析処理、結果の考察、本文校正を担当した) 共著者：吉本絵夢、秋葉憲彦、延澤忠真、 <u>今尾仁</u> 、ほか。
29 仮説検定を用いた仮説検定の評価の検討	-	令和1年6月29日	2019年度関東甲信越診療放射線技師学会大会	東日本大震災以降、様々な地域と環境の放射線量の測定がされているが、仮説検定を用いた検討は散見されない。短期的な空間線量率の低下の根拠として仮説検定の適応を検討し、有効である事が示唆された。(主研究担当者として研究計画、統計解析、結果の考察、本文の構成を担当した) 共同研究者：増田大誠、 <u>今尾仁</u> 、ほか。
30 付加フィルタ自動挿入機能による骨盤計測撮影の低線量化の検討	-	令和1年6月29日	2019年度関東甲信越診療放射線技師学会大会(東京)	伊藤香奈恵氏の研究における統計解析支援を行った。
31 乳幼児股関節の指摘線量の検討～低線量化を目指して～	-	令和1年6月29日	2019年度関東甲信越診療放射線技師学会大会(東京)	城尾俊氏の研究における統計解析支援を行った。
32 下肢全長撮影の低線量化の検討	-	令和1年6月29日	2019年度関東甲信越診療放射線技師学会大会(東京)	熊谷果南氏の研究における統計解析支援を行った。
30 Evaluation of spatial resolution using in ultrasonography image obtained with linear probe with half-width (リニアプローブの半値幅を利用した空間分解能の評価)	-	令和1年8月24日	The 21st Annual Vietnamese Congress of Radiology and Nuclear Medicine, 2019 The 5th Annual Philippines Vietnam Myanmar of Radiological	超音波診断装置における精度管理について、他のモダリティのように評価方法は確率していない。リニアプローブの分解能の精度管理の方法に半値層測定を用いて評価した。(研究計画、全体の考察、本文の構成を担当した) 共著者：EmuYoshimoto, NorihikoAkiba, TadamasaNobesawa, <u>MasashiImao</u> 、ほか

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30 東京都内施設における医療被ばく管理の実態調査	-	令和1年9月15日	第35回日本診療放射線技師学術大会大会要旨集 p. 180	東京都診療放射線技師会厚生調査委員会の調査として東京都の医療被ばく認定低減認定や放射線機器管理士の在席状況などを報告した。(研究計画、統計解析、全体の考察を担当した) 共著者：飯島文洋、江田哲男、斎藤誠治、 <u>今尾仁</u> 、ほか
31 X線撮影時補助者の防護エプロンの有用性に関する基礎的検討	-	令和1年9月15日	第35回日本診療放射線技師学術大会大会要旨集 p. 205	撮影体位保持の補助における被ばくの防護に対する有用性および露出部の被ばくに関する検討をし、特定の部位の被ばくが有意に高いことを報告した。(全体の考察を担当した) 共著者：角田佳祐、池野利一、延澤忠真、 <u>今尾仁</u> 、ほか

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 放射線学科

氏名

丸山 星

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21「Evaluation of the sharpness including effect of scattered radiation at an objective plane」 「被写体面における散乱線の影響を含んだ鮮鋭度評価」	—	平成31年4月	第75回 日本放射線技術学会総会学術大会 パシフィコ横浜 神奈川県	散乱線の影響を含めた被写体面のMTFの算出を目的として、理論値による計算とシミュレーションによるコントラストの変化を評価した。従来、散乱線の影響は直接線含有率によって決まるとされていたが、被写体面が変化した場合には誤差が生じる可能性があることを明らかにし、散乱線の影響を含めてMTFを求める際には十分考慮する必要があることを報告した。[英語口述発表] (実験の遂行、全体の考察、まとめ、発表などを担当) 共著者：丸山 星, 澤田 道人, 下瀬川 正幸

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 放射線学科 氏名 徳重 佑美子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 第20回流星祭企画オープン・スクール実施報告	共著	平成30年6月	群馬バース大学紀要 No. 23 pp. 27-30	2017年10月28日～29日の二日間、群馬バース大学内で行われた学園祭「第20回流星祭」で企画された「オープンスクール」において、放射線学科では5種類の公開展示が行われた。多くの一般来場者が公開展示に参加し、放射線学科1年生がスタッフとして実験や説明を担当した。学生教育及び公開実験・展示の成果を記録に残すこと及び各実験等の問題点や説明の課題などを抽出するため、来場者（総数約60名、回答48名）及び学生スタッフ（12名）それぞれにアンケートを実施した。 発表者：徳重佑美子、共同研究者：酒井健一、坂本重己、山岸貴子、土屋仁
2. 診療放射線技師養成機関における教育目標の比較検討	共著	令和元年12月	診療放射線学教育学 Vol. 7 pp. 1-6	本研究は、教育の特色が教育目標に反映されているか把握することを目的とした。方法として、文部科学大臣指定校である全35校を対象に、教育目標に着目して内容分析を行いその特長を比較検討した。なお、解析はKH Coderを用いて計量テキスト分析の手法によって行った。 各養成機関の教育目標は、解析結果において抽出された単語等で違いがみられた。このことから、教育過程にも特色が反映されている可能性が示唆され、到達目標と教育内容との整合性評価を含めたさらなる検討が必要であると考えられる。 著者：徳重佑美子、共著者：星野修平

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 内容分析を用いた臨床実習科目シラバスの基礎的検討	-	令和元年6月	2019年度関東甲信越診療放射線技師学術大会、東京都	診療放射線技師養成機関において、臨床実習で学生に求められる能力の傾向や特徴を検討することを本研究の目的とした。調査対象は、全国の養成機関のうち文部科学省指定校である全35校とし、臨床実習科目のシラバスを取得して「到達目標」を抽出し、内容分析による解析を行った。頻出150語検索では、国立・公立・私立大学のすべてで「説明」が「実施」・「実践」・「習得」より出現回数が多かった。対応分析・共起ネットワークでは、養成機関によって解析結果に違いがみられた。頻出語の結果より、技術を習得することよりも知識を説明することに重点が置かれている養成機関が多いことが予想される。また、到達目標は各養成機関が独自の基準に沿って決定している可能性が示唆される。 発表者：徳重佑美子、共同研究者：星野修平

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 内容分析を用いた臨床実 習科目シラバスの基礎的検討	-	令和元年6月	2019年度関東甲信越診療 放射線技師学会、東 京都	<p>診療放射線技師養成機関において、臨床実習で学 生に求められる能力の傾向や特徴を検討すること を本研究の目的とした。調査対象は、全国の養成 機関のうち文部科学省指定校である全35校とし、 臨床実習科目のシラバスを取得して「到達目標」 を抽出し、内容分析による解析を行った。頻出 150語検索では、国立・公立・私立大学のすべて で「説明」が「実施」・「実践」・「習得」より 出現回数が多かった。対応分析・共起ネットワ ークでは、養成機関によって解析結果に違いがみら れた。頻出語の結果より、技術を習得することよ りも知識を説明することに重点が置かれている養 成機関が多いことが予想される。また、到達目標 は各養成機関が独自の基準に沿って決定している 可能性が示唆される。</p> <p>発表者：徳重佑美子，共同研究者：星野修平</p>
2. 診療放射線技師教育にお ける臨床実習の現状に関する 調査	-	令和元年9月	第35回日本診療放射線技 師学会、埼玉県さい たま市	<p>診療放射線技師教育における臨床実習の現状を明 確にすることを目的として、無記名式質問紙調査 を行った。対象は、全国の技師養成機関（文部科 学省指定校）35校および教育の機能を持つ医療機 関である大学附属病院79施設とした。質問紙の内 容は、技師養成機関では臨床実習科目の配置、大 学附属病院では臨床実習の具体的内容とした。結 果・考察として、臨床実習は、医療機関に委任さ れ、養成機関によって内容やレベルが異なってい る可能性が示唆される。</p> <p>発表者：徳重佑美子，共同研究者：星野修平</p>
3. 医療系専門職の国家試験 出題基準による学術体系分類	-	令和元年9月	第35回日本診療放射線技 師学会、埼玉県さい たま市	<p>計量テキスト分析によって医療系専門職種の家 国試験出題基準から教育体系の特徴抽出を目的と する。方法として、診療放射線技師、看護師、 理学療法士、臨床検査技師、臨床工学技士の出題 基準をKH Coder (Ver. 3) を用いて計量テキスト分 析を行う。結果・考察として、診療放射線技師 は「検査・機器・測定・治療・情報・管理」、看 護師は「生活・支援・統合・実践」、理学療法士 は、「身体・機能・評価」、臨床検査技師は、 「検査・方法・分析・評価」、臨床工学技師は、 「機器・機械・材料・生体機能代行」などが特徴 として抽出された。また、医療系専門職の教育 体系の特徴として、看護、リハビリテーションは 「人間の生活支援」や「身体機能の評価」、医療 技術系は「検査機器や医療機械」「分析や方法と 評価」など、その主たる目的に特徴が見られた。 発表者：星野修平，共同研究者：徳重佑美子</p>

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名 島崎 綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 放射線学科 氏名

内林 由香

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 芝本隆

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
抗凝固薬	単著	令和1年8月	日本臨床工学技士会	芝本隆。血液の出血と血栓のメカニズムと、抗凝固作用と人工材料。さらには、体外循環で使用される抗凝固薬の特徴と投与方法について

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
医工連携を背景としたディスプレイ型酸素ボンベ残量警報装置の開発	共著	2019年12月	日本医療機器学会医療機器学誌 89(6) 502-509	使用中の酸素ボンベ残圧“ゼロ”を回避するため、オリジナルの酸素ボンベアラームを開発し、ボンベ内の酸素残圧をセンサーで検知してアラーム音とLEDを点滅させた。次に、院内において、完成した酸素ボンベアラームの検証試験を実施した結果、酸素ボンベアラームの有効性を評価・実証できた。酸素ボンベアラームを導入することでガス残圧の確認が容易になり、アンケート結果から目視確認の頻度を減らすことができた。吉岡淳、石山智之、八鍬純、島崎直也、加藤正太、近土真由美、芝本隆
1 高感度圧電素子を用いた連続心拍出量モニタの最適測定部位の検討(査読付)	共著	2019年9月	日本血液浄化技術学会雑誌第27巻p113-115	圧電素子を用いた循環動態モニタリング測定試みの基礎研究として生体を用いた測定を行い簡単に報告した。各測定部位ごとに、必要な力と安定性、不快感の3項目について比較した。最適測定部位の評価までを行った。西本千尋、小野哲治、芝本隆
山形県における医療現場ニーズ開取調査を通じた医療機器の開発	共著	2019年12月	日本臨床工学技士会誌 68 pp. 55-61	医療現場の課題解決のため、山形県次世代医療関連機器研究会と山形県臨床工学技士会医工連携プロジェクト委員会が協働して県内施設に対して医療現場ニーズ開取書を用いて調査を実施した。そして、収集したニーズをもとに、県内企業と連携して医療関連機器開発に取り組み、商品化に成功した。現場からのニーズが製品化され量産されるまでには知的財産等の課題は残るが、臨床工学技士主導による企業との共同開発、上市が今後期待される。吉岡淳、岡崎正信、五十嵐洋行、佐藤巧弥、江口幸也、芝本隆

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
56 過酢酸系洗浄剤使用時の装置内過酸化水素残留と配管部材への影響	-	2019年6月	日本透析医学会	渡井大介、藤倉淳、橋本貴仁、野木雅仙、末永松彦、星野正信、芝本隆
57 ヘモダイヤリフィルタのPVP溶出量からみた自動ブライミングの最適洗浄量について	-	2019年6月	日本透析医学会	橋本貴仁、渡井大介、藤倉淳、野木雅仙、末永松彦、星野正信、芝本隆
58 間歇補充型HDFの長期治療もたらす臨床効果	-	2019年6月	日本透析医学会	古屋紀良、谷本大輔、増田渉、矢口奈々子、野木雅仙、宮崎崇、八幡真弓、氏家一和、佐々木成、芝本隆
59 ニプロ社製循環血液量モニタの過料と評価	-	2019年6月	日本透析医学会	野木雅仙、古屋紀良、杉本信、谷本大輔、増田渉、谷本大輔、樋口真一、宮崎崇、八幡真弓、氏家一知、芝本隆、佐々木成
60 高感度圧電素子を用いた連続心拍出量モニタの開発	-	2019年6月	日本透析医学会	西本千尋、小野哲治、石黒隆、芝本隆
61 ET連続測定を目指した生物発光法迅速測定への試み	-	2019年6月	日本透析医学会	星野武俊、松本真澄、安田文彦、菊地史、芝本隆

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
62 通信機器およびスマート デバイスを用いた輸液 ポンプ遠隔監視システム の開発と検証試験	-	2019年6月	日本臨床モータ学会	吉岡淳、 <u>芝本隆</u> 、中根正樹、保科政実、川前金幸
63 ディスポーザブル酸素 ポンペアラムの開発と 上市	-	2019年6月	日本臨床工学技士学会	吉岡淳、八鍬純、石山智之、三春摩耶、 松田知美、今藤弘之、 <u>芝本隆</u>
64 開発したディスポ型酸素 ポンベ残量警報装置の現場 環境における検証と効果	-	2019年6月	日本医科器械学会	吉岡淳、八鍬純、石山智之、佐藤将志、 <u>芝本隆</u>
65 体重推定法を用いた簡易 身長体重計の開発	-	2019年10月	北海道東北臨床工学会	吉岡淳、近土真由美、加藤正太、島崎直也 鈴木博子、西本千尋、八鍬純、石山智之 三春摩耶、 <u>芝本隆</u>
(その他、学会など)				
01 高感度圧電素子を用いた 連続心拍出量モータの最適 測定部位の検討	-	2018年4月	日本血液浄化技術学会	西本千尋、小野哲治、 <u>芝本隆</u>
02 AYA-Pを用いた連続心拍 出量モータの有用性と今後の 展望	-	2018年4月	日本血液浄化技術学会	小野哲治、西本千尋、 <u>芝本隆</u>
03 過酢酸系除菌洗浄剤ステ アゲCAの洗浄消毒効果と 安全性	-	2018年4月	日本血液浄化技術学会	渡井大介、藤倉淳、橋本貴仁、野木雅仙 末永松彦、星野正信、 <u>芝本隆</u>
04 個人用透析装置への透析 液集中配管システムの問題点 と対策	-	2018年4月	日本血液浄化技術学会	杉本信、野木雅仙、古屋紀良、矢口奈々子 増田渉、谷本大輔、樋口真一、宮崎崇 八幡真弓、氏家一和、佐々木成、 <u>芝本隆</u>
05 ET測定に生物発光法を 導入して改めて分かった こと	-	2019年6月	日本透析医学会	今井涼麻、星野武俊、原良輔、唐沢祐介 王靖枝、菊地史、 <u>芝本隆</u>
06 本学における持続的腎 代替療法の治療開始時期と 予後について	-	2019年6月	日本透析医学会	三春摩耶、杉山陽子、吉岡淳、土谷順彦 <u>芝本隆</u>
07 NVボリマ処理膜による シールド効果の臨床評価	-	2019年6月	日本透析医学会	星野武俊、麻生さとみ、中村大志、王靖枝 菊地史、 <u>芝本隆</u>
08 濃縮排水回収システムの回収 率が塩素濃度に与える影響	-	2019年6月	日本透析医学会	高橋直志、神谷保、吉田慎吾、渡辺敏子 古屋紀良、野木雅仙、佐々木成、 <u>芝本隆</u>
10 生物発光法ET測定と大量 ろ過生菌培養から更なる 清浄化管理の有用性を検証	-	2019年6月	日本透析医学会	吉本裕、鈴木健、新井康介、高橋悠、鈴木聡宏 五十嵐恒輝、須田伸、 <u>芝本隆</u>
11 市販携帯型超音波画像 診断装置における穿刺時の 画像抽出と送らせの比較	-	2019年6月	日本透析医学会	藤倉淳、橋本貴仁、末永松彦、星野正信 野木雅仙、 <u>芝本隆</u>
12 スマートセンサを用いたロー ボンプの圧閉度の測定法	-	2019年9月	生体医工学治療学会	加藤正太、吉岡淳、草間良昌、鈴木博子 西本千尋、 <u>芝本隆</u>
13 簡易体重推定法を用いた 身長体重計の開発	-	2019年9月	北海道東北臨床工学会	吉岡淳近土真由美、加藤正太、島崎直也、 鈴木博子、西本千尋、八鍬純、石山智之 三春摩耶、 <u>芝本隆</u>
14 電磁波を利用した細胞タ ンパク質からのストレス解析と 医療分野への応用	-	2019年9月	北海道東北臨床工学会	井原有希乃、小林綾乃、佐藤絵里奈、 西本千尋、吉岡淳、 <u>芝本隆</u>
15 アミラーゼを指標としたスト レスチェックの有用性について	-	2019年9月	北海道東北臨床工学会	藤本浩太、井原有希乃、小林綾乃、佐藤絵里奈 西本千尋、吉岡淳、 <u>芝本隆</u>
16 臨床工学技士の将来像 から考える教育とは	-	2019年9月	北海道東北臨床工学会	西本千尋、吉岡淳、三春摩耶、 <u>芝本隆</u>
17 本学における持続的腎代 替療法の治療開始時期 と予後について	-	2019年9月	北海道東北臨床工学会	三春摩耶、杉山陽子、齋藤大樹、田中隆明 宇井勇気、宇野澤巖、川嶋龍彦、佐藤将志 東剛広、小沼和樹、土屋順彦、 <u>芝本隆</u>
18 超音波流量計を用いた ローボンプの吐出货量	-	2019年10月	日本体外循環医学会	加藤正太、吉岡淳、草間良昌、鈴木博子 西本千尋、 <u>芝本隆</u>
19 NVボリマ処理膜によるシールド 効果の臨床評価	-	2019年10月	日本HDF研究会	星野武俊、麻生さとみ、原良輔、王靖枝 菊地史、 <u>芝本隆</u>
20 Study on the occlusion destruction of the roller pump	-	2019年11月	The 8th meeting of the international federation for artificial organs	KATO S., YOSHIOKA J., KUSAMA Y., SUZUKI H., NISHIMOTO C. and <u>SHIBAMOTO T.</u>
・国内外招請講演・教育講演				
16 体外循環と血液凝固	-	2019年4月	東北アフェシス研究会	
17 血液透析療法と透析液	-	2019年7月	中国医療機器学会(蘇州)	
18 抗凝固薬	-	2019年8月	日本臨床工学技士会	

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 臨床工学科 氏名 尾林 徹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
当院におけるIntermediate-High risk PE患者の治療成績	共著	2019年7月	心臓 vol.51 No7(2019) 750-752	急性肺血栓塞栓のIntermediate-Highリスク患者へのDOAC単独投与の治療成績は従来のヘパリン・ワルファリン治療に比し有効性安全性について非劣性であり、新たな治療手段となりうる。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 阿部 薫

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
8. 体外循環に用いるローラーポンプの圧閉度の定量化に向けた研究—安定運転に及ぼすオクルージョンの制御因子—	共著	平成31年(2019年)	「体外循環技術」第46巻4号(2019)382-387	加藤正太、草間良昌、阿部薫、芝本隆 体外循環の還流温度を監視することが、有用であるか研究した。還流温度を監視することは、ローラーポンプの圧閉度の適切な制御へとつながり、より生理的な体外循環を実施するのに欠かせない要素と言える。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 吉岡 淳

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
調べてショック！使用済み酸素ボンベの取り扱い	単著	2019年5月	病院安全教育 第6巻第5号 pp. 10-11	酸素ボンベアラームを導入して酸素ボンベ使用中の「残量ゼロ」を回避しよう！調べてショック！あなたの施設での酸素ボンベの運用は大丈夫ですか？今日から君も酸素ボンベマスター！酸素ボンベの正しい使用方法を伝授した内容。
臨床工学技士における国際活動の現状と未来	単著	2019年7月	医工学治療 31 (2) pp. 107-111	人工透析療法、人工呼吸療法領域、心臓外科領域、不整脈治療領域、内視鏡手術領域、集中治療領域、高気圧酸素治療領域など臨床工学技士の業務は拡大の一途をたどっている。海外への臨床工学技士普及の第一歩として、日本臨床工学技士会国際交流委員会および臨床工学国際推進財団で行ってきた国際交流・活動について紹介している。
臨床工学技士の人工呼吸器遠隔監視システム開発秘話～アラーム対応を迅速で安全に！そして在宅へ！～	単著	2019年8月	Respica 17 (4) pp. 128-132	高度化した人工呼吸器を使用する上では更なる安全性が求められ、より徹底した保守管理体制の構築と稼働中の換気状態の監視が必要不可欠である。そのような中、人工呼吸器を使用している臨床現場から離れた場所にいる医師、看護師等の医療従事者が遠隔より人工呼吸器を監視でき、かつ、人工呼吸器に異常・不具合が発生した際にはリアルタイムにアラーム内容を簡単に確認できるシステムを紹介している。
酸素ボンベアラームの開発と活用	単著	2019年9月	クリニカルエンジニアリング 30 (10) pp. 970-974	酸素ボンベ内のガス残量を検知してLEDと音で通知するアラーム装置を地域の中小企業と共同開発して、酸素ボンベ内のガス残量を目視確認しないでLEDと音で監視できるようになった。また、ボンベ残量を監視する際の、監視者にかかる負担を軽減することができることについて解説している。
医工連携で医療安全！開発とは足し算の法則をぶち破ること	単著	2019年10月	病院安全教育 第7巻第2号 pp. 62-67	通常業務では1+1=2の結果を出せば良いが、開発分野では1+1=3にするべく相乗効果を発揮できる優れた開発脳について解説している。
便利で役立つ現場のワザ、酸素ボンベの残圧管理のためのワザ	単著	2019年12月	Respica 18 (1) pp. 111-115	酸素ボンベを扱う上での正しい操作方法と知識を身につけるため、『酸素ボンベ使用後のバルブ閉め忘れ』、『最大容量の勘違い』、『意図的なガスの排出』について注意喚起を促す。
医工連携で医療安全！No Life No Development	単著	2019年12月	病院安全教育 第7巻第3号 pp. 63-67	人工呼吸器ならびに輸液ポンプを使用している臨床現場から離れた場所にいる医師、看護師等の医療従事者が遠隔より医療機器を監視でき、かつ、機器に異常・不具合が発生した際にはリアルタイムにアラーム内容を簡単に確認できるシステムを紹介している。

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
医工連携を背景としたディスプレイポータブル型酸素ボンベ残量警報装置の開発	共著	2019年12月	医機学 89(6) pp. 502-509	使用中の酸素ボンベ残圧“ゼロ”を回避するため、オリジナルの酸素ボンベアラームを開発し、ボンベ内の酸素残圧をセンサーで検知してアラーム音とLEDを点滅させた。次に、院内において、完成した酸素ボンベアラームの検証試験を実施した結果、酸素ボンベアラームの有効性を評価・実証できた。酸素ボンベアラームを導入することでガス残圧の確認が容易になり、アンケート結果から目視確認の頻度を減らすことができた。(筆頭論文)吉岡淳, 石山智之, 八鍬純, 島崎直也, 加藤正太, 近土真由美, 芝本隆

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
山形県における医療現場 ニーズ開取調書を通じた医 療機器の開発	共著	2019年12月	日本臨床工学技士会誌 68 pp. 55-61	医療現場の課題解決のため、山形県次世代医療 関連機器研究会と山形県臨床工学技士会医工連 携プロジェクト委員会が協働して県内施設に対 して医療現場ニーズ開取書を用いて調査を実施 した。そして、収集したニーズをもとに、県内 企業と連携して医療関連機器開発に取り組み、 商品化に成功した。現場からのニーズが製品化 され量産されるまでには知的財産等の課題は残 るが、臨床工学技士主導による企業との共同開 発、上市が今後期待される。(筆頭論文)吉岡 淳, 岡崎正信, 五十嵐洋行, 佐藤巧弥, 江口幸 也, 芝本隆
各人工呼吸器の換気モード における一酸化窒素ガス消 費量の比較検討	共著	2019年10月	医工治療学 31(3) pp. 181-184	各人工呼吸器の換気モードにおけるNOガスの消 費量を比較検討した。新生児モードではPC- SIMV、HF0での消費量、成人モードではPC-SIMV でのNO消費量を調べた。結果、新生児モードで はPC-SIMVよりもHF0での消費量が多かった。PC- SIMVでは成人モードは小児モードよりNO消費量 が多かった。各人工呼吸器によってベースフ ローが異なり、ベースフローに応じてNO消費量 も変化していた。(共同研究につき、本人担当 分抽出不可能)三春摩弥, 吉岡淳, 中根正樹, 川前金幸

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 臨床工学科

氏名

近土 真由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 小野 哲治

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
NIRS (near-infrared spectroscopy)における脈波成分の比較	共著	2019年3月	2019年総合大会講演論文集(PDF版) P109	小野哲治、伊藤憲治、関本荘太郎、角田晃一 NIRS (near-infrared spectroscopy)の計測結果を解析することにより、認知・言語に関係した課題負荷に対する脳領域ごとの活動状況が把握できるため、センサとしてBMI (Brain-Machine Interface)への応用が可能であると他学会で発表を行ってきた。 本研究では、測定プローブ(1ch～22ch)のうち5ch(右側頭葉)、12ch(前頭葉)、17ch(左側頭葉)の左右性指標、緩変化値、脈波成分の解析および比較を行い、開発を開始した本システムにおける応用性評価、BMIへの導入につながる基本情報として脈波成分について比較検討したことについて述べた。本研究の一部は平成28および29年度科研費(25462628/26350600)の補助を受けた。
AYA-Pを用いた連続心拍出量モニタの有用性と今後の展望	共著	2019年9月	日本血液浄化技術学会雑誌 P116～P118	小野哲治、西本千尋、石黒隆 近年、心拍出量(CO:Cardiac Output)や1回拍出量(SV:Stroke Volume)など循環動態を低侵襲にリアルタイムで計測できる簡便なモニタが各社から販売されている。しかし、センサ装着時間の制限、複数のセンサ装着など非侵襲とはいえない。本研究では、太陽誘電(株)がその素材技術を使って開発した圧電素子をベースにインテリジェント化した高性能かつ超低消費電力な速度検出型の小型圧電振動センサ(AYA-P)を用いた低侵襲連続心拍出量モニタシステムを開発し、その有用性と展望について検討したことについて述べた。
高感度圧電素子を用いた連続心拍出量モニタの最適測定部位の検討	共著	2019年9月	血液浄化技術学会雑誌 P113	西本千尋、小野哲治、芝本隆、石黒隆 今回使用した高感度圧電素子(AYA-P)は心臓の鼓動から血管に伝わる微小振動を検出することでCOを測定する。したがって、検地される振動波形は大きさや形が測定部位によって異なることが予想される。本研究では高感度圧電素子AYA-Pの最適測定部位を探すため基礎的に検討したことについて述べた。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属

臨床工学科

氏名

草間良昌

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 体外循環に用いるローラーポンプの圧閉度の定量化に向けた研究—安定運転に及ぼすオクルージョンの制御因子—(査読付)	共著	令和元年	日本体外循環技術医学会誌46(4):382-387, 2019	本研究は、長時間使用のローラーポンプの圧閉度の変化による円周振れに注目し、灌流温度を圧閉度の規定因子とした。圧閉度を評価するために電気抵抗値の変化を確認した。灌流温度は、ローラーポンプの圧閉度を制御する重要因子であることが示唆された。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
加藤正太, 草間良昌, 芝本隆, 他: スマートセンサを用いたローラーポンプの圧閉度の測定法	-	令和元年年9月	生体医工学シンポジウム2019, 徳島,	稼働中の人工心肺装置の圧閉度の測定に、スマートセンサとデジタルマッチインジケータを使用して、円周振れの評価をした。さらに血液成分、血球画像を評価し、圧閉が高いほど溶血、血球形態に変化が表れた。
加藤正太, 草間良昌, 芝本隆, 他: 超音波流量計を用いたローラーポンプの吐出量	-	令和元年年10月	第45回日本体外循環技術医学会大会, 名古屋	3種類のローラーポンプを用いて、2つの圧閉度、6滴/分および13滴/分の違いによる体積流量の変化を評価した。本研究の結果より、6滴/分における体積流量の分散が多く、13滴/分の圧閉度を最適圧閉度とした。
Shota Kato, Yoshimasa Kusama and Takashi Shibamoto, et al: Study on the occlusion destruction of the roller pump	-	令和元年年11月	The 8th meeting of the international federation for artificial organs	This aimed to evaluate that it used a smart sensor and a digital match indicator to measure the fluctuation of the number of circles in order to measure the degree of closure of a working heart-lung machine. The blood autologous blood collection device was used to evaluate the blood components and blood cell images using red blood cells fractionated from the difference between the two occlusions.

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科

氏名

加藤 正太

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 体外循環に用いるローラポンプの圧閉度の定量化に向けた研究 — 安定運転に及ぼすオクルージョンの制御因子 — (査読付)	共	2019年12月	日本体外循環技術医学会 体外循環技術第46巻4号 pp382-387. (和文)	ローラポンプの長時間使用による、圧閉度の変化による円周振れに注目し、灌流温度を圧閉度の規定因子とした。圧閉度の評価を電気抵抗値に変換しことから、灌流温度はローラポンプの圧閉度を制御する重要な因子が示唆された。 (共著者：加藤正太、草間良昌、阿部薫、芝本隆)
2. 医工連携を背景としたディスプレイ型酸素ポンベ残量警報装置の開発 (査読付)	共	2019年12月	日本医療機器学会第89巻第6号pp502-509. (和文)	近年、臨床現場に医療機器が普及する中、信頼性および操作性がよい医療機器の開発が望まれている。酸素ポンベの残量が減少して、警報を発するシステムを作製し、臨床現場でとても有効であった。 (共著者：吉岡淳、八峯純、石山智之、島崎直也、加藤正太、近土真由美、松田智美、阿部義宏、芝本隆)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Measurement of occlusion of roller pump using the smart sensor.	—	2019年9月	生体医工学シンポジウム (徳島市)	稼働中のローラポンプの圧閉度の測定において、スマートセンサとデジタルマッチインジケータを用いて、円周振れの評価をした。また、自己血回収装置を用いて、血球画像の評価をした。圧閉度が高いほど、血液も溶血を起こし、高い圧閉のときのK ^t とHbとの相関が高かった。また、血球形態にも同様な現象が起きた。 (共著者：加藤正太、草間良昌、吉岡淳、他)
2. 超音波流量計を用いたローラポンプの吐出量	—	2019年10月	第45回日本体外循環技術医学会 (名古屋)	3種類のローラポンプを用いて、2種類の圧閉度(6滴/分および13滴/分)の違いによる体積流量を評価した。体積流量の評価には超音波流量計を用い、流量が彷徨するため、30秒間測定した時の最大値を評価した。本研究の結果より、6滴/分における体積流量の分散が多かったため、13滴/分の圧閉度を最適圧閉度とした。 (共著者：加藤正太、草間良昌、吉岡淳、他)
Study on the occlusion destruction of the roller pump.	—	2019年11月	IFA02019第8回国債人工臓器学術大会 (大阪市)	This aimed to evaluated that it used a smart sensor and a digital match indicator to measure the fluctuation of the number of circles in order to measure the occlusion of working CPB machine. (Shota Kato, Yoshimasa Kusama and Jun Yoshioka, etc)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 佐藤 求

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
4 工学を理解するための 応用数学 —微分方程式と物理現象—	単著	H31.4	コロナ社	微積分を中心に、双曲線関数、テイラー展開、次元解析、フーリエ展開、ラプラス変換など、物理の基礎をなす数学をまとめた。 複素数に関連する話題（ページの都合で割愛した）を付け加えれば、臨床工学科で扱うべき数学は発展的な話題までほぼ全て網羅してある。 例えば、ハーゲンポアゼイユの式の導出、LCR回路の微分方程式および減衰振動との同一視、全波整流の平均電圧など、当該科目で導出せずに進む可能性のある式を読者が導出できるようになることを目指した。全180ページ

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
5 学生実験用安定化電源の製作	単著	H31.3 (実際には12月の発行)	群馬バース大学紀要24号. 35-39	電気系実験には直流安定化電源は必須であるが、電圧可変型の製品よりも、電圧固定型で安価な物を数多くそろえた方が費用面でも、(扱うのが学生であるため)運用のスムーズさの面でも有利な場合がある。 回路自体は新規性もないよく知られたものだが、学生実験用に量産したので、電気系実験を要する他学科での運用の参考のためにも、制作報告をした。 Motom Sato

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 論理回路の実演機の製作報告	-	R1.9	臨床工学技士養成教員学術研究会, 浅草	論理回路実演機としては、本学所有の電子ブロック型よりもパネル型の方が有利なので、パネル型の論理回路実演機を製作したが、流れるLEDを回路の信号表現に利用することで非常に視覚表現に優れたものとなったので、その要求事項や回路設計を報告した。 本学助手のC.Nishimotoとの共同研究になるが、本人の担当は回路設計・製作の大部分、発表準備・口頭発表など、研究の主導的立場であり、70%程度の貢献度。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科

氏名

島崎直也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
「Computational Fluid Dynamics Analysis of the Optimal Shape for Side Holes in Indwelling Needles for Hemodialysis Comparisons of analytical and experimental results obtained for each side hole shape」(血液透析用留置針に設ける側孔の最適形状に関する数値流体力学解析—各種側孔形状に対する解析結果と実験結果の比較検討—) (査読無)	共著	2019年6月	Research bulletin, To in University of Yokohama No. 40 pp. 101-107	留置針の側孔の数や形状を変化させた解析モデルに対するCFD解析を実施した。また、実際に解析モデルと同じ形状を有する試作針を作製し、その実流量を測定することで、CFD解析の有用性について検討した。提案した側孔を有する留置針を作製するには、ステンレス製パイプを加工することで実現し、実流量を測定できることが確認できた。また、CFD解析においては流体抵抗を付加することで実流量と同様の結果を得ることができ、解析手法を確立することができた。 共著者：OKU Tomoko, SHIMAZAKI Naoya, YAMAUCHI Shinobu, MOTOHASHI Yuka, SATO Toshio, AGISHI Tetsuzo (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 鈴木 博子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. ダブルルーメンカテーテルのへばりつき発生評価システムを用いたDLC先端形状の最適化に関する検討	—	2019年6月	第58回日本生体医工学学会大会	鈴木博子、奥 知子、山内 忍、本橋由香、佐藤敏夫、阿岸鉄三 ダブルルーメンカテーテル (DLC) 使用時に脱血不良が度々発生し、治療の継続が困難となる場合がある。脱血不良の原因として、DLCの脱血孔が血管壁に吸い付くへばりつき現象であると指摘されている。へばりつき現象を低減できるDLC先端形状の最適化を最終目的とし、本研究では、へばりつき現象発生時の脱血圧変化に着目し、定量的に評価できるシステムについて検討した。
4. スマートセンサを用いたローラポンプの圧閉度の測定法	—	2019年9月	生体医工学シンポジウム 2019	加藤正太、吉岡淳、草間良昌、鈴木博子、西本千尋、芝本隆 稼働中の人工心肺装置の圧閉度の測定に、スマートセンサとデジマチックインジケータを用いて、円数振れの評価をした。また、血液自己血回収装置により、2つの圧閉度の違いを分画した赤血球を用い、血液成分および血球画像にて評価した。圧閉度の滴下数においては、圧閉が高いほど血液状態も溶血を多く、K ⁺ やHbとの相関が高かった。また、血球形態にも同様な現象が現れた。
4. 超音波流量計を用いたローラポンプの吐出量	—	2019年10月	第45回日本体外循環医学会	加藤正太、吉岡淳、草間良昌、鈴木博子、西本千尋、芝本隆 3種のローラポンプcv-8000およびBP-150、S5を用いて、2つの圧閉度6滴/分および13/分の違いによる体積流量の変化を評価した。体積流量の評価に超音波流量計を用い、灌流液に擬似血液を用いた。超音波流量計の体積流量は彷徨するため、30秒間測定したときの最大値を評価した。本研究の結果より、6滴/分における体積流量の分散が多かったため、13滴/分の圧閉度を最適圧閉度とした。
5. 簡易体重推定法を用いた身長体重の開発	—	2019年10月	第6回北海道・東北臨床工学会	吉岡淳、近土真由美、加藤正太、島崎直也、鈴木博子、西本千尋、芝本隆 仰臥位のまま患者の身長を工学的に測定し、そのデータをもとに体重を測定できる簡易身長体重計作製を試みた。意識不明症例に対しても身長、体重が測定できるため薬液投与量算出を行う上で有用性が高いと考える。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Study on the occlusion destruction of the roller pump	—	2019年11月	The 8th meeting of the international federation for artificial organs	Shota Kato, Jun Yoshioka, Yoshimasa Kusama, <u>Hiroko Suzuki</u> , Chihiro Nishimoto, Takashi Shibamoto 動作中の人工心肺の閉鎖の程度を測定するために、スマートセンサーとデジタルマッチングゲーターを使用して変動を測定したことを評価することを目的としました。血液自家採血装置を使用して、2つの閉塞間の差から分画された赤血球を使用して血液成分と血球を評価しました。
6. Effect of differing tip shapes of double-lumen catheter on sticking to the vessel wall with system for quantitative assessment of sticking phenomenon	—	2019年11月	TOIN International Symposium on iomedical engineering 2019	<u>Hiroko Suzuki</u> , Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashi, Toshio Sato, Tetsuzo Agishi DLC先端形状の各種パラメータがへばりつき現象発生に及ぼす影響について定量評価できるシステムの構築について検討した。このシステムを用いCO-DLC、SH-DLC、EH-DLCの3種類のDLCに対して、へばりつき現象発生までの時間を比較すると、CO-DLCが他のDLCに比べ、へばりつき現象発生までの時間が短いことがわかった。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 臨床工学科 氏名 西本千尋

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 高感度圧電素子を用いた連続心拍出量モニタの最適測定部位の検討(査読付)	共著	2019年9月	日本血液浄化技術学会雑誌	圧電素子を用いた循環動態モニタリング測定試みの基礎研究として生体を用いた測定を行い簡単に報告した。各測定部位ごとに、必要な力と安定性、不快感の3項目について比較した。最適測定部位の評価までを行った。 (共著者：西本千尋、小野哲治、芝本隆、他)
2 AYA-Pを用いた連続心拍出量モニタの有用性と今後の展望(査読付)	共著	2019年9月	日本血液浄化技術学会雑誌	圧電センサシステムを用いた脈波検出を応用し連続心拍出量測定システムを開発した。1拍毎の拍出量算出の原理や実際に被験者から算出した結果を中心に報告を行った。 (共著者：小野哲治、西本千尋、石黒隆)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 高感度圧電素子を用いた連続心拍出量モニタの最適測定部位の検討	-	2019年4月20日	日本血液浄化技術学会	電素子を用いた脈波測定について基礎研究を行った。耳朶、橈骨動脈、足背動脈、指先、側頭部について測定可能部位と最適部位の検討し発表した。 (共著者：西本千尋、小野哲治、芝本隆、他)
5 AYA-Pを用いた連続心拍出量モニタに有用センサの固定方法の検討	-	2019年6月29日	日本透析医学会	本研究では高感度圧電素子AYA-Pの固定方法が測定値に与える影響を観察し、最適な固定方法について検討した。結果はカプレステーブで平均および分散が少なく、他のテーブ群に比べて優れていたことを発表した。 (共著者：西本千尋、小野哲治、芝本隆、他)
6 スマートセンサを用いたローラポンプの圧閉度の測定法	-	2019年9月27日	生体医工学シンポジウム	稼働中のローラポンプの圧閉度の測定において、スマートセンサとデジマチックインジケータを用いて、円周振れの評価をした。また、自己血回収装置を用いて、血球画像の評価をした。圧閉度が高いほど、血液も溶血を起こし、高い圧閉のときのK ⁺ とHbとの相関が高かった。また、血球形態にも同様な現象が起きた。 (共著者：加藤正太、草間良昌、吉岡淳、他)
7 論理回路の実演機の作成報告	-	2019年9月21日	臨床工学養成施設教員学術研究会	論理回路を組み立てて動作を確認する実習機器をロジックトレーナーという。今回はそのロジックトレーナーを作成したためその思想、回路図、制作上の注意点などを発表した。 (共著者：佐藤求、西本千尋)
8 超音波流量計を用いたローラポンプの吐出量	-	2019年10月9日	第45回日本体外循環医学会	3種類のローラポンプを用いて、2種類の圧閉度(6滴/分および13滴/分)の違いによる体積流量を評価した。体積流量の評価には超音波流量計を用い、流量が彷徨するため、30秒間測定した時の最大値を評価した。本研究の結果より、6滴/分における体積流量の分散が多かったため、13滴/分の圧閉度を最適圧閉度とした。 (共著者：加藤正太、草間良昌、吉岡淳、他)
9 臨床工学技士の将来像から考える教育とは	-	2019年10月19日	北海道・東北臨床工学会	臨床工学科の教育理念である人間力をテーマに臨床工学技士像の将来像とその実現について本学の紹介を交え発表を行った。 (共著者：西本千尋、吉岡淳、芝本隆、他)

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 教養共通教育部 氏名

杉田 雅子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Benjamin Disraeli, 『コニングズビー』 (査読付き)	共訳	平成31年3月	Fortuna第30号 欧米言語文化学会誌	Benjamin Disraeliの小説 <i>Coningsby</i> の第4巻第9章第10章を翻訳。 B5判全72頁 担当部分：第4巻第9章、pp. 35～42 共訳者：杉田雅子、関田朋子

研究活動の記録 (2019年1月~2019年12月)

所属 教養共通教育部

浅見知市郎

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
2. Feeding in Vertebrates Evolution, Morphology, Behavior, Biomechanics	共著	2019年5月	Springer Switzerland AG Nature	本書は、脊椎動物の摂食、咀嚼、嚥下について進化、形態、行動、機能の各視点から解説する865頁にわたる成書であり、全世界の生物学系の研究者70人以上が過去の研究の集大成として執筆したものである。我々は、日本からの唯一の執筆陣として参加し、魚類を除く脊椎動物の舌の進化と特殊化についての総説を執筆した。舌の進化はその生物の生活環境、食性などによっておこり、分類上遠い種であっても共通点があったり、近い種であっても異なる点が多かったりする。 Chapter10 Evolutionary Specialization of the Tongue in Vertebrates : Structure and Function (P333~P384) Shin-ichi Iwasaki, Serkan Erdogan, <u>Tomoichiro Asami</u>

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
14. 下腹壁動脈	-	2019年3月	2018年度第12回肉眼解剖学 セミナー・新潟報告集	表記セミナーにおいて下腹壁動脈を剖出、観察した所見を報告した。下腹壁動脈は腹直筋鞘の下方外側より側腹筋群との境から腹直筋鞘内に下腹壁静脈と伴行しつつ進入し、すぐに外側にUターンする枝を出していた。その後、腹直筋に侵入し筋腹内を走っており、腹直筋を背面から剖出した。途中で腹直筋に5本の枝を出したのち、膈の上で数本の細い枝に分枝し、上腹壁動脈との交通は確認できなかった。 (P45~P46) 浅見知市郎
15. Some Examples of the Evolutionary and Morphological Specialization of the Reptilian Tongue	-	2019年3月28日	第124回日本解剖学会総会全 国学術集会 新潟	爬虫類の舌の進化について長年にわたる研究結果をまとめて報告した。ヘビ、カメレオン、カメ、クロコダイルの舌について過去の研究結果を総合し、総説的に解説した。舌の進化はその生物の生活環境、食性などによっておこり、分類上遠い種であっても共通点があったり、近い種であっても異なる点が多かったりする。 <u>Tomoichiro Asami</u> , Erdogan Serkan, Ken Yoshimura, Shin-Ich Iwasaki
16. Some Examples of the Evolutionary and Morphological Specialization of the Amphibian Tongue	-	2019年3月27日	第124回日本解剖学会総会全 国学術集会 新潟	両生類の舌の進化について長年にわたる研究結果をまとめて報告した。カエルと有尾目の舌について過去の研究結果を総合し、総説的に解説した。舌の進化はその生物の生活環境、食性などによっておこり、分類上遠い種であっても共通点があったり、近い種であっても異なる点が多かったりする。 Shin-Ich Iwasaki, Erdogan Serkan, Ken Yoshimura, <u>Tomoichiro Asami</u>

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 教養共通教育部 氏名

榎本光邦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 中途退学・休学をした大学生の精神的健康度の特徴に関する研究 －中途退学・休学をした学生と進級をした学生のUPI-RSスコアの比較－	－	令和1年9月	日本心理学会 第83回大会 (ポスター発表) 於立命館大学大阪 いばらきキャンパス	本研究では、中退した学生、休学した学生、進級した学生のUPI-RS各60項目のスコアの平均値の比較を行った。 中退群、休学群、進級群のUPI-RS各60項目のスコアについてKruskal-WallisのH検定を行ったところ、8項目について、いずれも中退群と進級群の間に差が見られた(中退群>進級群)。 差が見られた項目の内容から、大学生の学校適応には、単に精神的な健康度だけではなく、対人関係や自身についての認知も影響を及ぼしていると考えられた。
2. 感情の基礎研究からセラピーを考える －基礎心理学と人間性心理学の交差IV－	－	令和1年9月	日本人間性 心理学会 第38回大会 (自主シンポジウム) 於跡見学園大学	本企画では感情をテーマとして、基礎心理学の立場からの発表(藤木, 上田)を行い、それに対して人間性心理学(宮田)や折衷派のセラピストの立場(榎本)から指定討論がなされた。 榎本は、共感的反応への聴覚的作動記憶負荷の影響を検証することや、適度な体験の回避は精神的健康に寄与することを指摘した。 発表者: 宮田周平, 久羽康, 上田紋佳, 藤木大介, 榎本光邦

研究活動の記録（2019年1月～2019年12月）

所属 教養共通教育部 氏名

洞口貴弘

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
なし				

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし				

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
なし				

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 教養共通教育部 氏名

吉田 幸恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Tell me what you suggest, and let's do that, doctor” : Patient deliberation time during informal decision-making in clinical trials (臨床試験のインフォーマルな意思決定の際の患者の思慮期間についての研究) (査読付)	共著	平成31年1月	PLoS One 1(1) :e0211338	Haruka Nakada, Sachie Yoshida, Kaori Muto. (共同研究執筆のため本人担当部分抽出不可) 臨床試験・治験に関与経験のある患者へのインタビュー及びインターネット調査を実施。参加に決断までにかかる期間と医師の関与について考察した。患者は医師から説明される前に、臨床試験の参加はあらかじめ決めており、フォーマルな意思決定とインフォーマルな意思決定の差は数時間であることが明らかになった。患者が本来の意味のICを与えるためには、医療者側からの期間や場所が必要であると指摘した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
48. 倫理審査向け動画教材の開発 (2)	-	平成31年2月	第4回研究倫理を語る会 名古屋大学 (名古屋市中村区)	吉田幸恵、神里彩子 (筆頭演者) 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 研究公正高度化モデル開発支援事業「倫理審査の質向上を目的とした倫理審査委員会向け教材の開発」において開発している教育教材の作成工程およびその狙いについて報告した。
ロボットはどのような姿を纏うべきか—「人工知能」表紙問題への市民の眼差し	-	令和1年8月	2019年度規範・秩序研究会 研究集会 山中温泉文化会館 (石川県加賀市)	吉田幸恵 (筆頭演者) 学術雑誌「人工知能」において表紙が女性型ロボットのイラストに変更されたことについて学会内にて論争が起こったことについて、一般市民は「ロボットが女性の姿を纏っていること」をどう捉えたのか調査した結果報告を行った。
倫理審査の質の向上を目指して—倫理審査委員会向け教育教材作成の取り組み	-	令和1年11月	第14回医療の質・安全学会 学術集会 国立京都国際会館 (京都市左京区)	吉田幸恵、神里彩子 (筆頭演者) 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 研究公正高度化モデル開発支援事業「倫理審査の質向上を目的とした倫理審査委員会向け教材の開発」において開発している教育教材の利活用方法やその実態、実際にどのように委員会において使用すればよいかレクチャーを交えながら報告した。
倫理審査委員会における教育・研修の実態からみる今後の展望—一般の立場委員に対する全国調査の結果から	-	令和1年12月	第31回日本生命倫理学会 年次大会 東北大学 (仙台市青葉区)	吉田幸恵、神里彩子 (筆頭演者) 統一化されていない倫理審査委員会委員への教育環境を改善すべく、全国の一般の立場委員に対して調査を実施し、現状を把握し、今後どのような研修体制が良いか検討した。

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 教養共通教育部 氏名

衣 川 隆

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし				

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
なし				

研究活動の記録 (2019年1月～2019年12月)

所属 大学院 氏名 平野 久

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Network-guided analysis of hippocampal proteome identifies novel proteins that colocalize with A β in a mice model of early-stage Alzheimer's disease. Neurobiol Dis. 104603, 2019. (海馬プロテオームのネットワーク分析によって、初期のアルツハイマー病のマウスモデルでA β と共局在する新規タンパク質を特定した)(査読付)	共著	2019年	Neurobiol. Dis. 104603.	アルツハイマー病(AD)の初期段階で発現するタンパク質を特定するために、疾患の前臨床段階でADの若いAppNL-Fマウスモデルの海馬のプロテオーム解析を実施した。AppNL-Fマウスで発現変動が見られたタンパク質は、A β クリアランス、炎症性免疫応答、輸送、ミトコンドリア代謝、およびグリア細胞増殖に関連する経路に関連するものであった。インタクトーム解析や免疫プロットによりADとの関連を検証した。(質量分析、論文作成に関わった。)(共著者: Aladeokin, A.C., Akiyama, T., Kimura, A., Kimura, Y., Takahashi-Jitsuki, A., Nakamura, H., Makihara, H., Masukawa, D., Nakabayashi, J., <u>Hirano, H.</u> , Nakamura, F., Saito, T., Saido, T. and Goshima, Y.)
2. Two distinct mechanisms target the autophagy-related E3 complex to the pre-autophagosomal structure. (オートファジー関連E3複合体をプレオートファゴソーム構造にターゲットするメカニズム)(査読付)	共著	2019年	eLife. 8, e43088.	オートファジーでは、Atgタンパク質がオートファゴソームの形成を開始するためにプレオートファゴソーム構造(PAS)を構築する。オートファゴソームの形成に必要なタンパク質複合体Atg12-Atg5-Atg16が、PASの足場にターゲティングされるメカニズムが明らかになった。(タンパク質複合体の解析に関わった。)(共著者: Harada, K., Kotani, T., Kirisako, H., Sakoh-Nakatogawa, M., Oikawa, Y., Kimura, Y., <u>Hirano, H.</u> , Yamamoto, H., Ohsumi, Y. and Nakatogawa, H.)
3. Proteomic analysis of exosome-enriched fractions derived from cerebrospinal fluid of amyotrophic lateral sclerosis patients. (筋萎縮性側索硬化症患者の脳脊髄液由来のエキソソーム濃縮画分のプロテオーム解析)(査読付)	共著	2019年	Neurosci Res. in press.	筋萎縮性側索硬化症(ALS)に関連する新しい候補バイオマーカーとタンパク質を識別するために、散发性ALS患者の脳脊髄液(CSF)から分離されたエキソソーム濃縮画分のプロテオーム解析を行った。ALSに由来するCSFのエキソソーム濃縮画分が最も増加したタンパク質は、核小体機能と密接に関連する新規INHATリプレッサー(NIR)であった。免疫組織化学的分析により、ALS患者の運動ニューロンの核でNIRが減少することがわかった。(タンパク質複合体の解析に関わった。)(共著者: Hayashi, N., Doi, H., Kurata, Y., Kagawa, H., Atobe, Y., Funakoshi, K., Tada, M., Katsumoto, A., Tanaka, K., Kunii, M., Nakamura, H., Takahashi, K., Takeuchi, H., Koyano, S., Kimura, Y., <u>Hirano, H.</u> and Tanaka, F.)
4. PIM kinases facilitate lentiviral evasion from SAMHD1 restriction via Vpx phosphorylation. (PIMキナーゼは、Vpxリン酸化を介したSAMHD1制限からのレンチウイルス忌避を促進する)(査読付)	共著	2019年	Nat. Commun. 10, 1844.	レンチウイルスは、内在性の宿主制限因子SAMHD1に対抗するために補助タンパク質Vpxを獲得するように進化した。Vpxのリン酸化がSAMHD1に対する活性を実際に調節していることが明らかになった。PIMキナーゼであるPIM1およびPIM3はSer13でHIV-2 Vpxをリン酸化し、VpxとSAMHD1の相互作用を安定化するため、SAMHD1のエピキチンを介したタンパク質分解が促進されることがわかった。(プロテオーム解析に関わった。)(共著者: Miyakawa, K., Matsunaga, S., Yokoyama, M., Nomaguchi, M., Kimura, Y., Nishi, M., Kimura, H., Sato, H., Hirano, H., Tamura, T., Akari, H., Miura, T., Adachi, A., Sawasaki, T., Yamamoto, N. and Ryo, A.)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
5. Common Repository of FBS Proteins (cRFP) to be added to a search database for mass spectrometric analysis of cell secretome. (細胞セクレトームの質量分析のために検索データベースに追加されるべきFBSタンパク質の共通リポジトリ (cRFP)) (査読付)	共著	2019年	J. Proteome Res. 18, 3800-3806.	細胞セクレトームの質量分析におけるデータ検索でcRFP (FBSタンパク質の共通リポジトリ)を使用することを提案した。cRFPは、使用中のリファレンスデータベースに追加されたウシ胎児血清タンパク質の補足シーケンスリストである。cRFPを使用すれば、混入したFBSタンパク質が細胞タンパク質として誤認されるのを防ぐことができる。(論文執筆に関わった。)(共著者: Shin, J., Kwon, Y., Lee, S., Na, S., Hong, E., Ju, S., Jung, H-G., Kaushal, P., Shin, S., Back, J., Choi, S., Kim, E., Lee, S., Park, Y., Ahn, H-S., Ahn, Y., Kabir, M., Park, S-J., Yang, W., Yeom, J., Bang, O., Ha, C-W., Lee, J-W., Kang, U-B., Kim, H-J., Park, K-S., Lee, J., Lee, J., Kim, JY., Kim, KP., Kim, Y., <u>Hirano, H.</u> , Yi, E., Cho, J-Y., Paek, E. and Lee, C.)
6. 植物塩基性7S グロブリンの機能—研究の現状と課題—(査読付)	共著	2019年	Proteome Letters 4, 19-30.	ダイズ種子で見いだされた塩基性7S グロブリン (Bg7S) は、多種類の植物に普遍的に存在することが明らかになった。当初、このタンパク質は種子の主要貯蔵タンパク質であると考えていたが、その後の研究で、貯蔵タンパク質ではなく、ストレス応答性、抗菌性、ホルモン受容体様活性など多種類の機能を持ったタンパク質であることがわかった。マメ科植物とそれ以外の植物のBg7Sの間には、機能的な差異が見いだされた。マメ科以外の植物のBg7S は病原微生物の細胞内への侵入を阻害する機能を持っていた。また、マメ科植物以外ではBg7S に結合する活性を持ったペプチドであるレグインスリンがなかった。マメ科植物とそれ以外の植物のBg7S は、相同タンパク質ではあるが、機能的に異なる方向に進化してきた可能性がある。一方、Bg7S やレグインスリンには、血糖調節作用、血圧や血漿コレステロールの調節作用、がん細胞抗増殖作用など、ヒト、ラット、マウスに対する機能性があることが明らかになった。(論文執筆に関わった。)(共著者: 平野 久, 藤田清貴)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要